服部遺跡発掘調査報告書Ⅴ

－滋賀県守山市服部町所在－

〈本 文 編〉

1984

滋賀県教育委員会
守山市教育委員会
財団法人 滋賀県文化財保護協会

服部遺跡発掘調査報告書Ⅴ

－ 滋賀県守山市服部町所在 －

〈本 文 編〉

1984

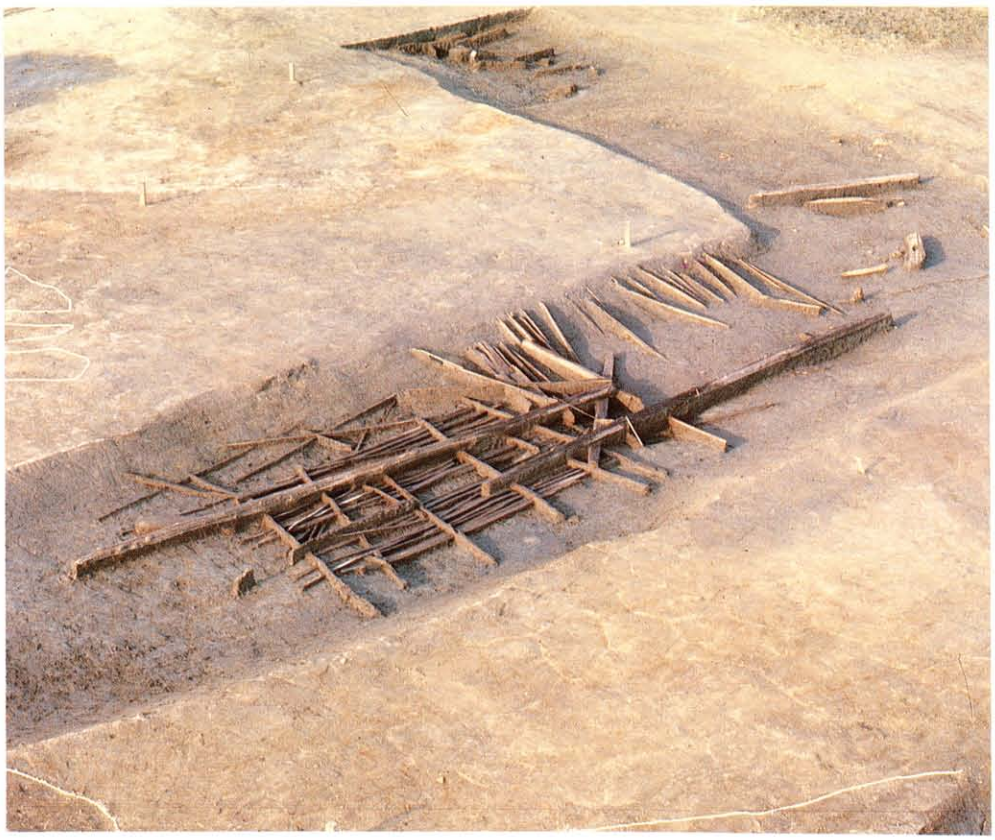
滋賀県教育委員会
守山市教育委員会
財団法人 滋賀県文化財保護協会

序

野洲川改修事業に伴う、服部遺跡の発掘調査は、昭和49年11月から昭和54年３月まで約５ヶ年を要して実施し、大きな成果を上げたところであります。調査対象面積が12万平方メートルと広大であるばかりでなく、野洲川の長年にわたる沖積作用により、各時代の遺構が、地表下３メートルまで、何層にも重複していることもあり、空前絶後の大規模な調査となりました。ここに改めて調査を御支援いただいた関係者各位に、御礼を申し上げるとともに、本書が、文化財の保存と普及、啓蒙に活用されんことを希望するものであります。

滋賀県教育委員会
教育長　南　光雄

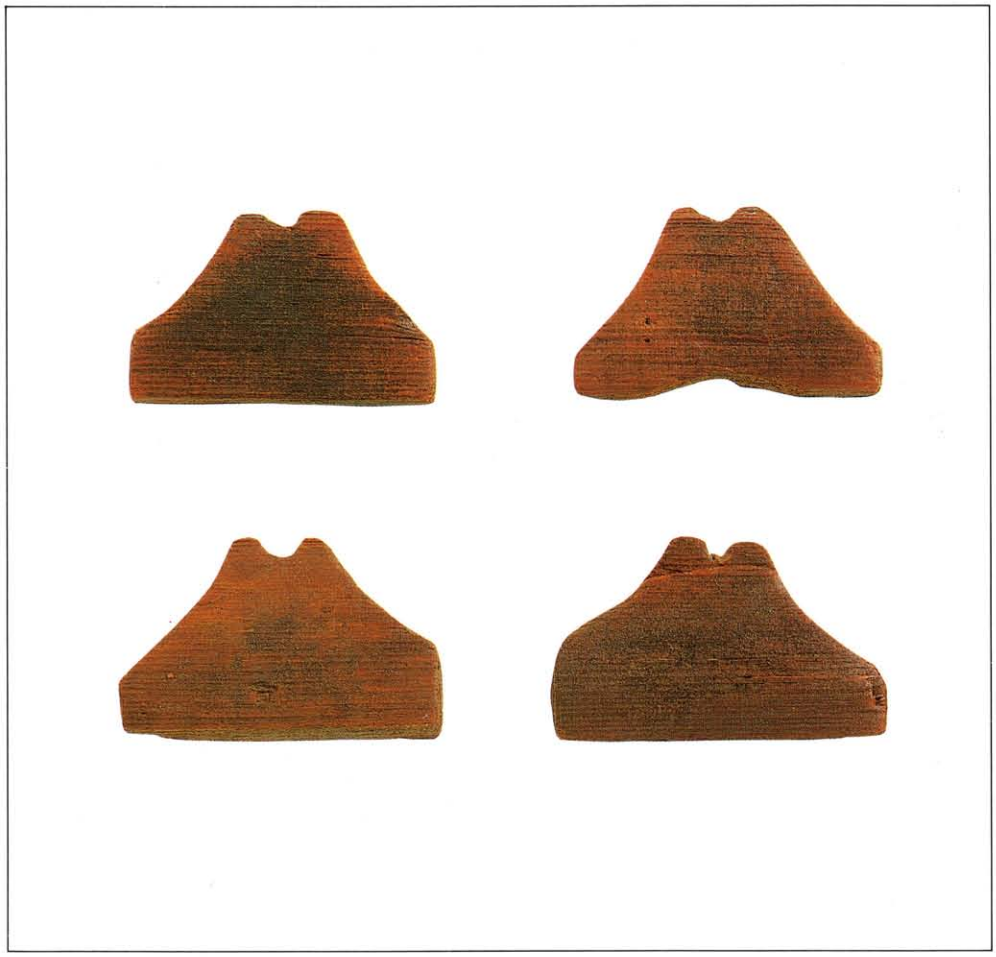
遺跡遠景(III次調査)



第17号南溝「やまと琴」出土状況

第１号南溝箱形容器出土状況

「やまと琴」



琴　柱

例　　言

1．本書は、滋賀県守山市服部町地先に所在する服部遺跡について、昭和49年から昭和54年まで、Ⅳ次にわたって実施した発掘調査の正報告書である。報告書は全6冊の予定で本書はその第5冊である。

2．本調査は、建設省近畿地方建設局琵琶湖工事事務所の所管する、野洲川改修放水路工事に伴うもので、同事務所の依頼にもとづき滋賀県教育委員会・守山市教育委員会が、財団法人滋賀県文化財保護協会の協力を得て実施したものである。

3．現地調査および本報告書の作成については、滋賀県教育委員会文化部文化財保護課技師大橋信弥が担当した。

4．本書の編集・執筆には、主として大橋と彦根市教育委員会社会教育課技師谷口　徹があたり、大阪府教育委員会文化財保護課技師藤沢真依氏、高島町教育委員会社会教育課技師白井忠雄氏の助言と協力を得た。なお執筆は、第Ⅲ章の木製品の項を谷口が、その他について大橋が分担し、遺物写真については、寿福　滋氏を煩した。

5．現地調査については、奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター長横山浩一氏(現九州大学教授)、文化庁文化財保護部記念物課主任調査官水野正好氏(現奈良大学教授)をはじめ、多くの方々の御指導を賜わったが、本報告書にかかる調査参加者は、以下のとおりである。

大橋信弥、谷口　徹、藤沢真依、白井忠雄、別所健二(現草津市教育委員会社会教育課埋蔵文化財係長)、入江正則(現財団法人大阪文化財センター技師)、西島陽子、山崎優子、木村良太、中西和多隆、中村　明、谷口孝司、尾谷　孝、井入　勉、三宅　治、水野敏昭、美濃部力、大崎義彦、福井昭彦、国松千夏、川立長司、山本芳正、吉田芳行、大橋美和子、市田　豊、進藤　裕、芝原英行、大奇秀久、小西岳彦、浦谷昌章、角出裕資、北野隆司、上形徳行、奥村二朗、寺田雅彦、加賀瓜久美子、出湯広子、内池芳枝、辰己邦子、中山順子、竹内義明、杉江尋幸、高田　正、川原崎鉄也、山下一也、太田智鶴、西藤崇浩、山本三良、野上　透、松岡　猛、篠原浩一、

吉川清香、南井安則、玉井弘樹、北村美穂代、川下晴美、吉川与志一、筈井美博、北脇邦彦、田中英一、南　清章

服部遺跡発掘調査報告書Ⅴ

― 滋賀県守山市服部町所在 ―

目　　次

口絵

序

例言

Ⅰ．はじめに …… 1

Ⅱ．調査の経過 ―日誌抄― …… 2

Ⅲ．遺跡の状況 …… 8

Ⅳ．調査の結果 …… 10

Ⅴ．調査の成果と課題 …… 86

出土遺物観察表 …… 113

挿　図　目　次

第１図　位置図……1
第２図　調査地全景……2
第３図　遺構検出状況……3
第４図　地区設定図（Ⅲ次調査）……4
第５図　調査風景……5
第６図　調査風景……6
第７図　調査地遠景……7
第８図　調査風景……7
第９図　遺跡基本土層模式図……8
第10図　遺構検出状況……9
第11図　遺跡土層断面図……9
第12図　第１号南溝供献状況実測図……10
第13図　遺構全図……11
第14図　第１号遺物出土状況実測図……14
第15図　遺構分布図(1)……17
第16図　第４号東溝遺物出土状況実測図……19
第17図　第５号北溝遺物出土状況実測図……20
第18図　第５号南溝遺物出土状況実測図……21
第19図　第５号周溝エレベーション……22
第20図　第６号遺物出土状況実測図……24
第21図　第７号南溝遺物出土状況実測図……26
第22図　第９号北溝(左)西溝(右)遺物出土状況実測図……29
第23図　第９号周溝断面……30
第24図　第10号北溝遺物出土状況実測図……32
第25図　第10号曲物出土状況……33
第26図　第12号東溝遺物出土状況実測図……35～36
第27図　第12号北溝供献具実測図……37
第28図　第13号遺物出土状況……38
第29図　遺構分布図(2)……39～40
第30図　第13号遺物出土状況実測図……41

第31図　第14号南溝遺物出土状況実測図……42
第32図　第14号北溝遺物出土状況実測図……43
第33図　第15号東溝遺物出土状況実測図……44
第34図　第17号北溝土器出土状況……46
第35図　第17号西溝遺物出土状況実測図……47
第36図　第17号南溝遺物出土状況実測図……48
第37図　第17号南溝遺物出土状況実測図……49～50
第38図　第18号遺物出土状況実測図……53
第39図　第19号南西溝遺物出土状況実測図……55～56
第40図　第19号東溝遺物出土状況実測図……57～58
第41図　第１号、第２号掘立柱建物平面実測図……59
第42図　第20号北東溝遺物出土状況実測図……64
第43図　第21号北溝遺物出土状況実測図……65
第44図　遺構分布図(3)……67～68
第45図　遺構分布図(4)……71～72
第46図　第23号南溝遺物出土状況実測図……73～74
第47図　第23号北溝遺物出土状況実測図……75～76
第48図　第24号南溝遺物出土状況実測図……79
第49図　第25号東溝遺物出土状況実測図……81～82
第50図　遺構配置図……90
第51図　第１号箱形容器供献状況実測図……92
第52図　第12号箱形容器供献状況実測図……93
第53図　第10号東溝曲物容器出土状況実測図……94
第54図　第７号東溝供献状況実測図……95
第55図　第25号長柄鋤出土状況実測図……96

図　版　目　次

図版１　遺構　１　調査前遺跡全景（南より）
　　２　調査前遺跡全景（南西より）
図版２　遺構　１　遺跡全景（南上空より）
　　２　遺跡全景（南上空より）
図版３　遺構　１　遺跡近景（東上空より）
　　２　第13･14･15号ほか（東上空より）
図版４　遺構　１　第16･17･19･20号ほか（東上空より）
　　２　第25号遠景（東上空より）
図版５　遺構　１　第１号遠景（北より）
　　２　第１号東溝（南より）
図版６　遺構　１　第１号西溝（南より）
　　２　第１号北溝箱形容器遠景（東より）
図版７　遺構　１　第１号箱形容器近景（南より）
　　２　第１号箱形容器近景（東より）
図版８　遺構　１　第１号箱形容器近景（南より）
　　２　第１号箱形容器近景（西より）
図版９　遺構　１　第１号南西溝近景（北より）
　　２　第１号周溝断面（南より）
図版10　遺構　１　第２号遠景（北より）
　　２　第２号近景（北より）
図版11　遺構　１　第３号遠景（北西より）
　　２　第３号近景（北西より）
図版12　遺構　１　第４号全景（西より）
　　２　第４号全景（東より）
図版13　遺構　１　第４号全景（北より）
　　２　第４号北溝近景（西より）
図版14　遺構　１　第５号全景（西より）
　　２　第５号全景（南より）
図版15　遺構　１　第５号全景（南西より）
　　２　第５号全景（北より）
図版16　遺構　１　第５号西溝近景（南より）
　　２　第５号供献近景（南より）
図版17　遺構　１　第５号供献近景（東より）
　　２　第５号供献近景（東より）
図版18　遺構　１　第５号南溝断面（北より）
　　２　第５号西溝断面（東より）
図版19　遺構　１　第６号全景（北より）
　　２　第６号全景（西より）
図版20　遺構　１　第６号全景（東より）
　　２　第６号全景（北より）
図版21　遺構　１　第６号東溝田舟出土状況（北より）
　　２　第６号東溝田舟出土状況（北より）
図版22　遺構　１　第７号全景（北より）
　　２　第７号全景（南より）
図版23　遺構　１　第７号近景（南より）
　　２　第７号供献土器出土状況（東より）
図版24　遺構　１　第８号全景（北より）
　　２　第８号全景（東より）
図版25　遺構　１　第８号全景（西より）
　　２　第９号全景（東より）
図版26　遺構　１　第９号全景（北より）
　　２　第９号近景（東より）
図版27　遺構　１　第９号近景（東より）
　　２　第９号近景（北より）
図版28　遺構　１　第10号全景（北より）
　　２　第10号全景（北より）
図版29　遺構　１　第10号全景（北より）
　　２　第10号供献土器出土状況（西より）
図版30　遺構　１　第10号供献土器出土状況（東より）
　　２　第10号曲物容器出土状況（西より）
図版31　遺構　１　第11号全景（西より）
　　２　第11号全景（北東より）
図版32　遺構　１　第12号全景（北東より）
　　２　第12号全景（西より）
図版33　遺構　１　第12号全景（東より）
　　２　第12号北溝箱形容器出土状況（南より）
図版34　遺構　１　第12号箱形容器出土状況（西より）

		2	第12号箱形容器出土状況（南より）
図版35	遺構	1	第12号箱形容器近景（西より）
		2	第12号小玉出土状況（西より）
図版36	遺構	1	第12号北溝曲物容器出土状況（南より）
		2	第12号曲物内木製矢出土状況（西より）
図版37	遺構	1	第12号曲物容器近景（南より）
		2	第12号曲物容器近景（西より）
図版38	遺構	1	第13号遠景（東より）
		2	第13号全景（北より）
図版39	遺構	1	第13号近景（北より）
		2	第13号北溝供献土器出土状況（東より）
図版40	遺構	1	第13号供献土器近景（北より）
		2	第13号供献土器近景（南より）
図版41	遺構	1	第14号全景（西より）
		2	第14号全景（北より）
図版42	遺構	1	第14号全景（東より）
		2	第14号北溝遺物出土状況（東より）
図版43	遺構	1	第15号全景（西より）
		2	第15号全景（北より）
図版44	遺構	1	第15号全景（西より）
		2	第15号近景（西より）
図版45	遺構	1	第16号遠景（北より）
		2	第16号近景（西より）
図版46	遺構	1	第16号近景（北より）
		2	第16号近景（南より）
図版47	遺構	1	第17号遠景（西より）
		2	第17号全景（北より）
図版48	遺構	1	第17号全景（東より）
		2	第17号全景（南より）
図版49	遺構	1	第17号南溝遺物出土状況（南より）
		2	第17号南溝組物出土状況(南西より)
図版50	遺構	1	第17号南溝組物全景（南より）
		2	第17号南溝琴出土状況（南より）
図版51	遺構	1	第17号南溝琴出土状況（北より）
		2	第17号琴出土状況（東より）
図版52	遺構	1	第17号琴出土状況（南より）
		2	第17号南溝断面（東より）
図版53	遺構	1	第18号遠景（北より）
		2	第18号全景（南より）
図版54	遺構	1	第18号全景（北より）
		2	第18号北溝土器出土状況（北より）
図版55	遺構	1	第19号遠景（南より）
		2	第19号全景（東より）
図版56	遺構	1	第19号全景（南より）
		2	第19号全景（東より）
図版57	遺構	1	第19号東溝遺物出土状況（東より）
		2	第19号西溝木器出土状況（南より）
図版58	遺構	1	第19号西溝木器出土状況（北より）
		2	第19号南溝木器出土状況（西より）
図版59	遺構	1	第19号東溝円筒埴輪出土状況（東より）
		2	第１号掘立柱建物（北より）
図版60	遺構	1	第２号掘立柱建物（北より）
		2	第１・２号掘立柱建物（北より）
図版61	遺構	1	第20号遠景（東より）
		2	第20号全景（北より）
図版62	遺構	1	第20号全景（東より）
		2	第20号全景（北より）
図版63	遺構	1	第21号遠景（東より）
		2	第21号近景（東より）
図版64	遺構	1	第22号遠景（南上空より）
		2	第22号全景（南より）
図版65	遺構	1	第23号全景（東上空より）
		2	第23号全景（北上空より）
図版66	遺構	1	第23号遠景（北より）
		2	第23号東溝遺物出土状況（東より）
図版67	遺構	1	第23号西溝遺物出土状況（東より）
		2	第23号東溝木器出土状況（東より）
図版68	遺構	1	第23号東溝長柄鋤出土状況(南より)
		2	第23号北溝遺物出土状況（南より）
図版69	遺構	1	第23号北溝大甕出土状況（南より）

		2	第23号西溝断面（面より）
図版70	遺構	1	第24号全景（西より）
		2	第24号全景（西より）
図版71	遺構	1	第24号全景（南より）
		2	第24号南溝長柄鋤出土状況(北より)
図版72	遺構	1	第25号遠景（西上空より）
		2	第25号全景（南より）
図版73	遺構	1	第25号全景（南東より）
		2	第25号東溝長柄鋤出土状況(西より)
図版74	遺構	1	第25号東溝長柄鋤出土状況(南より)
		2	第25号東溝長柄鋤出土状況(東より)
図版75	遺構	1	第26号全景（南より）
		2	第27号曲物出土状況（西より）
図版76	遺構		第14号、第15号、第17号、第19号(上空より)
図版77	遺構		第15号、第17号、第19号、第20号(上空より)
図版78	遺物		C001～C004（第1号）、C066（第3号）、H081、H082（第4号）
図版79	遺物		H005～H008、H085（第5号）、C009～C011（第7号）
図版80	遺物		C012～C017（第7号）、C018（第9号）
図版81	遺物		C083（第7号）、H019・C084（第9号）、C020～C023（第10号）
図版82	遺物		C065、C067、C069～C076（第12号）
図版83	遺物		C077～C080（第12号）、C024～C027（第13号）
図版84	遺物		C028、H029、H030（第13号）、H031～H034（第14号）
図版85	遺物		H035、C091（第15号）、C036～C039（第16号）、C041（第18号）、H068（第17号）
図版86	遺物		C042～C046（第18号）、C047～C049（第20号）、C050（第21号）
図版87	遺物		C053～C057、C040、C149（第23号）
図版88	遺物		C153（第23号）、C058（第24号）、C059～C064（第27号）
図版89	遺物		H086～H089、H113（第19号）、H144（参考資料）
図版90	遺物	1	H090（第19号）、H156（参考資料）
		2	C145、C146(第7号)、C147(第9号)、C148、C150、C152（第23号）、C151（第24号）
図版91	遺物		H092、H093、H099～H104、H107～H109、H115（第19号）
図版92	遺物		H094～H097、H105、H106、H110、H112、H114、H116、H117(第19号)、H141、H143（第23号）
図版93	遺物		H111、H119～H127（第19号）、H122、H135～H140（第23号）
図版94	遺物		H123～H134、H142（第23号）、H118（参考資料）
図版95	遺物	1	S001（第4号）、S004～S044（第12号）、S046（第19号）
		2	S002、S003（第6号）、S047（第19号）
図版96	遺物		W001（第1号）、W017（第5号）
図版97	遺物		W018～W020、W025、W028、W030、W031（第5号）
図版98	遺物		W037（第5号）、W041（第7号）、W042、W043、W047、W059（第9号）
図版99	遺物		W061、W066、W068、W070、W084(第9号)、W094（第13号）、W096（第15号）、W103、W104（第17号）
図版100	遺物		W091～W093（第12号）
図版101	遺物		W098（第17号）
図版102	遺物		W098（第17号）
図版103	遺物		W099～W102、W132、W141、W147（第17号）
図版104	遺物		W105、W112、W113、W115、W

118、W132、W144、W146(第17号)
図版105　遺物　W149～W157、W159（第19号）
図版106　遺物　W158、W161、W164、W191、W196、W197、W200、W207、W208、W223（第19号）
図版107　遺物　W228～W230、W233（第23号）
図版108　遺物　W238(第24号)、W239～W242(第25号)
図版109　遺物　1　第１号～第４号出土木製品
2　第５号出土木製品
図版110　遺物　1　第９号出土木製品
2　第９号出土木製品
図版111　遺物　1　第９号出土木製品
2　第10号～第15号出土木製品
図版112　遺物　1　第17号出土木製品
2　第17号出土木製品
図版113　遺物　1　第19号出土木製品
2　第17号出土木製品
図版114　遺物　1　第19号出土木製品
2　第19号出土木製品
図版115　遺物　1　第19号出土木製品
2　第19号出土木製品
図版116　遺物　1　第19号出土木製品
2　第23号出土木製品
図版117　遺物　1　各遺構出土木製品
2　各遺構出土木製品
図版118　第１号平面実測図
図版119　第２号平面実測図
第３号平面実測図
図版120　第４号平面実測図
図版121　第５号平面実測図
図版122　第６号平面実測図
図版123　第７号平面実測図
図版124　第８号平面実測図
図版125　第９号平面実測図
図版126　第10号平面実測図
図版127　第11号平面実測図
図版128　第12号平面実測図
図版129　第13号平面実測図
図版130　第14号平面実測図
図版131　第15号平面実測図
図版132　第16号平面実測図
第18号平面実測図
図版133　第17号平面実測図
図版134　第19号平面実測図
図版135　第20号平面実測図
図版136　第21号平面実測図
図版137　第22号平面実測図
図版138　第23号平面実測図
図版139　第24号平面実測図
図版140　第25号平面実測図
図版141　第26号平面実測図
図版142　第１号、第２号、第３号、第４号周溝断面図
図版143　第５号、第６号周溝断面図
図版144　第７号、第８号、第９号周溝断面図
図版145　第10号、第11号、第12号周溝断面図
図版146　第13号、第14号、第15号周溝断面図
図版147　第16号、第17号、第18号周溝断面図
図版148　第19号、第20号、第21号、第22号周溝断面図
図版149　第23号、第24号、第25号、第26号周溝断面図
図版150　出土土器実測図　C001～C004（第１号）、C066(第３号)、H081、H082(第４号)、H005～H008、H085（第５号）
図版151　出土土器実測図　C009～C017、C083、C145、C146（第７号）、C018、H019、C147、C154、C155（第９号）
図版152　出土土器実測図　C084（第９号）、C020～C023（第10号）
図版153　出土土器実測図　C065、C067、C069～C080(第12号)、C024～C028、H029、H030(第13号)
図版154　出土土器実測図　H031～H034（第14号）、H035、C091（第15号）、C036～C039（第16号）、H068（第17号）

図版155　出土土器実測図　C041～C046（第18号）、C047～C049(第20号)、C050(第21号)、C053～C057、C148、C150、C152（第23号）

図版156　出土土器実測図　C149（第23号）

図版157　出土土器実測図　C153（第23号）

図版158　出土土器実測図　C040（第23号）、C058、C051（第24号）、C059～C064（第27号）

図版159　出土埴輪実測図　円筒埴輪H086～H090、H113（第19号）

図版160　出土埴輪実測図　円筒埴輪H092、H093、H098～H104、H107～H109、H115（第19号）

図版161　出土埴輪実測図　円筒埴輪H094～H097、H105、H106、H110、H112、H114、H116、H117（第19号）

図版162　出土埴輪実測図　円筒埴輪H143（第23号）　朝顔形埴輪H141（第23号）〈参考資料〉H156、H157（ＣＥ２遺構面）、H144（ＢW遺構面）

図版163　出土埴輪実測図　形象埴輪H120、H121、H119、H111（第19号）、H140、H122、H135～139（第23号）

図版164　出土埴輪実測図　形象埴輪H123～H134、H142（第23号）〈参考資料〉H118（イ-Ⅲ-１、ＳＤ３）

図版165　石製品実測図　剣形石製品S001(第４号)、紡錘車S002、S003（第６号）、石釧S046（第19号）

図版166　石製品実測図　小玉S004、S005(第12号)、S006～S045（第12号）、管玉S045（第19号）

図版167　木製品実測図　第１号出土木製品（W001～W004）、第２号出土木製品（W005～W014）

図版168　木製品実測図　第５号出土木製品（W015～W017、W019～W024、W026～W035）

図版169　木製品実測図　第５号出土木製品（W025、W036～W039）、第６号出土木製品(W040)、第７号出土木製品（W041）、第９号出土木製品（W042～W046）

図版170　木製品実測図　第９号出土木製品（W047～W057、W096、W097）

図版171　木製品実測図　第９号出土木製品（W058～W079）

図版172　木製品実測図　第９号出土木製品（W082～W087）、第10号出土木製品(W088～W090)、第12号出土木製品（W091）、第17号出土木製品（W109、W110）

図版173　木製品実測図　第17号出土木製品（W098）

図版174　木製品実測図　第12号出土木製品（W092～W093）、第17号出土木製品(W099～W102)、第23号出土木製品（W227、W229）

図版175　木製品実測図　第13号出土木製品（W094、W095）、第17号出土木製品（W106、W111～W112）、第20号出土木製品（W226）

図版176　木製品実測図　第17号出土木製品（W123～W141、W143、W146）

図版177　木製品実測図　第17号出土木製品（W142、W144、W145）、第18号出土木製品(W148)、第19号出土木製品（W149、W151、W152）

図版178　木製品実測図　第19号出土木製品（W150、W153～W157、W159、W160、W165）

図版179　木製品実測図　第19号出土木製品（W161～W164、W166～W171、W175～W183）

図版180　木製品実測図　第19号出土木製品（W184～W205、W172）

図版181　木製品実測図　第19号出土木製品（W209～W220、W222～W225）

図版182　木製品実測図　第23号出土木製品（W228、W230、W233、W235）

図版183　木製品実測図　第23号出土木製品（W234、W236、W237）、第24号出土木製品(W228)、第25号出土木製品（W239～W242）

図版184　木製品実測図　第19号出土木製品（W173、W174）、出土地不明木製品（W231、W232、W243～W247）

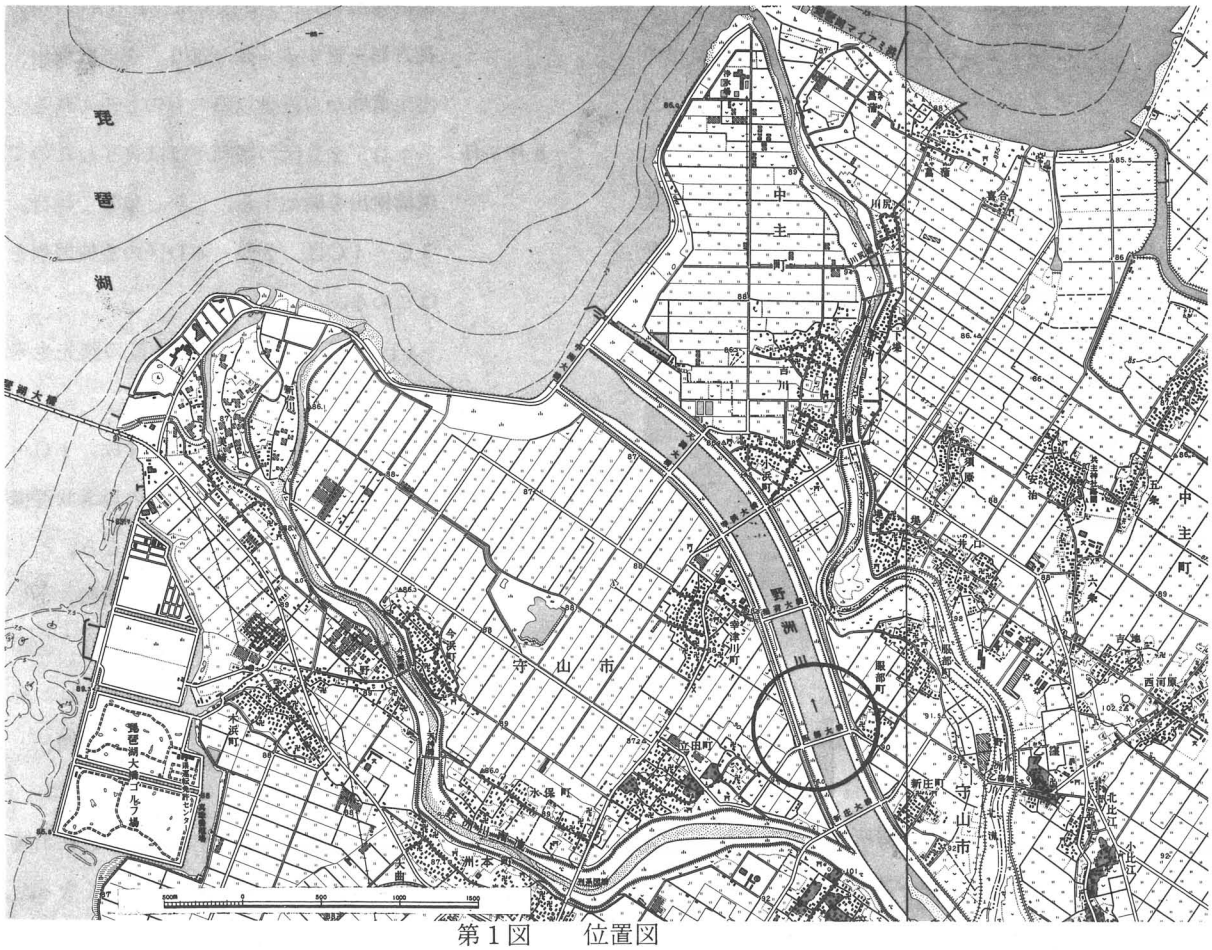
図版185　木製品実測図　第５号出土木製品(W018)、第17号出土木製品（W103～W105、W107、W108、W147）、第19号出土木製品（W158、W206～W208）

Ⅰ．はじめに

服部遺跡は、琵琶湖の南、滋賀県守山市服部町地先に所在する、縄文時代から鎌倉時代に到る大集落跡である。遺跡は野洲川南北二流にはさまれた中洲に立地し、たび重なる野洲川の洪水により、各時代の遺構が、現地表下３ｍ前後まで、重複して存在していた。

発掘調査は、この中洲部分に、南北二流を一本化する新川〈放水路〉工事が実施されるのに先立ち、昭和49年11月より、数回の中断をはさんで、昭和54年３月まで実施した。そして整理業務は、昭和54年４月より７ヶ年計画で実施し、順次時期別に報告書を刊行することになっているが、本冊には、昭和50年度と昭和51年度に実施した、古墳時代中・後期の遺構・遺物についての報告をおさめた。

服部遺跡の調査は、すでに工事の完了していた高水敷の部分を除いても、幅200ｍの大放水路の延長600ｍ以上、したがって、約120,000㎡を対象としてなされたものであり、しかも遺構が重複するということもあって、県下においても、全国的にみても、前例のない大規模な調査となった。そして、河川という工事の性格や、工事中発見という事情もあって、調査の実施そのものが、大いにおびやかされる事態がたびたび生じ、大きな問題になったことは、周知のところである。その詳細については、後続の報告書に譲ることとし、ここでは、長期にわたる発掘調査・整理調査に、協力・御支援いただいた、多くの方々に改めて御礼を申し上げたい。



第１図　　位置図

II．調査の経過

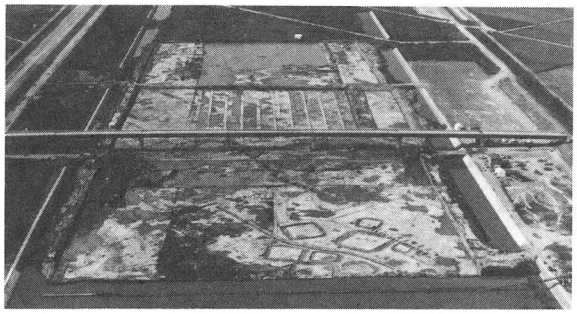
―日誌抄―

調査は、昭和49年11月から昭和50年３月まで実施した試掘調査（Ｉ次調査）の結果に基づき、昭和50年４月から昭和51年３月まで（II次調査）と昭和51年４月から10月まで（III次調査）の二次にわたって本格調査を実施し、昭和53年３月（IV次調査）に若干の補足調査を実施した。

Ａ．II次調査

昭和50年

５月６日　本格調査の開始、試掘調査結果に基づき、農道２号橋より上流（以下上流地区）を県教委が下流（下流地区）を市教委が分担して調査を実施することになる。上流地区では、全体を50mピッチで小区画し、上流から１～４、右岸からＢ・Ｃ・Ｄ・Ｅとして、50m区画を例えば１Ｃ区、３Ｄ区のように呼称することとした。そして土層観察用のセクションを２・３間、Ｃ・Ｄ間に残し、上流を４等分する形とした。このうち、まず１Ｃ・２Ｃ区より、地表下約１ｍまで重機で掘削し、第１遺構面の包含層直上面を検出することにした。



第２図　調査地全景

５月26日　重機掘削の完了した２Ｃ区から人力によって遺構検出開始する。試掘調査第６トレンチで確認した、青灰色粘質土のベースでまず遺構を求めることにする。

６月２日　１Ｃ・２Ｃ区の一部で、溝状遺構・土坑などが若干検出されるが、依然として、明確なまとまりは認められない。

６月19日　２Ｃ区において、弥生後期とみられる壺・高坏などの完形品が列をなして出土したため、精査するも、溝跡などのプランは検出できない。

６月21日　２Ｃ区の溝状遺構が円弧を描くことが判明したので、やや掘り足らない中央付近および両サイドの掘り下げを行う。

７月５日　この間、梅雨のため遺構検出は中断し、雨の合間をぬって1D・2D区の重機掘削をすすめるとともに、土器列をさらに追究する。

７月18日　梅雨のあとの猛暑で、遺構面が地割れし、遺構検出難行、１Ｃ区では、１ｍ×0.7mの長方形を呈する「砂だまり」を多数検出、出土遺物から近世以降のものとみられる。

８月８日　１Ｄ・２Ｄ区の掘削がほぼ完了したので、遺構検出を開始する。しかし猛暑で難行。３Ｃ・４Ｃ区、３Ｄ・４Ｄ区の重機掘削をはじめる。

（午前中、県文化財専門委員の諸先生来訪）

８月20日　２Ｃ区土器列の出土状況図作成。１Ｃ・２Ｃ区において、円形・方形の周溝状遺構が全面に広がることが明らかになる。

９月８日　２Ｃ区土器列の遺物取り上げ開始。１Ｃ区の一部で遺構未検出の部分があり、約20cmほど掘り下げる。１Ｄ・２Ｄ区では、全面に「砂だまり」の広がることが判明し、略測図を作成する。

９月10日　１Ｃ区東南部では、やはり暗紫色粘土層が広がり、沼沢地の可能性が大きくなった。

３Ｃ・４Ｃ区では、中央付近に多数の円

形ピットが検出されたので、その周辺の精査をすすめる。

9月27日　１Ｃ・２Ｃ区の遺構の全様がほぼ確認される。すなわち、南東部の沼沢地とみられる部分を除き、全面に円形・方形の周溝状遺構（円形２・方形５）が広がること、そしてそれらに切られて、古墳前期とみられる竪穴住居跡が（現在のところ６棟以上）存在することが明らかとなった。

10月６日　２Ｂ区の掘削開始、１Ｄ・２Ｄ区の掘り下げをさらにすすめる。

10月27日　１Ｃ・２Ｃ区の周溝状遺構の掘り下げを開始する。溝内埋葬の可能性を考慮して、縦横列のセクションを細かく設定する。第６周溝からは、早くも土器・木製品が出土する。又、表土掘削の終った２Ｂ区の遺構検出にとりかかる。

11月１日　第６周溝の掘り下げと断面図作成。２Ｂ区では第５周溝のつづきを検出し、１Ｄ区でも周溝状遺構を検出する。

11月２日　新たに第４周溝の掘り下げを始める。

11月４日　第６周溝では西溝より獣骨が出土したほか、木製品が多数出土。第４周溝でも木製品の出土多い。

11月６日　１Ｄ区の南端で、昨日琅が発見された付近を精査したところ、その下から須恵器坏蓋・身セットが２個と３個二列に並んで出土し、その前面に長辺59cm、短辺21cm幅、高さ3.7cmの木製箱形容器が出土、その中から、39点の滑石製小玉が一塊になって出土した（これは後になって、第１周溝と同様、第12周溝北溝内における供献儀礼であることが判明した）。

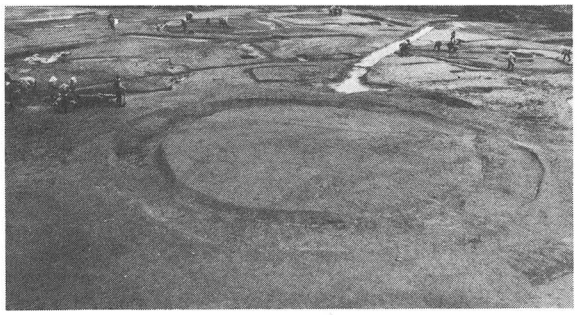
11月10日　第６号、第４号の掘り下げ続行。２Ｂ区の遺構検出、第５周溝の東側に黒色粘土層が広がり、沼沢地の可能性が強まった。上層からは奈良、平安期の土器出土。

11月13日　新たに第５周溝の掘り下げを開始。

11月21日　第４・第５周溝の掘り下げ、第６周溝の実測開始。

11月23日　溝Ａの掘り下げを始める。予想以上のＶ字溝で、底に砂質土が多く、土器も多い。

11月25日　第６号の平面実測、第４・第５号掘り下げ、断面実測を続行。溝Ａの掘り下げ続行。中断していた３Ｃ・４Ｃ区の遺構検出。第１号の掘り下げ開始。



第３図　遺構検出状況

12月11日　第１号の南溝の中央で、１Ｄ区でさきに発見された、箱形容器と須恵器坏蓋・身セットを検出。４号・５号の掘り下げ続行、新たに第３周溝の掘り下げ開始。

12月15日　第７周溝の掘り下げ開始。第５周溝続行、第１周溝・溝Ａの平面実測開始。

12月19日　第７周溝東溝よりより大甕が破砕された状態で出土し、その前面に坏蓋・身セットが検出される。第２・第９周溝掘り下げ開始。１Ｄ区の遺構検出。

12月23日　１Ｄ・２Ｄ区の遺構検出がほぼ完了し、写真撮影。円形２、方形が５基検出され、西に沼沢地が広がる。

12月28日　第５、第７、第９号の掘り下げ続行。実測の終った第６号・第１号の遺物とり上げ。

12月31日　第５号の実測開始。

昭和51年

１月６日　調査再開。

１月14日　この間、天候悪く調査難行する。本日よ

り第８・第10・第11周溝の掘り下げ開始。

３Ｃ・４Ｃ区の遺構検出。

１月19日　第12周溝の掘り下げ開始。北東溝内から曲物容器出土。中央に木製の模造矢２本並んで検出。

１月29日　第10・第12周溝、補足的な掘り下げと並行して平面実測開始。第11号平面実測。

２月１日　第10・第11・第12周溝の平面実測続行。

１Ｄ区沼沢地の掘り下げ開始。

２月５日　第７・第８号の掘り下げ。１Ｄ区沼沢地から編物ザル出土、取り上げ不能のため石膏で型をとる。

２月６日　１Ｄ区沼沢地セクション実測。第12周溝曲物容器内より滑石製小玉２点が出土した。

２月14日　周溝状遺構の掘り下げが一段落した２Ｃ区の竪穴住居跡の掘り下げを開始する。５—１・２・３・４、４—１・２、３—１・２など。

２月22日　５—１・２のセクションをはずし、遺物を取り上げる。５—３・４、遺物出土状態写真。

２月27日　６—１・２・３住居跡の掘り下げ関始、４—１・２補足掘り下げ、写真撮影。

第13・18周溝の掘り下げ開始。

３月４日　７—１・２、９—１・２掘り下げ開始。発掘完了の住居址の平面実測を順次すすめる。

第13・18周溝掘り下げ続行。

３月13日　６—４・５、13—１掘り下げ開始。７—１、断面実測、写真。

第13周溝の平面実測開始、第18号掘り下げ続行。

溝Ｂ掘り下げ開始。

３月19日　第９周溝の掘り下げ開始。住居跡６—４・５、13—１の写真撮影、補足掘り下げ。

３月25日　各遺構の最終的な写真・実測をすすめる。

３月31日　調査中途ながら、II次調査終了。

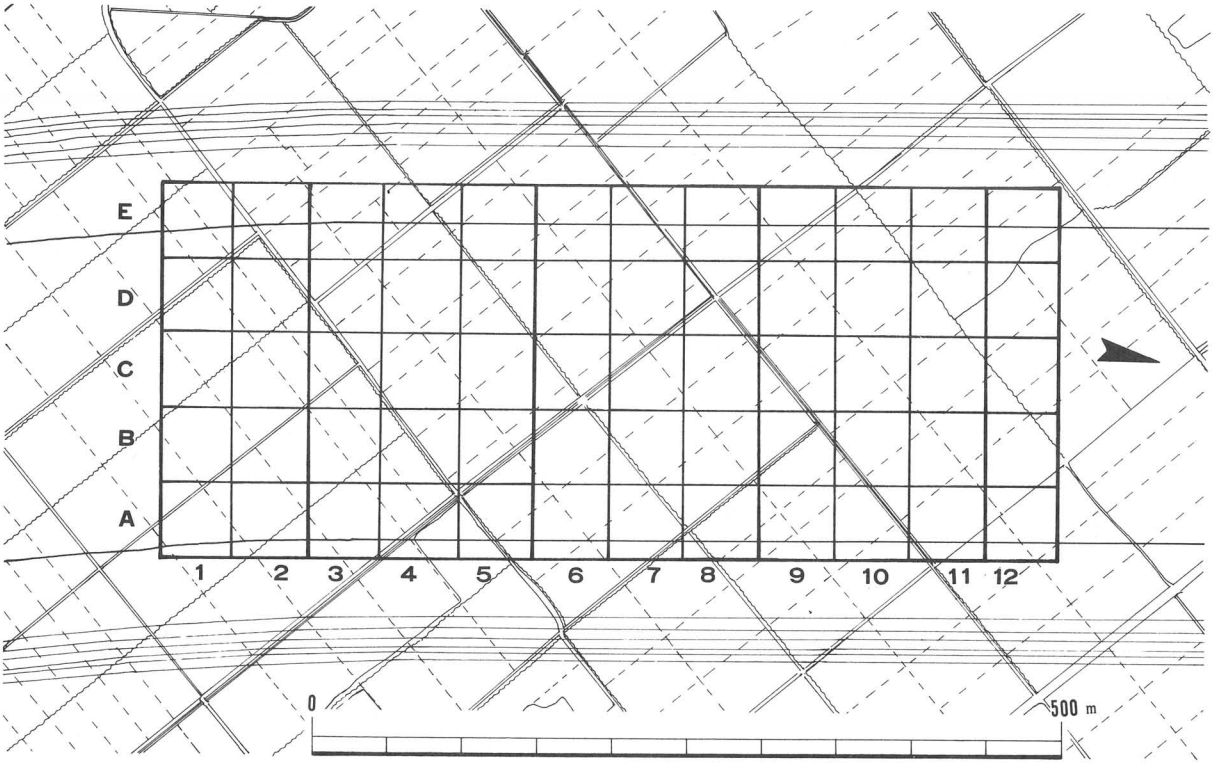
Ｂ．III次調査

昭和51年

７月７日　第III次調査開始。補足調査の名目で10月31日までの予定。

まず基準杭の確認を行う。

７月８日　第17周溝および溝Ｂの掘り下げ開始。



第４図　地区設定図（III次調査）

7月13日　新たに第14周溝・溝Aの掘り下げを始める。第17周溝南溝から、組み合された建材など木製品多数が出土する。

7月16日　第17・14周溝・溝B掘り下げ続行。第13周溝マウンド上の遺構検出を行なったところ竪穴住居跡4棟と溝跡などを検出する。

7月17日　第17周溝南溝の木器出土状況写真をとり、平面実測にかかる。他の掘り下げは続行。

7月20日　第17周溝の木製品を取り上げ始めたところ、その下から「やまと琴」とみられる木製品が出土した。マウンド上から組物とともに、溝内にズり落ちた状態で出土したので、当初は琴と認識できなかったが、東奈良遺跡調査会（現大阪府教委技師）藤沢真依氏が琴の可能性を示唆された。

第14周溝・溝B掘り下げ続行。

7月23日　第17周溝の「やまと琴」の実測を開始。第14周溝北溝より長頸壺・杓のある建材が出土した。

新たに第16周溝・溝Eの掘り下げ開始。溝B続行。

7月25日　第14・16・17周溝の掘り下げ続行。第14周溝遺物出土状況写真・実測。

第17周溝の「やまと琴」の取り上げを行なったところ、その底から4点の「琴柱」が出土し、琴説が明確になるとともに、「やまと琴」が絃を張った状態で埋没したことが明らかになった。

7月28日　第14・16・17号および溝13・溝Eの掘り下げ続行。

第15・19周溝の掘り下げ開始。

7月29日　第15号西溝より須恵器小型甕出土。第19号北東コーナー上層から「琵琶形木製品」が、4ヶ所から円筒埴輪が出土した。

4C区では掘立柱建物および溝跡が検出される。

7月31日　第16・17周溝の全景写真、第15・19号、溝B、溝E掘り下げ続行。

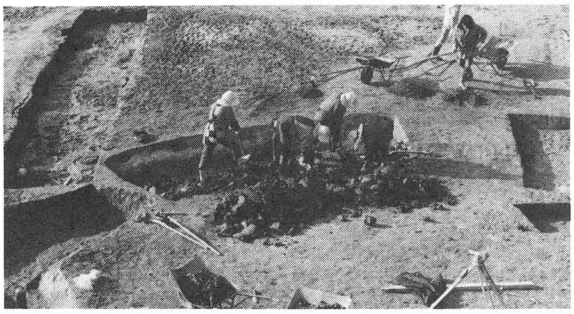
8月1日　第14号の最終写真。第15号遺物出土状況実測。第19号の「琵琶形土製品」取り上げ。他の周溝内からも、長柄鋤・ナスビ形着柄鋤など木製品多数が出土。

8月6日　この間雨のため掘り下げを中止し右岸側の断面実測を行なう。第19・第20周溝の掘り下げ、19—1・13—1住居跡の掘り下げを行なう。

8月8日　第15・第20号掘り下げ続行。第19号南溝の遺物実測後、遺物のとり上げを行う。

8月12日　第14・15周溝・溝Aなどの全景写真、第19号の遺物出土状況写真、第20号の掘り下げ続行。

8月18日　溝D・溝Fの掘り下げ開始。第19号の遺物とり上げ完了。19—1・2住居跡の掘り下げ続行。3B区の遺溝検出、周溝状遺構1基（第22号）と溝状遺構検出。



第5図　調査風景

8月20日　溝D・E・Fの掘り下げ続行、19—1住居跡、第19号・第20号全景写真、3C・4C区の遺構検出。

8月22日　第17周溝マウンド内の遺構検出、3B区の東側は黒色粘土が広がり、沼沢地の可能性が強くなる（文化庁水野正好調査官来訪）。

8月25日　排水作業続行。一部住居跡の掘り下げを行う。

8月31日　排出作業続行。調査不能のため左岸側の断面図作成、第1回目の航測準備。

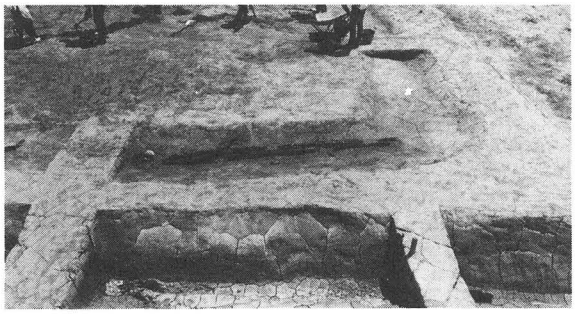
9月1日　航測準備のため全面清掃。並行して、9

—２・３、ｅ—３住居跡の掘り下げを行う。

９月２日　航測実施。その後、各遺構の個別写真をとる。並行して一部住居跡の掘り下げ。

９月３日　航測の撮り直し。午後降雨のため中止。

９月５日　住居跡、ｂ—３—１、９—２・３、14—１、19—１、ｅ—４—１等の掘り下げ。



第６図　調査風景

９月６日　１４—１で炭化米出土、溝Ｊ・Ｋ・Ｇの掘り下げ、４Ｃ区遺構検出。

９月８日　台風17号の影響で風雨強まり調査不能となる。

９月16日　住居跡掘り下げ、実測を行なう。14—１では、火災にあったらしく、焼け落ちた垂木を検出した。

溝Ｇの掘り下げと第15周溝内の遺構検出。

９月21日　17—１・２、19—2、15—１住居跡・溝Ｇの掘り下げ。

９月25日　土坑Ｏ・溝Ｋの掘り下げ、住居跡掘り下げ続行。

９月27日　沼第１・２・３トレンチの掘り下げ開始。住居跡掘り下げ続行。

９月28日　沼第１トレンチ断面実測。沼第４トレンチ掘り下げ開始。

住居跡、ｂ—３—１・２・４、９—４などの掘り下げ。

９月30日　沼第５・第６・第７トレンチの掘り下げ、住居跡の掘り下げ続行。

10月２日　沼第２・第５トレンチの断面実測。沼第６・７・８トレンチの掘り下げ、住居跡続行。

10月４日　住居跡　ｂ—３—２・３、14—１、９—２・３・４の最終写真、15—1・2掘り下げ。溝Ｇの実測。

10月５日　住居跡19—３・４の柱穴内から炭化した柱根出土。溝Ｐの掘り下げ。

第22周溝の掘り下げ開始。

沼第４・第８トレンチの断面実測。

10月６日　住居跡19—３・4の平面実測。15—1掘り下げ続行。

沼第６・第７トレンチ断面実測。

10月７日　土坑Ｐ・Ｑ・Ｒの掘り下げ開始。３Ｂ・３Ｄ・４Ｄ区の沼沢地の掘り下げ開始。

10月10日　第23・第24周溝の掘り下げ開始。他は続行。

10月11日　第21周溝の掘り下げ開始。北溝で坏身１点出土、残りは悪く周溝の埋土10cm前後である。第23周溝からは木製品が大量に出土し、その間から須恵器大甕や円筒埴輪片が出土した。条里溝の掘り下げ。

10月15日　排出作業の後、住居址の掘り下げと平面実測をすすめる。第23周溝では、マウンドの肩部に、立木の根株が等間隔で出土。

10月19日　第21・第22周溝の平面実測と写真。第23周溝でも一部で実測開始。第24周溝でも長柄鋤など木製品が出土する。

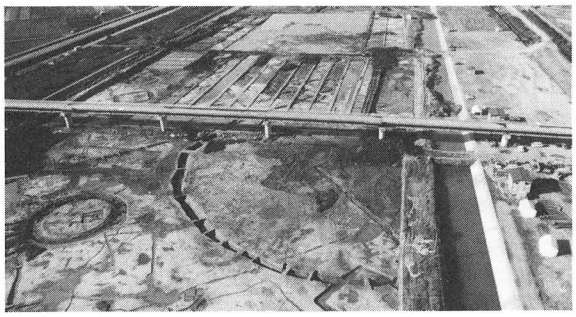
住居跡の掘り下げ、実測続行。

10月22日　住居跡19—５、22—１など掘り下げ開始。第23周溝の掘り下げと実測続行。第24周溝の平面実測。

10月23日　沼３Ｂ区を掘り下げていたところ、曲物と須恵器坏蓋・身セットが出土。プランでは検出できなかった周溝状遺構の可能性が高まる。他は引きつづき掘り下げ、実測。

10月25日　航測の準備と並行して住居跡19—５・６、15—１・２の最終写真。第23周溝の掘り下げ、実測続行。

10月27日　航測実施、引きつづいて各遺構の個別写



第７図　　調査地遠景

真。第24周溝の南西でも周溝状遺構や住居跡などを検出する。

10月31日　第Ⅲ次調査中断。

Ｃ．Ⅳ次調査

昭和53年

３月10日　第Ⅳ次調査の再開。事務所の設営、器材の搬入。

まずテトラポット設置部分を対象とし、調査区の両端に幅20メートルの細長いトレンチを設定する。沼沢地の広がるＡ区を除き、それぞれの地区の東西という位置関係から、ＢＥ１・２、ＢＷ１・２、ＣＥ１・２・３、ＣＷ１・２・３、ＤＥ１・２・３・４・５、ＤＷ１・２・３という地区設定を行なう。

本日は、ＣＥ１に重機を入れ、１年半の中断期間における撹乱層（10cm前後）を除去し、遺構検出を開始する。

３月11日　新たにＣＥ２・ＢＥ２でも調査開始。ＣＥ１・ＣＥ２では、早くも前回調査で検出された弥生時代の方形周溝墓を検出する（以下、古墳時代の遺構の分布するＢＥ１・ＢＥ２の地区に限定して記述する）。

３月12日　ＢＥ１で、弥生末～古墳初頭とみられる竪穴住居跡を検出する。

３月13日　本日より作業員を投入して遺構検出にかかる。ＢＥ１で溝Ｅの連続部分と第22周溝の東コーナーを、ＢＥ２で竪穴住居跡のほかに、第26周溝を検出する。

３月14日　ＢＥ１では溝Ｅと他の溝跡の遺物出土状況写真、ＢＥ２では、第26周溝の掘り下げを開始する。残りはきわめて悪く、深さ15cmにすぎない。

３月15日　ＢＥ１、溝跡の出土状況図作成のため割り付ける。ＢＥ２、第26号の掘り下げ続行。ＢＷ１の掘り下げをすすめたところ、円筒埴輪片が若干出土した。ただ精査したが砂層が広がり、遺構の検出はなかった。

３月17日　ＢＥ２の第26号の全様を把握するため、西側に拡張して遺構検出、掘り下げを行う。

３月20日　ＢＥ１では、第22周溝の東コーナーの掘り下げを開始しＢＥ２では、条里の坪界とみられる砂だまりを検出、掘り下げる。また、重複して検出された竪穴住居跡の掘り下げを開始する。

３月21日　ＢＥ１・２とも平面実測を開始する。並行して竪穴住居跡の掘り下げ続行。

３月23日　ＢＥ１・２の竪穴住居跡の掘り下げ。いずれも残りが悪く、深さ10cm前後で、出土遺物も、一部の土坑を除き、小破片が多い。

３月24日　掘り下げの完了した住居跡から、写真・平面実測を開始する。

３月26日　ＢＥ１では、竪穴住居跡のほか、溝Ｅの掘り残し部分を掘り下げる。ＢＥ２は、平面実測とその補正。

３月29日　ＢＥ１・２とも最終写真のための清掃・撮影。

第８図　　調査風景

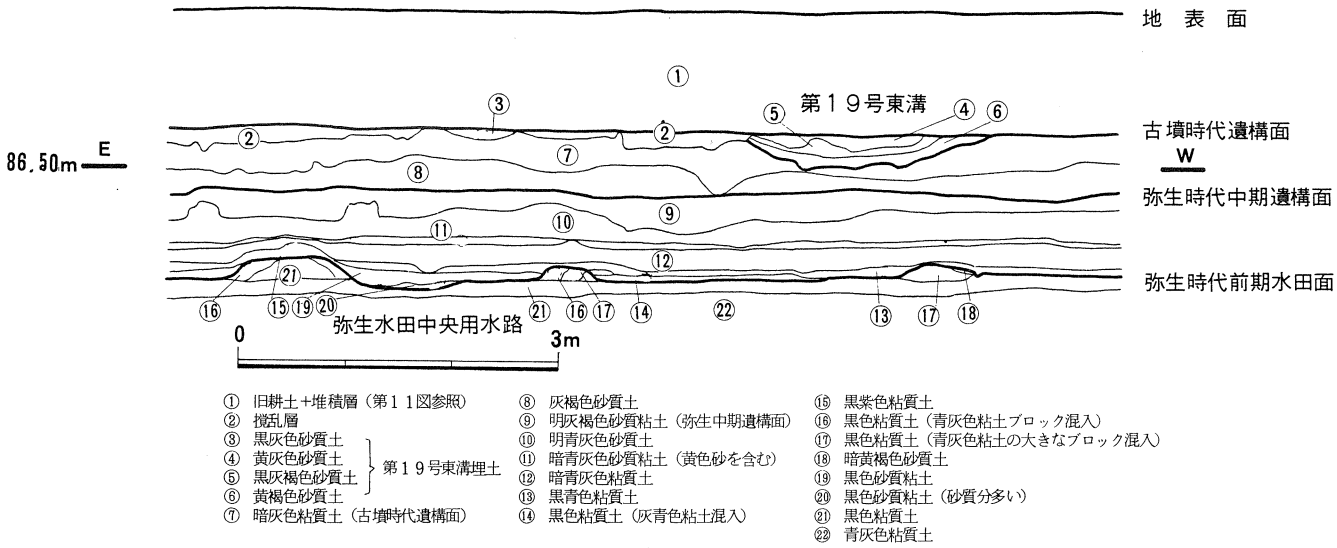
III. 遺跡の状況

服部遺跡は、推定360,000m²におよぶ大遺跡であり、現在のところ、縄文時代晩期から弥生時代の各時期・古墳時代・奈良時代・平安時代の諸遺構が重複して検出されている。

周知のように、野洲川は、その名の示すとおり、古来の暴れ川であり、たび重なる洪水によって、古琵琶湖層群や風化花崗岩地帯の、脆弱な甲賀山地から、大量の土砂を下流域に運搬してきたのである。したがって、その流路も近世に到るまで定着せず、多くの旧河道の痕跡を、現在もとどめているのである。注①このような状況の中で、野洲川下流域に分布する遺跡の多くは、かかる野洲川の洪水、沖積作用によって、深いものでは、現地表面から4m近く埋没していたのである。服部遺跡においても、弥生時代前期の水田跡は、現地表下2.7mで検出され、最も新しい平安時代の遺構は現地表下約90cmで検出されるのである。

今回の発掘調査で発見された遺構の主要なものは、縄文時代晩期から弥生時代前期に到る集落跡、弥生時代前期水田跡、約260面、18,700m²、弥生時代中期の方形周溝墓群、約400基、弥生時代中期竪穴住居跡群、20棟、弥生時代後期から古墳時代前期の環濠と竪穴住居跡群、50棟以上、古墳時代中・後期の周溝状遺構、27基、奈良時代後期の掘立柱建物群、約40棟、平安時代の掘立柱建物群、約20棟などで、このほか、各時期の溝跡・土坑が多数発見され、野洲川の洪水に伴うとみられる旧河道が、いくつか検出されている。これらの遺構に伴う遺物は、土器類がコンテナに5,000箱以上、木製品も水槽に30箱以上の膨大な量に達している。注②

服部遺跡の基本的な土層は、約35cmの現耕土、床土の下に、50～60cmをはかる堆積層があり、この大部分は、近世、



第9図　遺跡基本土層模式図

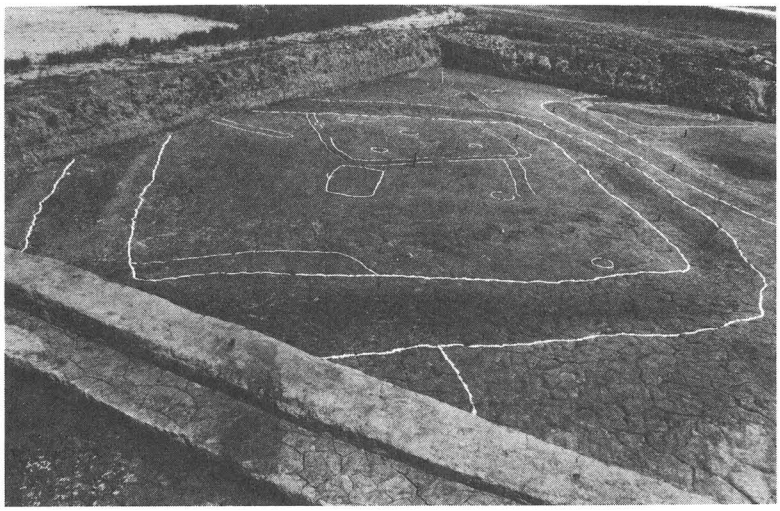
近代における洪水堆積物とみられる。そしてその、下層に約10cmの遺物包含層があって、その下から奈良・平安時代の遺構面が検出される。ただし、服部大橋から上流部分においては、奈良・平安時代の遺構面は撹乱されており、遺物包含層を除去した段階で、古墳時代中・後期と古墳時代前期（一部弥生時代終末期を含む）の遺構面が検出された。服部大橋下流部分の古墳時代の遺構面は、奈良・平安時代の遺構面より10cm前後下にあり、同一面で検出されている箇所も多い。弥生時代中期集落跡の遺構面は、古墳時代の遺構面の約30cm下から検出され、弥生時代中期方形周溝墓群はそのやや下層に存在した。弥生時代前期の集落跡は、その約20cm下層、弥生時代前期の水田跡は、さらに70cm前後下から検出されている（第９図参照）。

本書に収載した、古墳時代中・後期の遺構面までの土層については、第11図にサンプル的に示している通り、第１層、第２層が工事による盛土、第３層が撹乱、第４層が旧耕土と床土、第５層が野洲川洪水堆積物とみられる黄褐色砂質土、第６層が灰褐色砂質土、第７層が青灰色砂泥、第８層が青灰褐色砂泥で遺物包含層、第９層が暗青灰色粘質土で古墳時代中・後期の遺構面である。なお、第９層は弥生時代後期から古墳時代前期の遺構面でもあり、古墳時代中・後期の遺構は、それらを破壊して築造されていた。第５層から第７層までには、奈良時代以降、江戸時代に到る遺物が包含されており、後世の削平（おそらく耕作）により、遺構が破壊されたと考えられる。

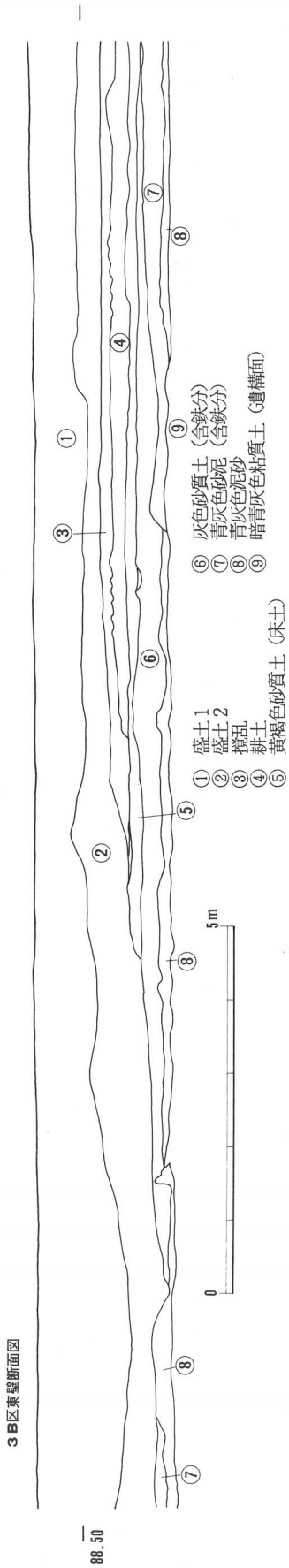
註

①辰己勝「野洲川下流平野の形成」（『地表空間の組織』所収、1981）

②大橋信弥・山崎秀二・谷口徹・辻広志『服部遺跡発掘調査概報』（滋賀県教育委員会、1979）



第10図　　遺構検出状況



第11図　　遺跡土層断面図

Ⅳ．調査の結果

本書が対象とする、古墳時代中・後期の遺構は、三次にわたる調査で、方形周構状遺構17基、円形周溝状遺構９基のほか、若干の溝跡が検出され、遺物としても、須恵器、土師器約100点、埴輪約60点、木製品約500点、石製品約50点と多数の出土をみた。ここでは、遺構と遺物が分ち難く結びついていることもあって、やや煩雑ではあるが、まとめて記述することにしたい。

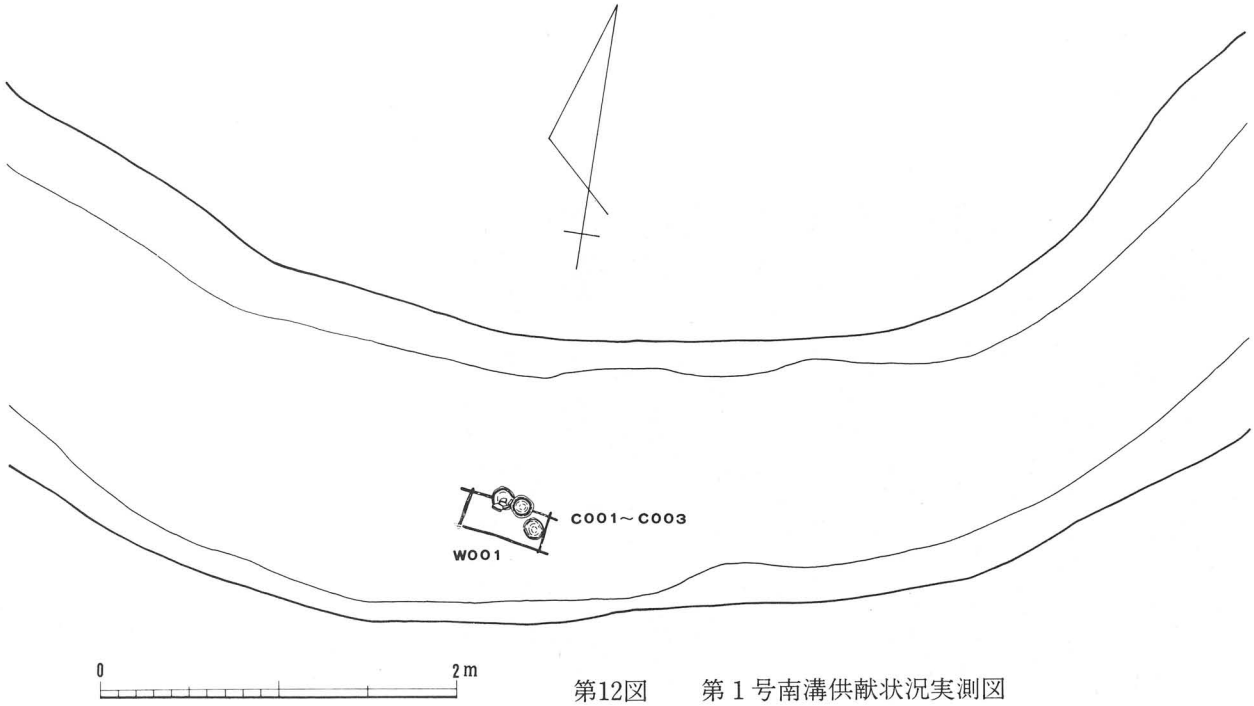
A．第１号円形周溝状遺構の調査

第４号の南に接して所在する中型の円形周溝状遺構である。この種の遺構として、最初に掘り下げを行なったものであったが、きわめて豊富な内容をもっていた。

(1) 遺構

径10,0mの台状部に、幅1.5～1.75m、深さ10.0～20.0cmの周溝がめぐり、上部はかなり削平を受けている模様で、埋葬施設の痕跡はなく、周溝もきわめて浅い。灰褐色砂質土の地山（以下同じ）を掘り込んだ周溝は、およそ２層に分けることができ、上層は暗灰青色粘質土、下層は暗紫色砂泥であった。

埋葬施設の痕跡はなかったが、周溝内には２ヶ所において、供献儀礼が認められる。まず、南の周溝中央において、箱形容器（W001）による供献が認められ、容器は長辺56.5cm、高さ4.0cm、厚さ1.2cmと短辺23.5cm、高さ4.0cm、厚さ1.1cmの長短各2本の板材を、枘によって組合せた箱形の容器である。底は残存していないが、板の底部に、それぞれ対になる、径0.3cmほどの小孔が、４ヶ所みられるところから、セイロ状の底があったことが推測される。



第12図　第１号南溝供献状況実測図

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
SD−B
SD−D
SD−E
0
50m

第13図　遺構全図

箱形容器内からは特に遺物は検出できなかったが、南の側板の上に須恵器坏身２点（C002、C003）が正位置で乗った状態で出土したのをはじめ、容器内に須恵器坏蓋１点（C001）が逆転して検出された。そして、坏身の１点（C003）の中から、貝の表皮らしいものが検出された。

又、周溝の北東部の中央からは、須恵器小型甕１点（C004）が正立した状態で出土しており、これも土器供献とみられる。なおほかに加工痕のある木製品がすこし出土をみたが、その意味するところは不明である。

(2) 遺物

出土した遺物は、上述のとおり、木製箱形容器１点、須恵器坏蓋１点、坏身２点、小型甕１点など８点であった。調査の段階では、重複して存在する古墳時代前期の竪穴住居跡にかかる土器片が、かなり出土しているが、本項では除外した（以下同じ）。

土器

坏蓋（C001）　口径12.5cm、器高4.6cmをはかり、丸い天井部で、口縁部は、やや内傾して下方にのび、端部は内傾する浅い凹面を呈する。天井部と口縁部の間は、明瞭な稜をもつ。天井部は、回転ヘラ削りで調整し、口縁外面および内面はナデにより調整している。全体的には丁寧なつくりである。

須恵器坏身（C002）　口径9.7cm、器高5.0cmをはかり、口縁部立ち上がりは、内傾して高くのび、端部は内傾する浅い凹面を呈する。受部は、やや外方にのび、丸くおさめ、底部は丸みをもつ。

須恵器坏身（C003）　口径10.9cm、器高5.0cmをはかり、高く、内傾してのびる立ち上がり部は、端部を内傾した凹面につくる。受部も外方にのび丸くおさめ、底部は平担である。底部外面ヘラケズリのほかナデ仕上げ。

須恵器甕（C004）　口径16.6cm、器高20.8cm、胴部最大径21.4cmをはかる小型の甕である。口頸部は「く」字に屈曲し、端部は大きく外反、上・下端をわずかに拡張し、外側に面を成す。又、端部下方に断面三角形の凸線を廻らす。体部は球状を呈し、底部はやや突出気味の丸底を呈する。口頸部外面に櫛描波状文一帯、体部外面全体に平行タタキ目痕がのこり、一部カキ目調整を施す。

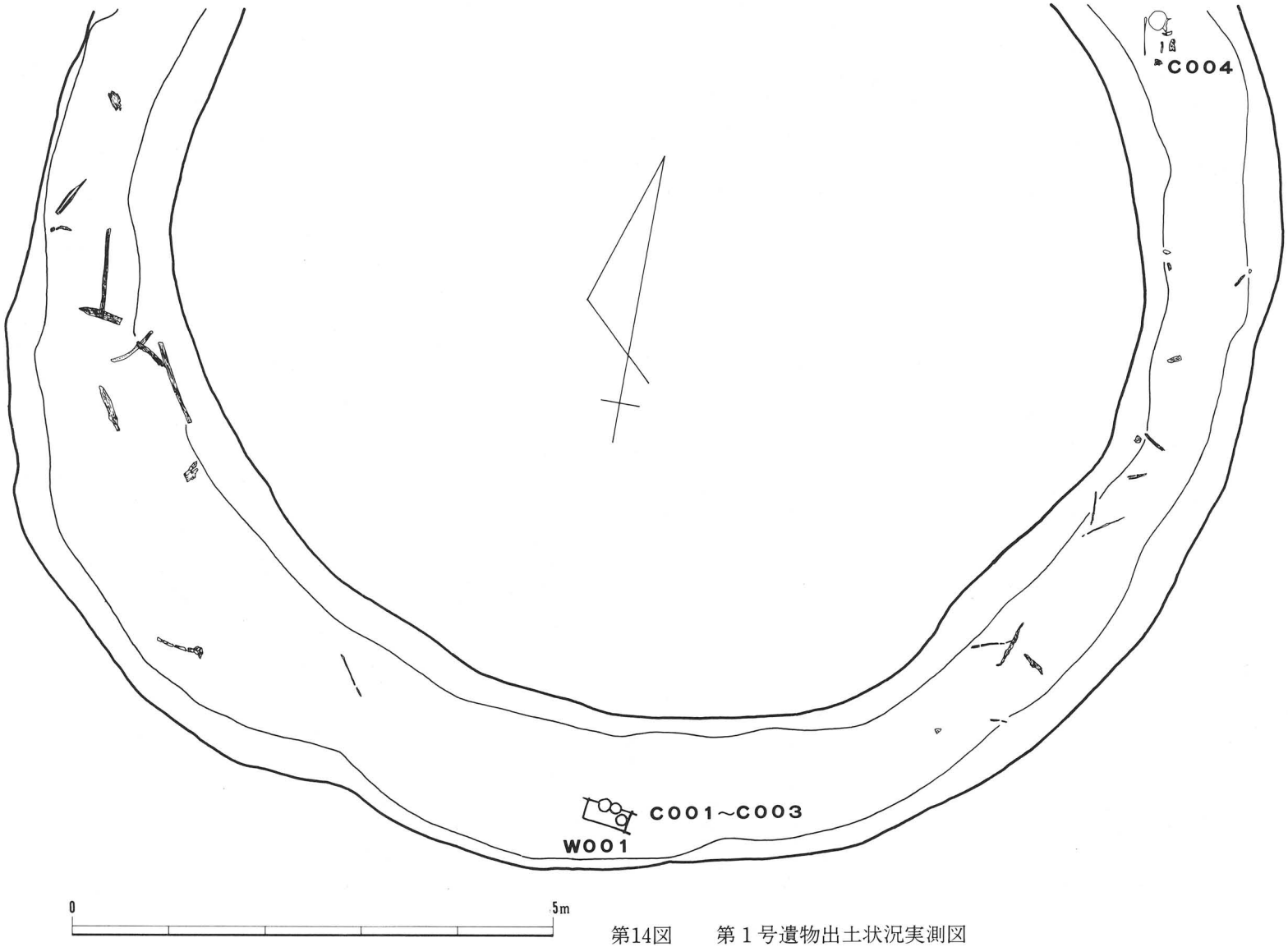
以上の出土土器のうち、須恵器坏蓋・坏身については、陶邑のⅠ型式の５段階に対比される。[注①]

木製品

箱形容器（W001）　細長い板材を組み合わせて作った箱形容器である。実測図は、出土状況から考えて、箱形容器を底部側から計側したことになる。短辺２枚の両端に枘を、長辺２枚にはそれに相応する長方形の枘穴を設け、両者を組み合わせて箱の４周を作る。底部は未確認だが、４枚の辺材には、いずれも対称的に小さな円孔が４つ穿たれている。植物繊維等を利用して、セイロ風の底部を形成していたのかもしれない。その他、４枚の辺材にはその底部側中央に台形状の切り込みが認められ、さらに長辺材の上面両端は斜めに切り落とされている。装飾的なものか、あるいは機能の一部をなすものであったのか。周溝溝内から検出された時、この容器上に須恵器坏身・坏蓋がセットになって定置されていたことから、墓前祭祀用の供献具として製作・使用されたと考えられる。長辺材の全長56.5cm、短辺材の全長23.5cm、容器としてみた場合には、長辺45.0cm、短辺18.0cm、深さ4.0cmをはかる。

長柄鋤Ａ〔柄部〕（W002）　柄と身を一木で直線的に削り出した、櫂状を呈する長柄鋤の柄部と考えられる。全体に磨耗が著しく、遺存状態は不良である。柄頭は五角形状に削り残して把手とする。現存長62.0cm、把手幅4.9cm、柄部の直径2.4cmをはかる。

矢板（W003）　比較的小型の矢板である。先端部を両側から断続的に削り込んで、矢状に尖がらせている。木材の辺材部を木取りしている。長さ43.7cm、幅8.1cm、厚さ2.5cmをはかる。



第14図　　第１号遺物出土状況実測図

杭（W004）　断面が長方形で矢板に近い形状を呈する杭である。先端部は、欠損した側から断続的に削り込んで尖がらせる。大木の辺材部を木取りしている。長さ41.8cm、幅5.7cm、厚さ2.3cmをはかる。

(3)　まとめ

第１号は、削平を受け、必ずしも良好な保存状態は示していなかったが、好運にも箱形容器による供献儀礼を検出できた。なお第１号は、その内容から西方に分布する第10～12号などと同一グループに属すると考えられる。

B．第２号方形周溝状遺構の調査

第１号の西に所在する方形周溝状遺構で第３号とともに、特に小型のものである、第３号とは形態・規模ともにほぼ同一であり、密接な関連が推定される。

(1)　遺構

台状部は、東西5.07m、南北5.05m、周溝は幅0.5m～1.0m、深さ11.0cm～16cmをはかる。後世の撹乱や削平で、北西・南西コーナー付近が十分に検出できていないので、陸橋部の存在は、明らかにし得ない。溝内は、およそ上・下２層で、上層は暗紫色砂泥、下層は暗青灰色砂質土で、いずれも、炭化物を含有していた。

(2)　遺物

溝内および台状部からは、全く出土遺物はなかった。

(3)　まとめ

第３号とともに、異例に小型の遺構であって、この種の遺構に含めるのは若干問題があると考えられるが、竪穴住居跡等と考える根拠も認められなかった。

C．第３号方形周溝状遺構の調査

第２号の西に接して所在する、小型の方形周溝状遺構である。

(1)　遺構

台状部は、東西約5.0m、南北4.8mをはかり、周溝のうち、南・西溝は、撹乱もあって検出できなかった。東溝は約5.05mを検出し、幅0.5cm、深さ25cmをはかり、北溝は残存長4.8m、幅0.8cm、深さ24cmをはかる。溝内の土層は、およそ３層に区分され第１層は暗青灰色粘質土、第２層は青灰色砂泥、第３層は青灰色砂質土で、炭化物がそれぞれに含有されていた。

(2)　遺物

溝内より完形の甕１点（C066）が出土しただけである。

土器

須恵器甕（C066）　口径15.2cm、器高20.8cmをはかる小型の甕である。口縁部は「く」字に大きく外反し、端部近くで、さらに外反する。体部は球形を呈し、底部はやや突出した丸底を呈する。口頸部外面は、二段に波状文をめぐらし、その間に細い凸線を廻らしている。体部は、不整方行の平行タタキ後、肩部にスリケシナデを施すものである。陶邑の編年案によるなら、Ⅰ型式の5段階に対比される。

(3)　まとめ

第2号とともに異例に小型のものであるが第4号などと方位を同じくしている点などから、それらと同じグループの可能性が高い。

D．第4号方形周溝状遺構の調査

第1号の北に接し、第2号・第3号と軸を等しくして所在する中型の方形周溝状遺構である。調査前の排水構により、南コーナーの一部が消失していた。

(1)　遺構

台状部は、東西11.0m、南北11.5mをはかり、幅2.4m、深さ30.0cmの溝がめぐる。北東コーナーに陸橋部をもっており、溝内の層序はおよそ3層に分かれる。第1層は黒灰色粘質土、第2層は暗青灰色粘質土、第3層は青灰色砂質土である。埋葬施設とみられるものはなく、第1号でみられたような明確な供献はみとめられなかった。南東コーナーの周溝内下層より、剣型石製品（S001）が1点出土し、北溝でも、全長4m以上、径7.0cmの建材が数本出土し、その間から土師器丸底壺1点（H082）が出土しており、何らかの供献儀礼を示すものとみられる。又西溝より、土師器坏1点（H081）が出土している。そして、第1号と同じく、大小の未加工木製品がかなり、各溝より出土している。

(2)　遺物

出土した遺物は、建材とみられる木製品などをはじめ、滑石製の剣型石製品、土師器坏・丸底壺等である。

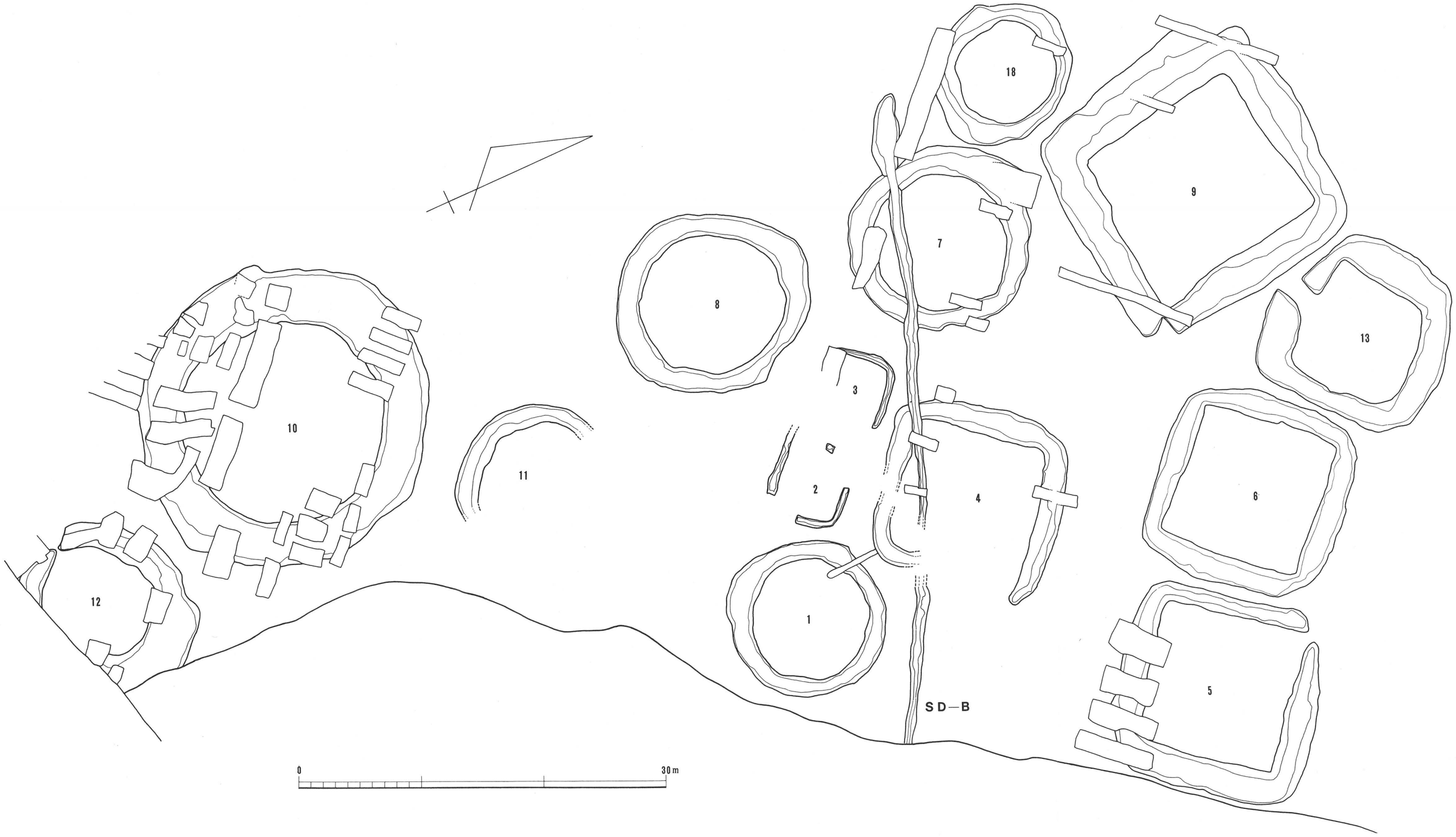
土器

土師器坏（H081）　口径12.3cm、器高4.4cmの土師器坏で、丸底の底部から、体部、口縁部は、内湾して斜上方にのび、端部を丸くおさめる。内外面とも、ナデにより調整される。

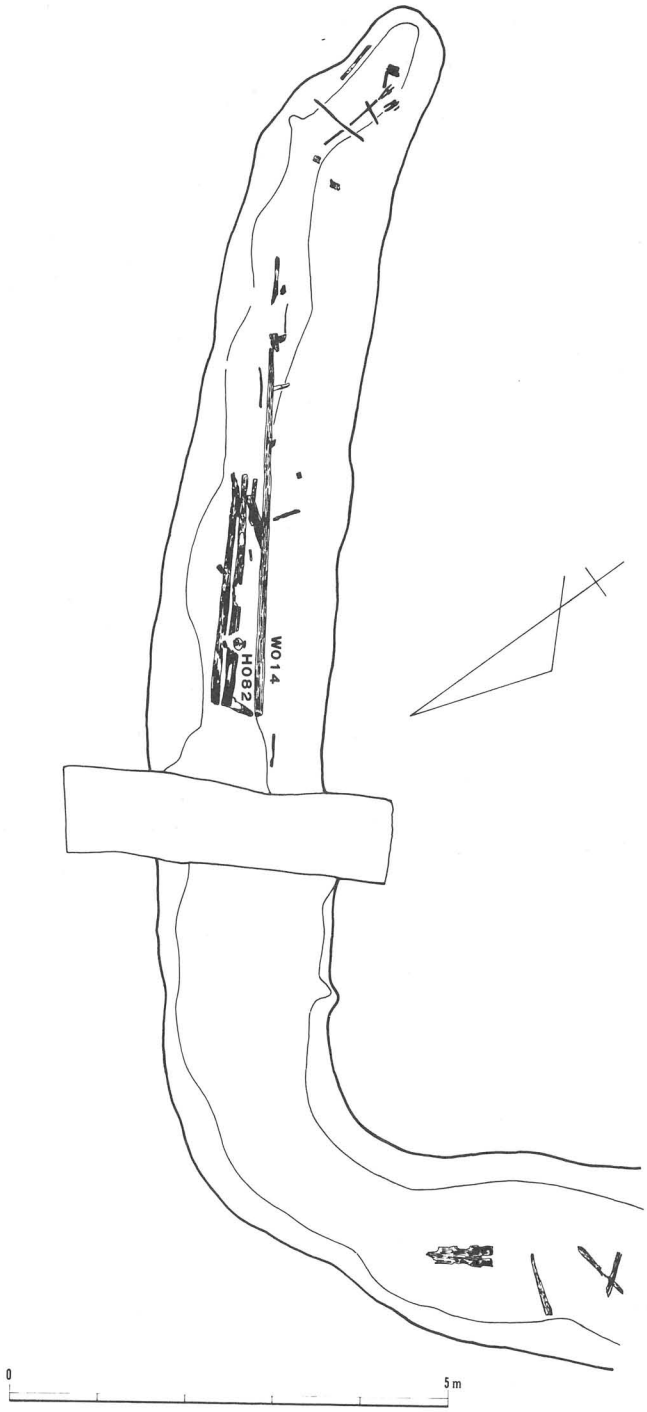
土師器壺（H082）　口径8.7cm、器高13.3cmをはかる土師器の小型壺である。口縁部は、受口状に立ち上がり、端部を丸くおさめる。体部は球状を呈し、底部は丸底である。口縁部は内外面ともナデにより調整し、体部外面は、肩部を横方向に丁寧なヘラミガキを施し、下半はハケ目調整の後ナデにより仕上げている。内面は、底部に一部ヘラ削りがみられるほかナデ上げにより仕上げている。類例の少ないもので、時期は判然としない。

石製品

剣形石製模造品（S001）　長径3.0cm、短径1.9cm、厚さ0.31cmをはかる滑石製の剣形模造品である。中央よりやや茎



第15図　遺構分布図(1)



第16図　　第４号東溝遺物出土状況実測図

よりに、径0.1cmの円孔を並べて２個穿っており、両面とも、斜方向の研磨痕がみとめられる。

木製品

柱状木製品（W005～W007）　いずれも樹皮を剝いだだけの丸太材である。柱根に近い部分のみ遺存し、全容は不明である。下端部は手斧様工具で断続的に切り落している。直径はW005が7.8cm、W006が幅8.2cm、W007が6.2をはかる。主柱としては径が小さく、支柱的な用途に供されたのであろう。

木端（W008）　多方向から打ち込まれた手斧痕が遺存する。手斧による木材加工の際、切り捨てられた木片と考えられる。

板状木製品（W009～W012）　４例とも小型の板状品である。W009には、一定方向の連続的な削り痕が明瞭に残っている。W010、W011は一端を斜めに削り落とす。いずれも柾目板に近い木取りである。

棒状木製品（W013・W014）　２例とも遺存状態は不良である。W013は丸太の辺材を断面長方形に木取りしたものである。W014は、木心に向かう亀裂のため変形しているが、本来樹皮が着いたままの細い丸太材である。建築部材として、垂木ないし小（木）舞いなど、屋根等の骨組み用途に供されていた可能性も考えられる。

(3)　まとめ

以上のように、第４号は、土師器のみの出土で、不本意ながら築造時期は判然とし難い。なお、建材については、出土状況から意識的なものか、流入したものか判然としなかったが、全長４m以上の建材が、周溝内に埋置されていたのは、単なる流入とは考え難いところである。

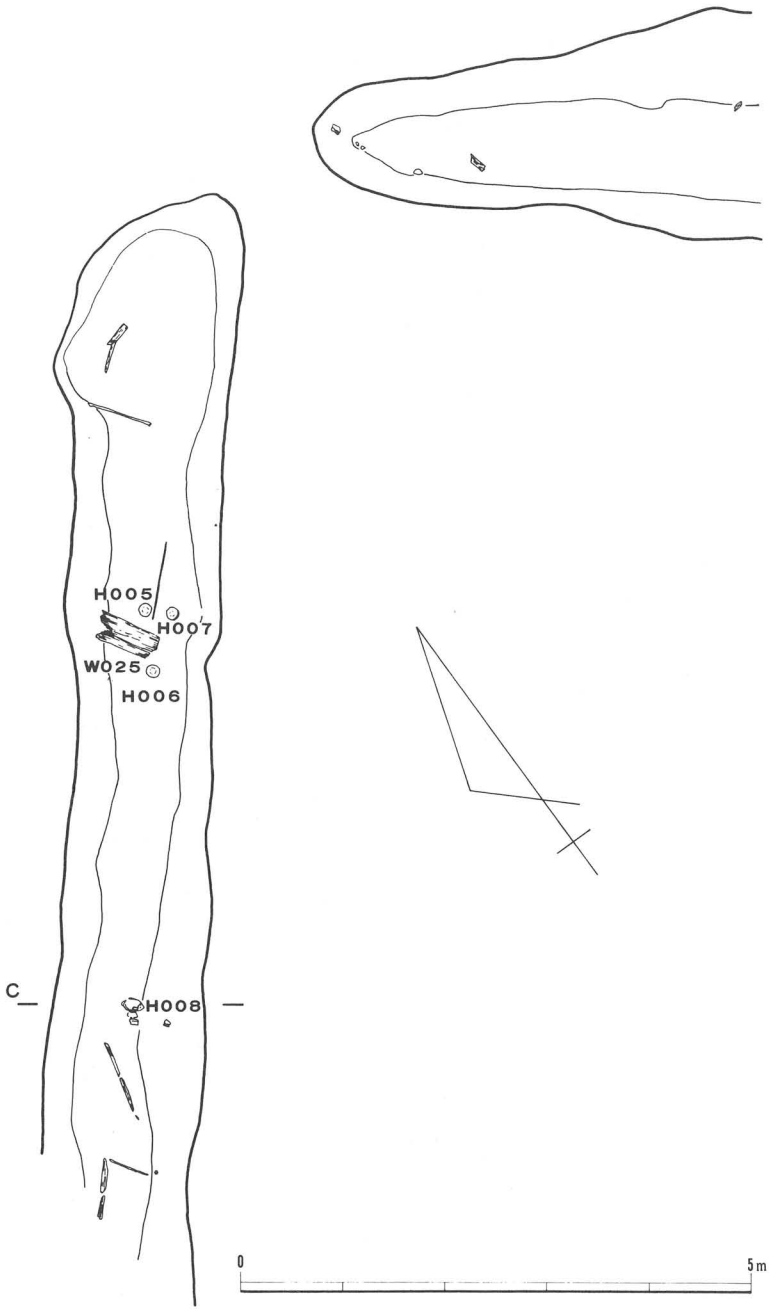
E．第５号方形周溝状遺構の調査

第４号の東に接し、第４号・第６号と方位を等しく所在する中型の方形周溝状遺構である。

(1) 遺構

台状部は、東西12.0m、南北11.4mをはかり、幅1.3～3.5m、深さ40.0cmの周溝がめぐる。北西コーナーに陸橋部があり、西溝は、隣接する第６号を意識して、周溝の幅がかなり狭くつくられており、第６号に後続して築造されたことが伺える。溝内の層序は、おおよそ３～４層に分かれ、残りの良いところでは、第１層に、黒灰青色砂泥が、第２層に黒灰色粘質土、第３層に灰青色粘質土、第４層に暗青灰色粘質土が堆積する。残りの悪いところでは、第１層が消失している。遺物の大部分は、第３・第４層より出土しており、溝の埋没する過程が知られる。埋葬施設は、すでに消失していたが、西溝、南溝に、顕著な供献儀礼が認められた。

西溝では、第１号における箱形容器に類するものとして、長辺63cm、短辺24cm、厚さ3.5cmの板材（W025）が周溝中央に置かれ、そのかわりに、土師器坏身３点（H005～H007）が、正位置で置かれているのがみられ、同じ西溝中央で、土師器短頸壺１点（H008）が転倒して検出された。南溝では、後世の削平により、全貌は明らかでないが各種の加工を加えた木製品が、大量に埋置されていたのである。



第17図　第５号北溝遺物出土状況実測図

(2) 遺物

上述のとおり、出土した遺物は、すべて溝内より発見されたものである。

土器

土師器坏（H005～H007） 口径12.0～12.7cm、器高4.0cm～4.5cmをはかる坏で、やや平坦な丸底の底部から体部・口縁部がやや内湾しつつ上方にのびる。内外面ともナデ調整。

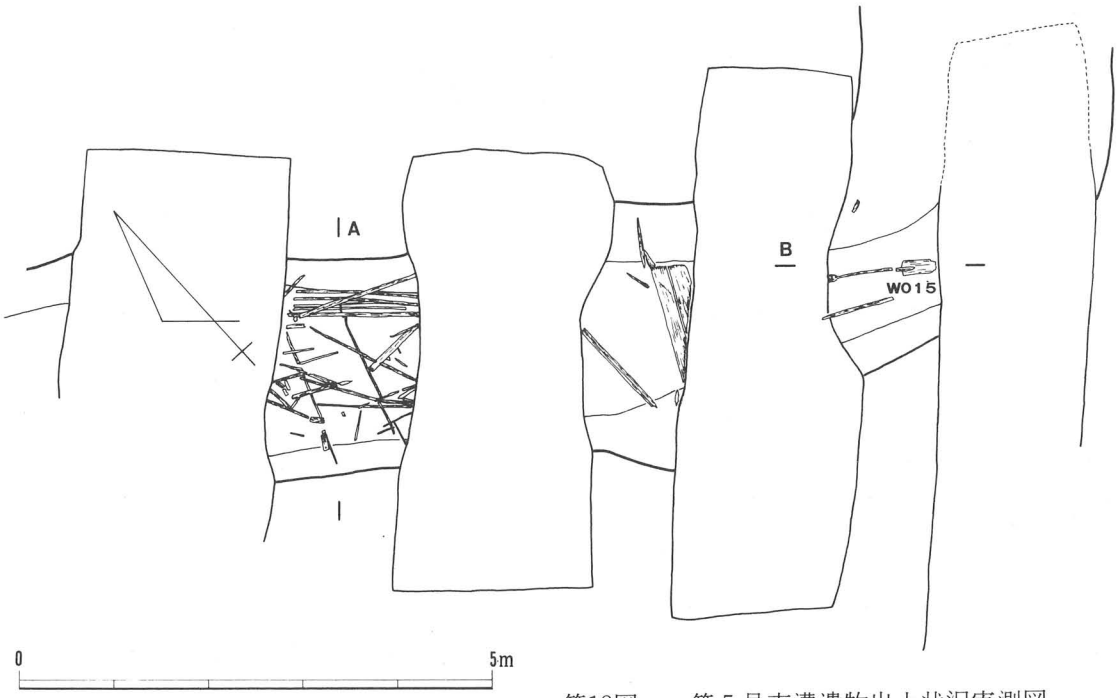
土師器壺（H008） 口径8.8cm、器高13.8cmをはかる短頸壺で、口頸部は、外反して斜上方にのび、端部を丸くおさめる。体部は球状を呈し、底部はやや平担な丸底を呈す。体部外面は下半に横方向、上半に縦方向のヘラミガキを施している。

土師器壺（H085） H005～H008と異なり、南溝より出土した短頸壺である。底部を欠失しており、口径は8.9cmをはかる。口頸部は、ゆるやかに外湾して、端部を丸くおさめ、体部は胴の張る偏球状を呈す。おそらく丸底とみられる。

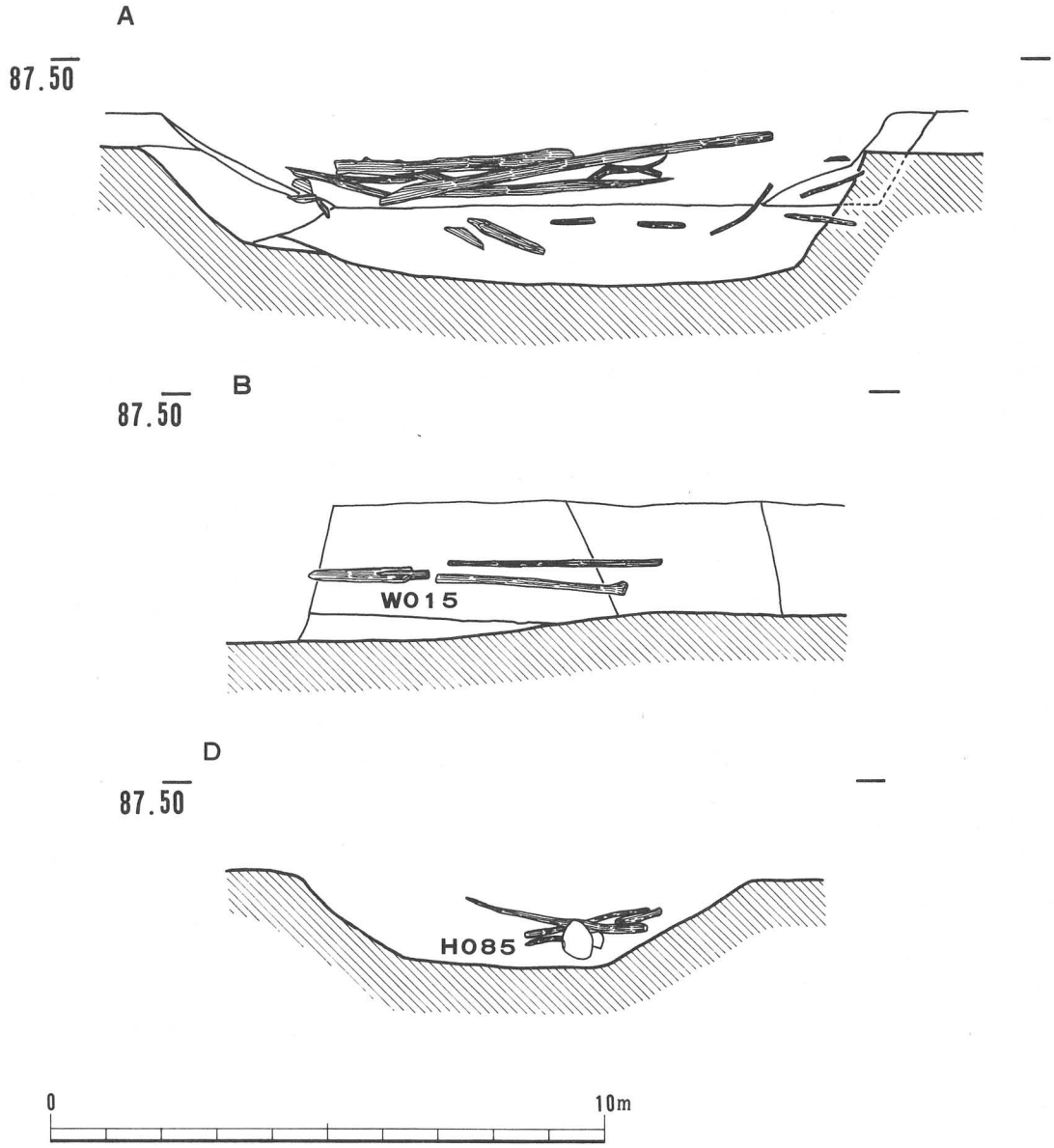
木製品

長柄鋤B（W015） 柄と身を一木で削り出した長柄鋤である。ただ、上述の直線的な長柄鋤Aと比べると、スプーンの縦断面に似た微妙なカーブが認められる。柄部は、柄頭にむかう上端部分のみ欠損している。柄部の横断面は、中位で厚くて幅の狭い楕円形だが、身に近づくにつれてしだいに薄くて幅広の楕円形へと変化する。一方、柄頭付近では、一まわり細い円形になるようである。縦断面は中位ではやや下湾気味で、柄頭と身へ向かうにつれ上湾気味になる。身は、上半近くまで柄の形が伸長しており、全体に厚くて強靱な作りをなす。身の肩部は、垂下気味ながら柄とほぼ直角で最も幅広い。身の下半は薄くなり、刃縁は一段削り込んでU字形に成形している。U字形部分の縁辺は、両面から斜めに削り込んで鉄製U字形鋤先の着装部としていたようだ。ただ、部分的に摩耗しており、あまり明確ではない。カシ材である。現存長101.2cm、身部の長さ36.8cm、身部の肩幅15.4cm、鋤先着装部最大長10.2cm、最大幅13.0cmをはかる。

鋤〔柄部〕（W016） 柄部にT字形の組み合わせ式把手がついた鋤の柄部である。柄は、中位で厚くて幅の狭い比較的太目の楕円形であるが、柄頭に向かってしだいに細い円形を呈すようになる。その上端は、把手を差し込むために4方から削り込んで調整している。柄本体はカシ材である。把手は、針葉樹系の別木を平面台形に短く切り、断面を隅丸方形に整えて中央に方孔を穿つ。方孔に柄を挿入した後、柄が抜けることのないように、上端両側から楔を打ち込んで固



第18図　第5号南溝遺物出土状況実測図



第19図　　第５号周溝エレベーション

定している。現存長42.3cm、把手最大幅10.4cmをはかる。

柱状木製品（W017・W018）　両者とも枝を打ち払い、樹皮を剥いだだけの丸太材である。W017は柱根に近い部分のみ遺存しており、全容は不明である。下端部は平滑となるよう手斧様工具で丁寧に切り落としている。直径18.0cmをはかり、主柱的な用途にも耐え得る規模である。W018は現存長397.6cmをはかるが、いまだ上端は欠損しており本来はさらに長い。下端部は手斧様工具で荒く切り落としている。下端部の直径9.0cm、現存上端部の直径4.2cmで、支柱的な用途に供されたものと考えられる。

有孔尖頭板状木製品（W019・W020）　細長い板材に４孔を穿ち、一方に杭状のものを作り出した木製品である。４孔はいずれも縦長の長方形に穿ち、それぞれ対称をなす。W019は完全な形をとどめている。板状部上端は手斧によって断続的に削り落とす。杭状部の下端は両側から切り込んで矢状に尖がらせている。W020は杭状部下半を欠損する。W019と比べてやや厚く、全体にひとまわり小型であるが、４孔の間隔は短い方で4.5cm、長い方で35.0cmと全く同じ値を示す点は留意されてよい。W019は、板状部長62.6cm、杭状部長66.2cm、全長128.8cm、板状部幅8.0cm、杭状部幅4.4cm、厚さ2.0cmをはかる。W020は板状部長50.6cm、現存長70.8cm、板状部幅6.8cm、杭状部幅3.6cm、厚さ2.2cmである。

尖頭板状木製品（W021・W022）　長方形の板材の一端を、両側から斜めに切り落として尖がらせたものである。木取りは柾目材とする。W021は長さ12.0cm、幅4.5cm、厚さ0.9cmをはかる。W022は、長さ15.6cm、幅4.3cm、厚さ0.9cmである。

板状木製品（W023～W025）　W023・W024は、狭長な板状品である。両者とも比較的厚い。W023は柾目板に、W024は板目板に木取りする。W025は、大型の板状品である。遺存状態は不良で、一端は欠損する。木取りは柾目板である。

串状木製品（W026・W027）　棒状割材の先端を尖らせた、串状を呈する木製品である。丸太の辺材部を木取りする。W026は長さ33.8cm、W027は51.9cmをはかる。

棒状木製品（W028～W039）　W028は、枝を打ち払い樹皮を剝いだだけの丸太材である。下端部は手斧様工具で荒く切り落としている。上端部は欠損しており不明である。下端部の直径6.4cm、現存長225.4cmをはかる。

W029～W039は、棒状の割裂材である。W029～W035は丸太の辺材部を、W036～W039は心材部を木取りする。摩耗の著しいものもあるが、断面はいずれも方形を意図したようである。W029・W030・W035・W036・W037は、一端を遺存している。内W026は、他材との結縛のために一面を抉り込んでいる。その他の木製品にはそうした加工の痕跡は認められず、いずれも単純に収めるが、W030・W035は手斧様工具で断続的に削り落とした様が明瞭に残っている。

W028は垂木として、又、それ以外の棒状品は小（木）舞いなどとして、屋根や壁面等の骨組み用途に利用されていた可能性も考えられる。

(3)　まとめ

以上、第５号の概要を述べた。西溝と南溝において顕著な供献儀礼が認められ、特に木製品の出土は、南溝が近世における「砂だまり」により、大きく寸断されているにもかかわらず、第17号・第19号・第23号に匹敵する内容をもち注目される。[注②]

F．第６号方形周溝状遺構の調査

第５号の西に接し、軸をほぼ等しくする中型の方形周溝状遺構である。

(1)　遺構

台状部は東西11.8m、南北11.6mのほぼ正方形で、幅2.2～2.8m、深さ40.0cmの周溝が全周する。ただしコーナーのみは、幅1.8m、深さ12cmと、狭くて浅くなっている。周溝内の埋土は、およそ４層に類別され、第１層は炭化物を含んだ黒灰色粘質土、第２層は暗褐色粘質土、第３層は暗黄褐色粘質土、第４層は黄褐色砂質土であった。埋葬施設の発見はなかったが、北溝を中心に供献儀礼の痕跡がみとめられる。

北溝の北東コーナー近くで、田舟による供献がみられた。田舟は大半が腐植しており、全様はうかがえないが、周溝の外縁にとどまった状態で検出され、現存長1.5m、幅0.43mをはかる。両側に各２本の突起をもつ、実用品とみられる。そして、その反対の周溝外縁部肩から、滑石製の紡錘車２点（Ｓ002・Ｓ003）が出土し、相関連するものとみられる。なお、他の各周溝からは、用途不明の木製品、自然木が多数出土したが、性格は明らかでない。

(2)　遺物

第20図　　第６号遺物出土状況実測図

遺構に伴うとみられる遺物は、上述の木製品・紡錘車のみで、土器の出土はなかった。田舟は全形をとどめず、図示できなかった。

石製品

紡錘車（S002・S003）　いずれも滑石製でS002は高さ1.2cm、上径2.0cm、下径4.7cm、重さ32.3gをはかり、上下方向の丁寧な細かい面とりの後、孔へ向う方斜線状の線刻を施す。裾帯部に回転による、下層部に不定方向の擦痕がある。S003は、高さ1.5cm、上径1.8cm、底径4.4cm、重さ33.6gをはかり、成形等はS002とほぼ同様であるが、下層部に¼周する同心円状の擦痕がみとめられる。

木製品

木端（W040）　大木の辺材加工の際、切り捨てられた木片と考えられる。多方向から打ち込まれた手斧痕が確認される。

(3)　まとめ

以上のように、第6号は、土器の出土もなく、築造時期は明らかにできない。ただ上述のように、その形態から第5号に先行する時期が求められる。なお、田舟による供献は、第23号でもみられ、供献儀礼の性格を示すと考える。

G．第7号円形周溝状遺構の調査

第4号の西に所在する中型の円形周溝状遺構である。南半を溝Bが切っているほか、近世における「砂だまり」によって、部分的に破壊されている。

(1)　遺構

台状部は、径11.2mをはかるほぼ円形を呈し、幅1.3m～2.5m、深さ18.0cm～25.0cmの周溝をめぐらす。南半の削平が大きく、溝もかなり浅い。溝内の層序は、南半では、残りが悪く、2層に類別され、上層は暗灰色粘質土、下層は暗灰色泥砂で、いずれも炭化物を包含していた。北溝では、一部3層に類別され、第1層は暗黒色粘質土、第2層は暗灰色粘質土、第3層は暗灰色泥砂である。埋葬施設は削平され、消失していたが、南溝において、須恵器大甕による供献が認められる。

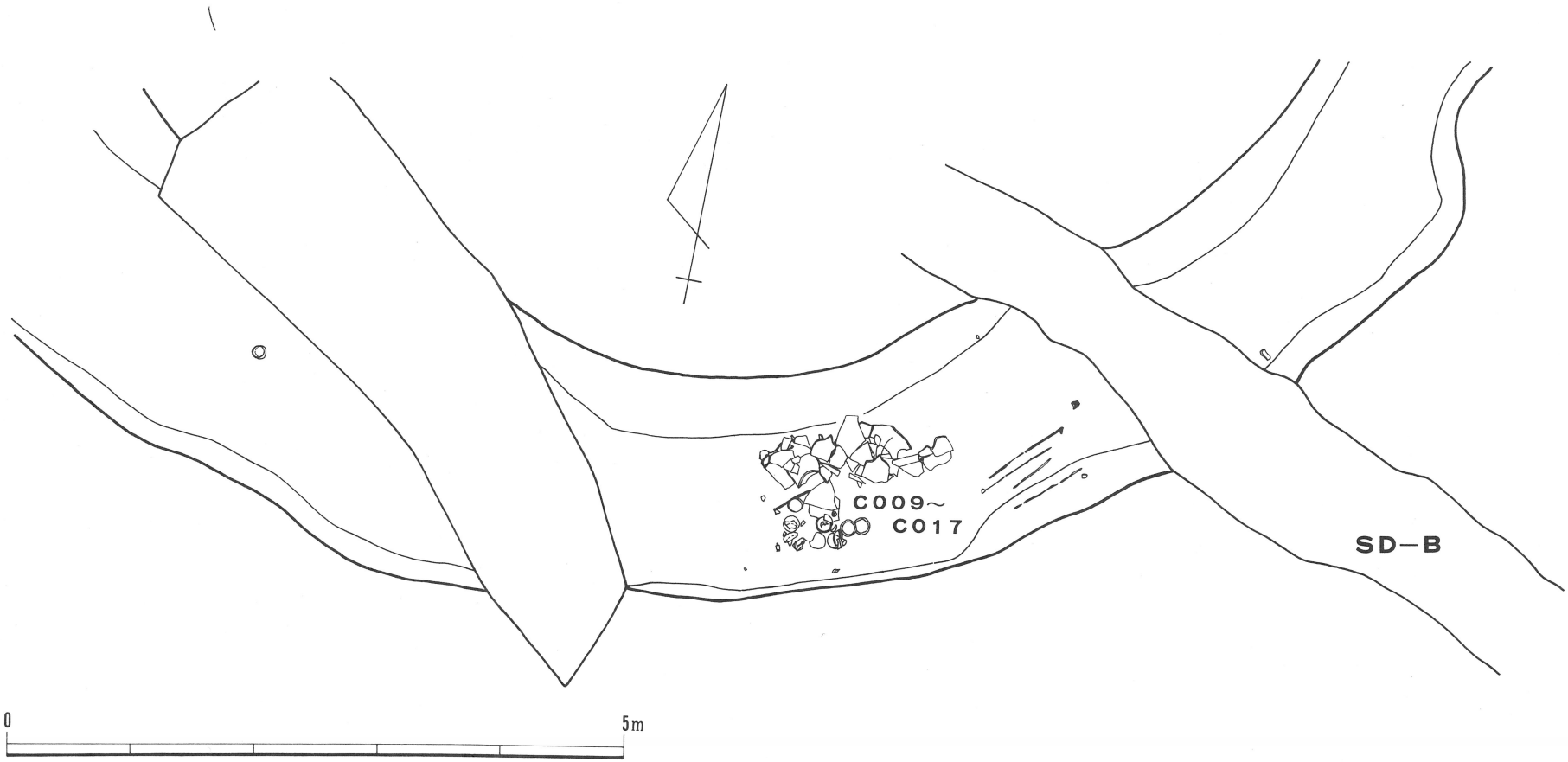
大甕は細かく粉砕され、折重なって周溝内幅一杯に広がっており、その前面および周囲に須恵器坏蓋・坏身が、転倒したり、正位置で、多数発見された。これらは、第1号や第5号における供献とは、やや異なるが、大甕を中央に据え、そのまわりで坏蓋・坏身を供献するという、類似した儀礼が推測される。なお大甕が粉砕されている点については、この部分の削平が大きい点と関連する可能性もあるが、出土状況をみると、一次的な堆積層に大部分が含まれ、溝内に転落して、自然にこわれたか、意識的に破砕された可能性が高い。（なお、本品は、復元できず、図示できなかった。）

(2)　遺物

出土した遺物は、南溝で供献されたとみられる須恵器大甕・坏蓋・坏身など11点のほか、若干の木製品であった。

土器

須恵器坏身（C009・C010・C012・C014・C016・C017）　立ち上がりは、内傾又は外湾気味に高くのび、端部は



第21図　　第７号南溝遺物出土状況実測図

内傾する浅い凹面を成している。受部は、ほぼ水平にのびるものと、短く上方にのび丸くおさめるものがある。底部は丸味をおびたものと、平底気味のものがある。いずれもマキアゲ・ミズビキ成形で、底部は回転ヘラケズリ調整後、回転ナデ、他は回転ナデ調整であった。C016の底部には、ヘラ状工具による「カマ印」様の線刻がみられた。

須恵器坏蓋（C011・C013・C015・C083）　口縁部はやや外湾気味に直線的に下り、端部は内傾する凹面を成す。天井部は浅く丸味を成し、稜は短く断面三角形を呈するもの（C011・C015・C083）と丸く鈍いものがある（C013）。マキアゲ・ミズビキ成形で、天井部は回転ヘラケズリ、天井部内面中央に仕上げナデを施す。

須恵器甕（C145・C146）　いずれも、口縁部の破片であるが、口径20cm前後の中型と小型の甕である。口縁部は大きく外湾し、C145の場合端部を外側に肥厚させ、外端部が凸状を呈するのに対し、C146の場合は端部を緩く屈曲させ短く上方に立ち上がらせている。C145には端部下方に4条の櫛摘波状文を施し、C146では、頸部下方と中位に各一条の細い凸線をめぐらせ、その間に櫛描波状文・直線文をめぐらせている。なお内外面とも回転ナデ調整で仕上げている。

木製品

板状木製品（W041）　板材の一端に両側から切り込んで枘を作り、枘から13.0cm入った箇所で長方形の枘穴を穿つ。他端は欠損しており不明である。現存長66.1cm、幅4.3cm、厚さ2.2cmをはかる。建築等に関連する横架材であろう。

(3) まとめ

第7号の場合、残りは余り良くなかったが南溝に良好な供献儀礼の遺構があり、第1号・第2号に似た須恵器坏蓋・坏身セットの供献がみられた。ただその前面には箱形容器ではなく、須恵器大甕が据えられており、独自の内容をもつものであった。出土須恵器は、陶邑の、Ⅰ型式の4段階に相当し、五世紀の第4四半期に築造された可能性が高い。

H. 第8号円形周溝状遺構の調査

第7号の南に所在する中型の円形周溝状遺構である。規模・形態とも第7号ときわめて類似しており、密接な関連が伺える。

(1) 遺構

台状部は、径11.5～12.0mの正円を示すが、周溝は、東・西溝が幅2.0m～2.1m、南・北溝が幅2.3m～2.6m、深さも東溝が20.2cmと深いのに対し、他は20.5cm～25.5cmと残りが悪かった。層序は、東・北溝が3層に類別され、第1層が暗黒色粘質土、第2層が暗青灰色砂泥、第3層が暗青灰色砂質土であり、西・南溝では、第1層が消失していた。なお第8号は、出土遺物は皆無で、他でみられた供献の痕跡も発見されなかった。

(2) まとめ

第8号は、上述のように、第7号にかなり類似した、均整のとれた円形周溝状遺構であったが、削平か、或は他の要因か不明であるけれど、溝内からの出土遺物はなく、実態は明らかにし得なかった。

Ⅰ．第９号方形周溝状遺構の調査

第７号の北に接して所在する、大型の方形周溝状遺構である。

(1) 遺構

台状部は、ほぼ正方形を呈し、一辺14.5m前後をはかり、周溝幅は、南溝・西溝がやや広く、4.8～4.3m、北・東溝が3.5～3.2mをはかり、深さは50～60cmと、比較的残りが良い。周溝内の土層は、おおよそ４層に類別され、第１層は暗青灰色粘質土、第２層は青灰褐色粘質土、第３層は暗灰色粘質土、第４層は、暗青灰色砂泥で、遺物の多くは、第３・４層に含まれていた。

埋葬施設は、削平され消失していたが、周溝内では、多数の木製品をはじめ、若干の供献の痕跡が認められた。。すなわち、北東コーナーには、須恵器中型甕（C084）が細かく粉砕された状態で検出されたほか、南西コーナーでは、須恵器小型壺（C018）の完成品が、北溝の中央付近で、砧とみられる木製品２点が接して検出された。なお、西溝を中心に大量の木製品が出土しているが、大部分が長さ80cm前後の棒状木製品であった。これらの供献具は、周溝内に意識的に埋置されたというより、墳丘上に供献された後、転落ないし廃葬された可能性が高いと考える。

(2) 遺物

土器

土師器壺（H019）　偏球状の体部に、外反して外上方に開く長頸のつく壺で、第５号・第13号・第14号・第15号などでも、同種のものが出土している。内外面ともナデによる調整を加えているが、体部外面には、横方向のヘラミガキが加えられている。ただし、剝離が激しく、不明瞭であった。

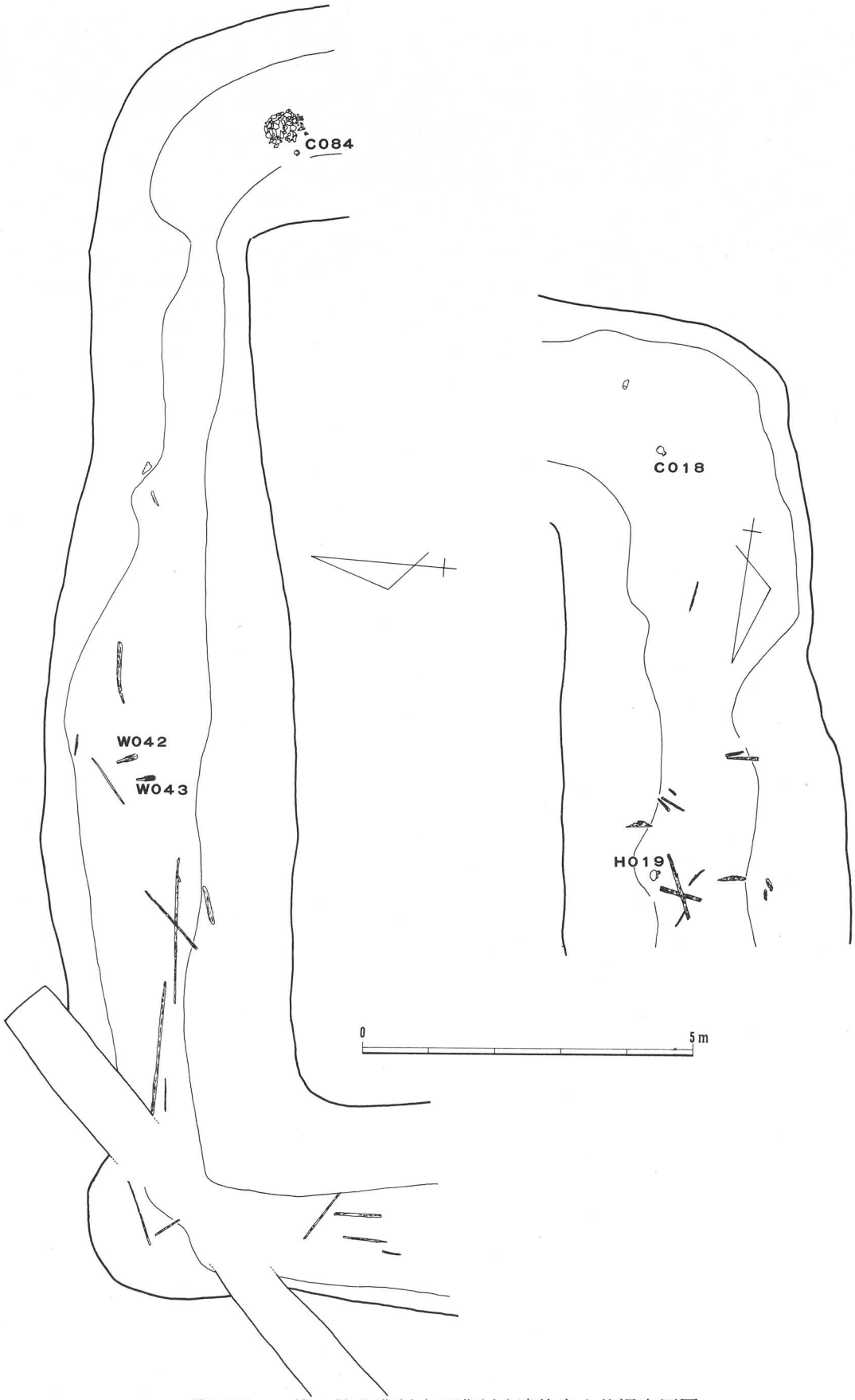
須恵器小型壺（C018）　楕円形の体部に、短く外湾する口縁部がつく。口縁端部外面は面を成して、ヘラ描きの沈線をめぐらしている。体部外面は回転ナデの後、胴部のみカキ目調整、底部はヘラ削りを施す。

須恵器甕（C084・C154・C155）　C084は完形の中型甕で、口縁部は「く」字に屈曲し大きく外湾、端部を上方に引き上げて、外面に面をつくる。体部は球状を呈するが、胴部上方に最大径をもち、底部は丸底を呈する。口頸部中位に櫛描波状文を施すが、全周せず、４分の１ほどであった。体部上半は、平行タタキを全面に施した後、部分的にカキ目調整を施している。下半部にはスリケシナデを施す。C154・C155は、中型甕の口頸部破片で、大きく外湾して広がる口頸部で、端部外面は、凹状を呈す。又、端部下方には断面三角形の凸線を１条めぐらす。内外面ともナデによる調整。

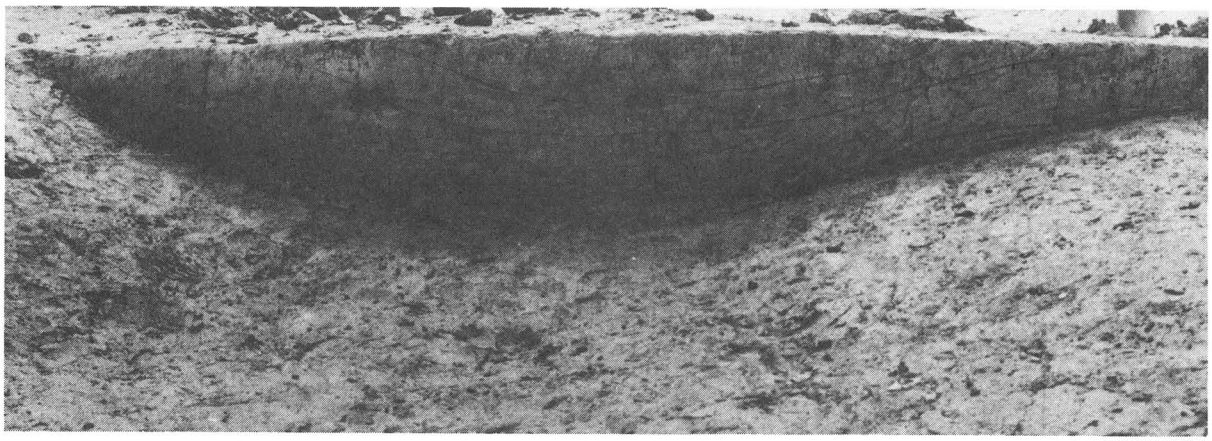
須恵器高坏（C147）　坏部は底部のみで、平坦であり、脚部は、やや外湾気味に大きく広がり、端部は浅い凹状を呈し、外側に稜をなしている。やや下方に、３方に円孔スカシを穿ち、その下に一条の凹線をめぐらす。内外とも、回転ナデ。

木製品

砧〔横槌〕（W042・W043）　30cm余の丸太材の過半を削り残して頭部とし、他を細く削り込んで柄とした砧（横槌）である。頭部は、一部手斧様工具で平滑にした痕跡も認められるが、基本的には樹皮を剝いだだけのものである。頭部上端は、手斧様工具で外周より木心へ向かって、断続的に切り落とす。柄は外周より斜めに一段細く削り込み、刀子様



第22図　　第９号北溝(左)西溝(右)遺物出土状況実測図



第23図　　第９号周溝断面

工具で丁寧に整形している。下端は、上端と同様、手斧様工具で木心に向かって断続的に切り落とす。全体に加工の痕跡が明瞭で、使用された形跡が余り認められない。当初から祭祀用の供献具として製作されたものかもしれない。W042は、頭部長18.2cm、柄部長13.5cm、全長31.7cm、頭部径7.7cm、柄部径3.1cmをはかる。同様にW043は頭部長18.9cm、柄部長13.2cm、全長32.1cm、頭部径8.2cm、柄部径4.1cmである。両者は形態・数値等極めて良く似ており、同一の丸太材を使用して、同一人物により製作された可能性が高い。

薦編み具の錘（W044）　木材の辺材部を平面長方形・断面水滴形に木取りし、上端中央をコの字状に大きく抉った、薦編み具用の錘と考えられる。一端の上・下は、新たに斜め方向の角取りが施されてもいる。抉り部分には、経糸となる細縄が括りつけられて、薦編み具としての一機能を担っていたのであろう。縦7.1cm、横15.1cm、最大厚4.4cmをはかる。

木端（W045・W046）　木材加工の際、切り捨てられた木片と考えられる。いずれも大木の辺材部片で、多方向から打ち込まれた手斧痕が顕著である。

有孔板状木製品（W047～W049）　W047・W048の両者は、木口の一端からやや入った箇所に長方形の枘穴を１つ穿った板状の木製品である。一方の側辺は大きく斜めに切り落とす。他方の側辺は、斜めの切り込みを数次にわたって加え、順次はつってしだいに幅を減じる。表面は手斧を連続的に加えて平滑にする。手斧の刃の当り幅は、W047で3.4cmを越える。W049の場合、枘穴は認められないが、その他の点では先述の二者に以ており、一括して記載しておく。W047は、現存長49.5cm、最大幅5.8cm、厚さ2.8cm、枘穴は1.6×1.2cmである。W048は、現存長95.3cm、最大幅5.4cm、厚さ2.2cm、枘穴は3.8cm×1.6cm、W049は、現存長75.5cm、最大幅4.4cm、厚さ2.3cmをはかる。

板状木製品（W050～W055）　W050は、丸太の辺材部を幅8.5cm、厚さ2.5cm前後に割裂し、木口のみ手斧で両面から断続的に打ち込んで切断した板材である。礎板の用途に供されたものか。W051は片側の木口を欠損するが、幅9.0cm、厚さ1.5cmの整った板材である。W052･W053は、規模は異なるが、両者とも遺存する側の木口を両側から斜めに削って矢板状に尖がらせている。W054は、部分的に手斧の加工痕が良く残っている。W055は、狭長な棒状の板材である。全長58.2cmをはかる。

両端切り込み材（W056～W058）　いずれも丸太の辺材部を木取りした、大型の棒状割裂材である。W056・W057は、断面長方形の類似した形状を示す。両者とも両端の切り込みは、深さ1.0cm、長さ5.0cm程度で、全長はW056が75.2cm、W057は78.8cmである。切り込み部を組み合わせ、土木や建築の一部材を構成していたのであろう。W058は、両端近くを径9.0cm余の半球状に抉り込んでいる。全長59.8cmをはかる。

棒状製品（W059～W087）　W059・W060は、細長い棒状品の両端に切り込みを入れた木製品である。先述の両端切り込み材と同様の細工を施すが、本例ははるかに細長い。W059は細い丸太の半裁品で全長223.2cmをはかり、中位で太

く両端はやや細くなる。W060は丸太辺材部の棒状割裂材である。両者とも組み材の一部を構成していたのであろう。

W061・W062・W064～W087は、いずれも棒状の割裂材である。木取りは、丸太の辺材部を利用したものが多いが、心材部のものもまれに存在する。断面は方形を意図したものの他、円形・半円形・多角形等多様である。先端は、単純に収めた例（W061・W062・W064～W067）の他、尖がらせたもの（W068～W079）が比較的豊富に出土している。

(3) まとめ

以上、第９号は、周溝内に多くの遺物を埋置しており、須恵器については、陶邑のＩ型式の５段階に該当し、ほぼその築造年代を、六世紀の第１四半期に比定できるであろう。又、第９号は、方形のものでは、第17号とともに、最も規模の大きいものであり、しかも隣接するものと、かなり近接しており、築造順序を考える上でも、注目されるところである。すなわち、第９号に隣接する第13号、第14号、第15号は、その北側を東から西に流れる、溝Ｄと第９号に規制され、いびつな形態を示しており、第９号がこれらに先行することが推定されるのである。

Ｊ．第10号円形周溝状遺構の調査

第12号の南、第11号の北に位置する、大型の円形周溝状遺構である。近代のものとみられる「砂だまり」により、かなり損傷を受けているが、一応全体像はとらえることができる。

(1) 遺構

台状部は、径16.3～16.5mをはかり、ややいびつな円形を呈する。周溝は、北溝が幅5.2mとやや広く、他は3.0m～4.6mをはかり、深さは、おおよそ、35cm～38cmと浅い。溝内の層序は、２～４層に分類でき、第１層は、灰褐色砂質土で、南溝のみでみられた。第２層は、暗灰青色粘質土、第３層は黒灰色粘質土、第４層は青灰褐色砂質土で、第２層と第３層とは、一部では類別できない箇所もあった。

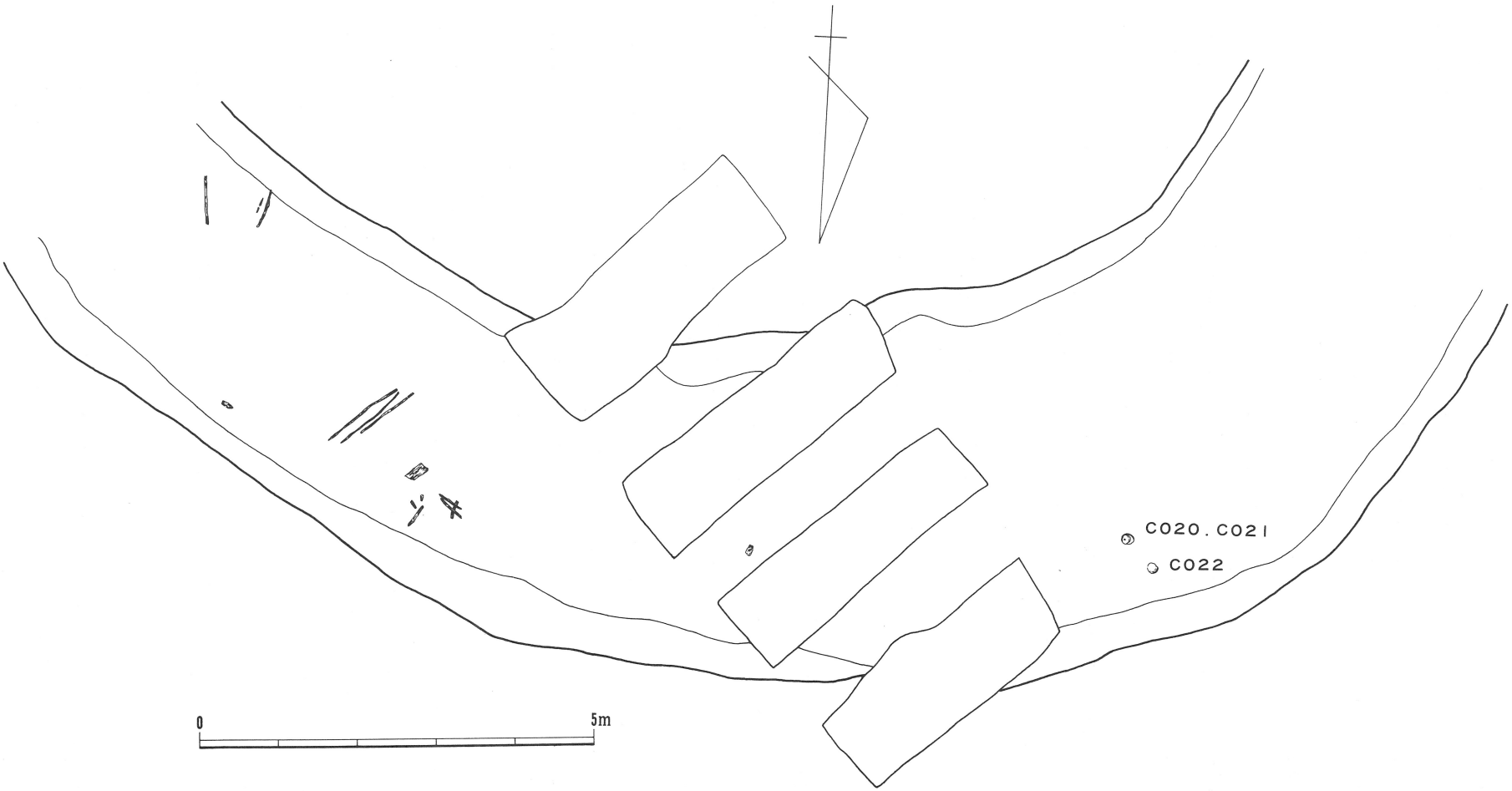
第10号における供献儀礼のあり方は、いわゆる「砂だまり」による掘削が、かなり広範囲に及んでおり、部分的に検出されたにすぎない。すなわち、東溝においては、「砂だまり」にはさまれた一角で、円形の曲物容器の断片が出土している。径65×52cmのややいびつな円形で、最下段が高さ5.0cm残されていただけで、ほとんど腐植がすすみ、取り上げも困難であった。底部もすでに消失し、曲物内および、周辺には、棒状の自然木が、若干みられるだけであった。当然、周辺部には、土器等の供献があったとみられるが、「砂だまり」による削平により、追究はできなかった。ただ、北溝のやや外よりに、須恵器坏・甕（Ｃ020～Ｃ022）による供献が、南東溝のやや外よりで、須恵器甕（Ｃ023）による供献がみられた。後者は甕１点が壊われた状態で、少し溝底から浮いた状態で検出されたが、前者の場合は、いずれも正立した状態で、坏は蓋と身がセットで検出されており、意識的に埋置されたことが推測される。

(2) 遺物

出土した遺物は、上述のとおり、須恵器坏蓋・坏身各１点、小型甕２点、そして木製品としては、曲物容器１点のほか、板状木製品、棒状木製品が大量に出土している。

土器

須恵器坏蓋（Ｃ020）　口縁部は、やや外下方に下り、端部は内傾する、浅い凹面を成している。稜は短く鈍い断面三角形を呈し、天井部は丸味をおび、中央が凹状のつまみをつけている。内外面とも回転ナデと回転ヘラケズリにより調整され、つまみは貼り付けている。

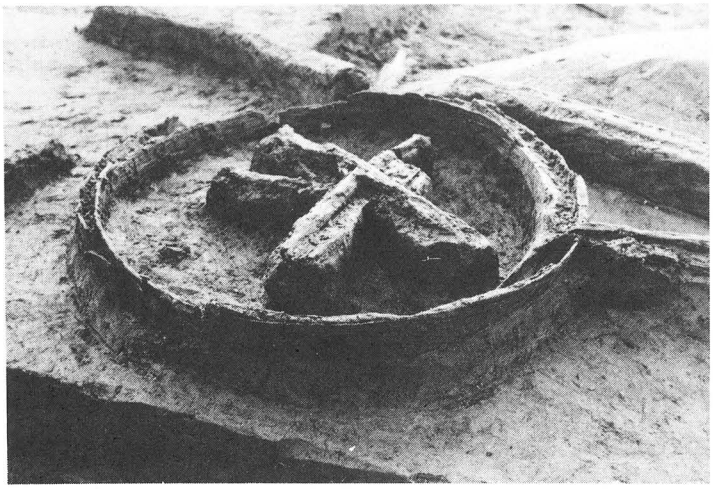


第24図　　第10号北溝遺物出土状況実測図

須恵器坏身（C021）　口縁部立ち上がりは高く、内傾後直上にのび、端部内面に浅い凹面をつくる。受部は外上方にのび端部を丸く収める。底部は比較的平坦で安定感がある。底部外面が回転ヘラ削り調整後回転ナデを施しており、他は回転ナデ調整を行っている。

須恵器甕（C022・C023）　口径15.6cm、器高22.7cm～体部最大径20.9cm～21.8cmをはかる小型甕である。C022は、ほぼ完形品で、口縁部は「く」字に大きく外反して、端部はやや肥厚させて、外傾する面をつくる。体部は球形をなし、底部は丸底を呈している。口頸部外面には、櫛描波状文2帯をめぐらせ、その間に凸線をめぐらしており、体部内外面は、平行タタキ後スリケシナデを施す。

C023は、口縁部を欠失しているが、頸部は「く」字に外反し、球形の体部は、最大径をやや体部上半におき、底部は丸底を呈する。頸部に波状文をめぐらせ、その上に二条の、断面三角形の凸線をめぐらせる。体部外面は、平行タタキ後上半部に半スリケシナデを施す。胴部上方に波状文をめぐらせ、その上に各二条の沈線を施している。なお内面は、タタキ後スリケシナデを施す。



第25図　　第10号曲物出土状況

木製品

曲物容器　上述の通り、腐植が激しく、取り上げに到らなかったが、径65×52cm余をはかり高さ5.0cmのみ残存していた。

棒状木製品（W088～W090）　W088は遺存状態は不良だが、樹皮を剥いだだけの細い丸太材であったとみられる。両端とも欠損しており、端部の形状は不明である。W089は丸太の辺材部を木取りした角材である。幅4.0cm、厚さ2.9cmをはかる。両端を欠失し、端部の形状は不明である。

板状木製品（W090）　幅9.3cm、厚さ1.6cmの板材である。柾目に木取りし、下端は矢板状に尖り、上端は火を受けて焼失している。

(3)　まとめ

以上が第10号の概要である。第10号は、円形のものでは、第23号につぐ規模をもっており、最古式の須恵器を出土したことと共に、注目される。「砂だまり」により、かなり損傷を受けているが、若干の供献儀礼も検出することができた。出土した須恵器は、いずれも、陶邑のⅠ型式の4段階に該当するもので、おおよそ、五世紀の第4四半期に比定される。

K．第11号円形周溝状遺構の調査

第8号の南5.8m、第10号の北東に所在する。円形の周溝状遺構である。東半が、後世の削平で消失しており、全様を知ることはできなかった。

(1)　遺構

台状部は、推定径10.0mの円形とみられ、幅2.1m、深さ20～25cmの周溝が廻る。上述のとおり、削平を受け、残りは

悪いが、周溝内の土層はおよそ２層に類別され、第１層が青灰褐色粘質土、第２層が黄青灰色砂質土で、地山は緑青灰色砂質土であった。主体部の痕跡はなく、周溝内における供献等も検出できなかった。

(2) 遺物

出土遺物は、重復して存在する古墳時代前期の遺構に伴う古式土師器が、若干出土したほか、本遺構に伴うものは皆無であった。

(3) まとめ

以上のように、第11号は、後世の削平もあって、実態は明らかでないが、第１号、第８号、第10号などの円形の周溝状遺構に囲まれて所在しており、相関連することが予想される。

L．第12号円形周溝状遺構の調査

第10号の南に所在する円形の周溝状遺構である。東と南の一部が消失しており、全様は判明しない。

(1) 遺構

台状部径は、推定9.2mをはかり、幅2.4m～4.0mの周溝がめぐる。西に陸橋部が一ヶ所あり、浅くなっている。東溝がやや幅広く4.0mをはかる。深さは、いずれも浅く20～30cmをはかる。周溝内の層序は、３層に類別され、第１層は、黒灰色粘質土、第２層は暗灰青色粘質土、第３層は灰褐色砂質土であった。

埋葬施設は検出できなかったが、周溝内の二ヶ所で、明確な供献の痕跡が検出された。まず、北西溝のほぼ中央で、第１号でみられたのと、ほぼ同一の箱形容器（W091）による供献がみられた。箱形容器は、長辺59.0cm、短辺21.0cmの長方形で、高さ3.7cmをはかる。長短各２本の板材を枘で組合せたもので、底は残存していない。底が存在したことは、第１号と同様箱形容器の下部に、径0.3cmの小孔が、それぞれ穿孔されているところから、セイロ状のものが推定される。容器の中からは、東よりの中央に、滑石製の小玉39点（S006～S044）が一ヶ所にかたまった状態で出土したが、他に遺物は認められなかった。そして、箱形容器の前面には、第１号と同じく、須恵器坏蓋身セット（C065～C076）による供献が、より明確に認められた。すなわち、容器の前に坏蓋・身セットが手前に三個、前面に二個セットで、二列に整然と並べられ、その上に須恵器瑞１点（C080）、土師器壺１点が逆転して載せられていた。

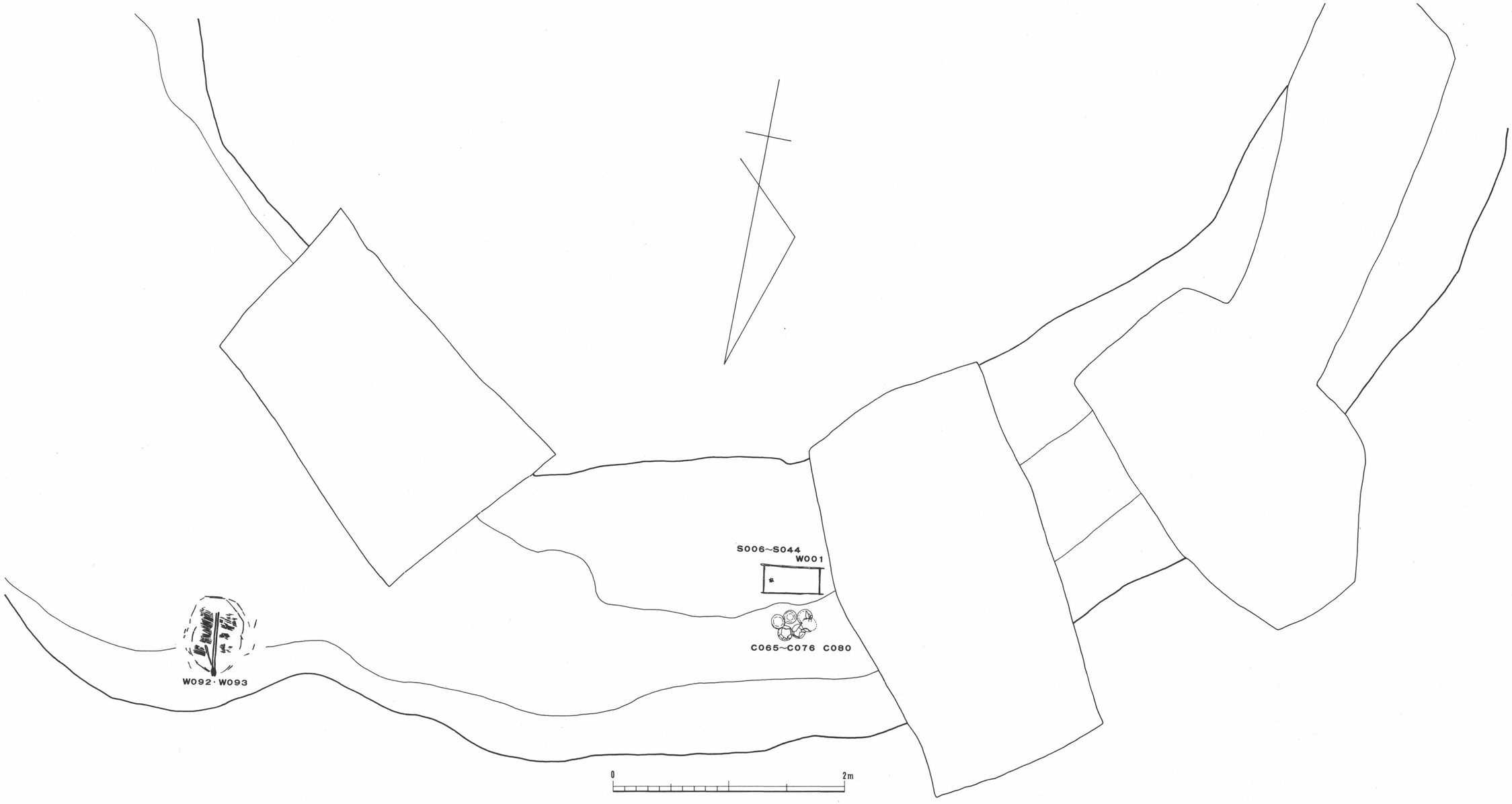
一方、東北溝においては、周溝中央に長径67.5cm、短径14.65cmの曲物容器が置かれ、その中央に、先端を台状部に向けた状態で、二本の矢形木製品（W092、W093）をのせ、さらに、その周囲に滑石製小玉２点（S004、S005）が散在していた。曲物容器は第10号のものと同様、腐植がはげしく、かろうじて、高さ3.0cmを残すのみであった。そして、底板の痕跡はなく、かわって植物の繊維状の痕跡があり、編物が敷かれていた可能性はある。

(2) 遺物

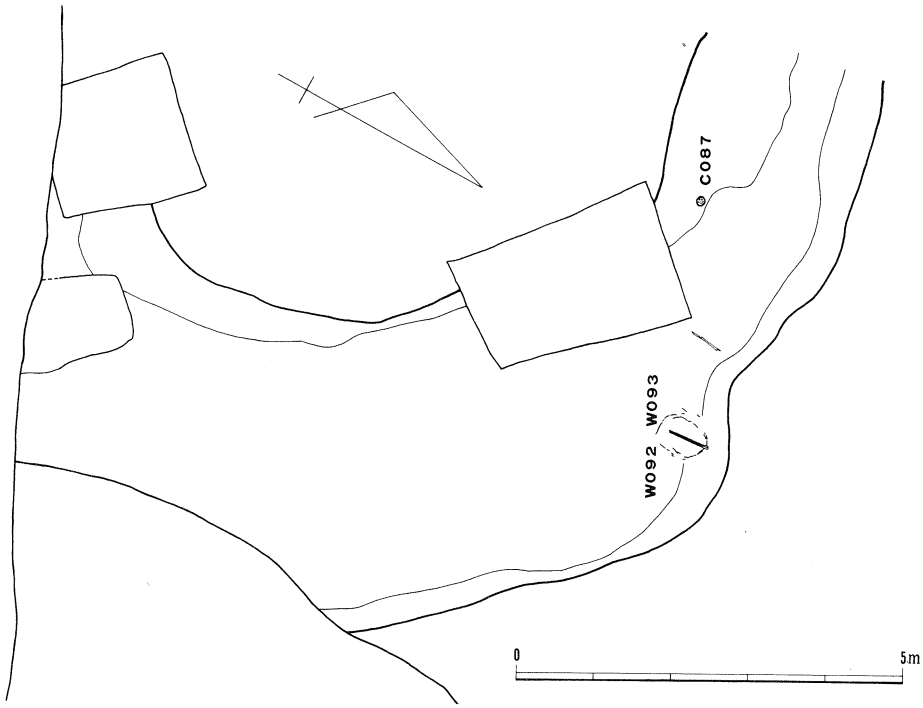
出土した遺物は、上述の須恵器をはじめ箱形容器・曲物容器・矢形木製品・滑石製小玉等である。

土器

須恵器坏蓋（C069・C071・C073・C075・C077・C079）　口縁部は、やや外湾気味に直線的に下方にのび、端部は内傾する浅い凹面を成しており、天井部は、丸味をもち、C069・C071・C079は、やや平坦である。稜は短く、大部



第26図　第12号東溝遺物出土状況実測図



第27図　　第12号北溝供献具実測図

分が丸味をもって鈍いものである。マキアゲ、ミズビキ成形で、天井部外面は回転ヘラケズリ、天井部内面に、仕上ナデが認められる。

須恵器坏身（C067、C070、C072、C074、C078）　立ち上がりは、やや内傾して、直線的に高くのび、端部は内傾する浅い凹面を成している。受部は、短く上方にのび、丸くおさめるものが多い。底部は、やや丸味をおびるものと、平底気味のものが、半々であった。いずれも、マキアゲ、ミズビキ成形で、底部は回転ヘラケズリ調整、他は回転ナデによる調整である。

須恵器坏（C080）　口縁部は一旦外湾してのち、段をつくって、やや内湾気味に外上方にのび、端部はやや内傾した面をつくり、凹面を成す。体部は肩がややはった球形を成し胴部最大径の部分に円孔を穿つ。マキアゲ・ミズビキ成形で、口縁部には、段の上下に二段にわたって波状文をめぐらし、胴部にも一段の波状文をめぐらし、その上下に一条の沈線をめぐらす。

木製品

箱形容器（W091）　細長い板材を組み合わせて作った箱形容器である。実測図は、箱形容器を底部側から計測したものである。短辺材２枚の両端に枘を、長辺材２枚にはそれに相応する四角形の枘穴を設け、両者を組み合わせて箱の四周を作る。その他、短辺材には方孔と小円孔を対称的にそれぞれ１対配しており、長辺材には方孔１対の他小円孔２対を穿つ。また長辺材のみ、その底部側中央に幅広く浅い台形状の切り込みが認められる。孔の形状・位置及びその数、ならびに切り込みの形状・部位等、細部について若干異なる部分も認められるが、先の第１号から出土した箱形容器（W001）と同種同様である。

矢形木製品（W092・W093）　２例とも曲物製の楕円形容器内に供献されていた矢形木製品である。鏃の部分と矢柄（箭・箙）の両部分を一木で削り出したもので、木心よりややはずれた位置を木取りしている。鏃の部分は砲弾状に太く作る。矢柄に矢羽を着装した痕跡は確認できない。W092は鏃長5.0cm、矢柄長50cmで全長55.0cm、鏃の部分の最大径1.9cm、矢柄の部分で径0.9cmをはかる。W093は、含水保管中、漏水のため一度乾燥しており、矯正の上で計測したもの

だが、本来はW092と同規模であったと予測される。中世以降の矢の全長は、通常２尺７寸前後が最良といわれ、古墳出土例や正倉院宝物中の奈良時代の矢をみても、およそ80～85cmとほぼ同様の数値を示す。これらの点を考慮すれば、本例はやや短い感があるものの、現寸大近くに模して作られた祭祀用の武器形木製品であろう。

石製品

滑石製小玉（Ｓ004～Ｓ044）　Ｓ004・Ｓ005の２点のみが曲物容器からの出土したもので、他は箱形容器からの出土である。総数41点は、ほぼ同規模で平均直径55.0mm、厚さ15.0～45.00mmをはかる。穿孔は一方からなされており、灰青色を呈するものが多い。

(3)　まとめ

以上、第12号は、全様はつかめないが、きわめて豊富な供献遺物の出土があり、この種の遺構の性格を考える上で、注目されたが、その築造年代は、出土した須恵器が、陶邑の形式で、Ｉ型式の４・５段階とみられ、およそ、六世紀の第１四半期と考えられる。

M.　第13号方形周溝状遺構の調査

第９号の東に接して所在する、ややいびつな方形の周溝状遺構である。東側に東西流する溝Ｄがあり、これと、第６号、第９号、第14号の空間地に築造されたことが推定される。

(1)　遺構

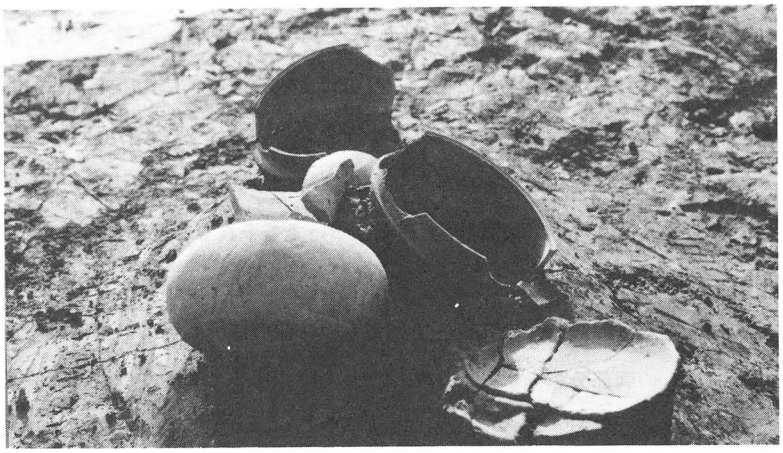
台状部は、東西9.3m、南北9.6mのほぼ方形を呈し、ややいびつな周溝がめぐっている。南溝は幅1.7m、深さ30cm、東溝は幅2.7m、深さ40cm、北溝で幅3.3m、深さ33cm、西溝で幅2.9m、深さ28cmをはかる。なお西溝は中央に陸橋部をもつ。周溝の層序は、ほぼ3～4層に類別され、第１層は暗紫色粘質土、第２層は暗青灰色砂泥、第３層は黄青灰色砂泥、第４層は青灰色砂質土で、遺物は、第３・第４層に含まれていた。これらは、明確な供献の形態は示していないが、北溝のほぼ中央の台状部裾に、須恵器坏蓋、坏身、無頸壺、碗や、土師器細頸壺などが、転倒した状態で検出され、東溝のほぼ中央で、土師器壺１点（H030）が、転倒して検出された。台状部に供献されたものが、後に転落した可能性が推測されよう。

(2)　遺物

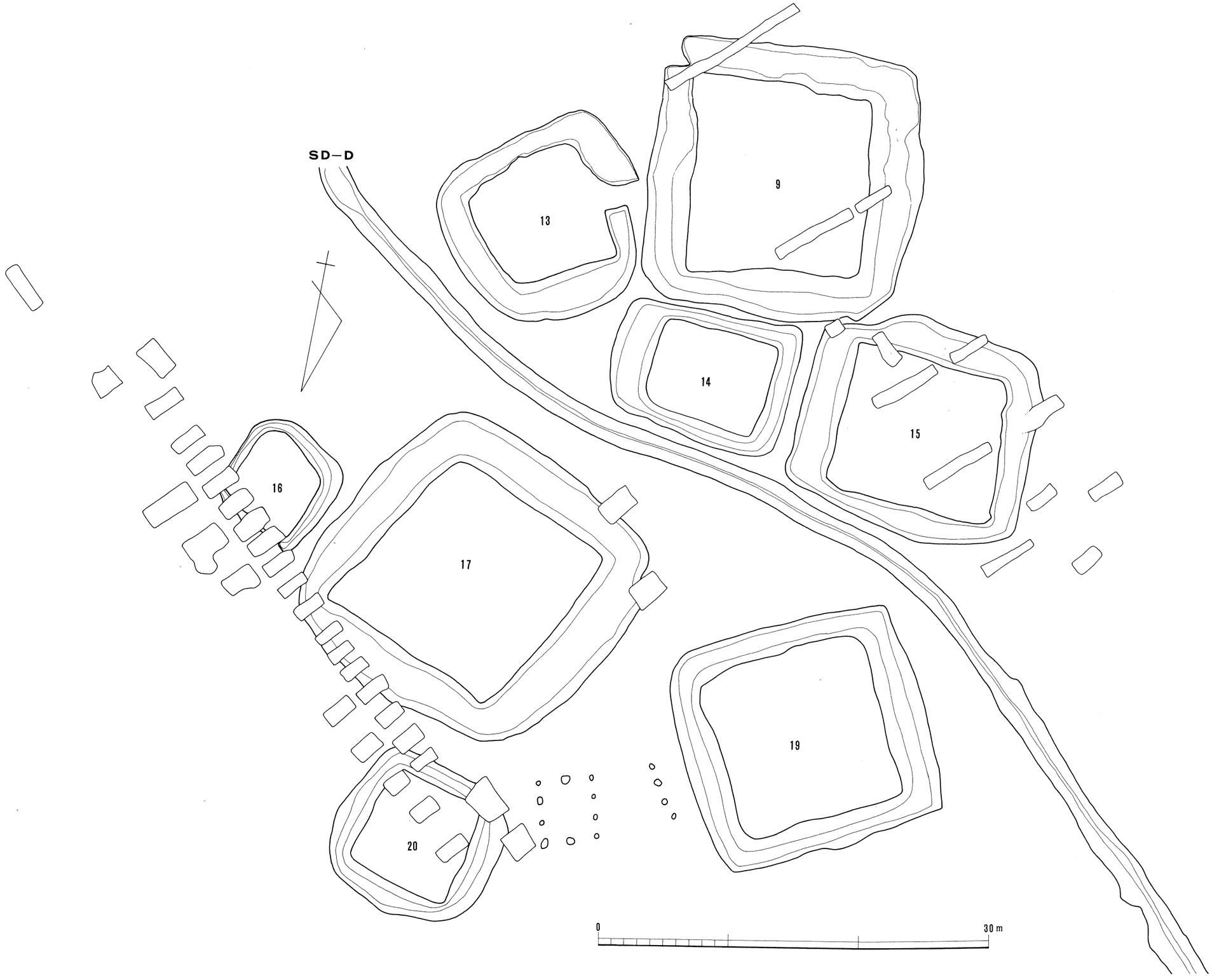
上述のとおり、周溝内に転落したとみられる須恵器、土師器、計７点と、若干の棒状木製品が出土した。

土器

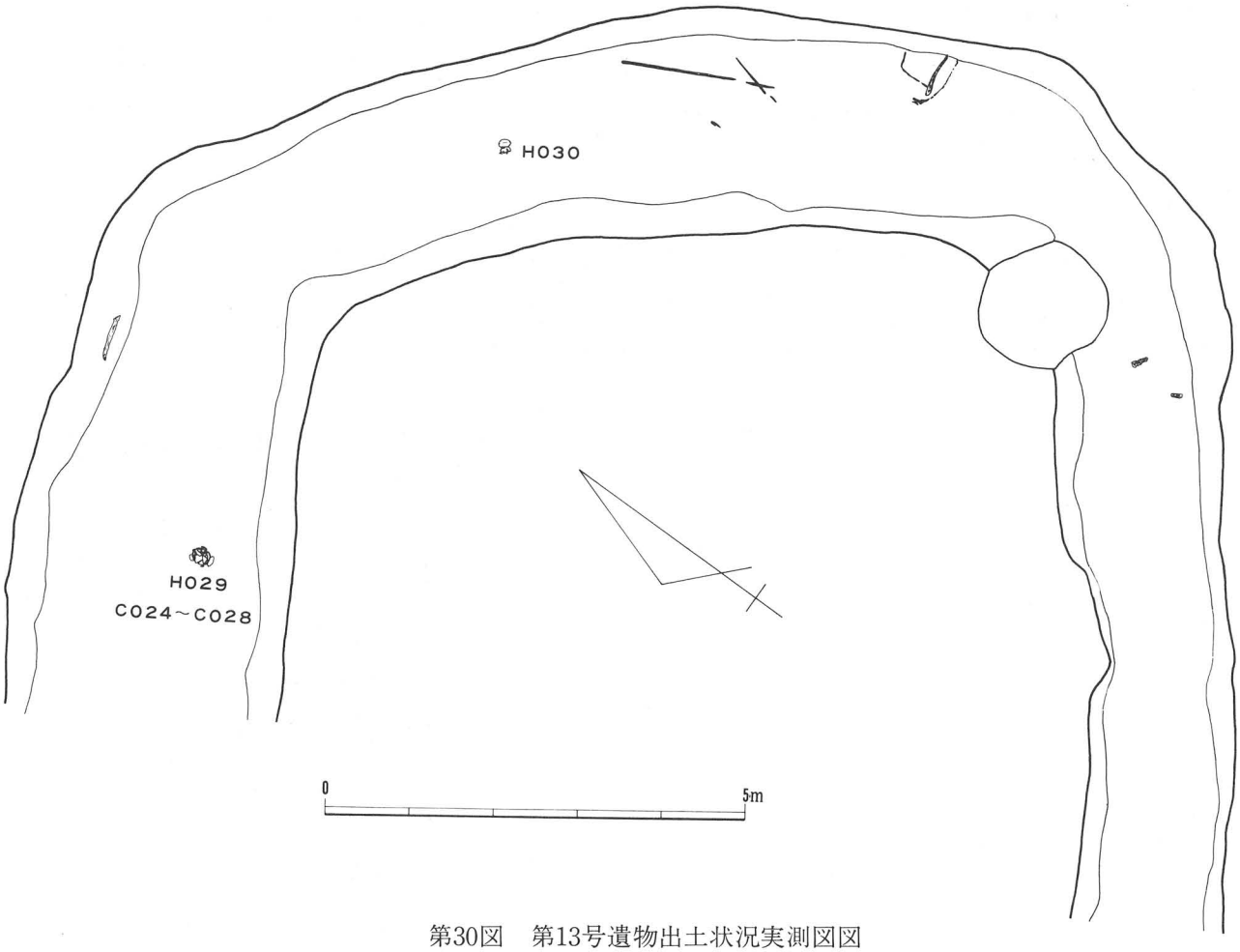
須恵器坏蓋（Ｃ024）　口縁部は外下方に直線的にのび、端部は内傾する浅い凹面を成している。稜は短く断面三角形を呈し天井部は丸味をもつ。内外面とも回



第28図　第13号遺物出土状況



第29図　遺構分布図(2)



第30図　第13号遺物出土状況実測図図

転ナデ調整、天井部外面回転ヘラ削り、同内面に仕上げナデを施す。

須恵器坏身（C025、C026）　やや内傾して外上方にのびる立ち上がり部をもち、端部は内傾した凹面を成す。受部はC025の場合短く外方にのび、C026は鋭く外上方にのびる。底部はC025が丸味を有し、C026は平坦に収める。内外面とも回転ナデ調整、底部は回転ヘラ削り、C025は口縁部がややいびつで、C026の底部にヘラ削りによる線刻がみられる。

須恵器瑞（C027）　口頸部はまた外反して直線的にのび、体部はやや上方に最大径をもつ球状で、底部はやや突出気味の丸味である。口頸部中位に細い凸様を二条廻らし、その下位に波状文をめぐらす。体部に上半にカキ目、底部はナデ調整を施している。

須恵器短頸壺（C028）　口頸部はやや外反して、短くのび、端部は内傾する面をもつ。体部は、やや上位に最大径をもつ偏球状を呈し、底部は丸底を呈する。肩部に太い沈線を二条廻らし、その間に波状文一帯を施文、体部外面は、平行タタキ後上半部にスリケシナデ、内面は、回転ナデ調整。

土器師壺（H029、H030）　H030は口縁部を欠失するが、いずれも口頸部が外反して、長くのびる長頸壺とみられる。口縁部は直線的に外上方にのび、体部は偏球状を呈す。

H029は丸底で、H030はやや凹状の底部を有す。内外面ともヘラミガキを施したとみられるが、表面は剥離して、ほとんどその痕跡を残さない。

木製品

棒状木製品（W094・W095）　丸太の辺材部を断面長方形に木取りしたものである。両者とも遺存する側の端部を、一面のみ削り込む。他材との結縛を意図したものであろう。他の一端は欠損しており不明である。W094は、現存長184.6cm、幅2.0cm、厚さ1.4cmをはかる。W095は、現存長53.4cm、幅2.0cm、厚さ1.3cmである。

(3)　まとめ

以上第13号は、特に顕著な供献はみられなかったが、周辺の先行する遺構に規制され、やや一般のものとは異なる、いびつな形態を示す点が注目される。なお本遺構の築造年代については、溝内の供献土器のうち、須恵器については、陶邑の型式で、Ⅰ型式の５段階にあたり、およそ、六世紀の第１四半期に比定できると考える。

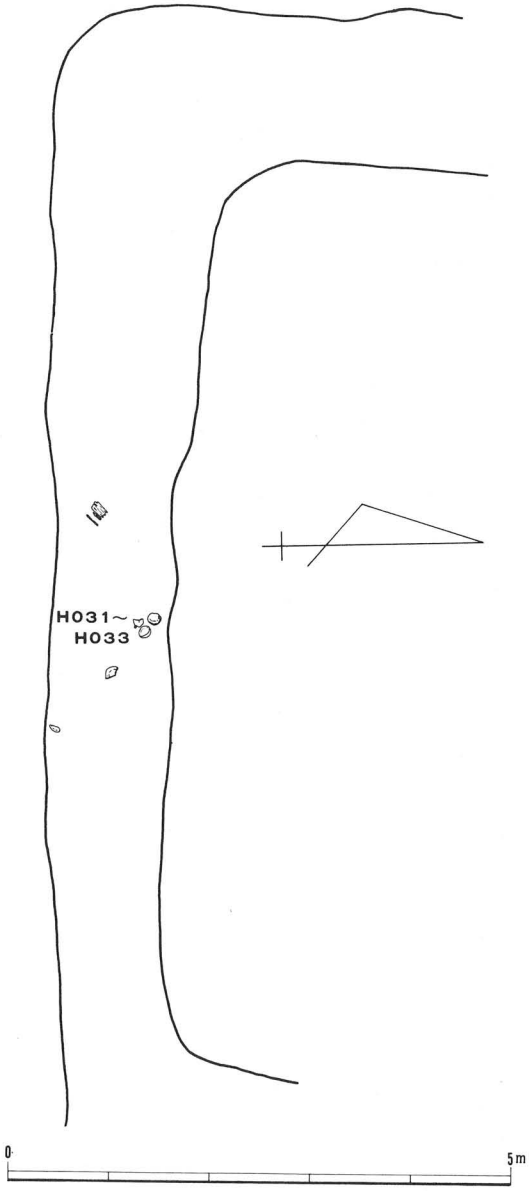
N. 第14号方形周溝状遺構の調査

第19号の北、第13号と第15号に東西を接する、ややいびつな方形周溝状遺構である。北に接する第９号と、南に接する溝Dによって、大きく規制を受けた結果とみられる。

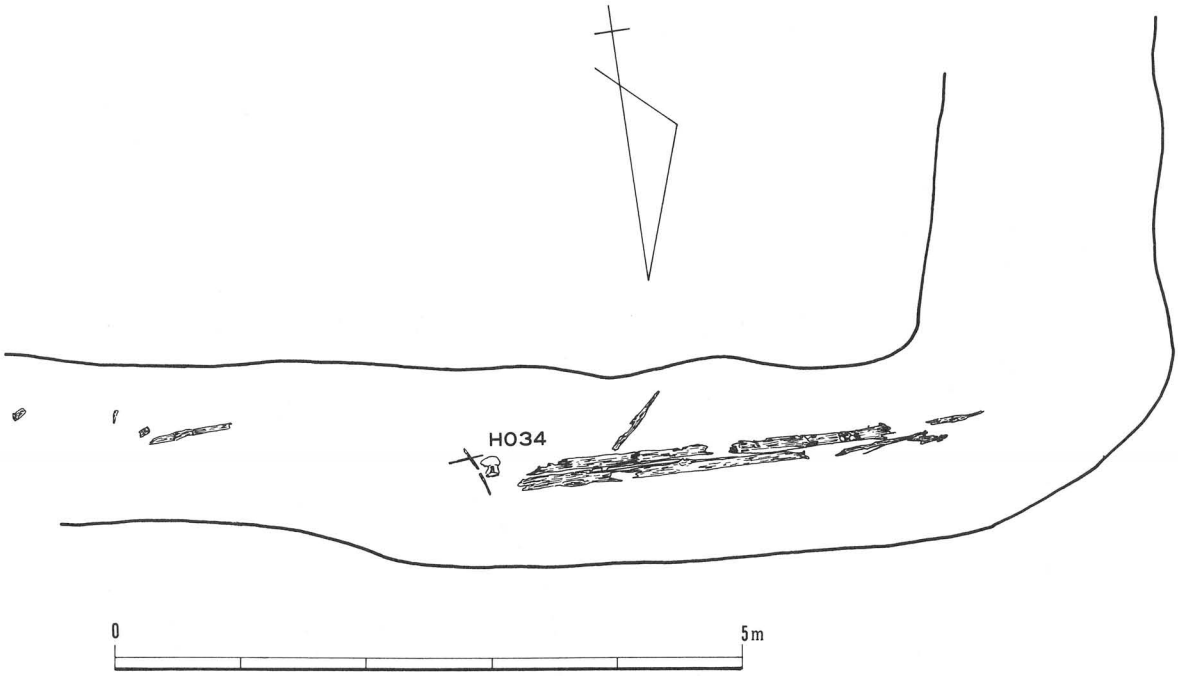
(1)　遺構

台状部は、東西7.1m、南北9.3mの一応均整のとれた長方形を呈するが、周溝は周囲の遺構の規制を受け、バラエティに富んでいる。南溝は幅1.2m、深さ20cmとかなり狭いのに対し、東溝は幅3.2m、深さ25.0cmと広く、北溝も幅1.7m、深さ50.0cmと狭い。西溝は一般的で幅1.7m、深さ45.0cmをはかる。

溝内の土層は、大きく２層に分類され、第１層は暗灰色粘質土、第２層は黒灰色粘質土であり、遺物はこの第２層より出土をみた。出土遺物は、いずれも土師器で、南溝中央に坏３点（H031～H033）が、北溝中央の板状木製品の間に壺１点（H034）が転倒した状態で出土をみた。これらは、必ずしも明瞭な供献ではないが、その一端を示すものといえよう。



第31図　　第14号南溝遺物出土状況実測図



第32図　　第14号北溝遺物出土状況実測図

(2)　遺物

出土した遺物は、上述のとおり、土師器坏３点と壺１点のみで、ほかに若干の木製品が出土したが、大部分が取り上げ不能の状態で腐植が進んでいた。

土器

土師器坏（H031～H033）　体部、口縁部は内湾しつつ上方にのび、端部は丸くおさめる。底部は丸味をもち、内外面ともナデによる調整。ほぼ第５号のものと同じ形態、手法である。

土師器壺（H034）　口頸部は大きく外湾して上方にのび、端部を丸くおさめる。体部は偏球状を呈する。底部は丸味をもった平底を呈する。体部外面のみ、ヘラミガキがみられるが、他はナデ調整、これも第５号のものに類似する。

(3)　まとめ

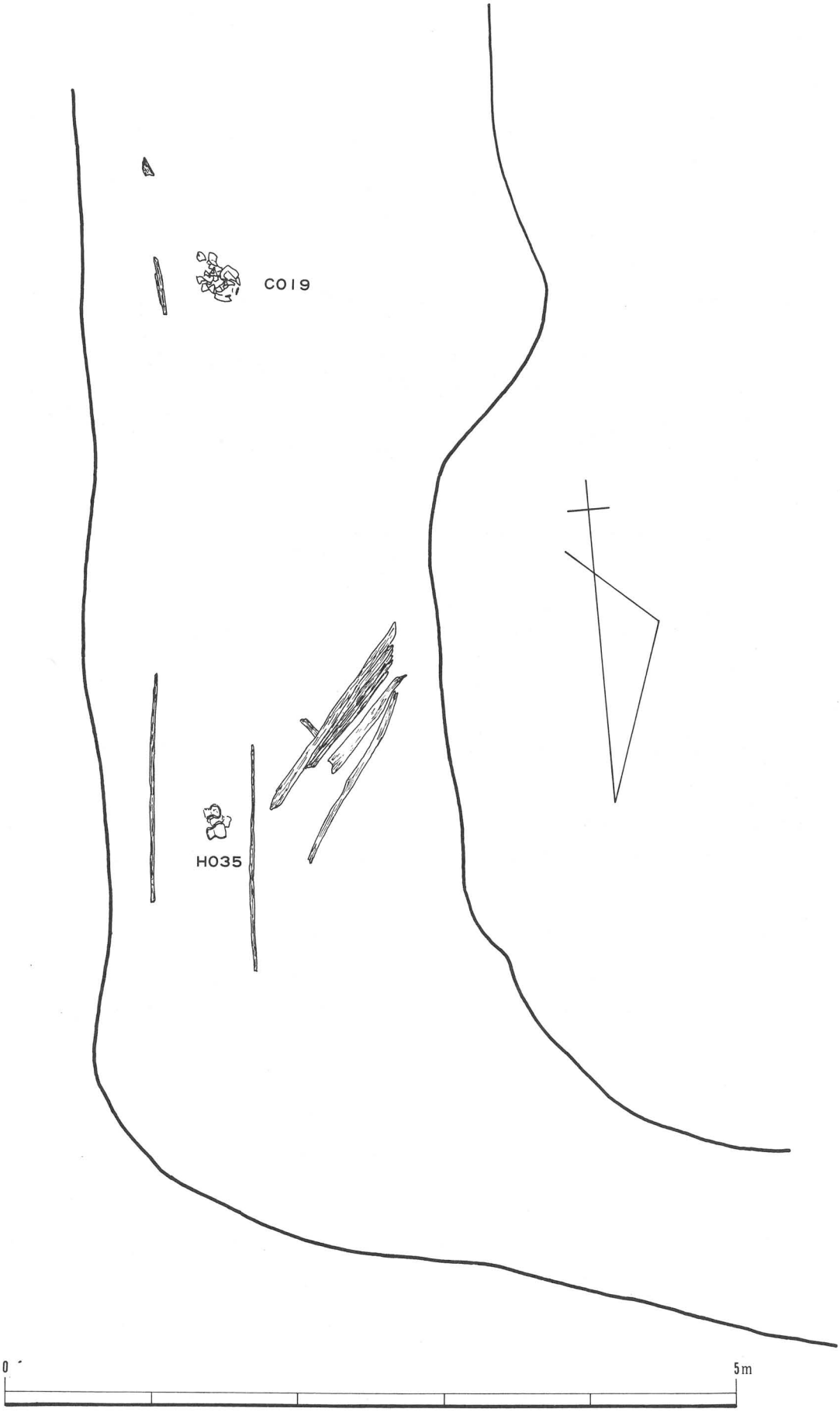
第14号は、両隣の遺構に規制され、いびつな形態を示すが、比較的明瞭な土師器による供献がみられ、上述の第５号のものに、かなり類似するものであることが明らかになった。したがって、その築造年代も、第５号に近接した時期が求められよう。

O．第15号方形周溝状遺構の調査

第14号の西に接して所在する、方形周溝状遺構である。これも、隣接する第９号と溝Dに規制され、周溝が一部いびつな形態を示している。

(1)　遺構

台状部は、東西12.4m、南北11.2mのほぼ方形を呈し、深さ40.0cm～65.0cmの周溝がめぐる。周溝の幅は、北溝と西溝が2.5mとややせまく、他は2.9m～3.1mである。周溝内の層序は、おおよそ５層に分かれ、第１層は暗紫色粘質土



第33図　　第15号東溝遺物出土状況実測図

層、第２層は暗灰色砂質土、第３層は暗灰色砂泥、第４層は暗青灰色砂質土、第５層は青灰色粘質土であった。周溝内には、東溝中央に土師器長頸壺（H035）、東溝中央に須恵器小型甕（C091）が、破砕された状態で発見されたのをはじめ、用途不明の若干の棒状木製品が検出された。これも、第14号と同様、供献儀礼の一端を示すものであろう。

(2) 遺物

土器

須恵器甕（C091）　比較的小型の甕である。口頸部はゆるやかに外反して広がり、端部を上下に拡張しており面を成す。体部は球状で、やや上位に最大径をもつ。底部は欠失するが丸底とみられる。口頸部中位に二条の凸線を廻らし、その上方に櫛描波状文を施す。体部外面は、平行タタキ後カキ目調整、内面は、同心円タタキ後上半部にスリケシナデを施す。

土師器壺（H035）　口縁部は外上方に直線的にのび、端部を丸くおさめる。体部は胴の張る偏球状で丸底を呈すると思われる。内外面とも剝離が激しく、調整は明らかでないが、体部外面にヘラミガキが施されるほか、ナデによる調整とみられる。

木製品

棒状木製品（W096・W097）　第13号出土の棒状木製品と同種同様の木製品である。両者とも遺存状態は不良だが、やはり丸太の辺材部を断面長方形に木取りしていたものと予想される。両端とも欠損しており、端部をどのように収めたかは不明である。W096は、現存長77.6cm、幅1.5cm、厚さ0.7cmをはかる。W097は、現存長114.6cm、幅2.0cm、厚さ1.2cmである。

(3) まとめ

第15号は南東コーナーが第９号に規制され、ややいびつな形態をとり、北溝も溝Dに規制され、やや幅が狭くなるなど、築造状況をうかがえる痕跡がみられるほか、北東・南西の両コーナーにおける供献が注目された。供献された小型甕は、陶邑のⅠ型式の５段階とみられ、およそ六世紀の第１四半期に築造されたことが推定される。

P．第16号方形周溝状遺構の調査

第17号の東に接して所在する。やや小型の方形周溝状遺構である。北溝が「砂だまり」により寸断されている。

(1) 遺構

台状部は東西6.1m、南北6.4mの方形を呈し、深さ15cm～30cmの周溝がめぐる。周溝の幅は、西溝が150cmとやや広く、他は70cm～130cmであった。周溝は残りが浅いため、暗灰色砂泥の単層であった。周溝内からは、須恵器坏蓋、坏身、計４点が出土しているが、特に顕著な出土状況は示しておらず供献儀礼を復元するまでには到らなかった。

(2) 遺物

土器

須恵器坏蓋（C036、C038、C089）　口縁部は、やや外下方に、直線的に下り、端部はやや内傾した面をもつ。天井部はC039がやや平坦なほかC036、C038はやや丸味を有す。稜はいずれも緩く、断面三角形を呈する。内外面とも回転ナデ、天井部外面のみ回転ヘラ削り調整を施す。

須恵器坏身（C037）　口縁部立ち上がりは、やや内傾して上方にのび、受部は短くのびる。底部は丸味をおびた平底である。全体に回転ナデによる調整。底部のみ回転ヘラ削り調整（約3分の2）を施す。

(3)　まとめ

第16号は、大型の第17号に従属するように接して所在する小型の周溝状遺構で、その性格が注意されるが、出土した須恵器は、やや新しい様相を示し、陶邑のII型式の1段階に併行するとみられ、およそ六世紀の第2四半期に築造されたとみられる。

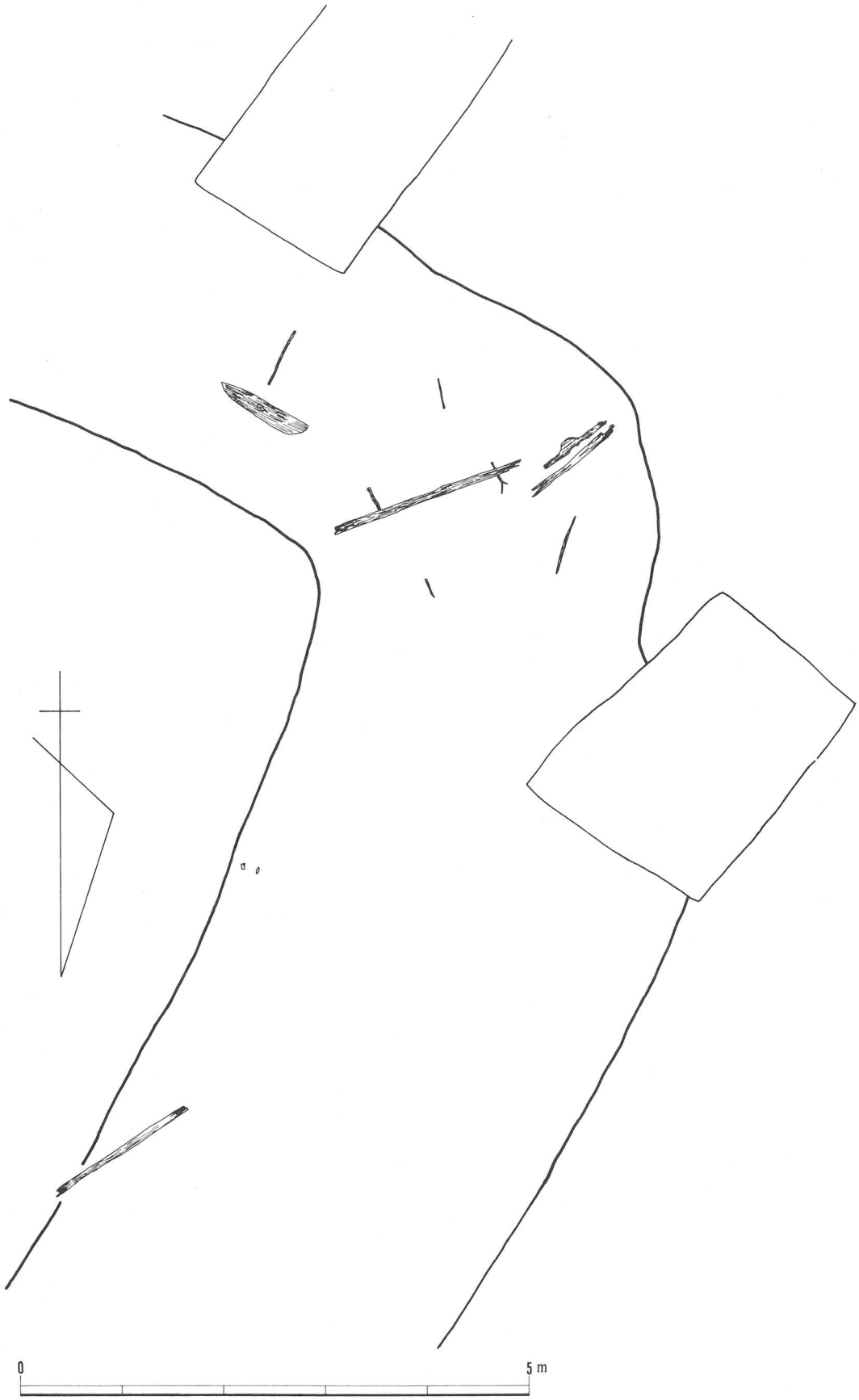
Q．第17号方形周溝状遺構の調査

第16号、第20号、第19号、溝Dにはさまれて所在する大型の方形周溝状遺構で、第16号、第20号の盟主的な性格がうかがえ注目される。

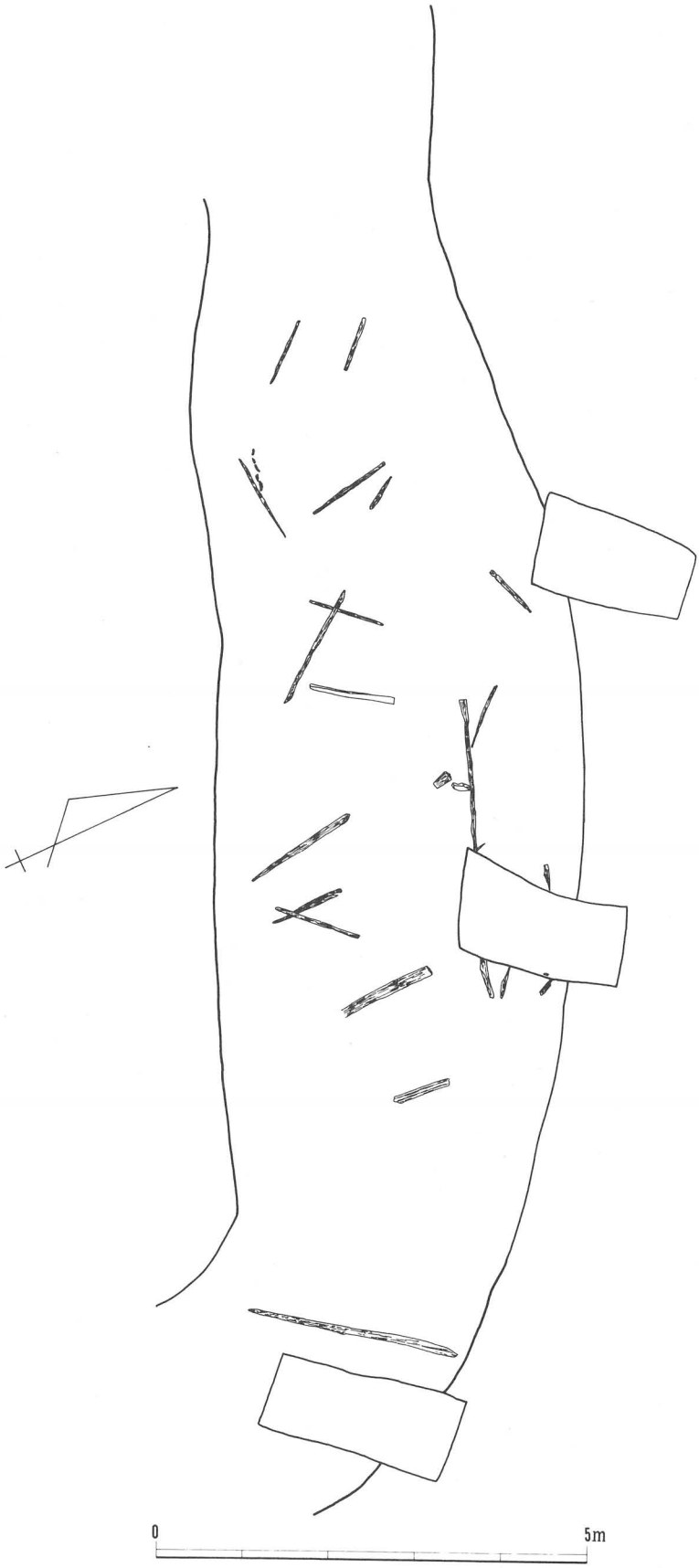
(1)　遺構

台状部は、東西14.4m、南北14.5mをはかる正方形で、幅4.3m～4.4m、深さ40～50cmの周溝がめぐる。周溝内の層

第34図　　第17号北溝土器出土状況



第35図　　第17号西溝遺物出土状況実測図



第36図　　第17号南溝遺物出土状況実測図

序は、おおよそ4層に類別され、第1層は暗紫色粘質土、第2層は暗茶褐色粘質土、第3層は暗青灰色砂質土、第4層は青灰褐色粘質土であり、遺物は第3、第4層に大部分が含まれていた。

本遺構では、南溝において、顕著な儀礼の痕跡が認められた。すなわち、南溝中央には一面に建材の一部とみられる、木製の組物が検出され、その組物に引っかかるように、「やまと琴」とそれに伴う琴柱4点が出土した。「やまと琴」は逆転した状態で、台状部からずり落ち、組物に引っかかった状態で検出され、台状部に供献されていた後、転落したものと考えられる。なお、琴の下部からは、琴柱4点が出土し、琴に絃が張られた状態で転落したことが知られた。

土器の供献としては、北溝中央における土師器壺1点（H068）のみであったが、北西コーナーでは、獣歯が下層から出土し、その意味が注目される。

なお周溝で注意されるのは、南溝の東半において、棒状の杭が台状部の肩から裾部に向けて、突き刺した状態で数10本検出されたことである。おそらく、台状部の崩壊を止めるための施設と考えられよう。

(2) 遺物

周溝内から出土した遺物は、土師器壺1点のほかは、琴をはじめとする木製品で、その大部分は棒状の木製品であった。

土器

土師器壺（H068）　口縁部を欠失しており頸部は「く」字に外反している。体部は、胴の張る偏球状を呈し、底部は平担につくる。体部上半にヘラミガキが認

　第37図　第17号南溝遺物出土状況実測図

められるほか、ナデにより調整している。他の周溝出土のものと、大きな相違はない。

木製品

「やまと琴」(W098)　本品は、南溝のほぼ中央、建材と推定される組物に引っかかり、台状部よりずり落ちた状態で検出され、竜角を溝底に、竜尾を台状部傾斜面におき、逆転して琴面を下にした状態であった。

本品は竜尾の一部を欠失しているが、現存長で1.18m、竜角の幅29cm、厚さ10.5cmをはかり、竜角から竜尾にかけて、しだいに幅を狭ばめている。共鳴槽を結縛するための枘穴の位置などから全長1.5m前後であったことが推測される。

本体ともいうべき琴板は、厚さ1cm前後の薄い一枚板で、竜角側には側縁を削り出した、6本の突起があり、両端の2本が意識的に幅広につくられている。そして、竜角・竜尾との中間の両端に、共鳴槽を結縛するための枘穴が6ヶ所(2ヶ所については推定)穿孔されている。一方共鳴槽の部分は、断面凹状のくり抜き一本づくりで、底部の厚さ1.5cm、磯の高さは最高9cmで、竜尾に向けしだいに低くなっている。竜尾側がかなり欠失しており、全長は窺えないが、琴板と同規であった可能性が高い。なお残存長は71.8cmである。磯板部の竜角側先端は、琴板の両端の突起に合せるように、突起状に削り出しており、磯板下方には、琴板と同位置に6ヶ所(推定2ヶ所)の枘穴が穿たれていた。なお琴板と共鳴槽との結縛には、桜の樹皮が使用され、4ヶ所において確認された。そして共鳴槽の小口板については、残りのいい竜角部分でも認められず、その痕跡もないところから、本来的になかった可能性が高い。

以上のように、本品は、槽作りの実際の琴としては、最古の遺例であり、ほぼ全形がうかがえること、着装されていた琴柱を共伴することも加えて、重要な意義をもつといえる。注③

琴柱(W099〜W102)　「やまと琴」の底部より発見された琴柱は4点で、おそらく琴板に着装されていたとみられるが、出土状況よりそれを復元することはできなかった。4点はいずれも等脚台形の両斜辺を中位から垂直に裁ち落した、六角形を基本形とする琴柱である。いずれも上辺に弦受けのU字溝を作り、斜辺はやや内湾気味に削り込む。底辺は3例が直線的に仕上げるが、W101のみ弧状に切り欠いている。又,縦断面を観察すると、琴の槽板に安定した状態で立てる必要から、底部を最も厚く、上方に向かってしだいに薄く作っている。W099は、底辺3.3cm、上辺1.1cm、高さ2.1cm、底辺厚さ0.7cmをはかる。W100は、同様に3.3cm、1.0cm、2.1cm、1.0cm、W101は、3.3cm、1.0cm、2.2cm、1.0cm、W102は3.4cm、1.1cm、2.1cm、0.9cmをそれぞれはかる。4例とも極めて近似する数値を示す点が留意されよう。金子裕之氏の型式分類で、琴柱形Aの原型となる古式の琴柱である。注④

柱状木製品(W103〜W105)　3点とも枝を打ち払い、樹皮を剝いだだけの丸太材である。上下端とも、手斧様工具で周辺から木心に向かって断続的に切り落とす。全容の明らかなW103・W104では、上端より5cm余入った箇所に、幅10cm程度のコの字形切り込みが存在する。切り込みは、断面の3分の1前後に達している。横架材をはめ込んで結縛するための加工であろう。W103の下端部直径10.0cm、同様にW104では10.2cm、W105では9.8cmをはかる。支柱的な用途に供されたものか。もっとも、W103は全長513.6cm、W104は512.4cmと両者相近似した値を示しかつ極めて長い。長さを考慮すれば、簡易な建物の棟持柱と考えられなくもない。

矢板(W106)　大木の辺材部を木取りした厚手の矢板である。上端は磨耗のため欠損しており、下端40cm余は両側から断続的にしだいに削り込んで尖がらせている。現存長69.3cm、最大幅13.3cm、厚さ5.8cmをはかる。

板状木製品(W107)　板目板に木取りした大型の板材である。一端を欠損するが遺存状況は良好で、支割裂後、手斧による加工痕が各面に加えられている。丁寧に製作された板材といえよう。手斧の当り幅は10cmを超えるものがある。現存長198.0cm、幅26cm、厚さ5.4cmをはかる。

有孔板状木製品(W108)　一端を欠損しているが、木口の両端近くに長方形の枘穴各1つを穿った、板状の木製品と考えられる。横架材か。現存長91.0cm、幅3.8cm、厚さ1.5cm、枘穴は1.8×1.1cmをはかる。

付札状木製品（W109）　薄く狭長な板材の一端に、両側から切り込みを入れた木製品である。後世の付札に形状が似る。全長45.7cm、幅3.7cm、厚さ0.5cmをはかる。

木端（W110）　木材加工の際、切り捨てられた木片と考えられる。大木の辺材部片である。

有頭棒状木製品（W111・W112）　2例とも一端は欠損しており不明だが、遺存する側の端部に有頭部を形成した棒状品である。辺材部を木取りする。W111は、端部に向かって一度細く削り込み、端部を細長い宝珠状に仕上げたものである。断面は楕円形を呈している。現存長74.7cm、幅3.6cm、厚さ2.6cm、宝珠部長18.0cmをはかる。W112は、端部を瘤状に残し、以下をやや扁平な方柱状に削り込んだものである。現存長217.8cm、幅4.0cm、厚さ2.0cm、瘤部長6.4cmである。用途は不明だが、建築部材やそれに類する木製品とともに出土している。

棒状木製品（W113～W148）　細長い棒状の割裂材である。W113～W134は、幅5cm前後、断面は偏差に富むが方形を意図したものの多くみられる棒状品である。完形品がないため全長は確定し難いが、出土状況から判断すると2m近いものであったと予測される。W113～W126は尖頭の一端部を遺存する。手斧様工具で断続的に削り落として尖がらせている。W115は丸太の心材部を木取りするが他はいずれも辺材部を利用する。

以上の木製品は、17号周溝状遺構の南側溝内からあたかもマウンドより流れ込んだ様相で出土したもので、大きく二群が識別される。一群は先端が尖頭を呈する棒状品を主体とするもので、マウンド側の肩部に連らなって尖頭部を下方に突き刺した状態で出土しており、マウンドの土止めの機能をもつものか。他の一群は組物状のもので溝内で溝に平行して比較的密に並んでいた。これらの直上には、直交する細い丸太材が一定の間隔をおいて並ぶ。丸太材には一部枘穴を穿ったのも確認されたが、摩耗が著しく計測するまでには至っていない。本例を小（木）舞いとし、丸太材を垂木と考え、両者を組み合わせて屋根材に供されていたものか、あるいは壁面等の骨組みとして利用されていた可能性が考えられる。その場合、同溝周辺に何がしかの建築物を想定することになり、民俗例等に散見される殯などが想起されよう。[注⑤]

W135～W141は、上述の棒状品と比較すると、1まわり細い直径1.0cm前後、断面は円形を主体に半円形・方形を含む棒状品である。端部はストレートに収めるW135の他、やや尖がり気味とするW136・W137がある。

W142～W144は棒状の角材である。W142は4.3×4.1cm、W143は3.5×2.5cmで全長96.3cm、W144は、2.3×1.2cmをはかる。

W145～W148は棒状の板材である。W146では、木口を手斧で断続的に切断している。W147・W148は薄く細長い柾目板である。木口はストレートに収める。W147は、木口の一端が欠損しており、さらに長く延びることが予測されるが、現存長でも297.2cmをはかる。

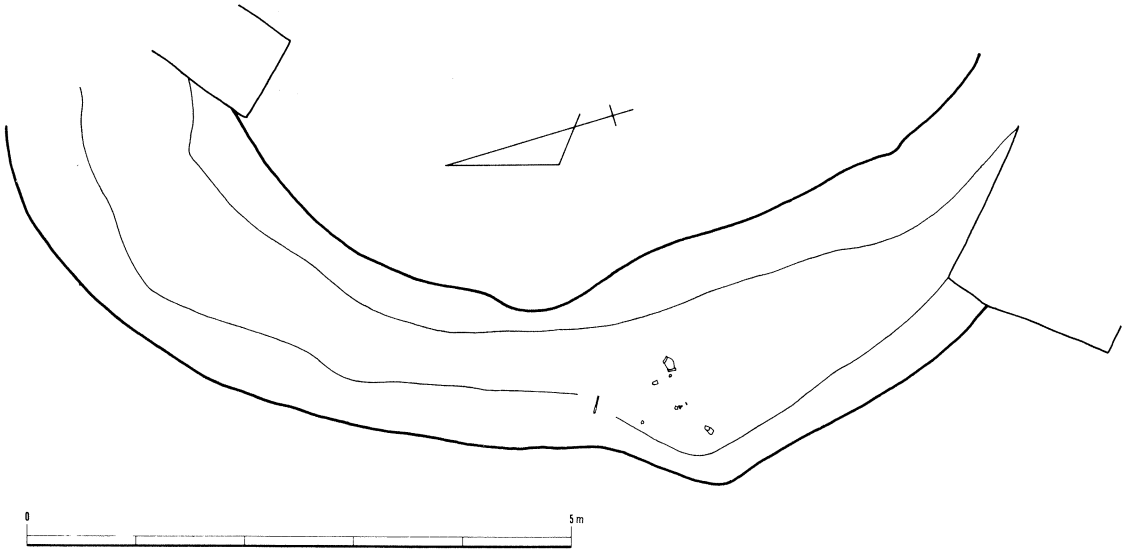
(3) まとめ

以上のように、第17号は、比較的大型の周溝状遺構であり、その廻りに第16号、第20号を従えるごとき配置をとっていること、「やまと琴」をめぐる顕著な供献儀礼の認められることなどによって、やや特異な性格が注目されよう。その築造年代は、出土した土師器により、第13号などと同様、六世紀の第1四半期に比定できると考える。

R．第18号円形周溝状遺構の調査

第7号と第9号の西に接して所在する、やや小型の円形周溝状遺構である。

(1) 遺構



第38図　　第18号遺物出土状況実測図

台状部は径8.2mのほぼ円形を呈し、幅1.0m～2.3mの周溝がめぐる。第9号を意識してか、東溝が幅1.0mと狭く、深さは西溝と南溝が浅く、それぞれ25cm、20cmをはかり、東溝で35cm、北溝で40cmとやや深い。周溝内の層序は、ほぼ4層に類別され、第1層は暗青灰色砂泥、第2層が青灰色砂泥、第3層が青灰色砂質土、第4層が青灰色粘質土であった。遺物は、このうち第3層、第4層に含まれていた。特に北溝中央では、台状部からずり落ちた状態で、須恵器坏蓋4点、坏身1点、埦1点の計6点が、逆転して重なって検出されている。これらは、おそらく台状部に置いて供献されたものが転落したとみられよう。

(2)　遺物

周溝内からは、上述の須恵器6点のほか、用途不明の棒状木製品が出土しているが、そのほとんどが腐植して、取り上げ不能であった。

土器

須恵器坏蓋（C041～C043）　口縁部はやや外反気味に下方にのび、端部は浅い内傾した凹面につくる。稜は短く、C042はほとんど退化している。天井部は丸味をもっており、天井部は回転ヘラ削りにより調整する。

須恵器坏蓋（C044）　口縁部は直線的に垂下して、端部は浅い凹状を成す。稜は短く鈍い、天井部は平らに近く、中央に凹状のつまみを有する。

須恵器坏身（C045）　立ち上がりは、内傾してのび　端部はやや内傾する。受部は短く外方にのび、底部は丸味を有する。

須恵器坏（C046）　口縁部は短く外反して、端部を丸くおさめる。体部から底部へはゆるやかに内湾して、底部は平担である。頸部直下に、丸味のある凸線を2条廻らし、その下方に波状文を施している。内外面とも回転ナデ調整、底部外面のみヘラ削り調整。

木製品

杭（W148）　丸太の辺材を断面長方形に木取りした杭である。頭部は欠損しており不明である。先端部は大きく2側面から断続的に削り込んで尖がらせ、最先端のみさらに多方向から削って調整する。現存長53.5cm、幅3.5cm、厚さ2.3cmをはかる。

(3) まとめ

以上のように、第18号は、コンパクトな円形周溝状遺構であったが、第９号を意識して東溝を細くするなど、形態上注目すべき点もあり、かなり明確な土器供献が認められた点も注意されよう。供献された須恵器は、陶邑の形式で、Ⅰ型式の５段階・Ⅱ型式の１段階に相当し、およそ六世紀の第２四半期に築造されたことがうかがえるのである。

S．第19号方形周溝状遺構の調査

第17号の北に所在し、まわりの周溝状遺構と異なる方位をとっている。第17号より一回り小さいが、大型の周溝状遺構といえる。周溝も深く、マウンドを除き、保存状況は良好である。

(1) 遺構

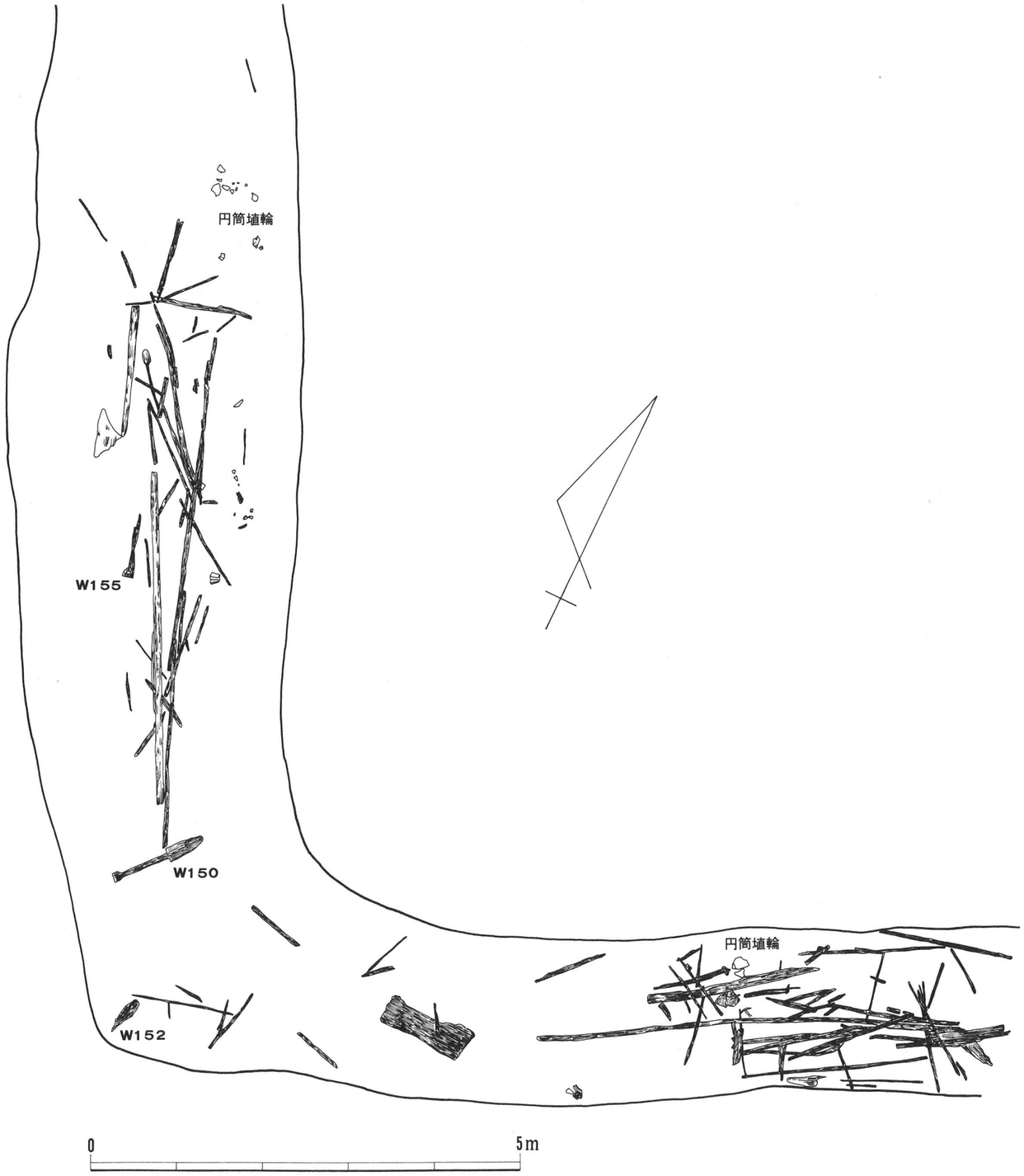
台状部は東西12.8m、南北12.7mのほぼ正方形で、幅1.9m～3.4m、深さ50cm～60cmの周溝が全周する。南端がやや幅狭く、北端・西端がやや広い。周溝内の層序は、青灰色粘質土をベースとして、第１層が、淡黒灰色粘質土、第２層が暗青灰褐色粘質土、第３層が暗灰色土、第４層が黒灰色砂泥の４層に類別される。

周溝内には、土器の供献は皆無であったが、主として木製品の供献が顕著であり、第23号とともに埴輪の出土がみられたのは注目される。そして、北溝上層から管玉（S045）、西溝第２層より石釧（S046）各１点が出土している。木製品は、西溝・南溝・東溝の中央付近に大小様々な建材とみられる棒状木製品が大量に集中しており、用途の明確なものとしては、北東コーナーで「琵琶形木製品」（W149）が、南西コーナーで、長柄鋤、ナスビ形着柄鋤の完形品が各１点、東溝、西溝の中央付近で、鋤の柄２本が検出され、南溝の中央付近から格座間状木製品１点が出土した。埴輪は、比較的上層（２～３層）から、円筒埴輪が50点、形象埴輪が４点出土している。主として東溝を中心に南溝、北溝の上層に集中している。円筒埴輪は、おそらく、マウンド裾部に配列されていたものが転落したものとみられるが、木製品の場合には、意識的に溝内に投棄された可能性も考えられ、農具の場合、模造品ではなく、実用品である点は注目されよう。これらをめぐる供献儀礼については、後に詳しく検討したい。

ところで、第19号に関連する遺構として注目されるのは、第19号と一部重複し、又隣接して所在する２棟の掘立柱建物のことである。いずれも、二間×三間の素掘りの掘立柱建物で、第19号に西の桁行が重複するＳＢ１は、東西2.8m、南北4.2mをはかり、第19号の東側に所在するＳＢ２は、東西4.2m、南北4.5mの規模をもち、棟持柱だけが直径70cmとやや大きく、他の柱穴は、直径30～40cmであった。いずれも柱穴内からの出土遺物はないが、遺構検出面や、第19号との重複関係から、古墳時代中、後期の遺構に並行するものと考える。２棟の建物は、規模や構造からみて、掘立小屋的なものとみられるが、その点で注意されるのが、各遺構から出土している建材のみられる木製品のことである。中でも第17号の南溝より出土した組物については、小建物の屋根ないし、壁板の可能性が考えられるのである。したがって、かかる小建物を、周溝状遺構に関連して築造された仮小屋、憶測をたくましくしていえば、いわゆる殯に使用される「喪屋」と考えることもできると考える。この点については第Ⅴ章で、さらに詳しく考えることにしたい。

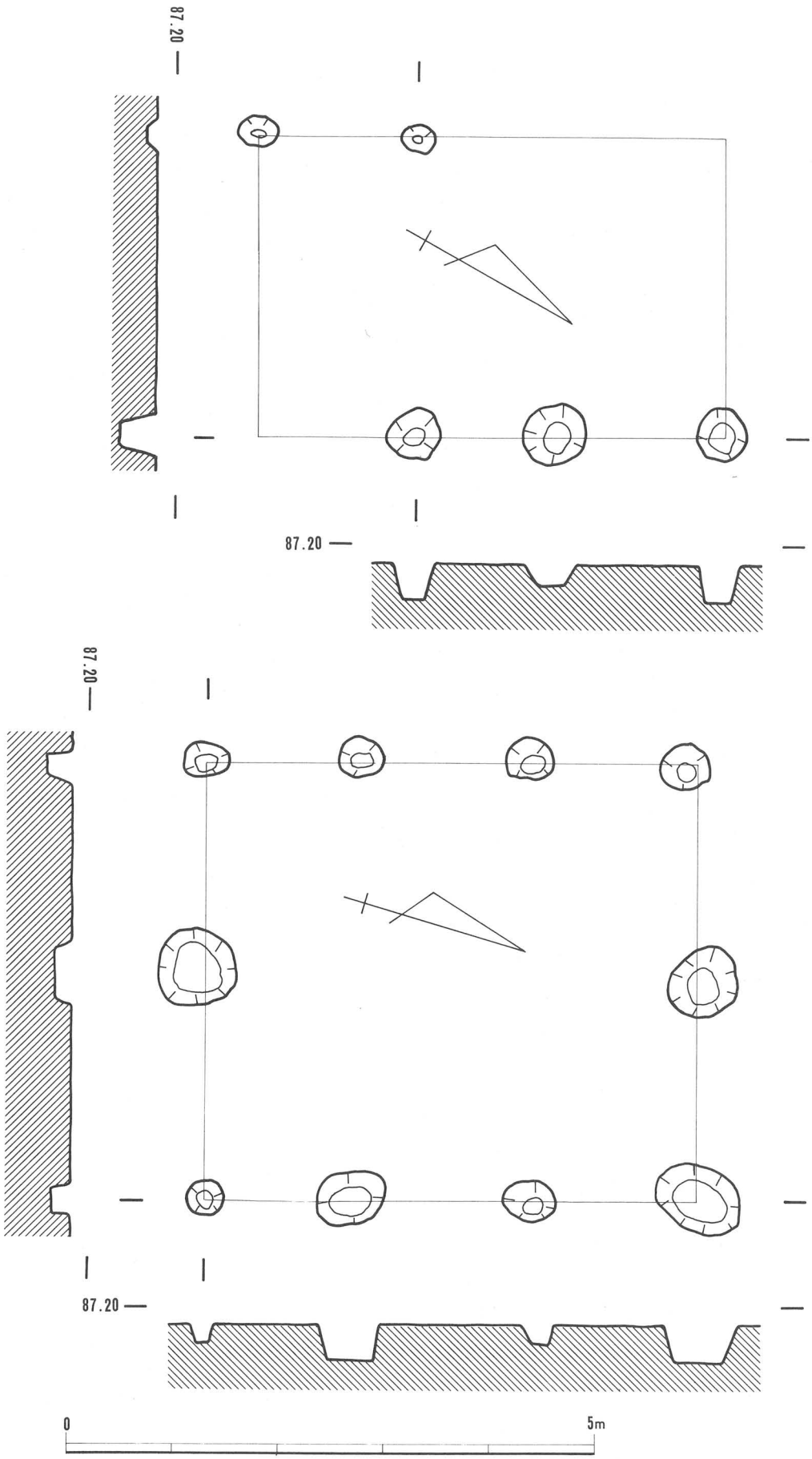
(2) 遺物

上述のとおり、出土した遺物は、円筒埴輪、形象埴輪と多数の木製品のほか、管玉、石釧など若干の石製品のみで、土器類の出土は皆無であった。



第39図　第19号南西溝遺物出土状況実測図

第40図　第19号東溝遺物出土状況実測図



第41図　　第１号、第２号掘立柱建物平面実測図

木製品

琵琶形木製品（W149）　本品は、リードに当る部分の先端など一部欠失するが、残存長98.5cmをはかり、全形が窺える。ボディ部分は、全長64.5cm、厚さ2.5cm、幅は先端で27cm、リード側で21cmをはかる。先端部の中央には、方形の切り込みがあり、その両側各２ヶ所に三角形の切り込みが刻まれている。そして、ボディの両側は、波状の凹凸が削り出されている。一方リードの部分は、残存長34.0cm、最大幅6.2cm、厚さ3.2cmをはかり、やや中ぶくれの形態を示す。そして先端部については、片面を斜めに削り面をつくっている。

本品を楽器とする根拠は、ボディ先端部の切り込みと、リード部の形態からで、これをいわゆる共鳴槽のない板作りの琴の一種とみるか、リュート系の楽器とみるかは、意見の分かれるところであるが、ボディ部分とリード部分が、明確に区分されているところからリュート系の琵琶形木製品と理解したい。[注⑥]

長柄鋤Ａ（W150）　柄と身を一木で直線的に削り出した、櫂状の長柄鋤である。柄及び身の各一部に火を受けた痕跡が認められるが、全体に遺存状態は良好で、手斧による加工痕が確認される。手斧の当り幅は、最大値で3.6cmをはかる。柄頭には、五角形状の把手を削り残している。身の肩は柄とほぼ直角であり、身の刃縁は一段削り込んでU字形に成形している。U字形部分の縁辺は、両面から斜めに刃先状に削り込んでおり、鉄製U字形鋤先の着装部とする。スギ材か。全長114.6cm、柄部68.0cm、身部46.6cm、把手幅10.8cm、柄部直径4.4cm、身部の肩幅14.6cm、厚さ2.0cm、鋤先着装部最大長15.6cm、最大幅14.8cmをそれぞれはかる。

長柄鋤Ｂ（W151）　柄と身を一木で削り出した長柄鋤である。柄部はほとんど遺存していないが、第５号出土の長柄鋤Ｂ（W015）と同種同様のタイプが予想される。身の上半は柄の形が伸長しており、全体に厚くて強靱な作りをなす。下半は薄くなり、刃縁は一段削り込んでU字形に成形している。U字形部分の縁辺は、両面から斜めに刃先状に削り込んで、鉄製U字形鋤先の着装部とした痕跡が明瞭である。カシ材からなる。現存長54.7cm、身部の長さ40.3cm、身部の予想される肩幅14.6cm、鋤先着装部最大長9.5cm、同最大幅10.3cmをはかる。

ナスビ形着柄鋤（W152・W153）　着柄部分の基部と耕起部分の刃部よりなる。基部は、上半が細く下半へ急激に幅を広げる傘状の平面形を呈す。着柄される表面（着柄面）は平坦に、対する裏面は中央部を厚く周縁部を薄く削って仕上げる傾向にある。刃部は扁平で、刃縁は一段削り込んでU字形に成形している。U字形部分の縁辺は、両面から斜めに刃先状に削り込んでおり、鉄製U字形鋤先の着装部とする。その他、W152の刃部中央には、二等辺三角形の大きな１孔が穿たれている。同期の類例が福音寺遺跡（愛媛県）などにある。[注⑦] おそらく、泥土からの土離れを良くする工夫であろう。

基部と刃部の境には、ナスビのいわゆる「帯（ベタ）」にあたる突起と、その直下にわずかな抉り込みがある。W152では、抉り込みの両側辺に、紐で緊縛したためにできたと考えられる圧痕がかすかに識別される。又、両例とも基部上端を欠損しており不明だが、同期の類例を考慮すると、小さな有頭部が存在していた可能性が高い。この有頭部と帯状突起は、おのおのその直下で柄に緊縛された紐が、使用時の打撃で上方にずれるのを防止する機能を有していたものと考えられる。

W152はカシ材。現存長45.3cm、刃部最大幅11.8cm、刃部中央の二等辺三角形孔は底辺3.0cm、高さ8.3cm、鋤先着装部最大長9.5cm、同最大幅11.1cmをはかる。W153は欠損部分が多いが、現存長45.0cm、鋤先着装部最大長12.1cm、同最大幅12.2cmである。

着柄鋤（W154）　弥生時代以来の伝統をもつ着柄鋤である。欠損部分が多いため、全容を判断しにくいが、着柄部分の基部と、耕起部分の刃部よりなる。刃部上半の中央には方孔が１つ穿たれているが、本来は欠損部分にさらに１穴が対称的に穿たれ、２孔１単位であったと予想される。この２孔間に柄の一端を配し、基部とともに紐状繊維で柄を固定

していたのであろう。刃部下半はしだいに薄くなり、ほどなく欠損している。したがって、先端部に鉄製U字形鋤先が着装されていたかどうかは不明である。現存長42.9cm、復元幅26.4cmをはかる。

鋤〔柄部〕(W155～W157)　W155・W156の両者は、微妙なカーブを示す鋤の柄部である。柄頭にはU字形の環状把手がつく。握部は手に馴染むように、丸くかつ頑強に作られている。長柄鋤Bの柄部か。材はカシである。W155は、現存長63.3cm、復元把手幅13.0cm、柄部の直径3.4cmをはかる。W156は、現存長71.2cm、把手幅10.7cm、柄部の直径3.1cmである。

W157は、弓状に反った鋤の柄部と考えられる。柄部上端を欠損しており、全体に磨耗も著しい。鋤身と接する面は平滑に加工され、鋤身を紐で緊縛する必要から、先端より約12cmの箇所にかえりの痕跡が認められる。最先端部にも、当初は緊縛に必要な有頭部が存在していたものと予想される。現存長67.3cm、柄部直径2.7cmをはかる。この種の柄部の類例が、県下針江中遺跡（5世紀末）、森浜遺跡（古墳時代前期）、服部遺跡（弥生時代後期後半～古墳時代初頭）などにある。針江中遺跡では、土坑の下部からナスビ形着柄鋤が併出しており、着柄状態が復元されてもいる。

注⑧

柱状木製品(W158)　枝を打ち払い、樹皮を剝いで半截した、柱状の木製品である。上端より下端に向かってしだいに径を増す。上端12cm余は、3分の2程度まで大きく切り込んでいる。横木を架けて結縛するための加工であろう。下端は、両側より断続的に削り込んで矢状に尖がらせている。全長299.4cm、最大径12.6cmをはかる。支柱的な用途に供されたものか。

鋤身状木製品(W159)　長柄鋤Bの身の形状に似る。ただ柾目板に木取りをしたり、刃縁に相応する箇所に鉄製U字形鋤先の着装部が認められないなど、この期の通有の鋤と比べるといささか疑問点が残り、ここでは用途不明木製品として扱うことにしたい。全長38.3cm、現存幅10.3cmをはかる。

鋤柄状木製品(W160)　先述の鋤柄に似た、柄状を呈する木製品である。ただ、上端の把手部分が欠損しており、鋤身に向かってしだいに湾曲しながら縦方向に鋭く切断されている。杭に転用された可能性も考えられる。カシ材である。全長51.4cm、最大径3.5cmをはかる。

両端切り込み材(W161)　枝を打ち払い、樹皮を剝いだ丸太材の両木口を、手斧様工具でV字状に切り込んだものである。両木口を他材とかみ合わせ、横架材として利用していたのかもしれない。全長161.6cm、直径12.4cmをはかる。

両端抉り材(W162・W163)　棒状の割裂材の両端近くを手斧様工具で皿状に抉り、端部に有頭部を形成した材である。2例とも形状・規模が近似しており、同様の機能・用途に供されていたものと考えられる。W161に同じく、抉り部で他材とかみ合わせ、横架材として利用していたものかもしれない。W162は全長85.0cm、径4.3cmをはかる。W163は現存長84.3cm、径3.4cmである。

中央抉り材(W164・W165)　棒状の割裂材の中央付近を、手斧様工具で皿状に抉った材である。W164は、ストレートに収めた側の端部に偏して抉りがあり、他端には手斧様工具で斜めに切り落としている。W165は、両端を欠損しており全容は不明である。W164の全長151.8cm、径4.8cm、W165の現存長61.2cm、径4.6cmをはかる。

木端(W166・W167)　それぞれ形状は異なるが、木材加工の際切り捨てられた木片と考えられる。多方向より打ち込まれた手斧加工痕が顕著である。

有孔板状木製品(W168～W171)　W168・W169は、いずれも一端を欠損するが、薄い板材に3cm～5cmの間隔で中央に穿孔を連ねたものである。穿孔は、径数mmの円孔である。板材の表面には、両者とも縦方向の線刻が認められる。遺存する側の一端は、板目に直交してストレートに収める。W168は幅4.2cm、厚さ0.7cm、W169は幅4.2cm、厚さ0.5cmをはかる。

W170は、棒状の割裂材の中央に方孔を穿ち、3片の木端を詰め込んでいる。全長39.6cm、幅3.0cm、厚さ1.5cm、方孔

は1.5×0.8cmをそれぞれはかる。

W171も棒状の割裂材に方孔を１つ穿った板材である。欠損部が多いため、全容はつかめない。

板状木製品（W172～W174）　W172は、一端を矢板状にやや尖がり気味とする板材である。他端は欠損する。表面に手斧様工具による加工痕がわずかに確認できる。W173も、一端がやや尖がる傾向をみせる。他端は手斧で断続的に荒く切り落としている。W174は最も狭長な板材で、両端とも欠損している。W172は幅14.2cm、厚さ3.4cm、W173は現存長70.0cm、幅9.5cm、厚さ2.2cm、W174は現存長63.5cm、幅4.5cm、厚さ0.9cmをはかる。

棒状木製品（W175～W225）　W175～W183は、小枝を打ち払い、樹皮を剝いだ棒状の丸太材である。W175は両端を手斧で荒く切り落とした完形品である。全長77.9cmをはかる。W176～W178は一端を欠損しており全容は不明だが、遺存する一端はW175と同様、手斧で荒く切り落としている。W179～W181は、遺存する一端を手斧で尖らせて杭状にしたものである。W179・W180は多方向から、W181は１方向から手斧を加えている。

W063･W184～W225は、いずれも丸太を割裂して棒状に木取りした、いわゆる棒状割裂材である。直径数cmの細長い棒状品（W063・W184～W205）と直径が５cm前後で厚さが比較的薄いやや扁平な形状を有する棒状品（W206～W225）の大きく２種が識別される。

前者は、さらに断面の形状から、方形を意図したもの（W063・W184～W192）と、円形を意図したもの（W193～W195）、本来方形を意図したものであったかもしれないが、粗雑に製作されたため不定形を呈するもの（W196～W205）の３様に分類される。方形を意図したものの中には、W184のように一端の両側辺を一段削り込んで枘状にした、全体に作りの丁寧な棒状品が認められる。W063･W185～W188は、遺存する端部を木目に直交してストレートに収めるが、W189は断続的に削り込んで尖がらせる。W185・W190・W191の３例は、一端に向かって漸次細くなる傾向にあり、先端がW189のように尖がる可能性も考えられる。断面の形状が円形となるよう意図したものは３例しかないが、端部を遺存するものはいずれも丸く収めている。断面が不定形のものは比較的多く、合計10例を数える。この中で端部を遺存するものが４例あり、W196・W197は木目に直交してストレートに収め、W198・W199は尖がらせている。

扁平な棒状品中、W206～W215はいずれも端部を遺存する。上端は木目に直交してストレートに収め、下端はしだいに削り込んで尖がらせる傾向にある。W206～W208の３例は極めて長く、一端を欠損する現存長でも優に３mを越えており、幅も他の製品と比べるとやや広い。一方、W213は、両端とも遺存する完形品であるが、全長71.6cmと短い。又、W209の側辺は、割裂後、手斧で整形する丁寧な処置が施されている。

以上、棒状木製品として一括した製品も、詳細に観察すると偏差に富んでいることが理解される。従ってすべてを同一の機能・用途にあてはめてしまうことは困難だが、これらのあるものは、他の周溝状遺構で予測してきたように、丸太材を垂木、割裂材を小（木）舞いと考え、両者を組み合わせて屋根材に供されたか、あるいは壁面等の骨組みとして利用された可能性が考えられよう。

埴輪

第19号からは、主としては東溝、北溝より円筒埴輪と若干の形象埴輪が出土している。いずれも、周溝底から検出されたものは少なく、マウンド上や、周溝外縁に置かれていたものが、後に転落した可能性が大きい。事実円筒埴輪・形象埴輪とも破片で、完形になるものは皆無であった。

形象埴輪（H111・H119～H121）　H120・H121は、舟形埴輪の一部と推測されるもので、色調は、淡褐色を呈し、胎土は１～３mmの大の石粒を含有するやや粗いものであるが比較的丁寧なつくりである。

H120は、90度の直角を有し、舟底と舟べりを成すとみられる。ハケ調整後一部ナデを施す。又、舟底には、幅1.9cmの沈線を刻む。船首と思われる部分はややカーブしており、さらに粘土を貼り付け盛り上がっている。又、舟底の外面

には、剝離が認められるが、どのような形態をなすものかは判然としない。H121と同様台座がつく可能性もある。

H121は、舟底より上・下に90度の角度を有し舟べりと台座の部分を形成するもので、H120と同一個体のものである。調整は、H120と同様にハケ調整を施し、一部ナデを行なうと思われる。舟底には、平行する2条の沈線（幅1.9cm）に直交する2条の沈線が刻まれている。またH120と同様にさらに粘土で貼り足した盛り上がりの部分がみられるが、帯状の剝離が認められ、さらに何かが取り付けられたと考えられる節がある。台座の部分は身底よりほぼ直角に下方に折れ、ややカーブするものである。

H111・H119は、家形埴輪の一部とみられる。H111は、下端より4cm上にタガを廻らせるものであるが、どの部分かは、明らかでない。ハケ調整後ナデを施すものである。H119は、家形埴輪の底部と思われ、120度の鈍角を成すものである。タガ貼り付け部分に、3条の沈線を廻らせ、タガの接着をしやすくしている。内外面とも磨滅しており、調整は詳らかではないが、外面は、ハケ調整後ナデを施し、底部下端は、ケズリを加える。共に淡褐色を呈し1～3mm大の石粒の多い胎土である。

円筒埴輪（（H086～H090、H092～H110・H112～H117）　第19号からは、50点余の円筒埴輪の出土が知られる。このうち全形の判明するものはなく、径の復元できるものは29点であった。大部分が径25cm前後、推定高45cmの小型品で、二次調整のヨコハケをやや省略化したものが多く、川西編年の「Ⅳ期」の新しい段階、およそ六世紀前半代のものとみられる。なお個々の遺物の検討は第Ⅴ章において行なうので、ここでは省略し、観察表とともに参照願いたい。注⑨

石製品

管玉（S045）　碧玉製の管玉で、長さ2.6cm、直径60mm、をはかる。濃緑色を呈し、丁寧なミガキを加えており、穿孔は両面から行なっている。

石釧（S046）　碧玉製とみられ、外径7.8cm、内径5.7cm、環体幅8.0cm、高さ2.05cmをはかる。暗褐色を呈し、傾斜面に細かい刻線を施し、側面に幅の広い凹面帯を2条めぐらす。

(3)　まとめ

以上、第19号は、その方位や形態、或は供献のあり方に、他と異なる点が認められた。その意味するところは後に検討したいが、土器の供献が検出されず、円筒埴輪の樹立が確認された点は注目されよう。又,「琵琶形木製品」や農具類の供献も、他の遺構との微妙なちがいを示しているともいえる。なお、第19号の築造年代は、円筒埴輪の編年案によるなら、「Ⅳ期」の新しい段階、およそ六世紀前半代とすることができる。

T．第20号方形周溝状遺構の調査

第17号の北に接して所在する、やや小型の方形周溝状遺構である。南溝が「砂だまり」により、かなり削平を受けているが、ほぼ全形はうかがえる。

(1)遺構

台状部は東西7.9m、南北8.1mのほぼ方形を呈し、幅1.3m～2.3m、深さ30cm～40cmの周溝がめぐる。南溝が最も狭く、西溝が最も幅広い。周溝内の層序は、大きく4層に類別され、第1層は黒灰色砂泥、第2層は灰褐色粘質土、第3層は暗灰褐色粘質土、第4層は青灰色砂質土で、地山は青灰色粘質土であった。周溝内には、用途不明の木製品が若干

出土したほか、須恵器の供献が３ヶ所でみられた。すなわち、南溝中央に坏蓋１点（C047）が逆転して、北東コーナーで坏身（C048）が正立して検出されたほか、北溝中央で、小型甕１点（C049）がこわれた状態で検出された。これらが意識的に埋置されたものか、マウンドから転落したかは判然としないが、供献儀礼に伴うものであろう。

(2) 遺物

出土した遺物は上述のとおり、須恵器３点と木製品であったが、木製品で図示し得るものは棒状木製品１点のみであった。

土器

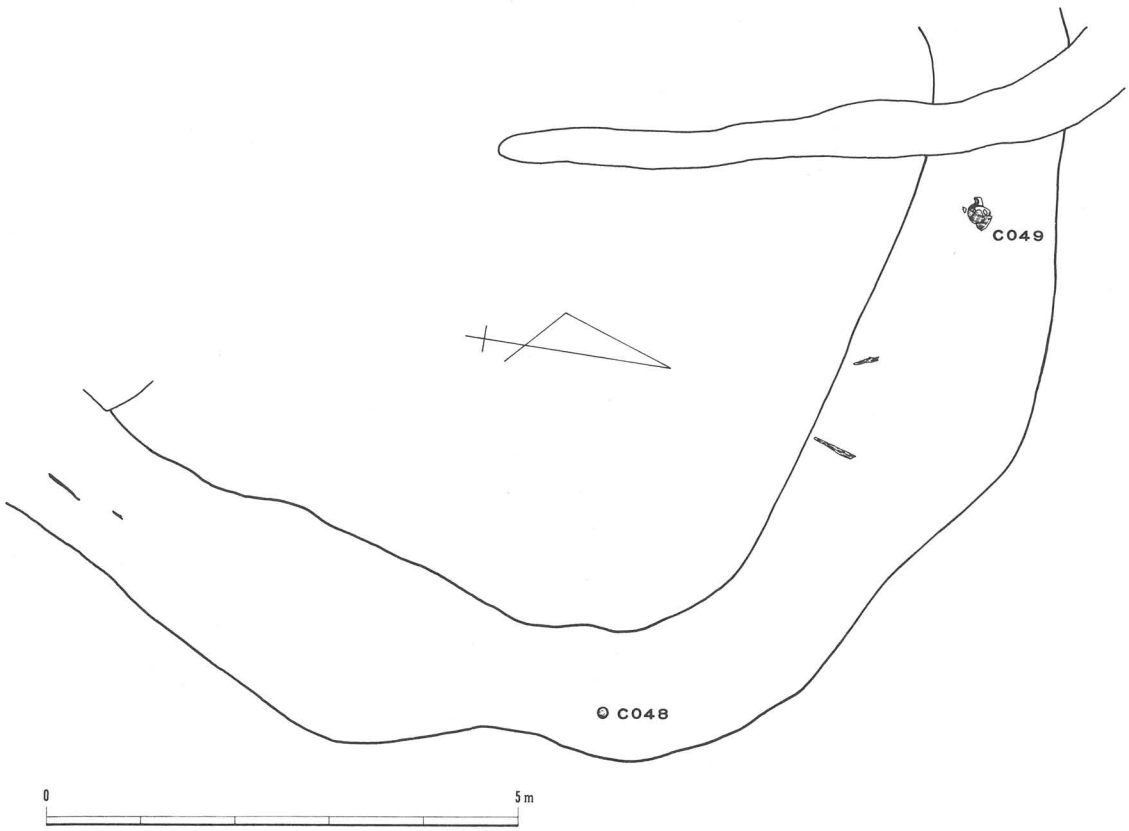
須恵器坏蓋（C047）　口縁部はやや外下方に下り、端部は内傾する面をなす。天井部は丸く、稜は短く、断面三角形を呈する。天井部外面回転ヘラ削り調整を施す。他は、回転ナデ調整。

須恵器坏身（C048）　口縁立上がりは、内傾後直上にのび、端部は内傾した浅い凹面を成している。受部は短く、底部は平らに近い。底部外面は、回転ヘラ削り調整。他は、回転ナデ調整を施す。

須恵器甕（C049）　口頸部は大きく外湾してのび、端部はやや下に拡張して段をなす。体部は、ほぼ球状を呈し、底部は丸底である。口縁部外面中位には、波状文がめぐり、体頸部外面は不定方行の平行タタキ後胴部にカキ目調整を施す。又、器体外面上半部及び内面口縁部、体下部に自然釉が付着し、黄緑色を呈す。

木製品

棒状木製品（W226）　棒状木製品の一端のみ遺存した製品と考えられる。丸太の辺材部を断面長方形に木取りする。端部は他材との結縛の必要から、３面が手斧ないし刃子様工具で抉り込まれている。断面は5.0×4.2cmをはかる。



第42図　　第20号北東溝遺物出土状況実測図

(3)まとめ

以上、第20号は、やや小型で、第17号に従属するごとき位置を占めるが、比較的良好な供献土器を埋置しており、おおよその築造年代が判明する。すなわち、出土した須恵器は陶邑の形式で、Ⅰ型式の５段階に該当し、おおよそ六世紀の第１四半期に比定しうるのである。

U．第21号円形周溝状遺構の調査

第19号の北方50mに所在する大型の円形周溝状遺構である。ただし大幅な削平を受け北半のみがかろうじて残存していた。

(1)　遺構

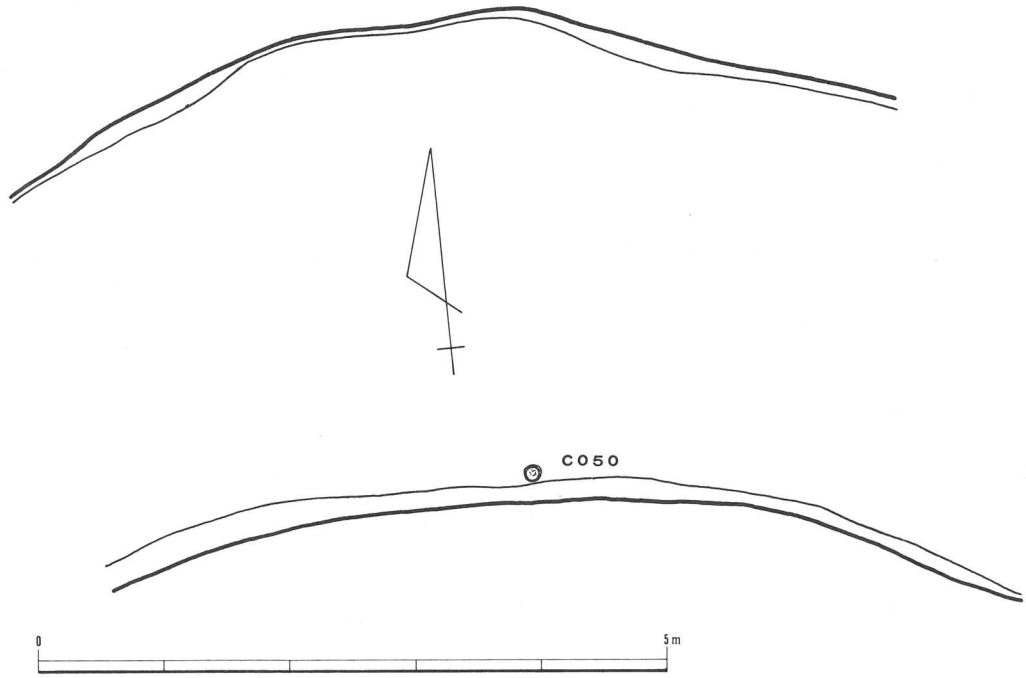
台状部は推定径15.0mの円形を呈し、幅2.4m～3.8m、深さ8.0cm～12.0cmの周溝がめぐる。周溝はかろうじて２層に類別され、第１層は青灰色泥砂、第２層は黒灰色泥砂であった。北溝中央の台状部裾に、須恵器坏身が１点（C050）正立して検出されており、供献の一端がうかがえる。

(2)　遺物

周溝内から出土した遺物で、周溝状遺構に伴うものは、上述のとおり、須恵器坏身１点のみであった。

土器

須恵器坏身（C050）　口縁部立ち上がりは、内傾して直線的に立ち上がり、受部はきわめて短く鈍い。底部は平らに



第43図　　第21号北溝遺物出土状況実測図

近い。底部ヘラ削りのほか、回転ナデ調整。

(3)まとめ

第21号は、弥生時代後期末の環濠の内側に位置しており、その関係から削平された可能性が強いといえよう。ただ唯一の出土遺物である坏身は、陶邑の形式で、II型式の1段階に該当し、六世紀の第2四半期に築造されたことが推定される。[注⑩]

V. 第22号方形周溝状遺構の調査

第20号の北東16mに所在するやや大型の方形周溝状遺構である。弥生後期後半の環濠を切って築造されている。昭和51年西の過半の調査を行い、東北コーナーについては、昭和53年に調査を実施した。

(1) 遺構

台状部は、東西14.3m、南北14.5mのほぼ方形を呈し、それに幅2.9～3.8m、深さ1.6mの周溝が全周する。溝内の層序は、ほぼ4層に類別され、第1層が暗黒灰色粘質土、第2層が黒灰色粘質土、第3層が黒茶褐色粘質土、第4層が灰黒色粘質土であった。主体部および、顕著な供献の痕跡は認められなかった。

(2) 遺物

出土遺物は、遺構に伴なわない古式土師器を除けば、全く検出されなかった。

(3) まとめ

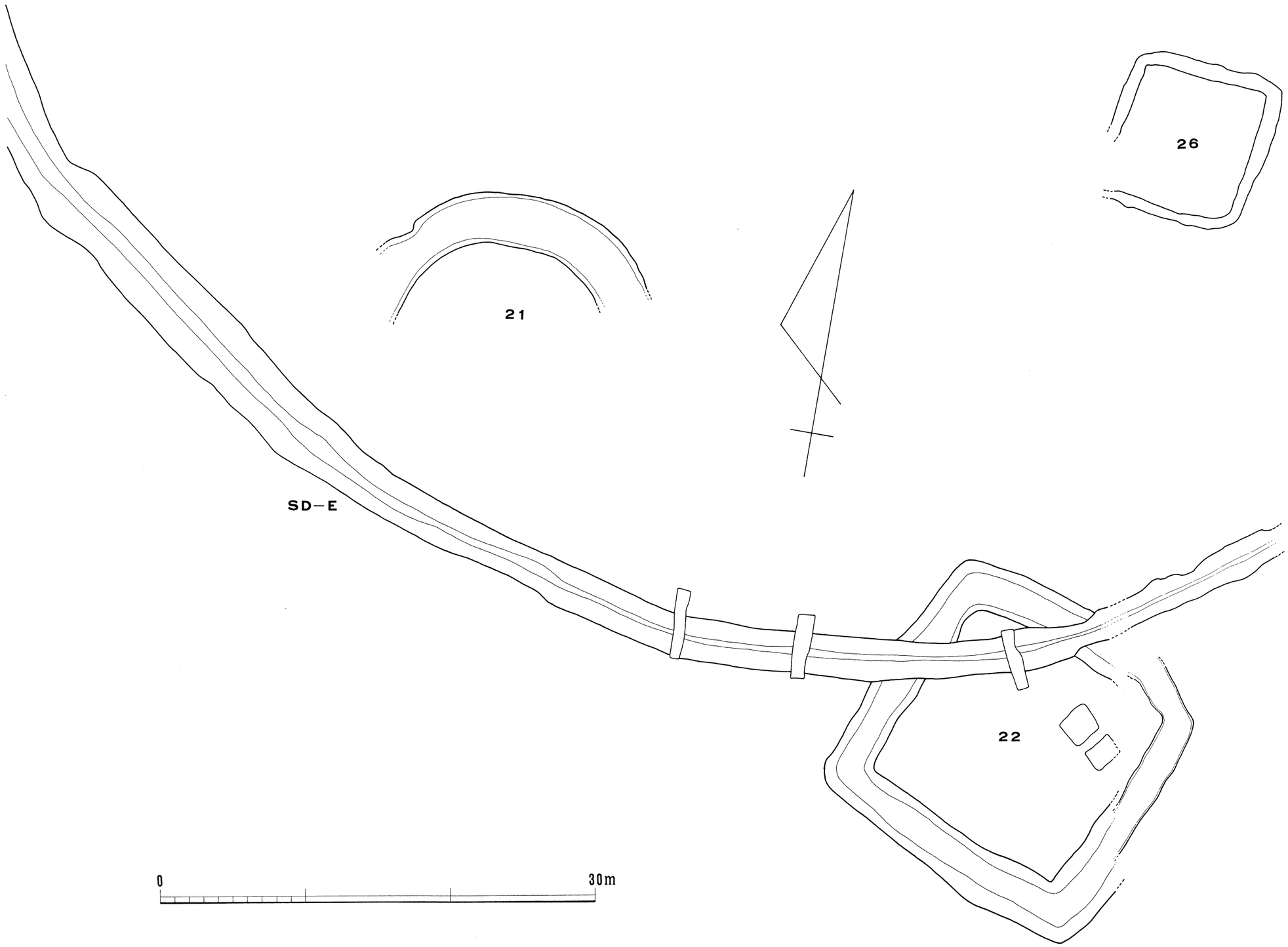
第22号は、比較的大型の方形周溝状遺構で、おそらく隣接する第26号とも、関連が予想されるが、残念ながら、出土遺物がなく、築造年代は判明しなかった。

W. 第23号円形周溝状遺構の調査

第19号の北西30m、第21号の西35mに所在する、大型の円形周溝状遺構である。

(1) 遺構

台状部は径20.2～20.4mの円形を呈し、幅4.1～6.8m、深さ64～75cmの周溝がめぐる。東溝が比較的幅広く、6.8mで深さ75.0cmをはかるのに対し、南溝がやや狭く4.1mで深さ64.0cmをはかる。溝内の層序は、大きく5層に類別され、第1層は黒灰色粘質土、第2層は暗灰色粘質土、第3層は暗青灰色粘質土、第4層は黄青灰色粘質土、第5層は暗緑灰色粘質土であった。台状部には、主体部を含めて、顕著な遺構の検出はなかったが、溝内には、多様な供献が認められた。土器では、須恵器坏蓋4点、坏身1点、碗1点、壺1点、甕4点が周溝内に散在し、木製品としては、田舟1点、長柄鋤2点、ナスビ形着柄鋤1点、把手付四脚槽1点、刀形木製品1点などが出土した。そして、第19号とともに、円筒埴



第44図　遺構分布図(3)

輪、朝顔形埴輪、形象埴輪が大量に出土している。これらは、マウンド上、或は周溝周辺における、大規模な祭祀の痕跡を示すものであろう。

なお第23号で注目されるのは、台状部肩において検出された、樹木の切株である。すなわち北東溝の台状部肩に意識的に等間隔をもって、切株が検出されており、計画的に植樹された可能性が考えられるのである。

(2) 遺物

上述のように周溝内より、須恵器、木製品、埴輪が大量に出土しており、意識的に溝内に投棄あるいは、埋置されたと考える。

土器

須恵器坏蓋A（053）　つまみのない坏蓋で、口縁部はやや内湾して下がり、端部は内傾する浅い凹面をなす。稜は鈍く、短い断面三角形を成す。天井部は、低く平らに近い。天井部外面は、ヘラ削り未調整、他は、回転ナデ調整。

須恵器坏蓋B（C057）　口縁部は外下方に直線的にのび、端部を外に引き出し、丸くおさめる。稜は明確な段をなしている。天井部は、ゆるやかに円弧を描き、中央にやや高い宝珠のツマミをつける。器体内外面共回転ナデ調整、天井部外面中央にヘラ削りを施す。

須恵器高坏（C054・C148）　C054はおそらく短脚の一段透かしをもつ高坏の坏部にあたるとみられる。立ち上がりはやや内傾してのび、端部は内傾する面を成す。受部は外上方にのび、端部を丸くおさめる。底部は平坦で、中央に脚台を付している。C148は同じく高坏の坏底部であり脚台の接着状況がうかがえる。

須恵器瑞（C056）　第12号のものより、やや小型で装飾も簡略化されている。口縁部は一坦外湾してのち、段をつくって内湾気味に上方にのび、端部は内傾した面をもつ。体部は肩のはった球形をなし、底部は尖り気味の丸底である。頸部には細かい波状文を施し、体部最大径の部分に円孔をうがっている。内外面共回転ナデ調整。

須恵器壺（C056）　広口の小型壺で、口縁部は「く」字に外湾して短くのび、体部は球状を呈する。体部外面にカキ目がみられるほか、ナデによる調整。

須恵器甕（C150）　小型甕の口頸部である。口縁はゆるやかに外湾し、端部は上方に引き出して外側に凹面をなす。端部下方に細かい凸線を廻らし、その下位に櫛描波状文を施し、頸部近くにも沈線がめぐる。内外面とも回転ナデ調整。

須恵器甕（C040・C149・C152）　胴部最大径が38.0cm～129cmの中型・大型の甕である。C040は長胴形の体部に、外湾して開く口頸部を有する。体部外面には、不整方向の平行タタキ、内面下半部には、指頭圧痕が認められる。C149は、肩が強く張り出した球状の体部をもち、底部は丸底である。体部外面には格子目タタキを残す。C153は、口縁部が外湾して大きく開き、端部は外側に肥厚、外端部は凸状に呈している。体部は肩の張った球状を呈し、焼成時に自重のため底部が凹んでいる。内外面とも回転ナデ調整で、外面に平行タタキを残す。

須恵器土錘（C152）　円柱状を呈した中ぶくれの錘で、径0.9cmの円孔をうがっている。

木製品

刀形木製品（W227）　厚さ0.6cm前後の薄い柾目板を削って、柄（茎（なかご））部と刀身部を作った刀形を呈する木製品である。柄部は柄頭を長方形に削り残し、把の部分を山形に削り込む。鍔の表現はなく、柄部と刀身部の境は両関（まち）とする。刀身部は、一端を刀子様工具で連続的に削って刃をつける。切先は半月状に収めていたようであるが、過半は欠損して遺存しない。刀背は、一部火を受けて焼けている箇所が認められるが、本来、直線的である。柄部の長さ8.5cm、刀身の長さ44.3cm、幅4.5cmをはかる。金子裕之氏の刀形木製品の型式分類上[注⑪]、刀形Aの祖形をなすものと考えられる。

田舟（W228）　割竹形を呈する大型の田舟である。大木を半截し、若干整形を加えた後、内側を刳りぬいて田舟とす

る。約半分が欠損する他、摩耗した箇所が散見され、遺存状態は余り良くない。平面形は長方形を基本とし、断面形は外形線・内形線ともに縦断面が倒立の等脚台形、横断面が半円形を呈す。側辺部は、口縁端が幅2cm前後と最も薄く、半円状に刳りぬきながら底部にむかって厚みを増し、底部近くに至って再び薄くなる。木口側は、口縁部で8cm前後と厚く、その厚さを維持しつつ内傾して直線的に底部へ刳りぬいていく。木口外面には、端部よりやや入った箇所に、長さ8cm余の棒状把手が削り出されている。現状では両木口に1箇所ずつ確認されるが、本来は各木口に2箇所、合計4箇所に存在したものと思われる。把手を除外した全長165.0cm、現存幅20.4cm、高さ15.8cm、深さ14.0cmをはかる。

長柄鋤A（W229・W230）　両者とも柄と身を一木で直線的に削り出した、櫂状の長柄鋤である。W229の遺存状態は極めて良好で、手斧の加工痕が明瞭である。特に身部では、上下に連続的に手斧を加えて削り出す様がうかがえる。手斧の刃の当り幅は、4.8cm前後をはかる。W230の遺存状態は余り良好ではないが、わずかに手斧による加工痕が認められる。柄部は、断面がW229では円形に、W230では方形を意図して製作され、両者とも中位が最も細く、柄頭及び身部に近づくにつれてしだいに太くなる。柄頭には、両者とも当遺跡出土の長柄鋤Aに特徴的な五角形状の把手がつく。身部の肩は柄とほぼ直角で最も幅広く、特にW230では、外にやや張る傾向がある。身部の刃縁は一段削り込んでU字形に成形している。U字形部分の縁辺は、両面から斜めに刃先状に削り込んで、鉄製U字形鋤先の着装部とする。両者ともスギ材と思われる。W229は、全長122.2cm、柄部78.0cm、身部44.2cm、把手幅10.4cm、柄部中位の直径3.4cm、身部の肩幅17.6cm、厚さ2.8cm、鋤先着装部最大長14.6cm、最大幅14.4cmである。W230は、全長122.0cm、柄部81.8cm、身部40.2cm、把手幅9.4cm、柄部中位の直径3.6cm、身部の肩現存幅11.2cm、厚さ2.2cm、鋤先着装部最大長15.0cm、最大現存幅12.8cmをはかる。

なお、鋤・鍬類は通常、強靱なカシ材で製作される。ところが、当遺跡出土の長柄鋤Aはすべてスギ材である。加えて、W229のように遺存状態の良好なものを観察すると、使用された形跡が余りなく、製作痕が良好に残っている。これらの点から、当遺跡出土の長柄鋤Aは、いずれも当初より祭祀用の供献具として原寸大に製作されたものと考えた方が良いのかもしれない。

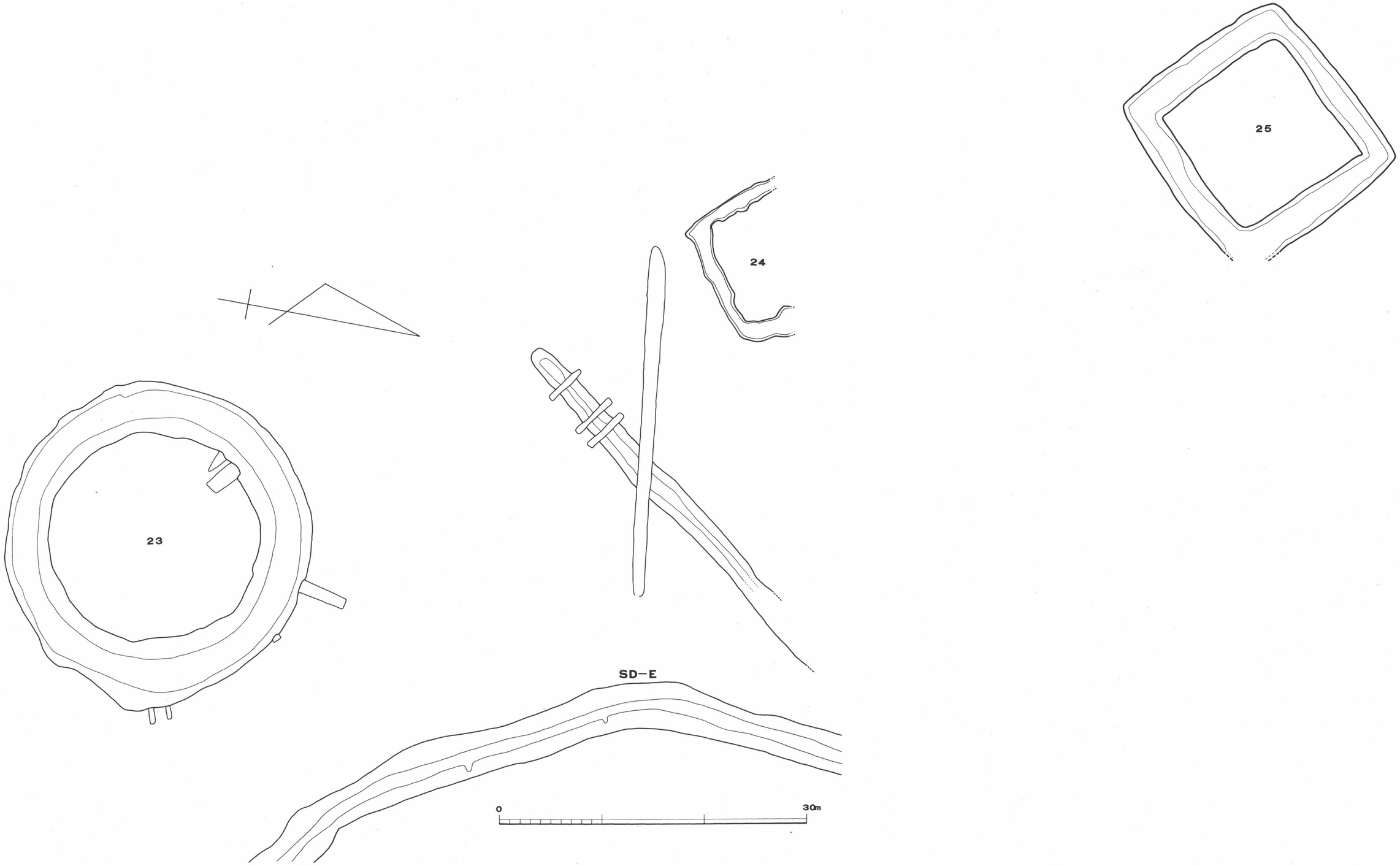
把手付四脚槽（W233）　平面が楕円形、断面が鉢状を呈する槽である。楕円の長軸方向両端には平担な把手が付き、底部には四脚が存在していたものと思われるが、現況では約半分が欠損している。大木を半截し、槽の底部が木心側にくるように木取りしたもので、楕円の長軸方向を木目と平行に、短軸方向を木目と直交するように配している。槽の外面は腐植が進行しているが、内面は一部手斧で削った加工痕が認められ、内底面は多方向の直線的な線刻が著しい。全長46.6cm、現存幅17.5cm、器高11.1cm、脚高2.2cm、把手幅4.3cm、器壁の厚さ2.0cm前後をはかる。

柱状木製品（W234・W235）　両者とも枝を打ち払い、樹皮を剝いだ丸太材である。柱根に近い部分のみ遺存しており、上端はいずれも欠損する。W234の上端は火を受けて焼けており、そのことに起因して欠損したものと予測される。下端は、W234は手斧用工具で比較的丸く仕上げるが、W235は大きく2方向から断続的に削って尖がらせている。W234は現存長48.2cm、直径9.0cm、W235は現存長29.8cm、直径7.5cmをはかる。直径から考えて、支柱的な用途に供されたものであろう。

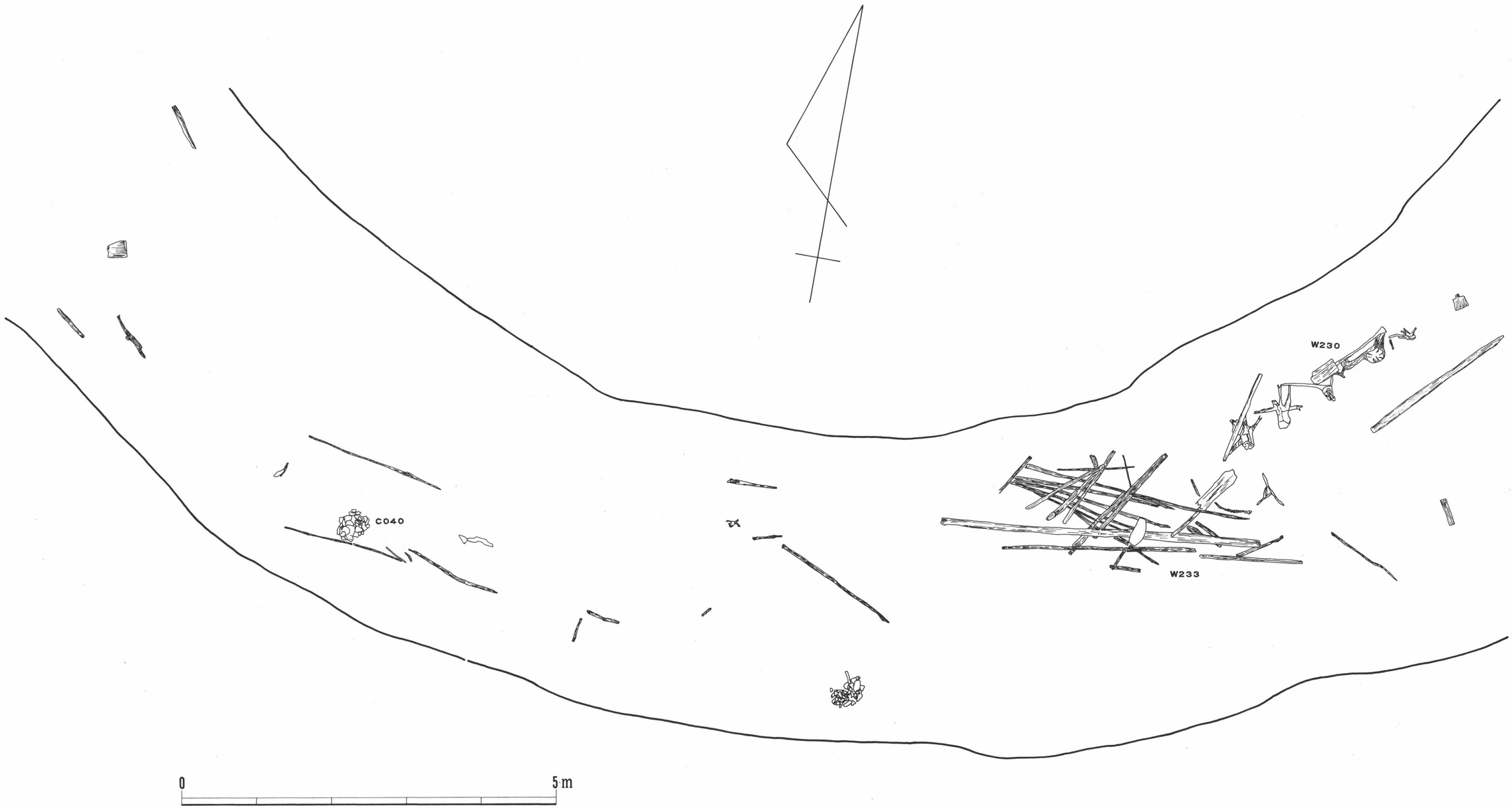
棒状木製品（W236・W237）　W236は枝を打ち払っただけの、又、W237はさらに樹皮を剝いだ細い丸太材である。上端はいずれも欠損しており不明だが、下端は手斧で削り落として杭状に尖がらせている。W236は現存長56.8cm、直径3.8cm、W237は現存長48.6cm、直径3.6cmをはかる。

埴輪

第23号からも、各周溝から、円筒埴輪・形象埴輪が若干出土をみた。第19号の場合と同様に、必ずしも周溝底から検出されず、浮いた状態のものが多く、又小破片で完形のものが皆無であるところから、マウンド上や周溝の外縁部に樹



第45図　遺構分布図(4)



第46図　第23号南溝遺物出土状況実測図

　第47図　第23号北溝遺物出土状況実測図

立されていたものが、後に転落したと考えられる。

形象埴輪（H122～H140・H142）　H140は家形埴輪の壁面の一部と考えられ約100度の鈍角を成すもので、窓側等の一部も残存している。朱塗で、1～3㎜大の石粒を含む粗い胎土である。外面は、縦方向のハケ調整を施し、直交する直線が刻まれる。内面は、ハケ調整後ナデを施す。

H118は、家形埴輪の底部と考えられ、約120度の鈍角で折れる。底部下端より1.3cm上にタガを有する（タガ幅2.0cm、タガ高1.4cm）。H119と同じくタガ接合に先立ち3条の沈線を廻らせるものである。外面ハケ調整、内面ハケ調整後ナデを行なう。底部下端は、ケズリ。色調は淡褐色を呈するが、焼成はやや甘く断面灰色を呈す。

他は、小片であり、家形埴輪の一部とは考えられるが、判然としないのも含まれる。

H122・H135・H128は、いずれもハシゴ状の線刻を有するもので、同一個体の可能性がある。色調は、淡褐色を呈し、1～5㎜の石粒を含む粗い胎土である。H128は、端部を内外面に肥厚させ（2.0cm）やや凹状を呈す。H135は、端部が約100度に屈折するもので、ハシゴ状の線刻もそれに伴う。共に調整等詳らかではないが、H135内面に細かいハケ調整が認められ、外面はハケ調整後ナデが施されるとみられる。どのような埴輪の形態をなすかは判然としない。

H136は、端部がやや湾曲しており、直線と、矢印様の線刻を有するものである。内外面共ナデが施され、端部は、やや丸味を呈する。

H138、H139は、朱塗（H138は剝離しているが朱の痕跡が認められる）で、家形埴輪の屋根の部分と考えられる。H138はアジロ模様を有するが、H139は斜方向のハケ調整が施され、2条の直線が刻まれるものである。内面には、ナデと指頭圧痕が残存する。

H137、H126は、器壁がやや湾曲するもので、直線及び弧状の線刻を有する。外面は、ハケ調整後ナデ、内面はナデが施されている。共に胎土は、粗く、淡褐色を呈す。

H124、H125、H127は、小片で、共に線刻を有するものであり、家形埴輪の一部と思われるが判然としない。

H134は、端部がやや湾曲しており、内面には凸帯が付される。外面には、端部より2.8cm上に端部のカーブにそった弧線が刻まれる。どのような埴輪の形態をとるかは不明である。

H132は、小片であり、剝離が著しく形態不明であるが、突起状に粘土を貼り付けたものである。

H131は、家形埴輪の底部か。器壁は、2.1cmと分厚い。内外面共剝離が著しく調整不明。

H133は、家形埴輪の棟先の一部とみられる。直径は、4.8cmに復元される。

H142は、比較的高いタガを有するもので、円筒埴輪の一部とも考えられるが、器壁がややカーブしており、調整、タガの形態等において疑問とされる。内外面共ナデが施され、タガは、高さ1.4cm、幅1.3cmでほぼ方形を呈しており、ナデが施される。当遺跡出土の円筒埴輪と比較した場合、タガ高、幅とも他のものよりやや大きくしっかりしている。又、外面にハケ調整が認められずナデが行なわれる点等より形象埴輪と考えた。

H123、H129、H130は、いずれも筒状の形態をとり、同一個体と考えられる。器壁は、1.2～1.4cmをはかる。中空構造で、直径7cmに復元し得る。

H129は、上方でやや広がりを見せ、たとえば馬形とみた場合、体部と脚部との接合部分を思わせるが、不明である。

H123は、小片であるが、わずかに線刻が残存する。

以上、形象埴輪片の概略を記したが、如何なる形態を示すものか識別困難なものが多々ある。しかしながら、全て淡褐色の色調を呈し、また、1～5㎜大の石粒を含む粗い胎土を有するものであり、円筒埴輪の胎土よりは、粗いようである。

円筒埴輪（H143）　第23号で円筒埴輪と考えられるのは、H143のみであり、胴部破片で、径18.7cmをはかる。外面

は連続ヨコハケの二次調査を加え、タガ接合面はヨコナデがみられる。内面はハケはなくナデ調整であった。これも第19号のものと同じく、周溝内で浮いた状態で検出されており、マウンド上ないし周溝外縁部より転落したものと考えられる。なお詳細については第Ⅴ章において検討を加えるので参照されたい。

朝顔形埴輪（H141）　第23号より、頸部が1点出土している。円筒部より、ゆるく「く」字形に屈曲するもので、頸部径は、19.8cmをはかる。内外面ヨコナデ調整を施すが、内面には、ナナメハケの痕跡が認められる。色調は、淡褐色を呈し、焼成はやや軟い。

伊香郡高月町涌出山古墳でも朝顔形埴輪多数が知られるが、頸部径平均値15cm前後と本品よりは、屈曲が大きい。注⑬

(3) まとめ

以上のように、第23号は、服部遺跡のこの種の遺構では、最も大きな規模をもつだけでなく、その内容においても、形象埴輪、円筒埴輪をもつことをはじめ、大甕2点を含む須恵器の供献や、木製品などの供献においても、重要な内容をもつことが明らかになった。ただ、出土した須恵器によるなら、第23号の築造時期は、陶邑の編年で、第Ⅰ型式の5段階、およそ六世紀の第1四半期に該当するとみられる。なお、径20m、周濠を含めると、径35m前後という規模は、県下の円墳においても、上位を占めるものであろう。

X．第24号方形周溝状遺構の調査

第23号の北西45mに所在する、やや小型の方形周溝状遺構である。北半は農道2号橋の橋梁工事によって、すでに消失していた。

(1) 遺構

台状部は、東西12.8mをはかり、方形を呈するとみられ、それに幅1.2～2.5m、深さ21～39cmの周溝がめぐっている。北半が消失しているほか、削平もかなりあるとみられ、残りも悪い。溝内の層序は、ほぼ2層に分かれ、第1層は黒灰色粘質土、第2層は暗黒灰色粘質土を呈する。主として第2層から、若干の須恵器と木製品が出土した。このうち木製の長柄鋤は南溝の中央において検出され、その周囲で須恵器坏身1点が出土しており、明確ではないが、何んらかの供献を示すものと考えられる。

(2) 遺物

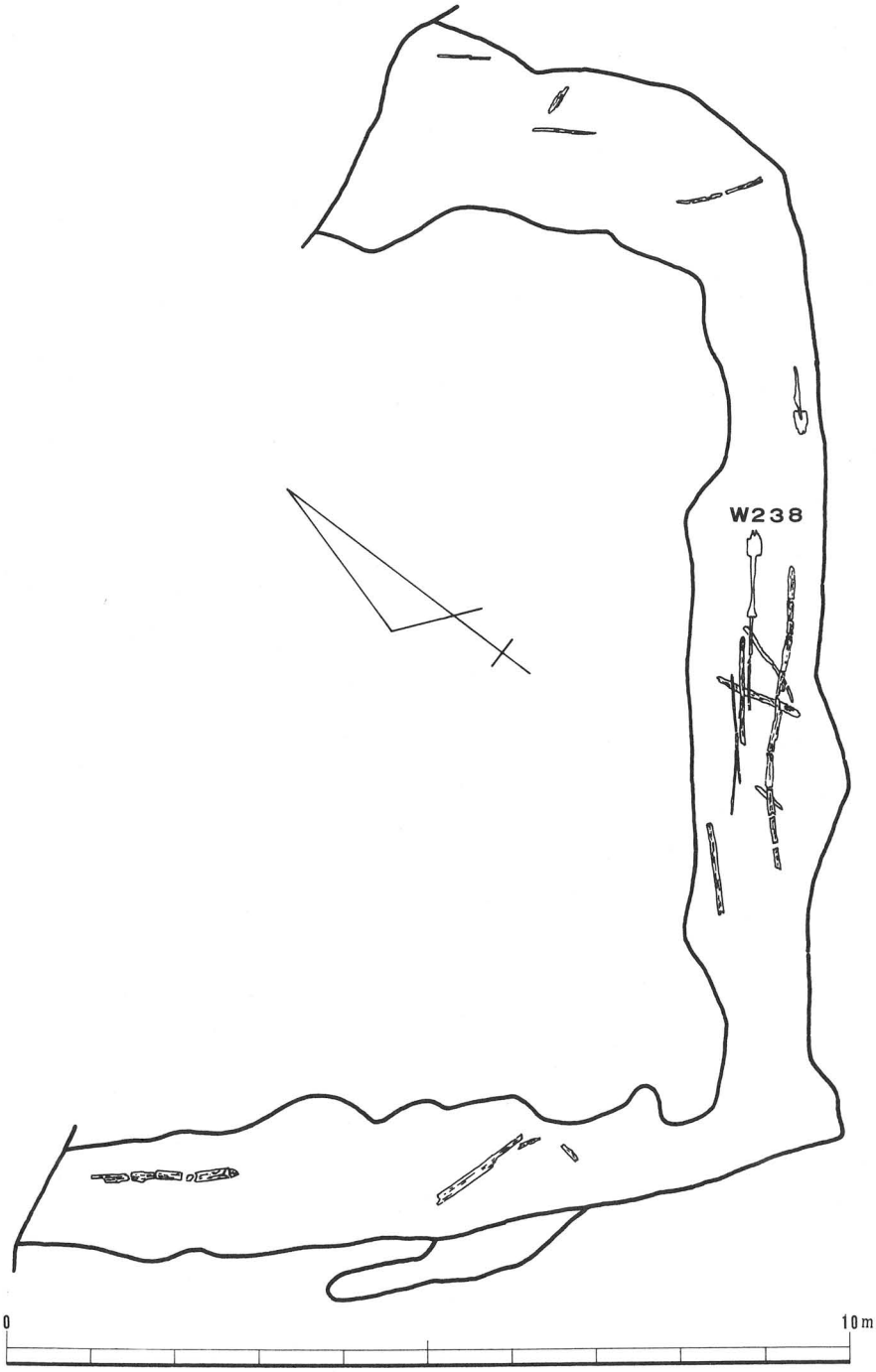
周溝内から、須恵器坏身2点と、長柄鋤2点が出土したが、鋤1点はすでに腐植がすすみ、取りあげることはできなかった。

土器

須恵器坏身（C058・C151）　口縁部立ちあがりは、やや外湾しつつのび、端部を丸くおさめる。C151の場合は、やや内傾して立ちあがる。受部はいずれも短く、水平或いはやや上方にのび、断面三角形を呈する。底部は丸味をもつ。内外面ともナデ調整。底部のみヘラ削りの後、調整ナデ。

木製品

長柄鋤A（W238）　身部の刃縁をわずかに欠損しているが、ほぼ全容を残す長柄鋤である。ただ遺存状態は良好とは



第48図　　第24号南溝遺物出土状況実測図

言い難い。柄部の断面は円形を意図しており、柄頭は五角形状の把手を削り残している。身部の肩は柄とほぼ直角に作り、刃縁は一段削りこんでU字形に成形していたものと思われる。本来、鉄製U字形鋤先の着装部が存在したのであろう。スギ材か。全長103.6cm、柄部72.6cm、身部31.0cm、把手幅10.6cm、柄部直径2.8cm、身部肩幅14.4cm、厚さ3.2cmをはかる。

(3) まとめ

以上、第24号は、やや小型で、しかも北半を消失していたにもかかわらず、若干の供献の痕跡がみとめられ、出土した須恵器は陶邑のII型式の１段階に該当し、およそ六世紀の第２四半期に築造年代をおさえることができた。

Y．第25方形周溝状遺構の調査

第24号の北西30mに所在する大型の方形周溝状遺構で、この種の遺構では最北端に位置している。

(1) 遺構

台状部は、南北14.2m、東西13.9mのほぼ方形を呈し、幅2.5～3.4m、深さ25.0～30.0cmの周溝がめぐる。周溝内の層序はおよそ３層に類別され、第１層は、灰色粘質土、第２層は、暗灰色粘質土、第３層は灰色粘質土であった。周溝内において、明確な供献の痕跡は認められなかったが、東溝の中央より長柄鋤２点が重なって出土し、その周辺からもナスビ形着柄鋤１点、長柄鋤１点が出土した。供献の一形態と考えることができよう、

(2) 遺物

周溝内からは、土器の出土は全くなく、上述の木製農具４点のほか、若干の自然木が出土した。

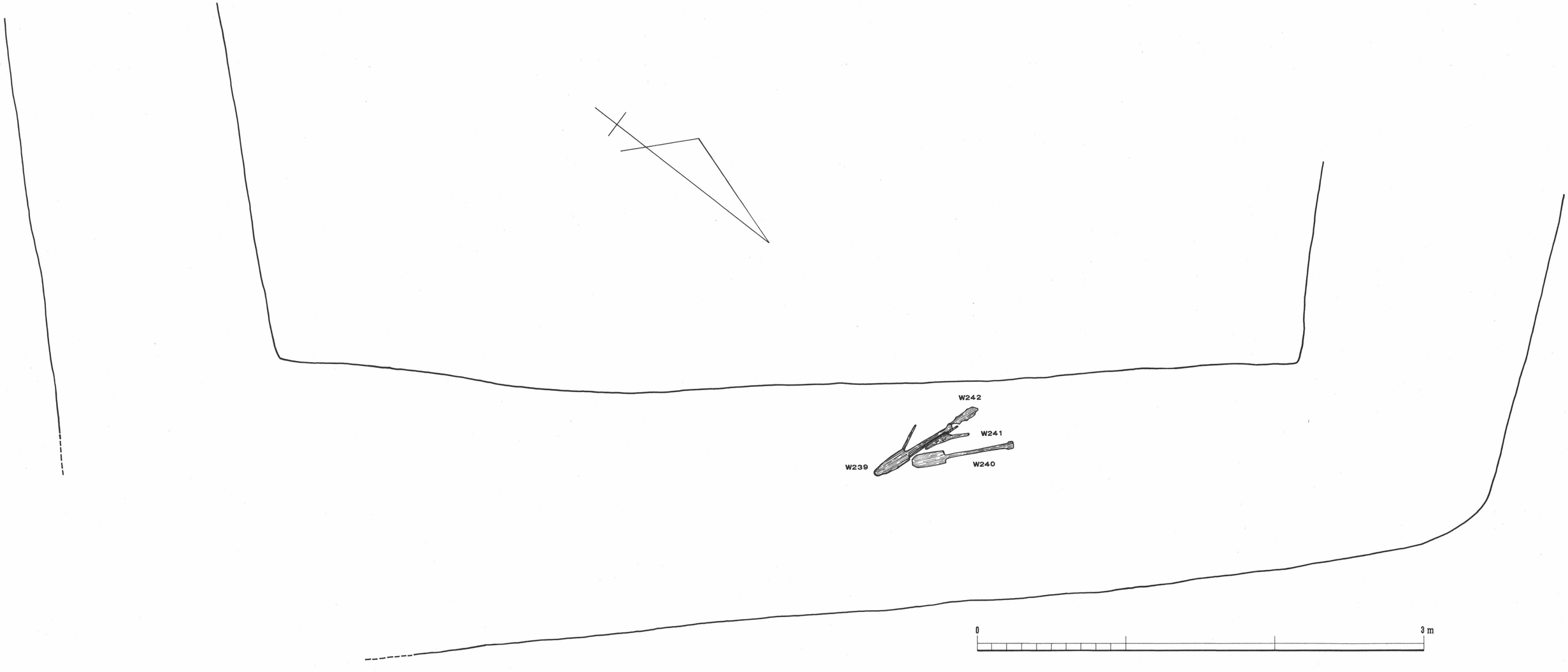
木製品

長柄鋤Ａ（W239・W240）　両者とも柄と身を一木で直線的に削り出した、櫂状の長柄鋤である。遺存状態は比較的良好で、一部手斧の加工痕が確認される。手斧の刃の当り幅は、W239で4.5cm前後、W240で3.4cm前後をはかる。柄部の断面は、両者とも方形を意図して製作されている。柄頭は五角形状の把手を削り出すが、W240では、さらにその片面の中央を抉って、使用時手に馴染み易くする。身の肩は柄とほぼ直角である。身の刃縁は、一段削り込んで鉄製U字形鋤先の着装部を形成しているが、W240では余り明確でない。両者とも杉材か。W239は、全長120.6cm、柄部71.6cm、身部49.0cm、把手幅10.6cm、柄の直径3.8cm、身部の肩幅17.0cm、厚さ2.8cm、鋤先着装部最大長19.6cm、最大幅16.4cmである。W240は、全長135.2cm、柄部93.2cm、身部42.0cm、把手幅8.6cm、柄の直径3.4cm、身部の肩幅16.8cm、厚さ1.4cm、鋤先着装部最大長12.4cm、最大幅17.4cmをはかる。

長柄鋤Ｂ（W241）　柄と身を一木で削り出した長柄鋤である。ただ、本報告の直線的な長柄鋤Ａと比べると、スプーンの縦断面にも似た微妙なカーブが認められる。柄は、身に近いわずかな部分を残して大半を欠損している。身との間に鈍角を形成する。身は、左辺が乾燥して萎縮しているが、ほぼ全容が把握できる。身の中央は上半で柄の形が伸長しており、全体に厚くて強靱な作りをなす。身の肩部は、やや垂下気味ながら柄とほぼ直角である。身の下半は薄くなり、刃縁は一段削り込んでU字形に成形している。U字形部分の縁辺は、両面から斜めに刃先状に削り込んで、鉄製U字形鋤先の着装部としていたのであろう。カシ材である。現存長42.1cm、身の長さ35.0cm、現状の肩幅11.4cm、鋤先着装部最大長11.1cm、現状の同部位最大幅10.7cmをはかる。

ナスビ形着柄鋤（W242）　着柄部分の基部と、耕起部分の刃部よりなるナスビ形着柄鋤である。基部は、上半が細く下半へ急激に幅を広げる傘状の平面形を呈す。着柄される表面（着柄面）は平担に、対する裏面は中央部を厚く周辺部を薄く削って仕上げる傾向にある。刃部は扁平で、刃縁は一段削り込んでU字形に成形している。U字形部分の縁辺は、両面から斜めに刃先状に削り込んでおり、鉄製U字形鋤先の着装部とする。

基部と刃部の境には、ナスビの蔕（へた）にあたる突起と、直下に抉り込みがある。抉り込みの両側辺には、紐で緊縛したためにできたと考えられる圧痕が確認できる。又、基部の最上端には、小さな有頭部が削り出されている。この有頭部と



第49図　第25号東溝遺物出土状況実測図

帯状突起は、おのおのその直下で柄に緊縛された紐が、使用時の打撃で上方にずれるのを防ぐための機能を有していたものと考えられる。カシ材である。

全長49.2cm、刃部最大幅14.0cm、鋤先着装部最大長8.5cm、同最大幅9.9cmをはかる。

(3) まとめ

以上のように、第25号の場合は、土器の出土がなかったこともあって、その築造時期は明確にし難い。ただ溝内より出土した木製農具は、第19号、第23号出土のものと、ほぼ同じ形態、技法を示しており、それらと近い時期が推定されるであろう。

Z．第26号方形周溝状遺構の調査

第IV次調査で検出されたもので、第22号の北東26mに所在する方形周溝状遺構で、方位も第22号とほぼ一致している。

(1) 遺構

かなり削平を受けており、台状部の東西8.9m～南北9.3mの方形を呈し、幅0.7～1.2m、深さ8～15cmの周溝がめぐる。周溝内の層序は、ほぼ2層に分かれ、第1層は黒色粘質土、第2層は黒灰褐色砂質土であった。溝内より出土した遺物は皆無で、主体部、供献の痕跡も認められなかった。

(2) まとめ

第26号は、上述のように検出段階で大きく削平を受けていた。これは第21号のあり方と同様であり、両者が弥生時代後期後半の環濠内に所在することが問題になる。すなわち、環濠の内外に若干のレベル差があり、それがかかる差異の原因になった可能性も考えられるのである。このことは、環濠外において多数の竪穴住居跡が検出されているにもかかわらず、環濠の内側では、ごく稀にしか検出できていない点とも関連しており、今後の検討が必要と考える。

α．第27号周溝状遺構の調査

第5号、第6号の東側に所在したとみられるもので、沼沢地との境界付近のため、平面的に確認できず、わずかに遺物の出土により、その存在が推定されるにすぎない。

(1) 遺構

第5号の北東、約15m地点において、沼沢地の落ち際を調査中、須恵器坏蓋、坏身セット各2点、短脚一段透し高坏の身・蓋セット各1点の計6点が集中して出土し、それと隣接した場所で、曲物の円形容器の一部が出土した。これら出土遺物の内容は、上述の諸遺構のものと完全に一致し、この箇所に周溝状遺構の存在したことが推測されたのである。そしてこれは、第12号や、第10号などでみられた、円形容器による供献の一例と解することができるのである。

(2) 遺物

出土した遺物は、曲物の円形容器１点と須恵器６点であるが、曲物は、すでに腐植がすすんでおり、そのままでは取り上げることはできなかった。

土器

須恵器坏蓋（C061・C063）　つまみのつかない蓋で坏身とセットになるとみられる、いずれも口縁部は外下方に直線的に垂下し、端部は内傾する浅い凹面をなしている。稜は短く断面三角形をなし、天井部は丸味をおびている。内外面とも回転ナデ調整。天井部外面回転ヘラ削り、内面仕上ナデが認められる。

須恵器坏蓋（C059）　天井部にツマミの付くタイプで、高坏に伴うものとみられる。形態はC061とほぼ同様であるが、底が低くやや不明確になっており、天井部もツマミの付く関係で、やや丸味を失っている。

須恵器坏身（C062・C064）　口縁立ち上がりはやや外湾して高くのび、端部は内傾する浅い凹面をなしている。受部は外方にのび端部をを丸くおさめる。底部は平坦につくり、ヘラ削りを施す。他は回転ナデ調整。

須恵器高坏（C060）　短脚一段透し高坏である。第23号に脚部を大部分欠損した例があるが、完形品は、この種の遺物では唯一の出土例である。坏部の手法は、坏身とほぼ同じで、底部中央に脚部が付される。脚部は基部よりやや外湾気味に外下方にのび、裾端部を上・下に肥厚させる。脚部４方向に台形透しを有す。

木製品

曲物容器　径50cmで現存高11cmをはかる。最下段のみ残存しており、桜の樹皮により綴られていた。

(3)　まとめ

以上、第27号については、遺物の出土状況から、その存在が推定されるにすぎないが、第10号や第12号でみられた曲物容器による供献が推察され、、注目されるところである。なお、出土した須恵器は、陶邑のＩ型式の５段階に該当し、およそ六世紀の第１四半期に築造の時期を求めることができよう。

β．その他

〈出土地不明木製品〉

ナスビ形着柄鋤（W231）　着柄部分の基部と耕起部分の刃部よりなるナスビ形着柄鋤である。基部は上端を欠損するが、上半が細く下半へ急激に幅を広げる傘状の平面形を呈す。着柄される表面（着柄面）を平担に、対する裏面は中央部を厚く周辺部を薄くする傾向が認められる。刃部は扁平で、刃縁は一段削り込んでU字形に成形している。U字形部分には、鉄製のU字形鋤先が装着されたのであろう。

基部と刃部の境には、ナスビの蔕にあたる突起があり、直下には抉り込みが確認される。蔕状突起は、基部上端に本来存在していたと考えられる有頭部とともに、おのおのその直下で柄に緊縛された紐が、使用時の打撃で上方にずれるのを防ぐ工夫であろう。カシ材である。現存長42.5cm、鋤先着装部最大長9.1cm、同部位の復元最大幅9.8cmをはかる。

着柄鋤（W232）　弥生時代以来の伝統をもつ着柄鋤の１種である。着柄部分の基部と、耕起部分の刃部よりなる。基部は、上端が一段狭くなる２段構成で、最上端に有頭部を残し、直下をやや削り込んで紐掛り部位とする。横断面は、着柄を考慮して半円形を呈している。

刃部は極めて狭長で、下端に向かってしだいに幅を広げ、同時に厚さを減じる。着柄される面（着柄面）は平担に、対面は中央部を厚く、周辺部を薄く削って仕上げる。刃縁には、鉄製U字形鋤先を装着していた痕跡が認められない点、

留意される。全長68.7cm、基部全長18.1cm、基部直径4.3cm及び3.0cm、刃部全長50.6cm、最大幅10.2cm、同部位の厚さ1.0cmをはかる。狭く深く掘る用途に適しており、農具として排水等の溝掘開の他、土木具として柱穴などの掘開に、特に多用されたものと予測される。

杭（W243～W245） W243は、小枝を打ち払い、樹皮を剝いだ丸太材である。先端を多方向から断続的に手斧で削って尖がらせている。全長54.4cm、直径4.5cmをはかる。

W244・W245は、いずれも太い丸太を縦方向に割裂した杭である。W244は、横断面を三角形に、又、W245は長方形に木取りする。先端は、W244は多方向から、W245は一側辺から削って尖がらせている。

用途不明木製品（W247・W248） W247は、先述の着柄鋤（W232）に似た形状を示すが、刃部上端から基部は一段厚く削り残しており、刃部下端近くに至って対称的な2孔を穿っている。刃部表面には手斧の加工跡が確認できる。現存長51.6cm、幅8.8cm、厚さは4.0cm、及び1.5cmをはかる。

W248は、柾目板に木取りした板材である。幅8.4cm、厚さ1.1cmをはかる。

註

① 中村浩ほか『陶邑Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ』（大阪府文化財調査報告第28・29・30輯　大阪府教育委員会　1976・1977・1978）

② 「砂だまり」とここで呼ぶのは、調査域のほぼ全域で、地表下70～90cmで検出された遺構である。規模は多様にわたり長辺60cm～4m、短辺30cm～2mの正方形ないし長方形を呈し、深さは0.8～1.2mをはかる。いずれも垂直に、しかも丁寧に掘削されたもので、内部には野洲川の洪水堆積物とみられる茶褐色砂質土のみが充塡されていた。旧水田の一枚単位で、形態や規模が異なるところから、洪水堆積物を除去する目的で掘削されたことが推定される。出土遺物はほとんどないが、若干近世・近代の陶磁器が出土しており、掘削方法とともに、かなり新しい遺構とみられる。

③ 出土琴については、大場磐雄「菅生発見の『やまとごと』」上・下（季刊『どるめん』創刊号・第2号　1973・1974）、水野正好「琴の誕生とその展開」（『考古学雑誌』66―1　1980）、佐田　茂「古代琴雑考」（『考古学雑誌』66―1　1980）に論究がある。なお、山上伊豆母氏は、本品を六弦琴とされるが（「五世紀王朝と日本琴」講座日本の古代信仰第5巻『呪禱と芸能』　1980）、両端の突起は、琴糸を結縛するというより、琴板と共鳴槽を結縛するための施設とみられること、共伴した琴柱が4点であったことから、四弦琴と理解したい。

④ 金子裕之「古代の木製模造品」（『研究論集Ⅳ』　奈良国立文化財研究所　1980）

⑤ 柳田国男「葬制の沿革について」（『定本柳田国男集』　第15巻　筑摩書房　1963）

⑥ この点については、岸辺成雄氏の御教示を受けた。

⑦ 「福音寺遺跡」（『埋蔵文化財発掘調査概報』　松山市教育委員会　1975）

⑧ 兼康保明「針江中遺跡の調査」（『国道161号線バイパス関連遺跡調査概要』3　滋賀県教育委員会　1983）、谷口　徹「三・四世紀の木製鋤」（『滋賀文化財だより』28　1979）、同「近江を中心にみた農県具（鍬・鋤）の変遷」（埋蔵文化財研究会、第14回研究集会資料、1983）

⑨ 川西宏幸「円筒埴輪総論」（『考古学雑誌』64―2　1978）

⑩ 環濠内を精査したが、一部を除いて住居跡など集落に伴う遺構は検出できなかった。このことから逆に、環濠内にかなりの盛土のあったことを推定することもできよう。

⑪ 注④に同じ

⑫ 谷口　徹「服部遺跡出土の線刻ある木製品について」（『滋賀文化財だより』48　1981）

⑬ 田中勝弘『北陸自動車道関連遺跡発掘調査報告書Ⅷ―高月町涌出山古墳―』（滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会　1983）

V．調査の成果と課題

A．遺構の性格

本報告書に収載した遺構は、方形の周溝状遺構17基、円形周溝状遺構９基の計26基にのぼった。このほか、調査域外に広がるものや、第27号のように遺構検出できなかったもの、第13・第21号のように、すでに削平を受けているもの等々を加えるなら、その総数はさらに大きくなるといえよう。そこで以下、これらの遺構、遺物が提起する問題について、若干の考察をすすめたいが、その前に遺構の性格について、少しふれておく必要があろう。

服部遺跡で、これらの周溝状遺構が検出されたのは、昭和50年夏であったが、周知のように、この前後の時期は、いわゆる高度成長期の末期にあたり、大規模土木開発が依然盛行し、それに伴う埋蔵文化財の発掘調査もうなぎのぼりに増加、大規模化した時期であり、いわゆる方形周溝墓と呼称された墓制が各地において、続々と発見された時期でもあった。このため、服部遺跡のこれらの遺構も、いわゆる周溝墓という視点から、調査を実施することになったのである。[注①] ところが調査をすすめる中で、須恵器の供献がみられたり、滑石製の模造品や小玉が出土したりして、いわゆる周溝墓の範疇でとらえるより、マウンドを削平された古墳の可能性も、しだいに大きくなった。事実、いずれの遺構においても、主体部とみられる遺構は、全く検出できなかったのである。しかしながら、一方において、周溝内における多様な供献、特に農具や建築材の出土、さらに「やまと琴」の検出は、従前における古墳の調査では、ほとんど指摘されていない点であり、それよりも、いわゆる後期群集墳の盛行する以前において、しかも平野部において、円墳、方墳からなる大古墳群が存在するという点も、この段階では依然未周知の分野であったのである。このような状態で、後半の調査は、周溝墓・古墳という両面からすすめられたのである。そして、第19号、第23号からは、円筒埴輪、朝顔形埴輪、家形埴輪などの形象埴輪が出土し、古墳説を裏付けることとなった。一方、県下の各地や、他府県においても、いわゆるマウンドを削平された古墳が、その後陸続と発見され、いわゆる正規の古墳に対し、弥生時代の方形周溝墓の系譜を引く、低墳丘墓の存在を指摘する見解も現れたのである。[注②]

以上、調査の経過と関連して、問題の所在を明らかにしようとした。それでは、現時点における遺構の性格規定はどうかという点であるが、古墳時代における低墳丘墓の実態が十分に明らかでない以上、服部遺跡の周溝状遺構を、古墳としてとらえるのが、最も妥当といえよう。したがって、以下の考察も、かかる視点からすすめたいが、県下における、この種の遺構について、一応目を通しておきたい。

(1) 余呉町桜内遺跡

湖北伊香郡余呉町に所在する古墳時代前期から後期にかけての墓地跡、集落跡で、方形周溝墓14基、竪穴住居跡40棟などが検出されている。そして、その南端において、古墳時代後期の円墳１基が検出された。径11.5mをはかり、幅4.5mの周溝がめぐるが、墳丘はすべて削平されていた。詳細は未報告であるが、周溝内より須恵器が若干出土しているだけで、他の遺物の出土は知られていない。桜内遺跡の北東尾根上には、弥生後期の方形周溝墓と古墳時代中期の円墳が重複して分布する黒田長山古墳群が所在し、東南の尾根上にも、古墳時代中・後期の方墳・円墳からなる黒田長野古墳

群が所在しており、桜内遺跡の円墳も、それらの系譜につらなるものと考えられよう。

(2) 長浜市越前塚遺跡[注④]

長浜市の東、加納町に所在する越前塚遺跡は、昭和56年～昭和57年にかけての調査で弥生時代中期～古墳時代前期の方形周溝墓と古墳時代中期～後期の古墳が重複して、70基以上検出された。このうち、1号、30号、39号（前方後円墳）、43号、および越前塚古墳（前方後円墳）の5基が古墳とみられている。

1号は径12.8m、周溝幅2～3mの円墳で二ヶ所に陸橋部が認められる。周溝内からは大量の円筒埴輪と家形埴輪2個体以上のほか須恵器、土師器が多数検出された。30号も、径10.8m、周溝幅約2mの円墳で、周溝内から、須恵器を出している。越前塚古墳は、後円部径約38m、周溝幅約8mをはかり、周溝内からは、埴輪片と須恵器を出土している。これら3基は、出土遺物から五世紀末に築造されたと考えられている。

39号は前方部長12.8m、後円部径19.8m、周溝幅2.8～11.0mをはかり、周溝内からは若干の須恵器を出しており、43号は一辺28.8mの方形で、幅4.6～5.8mの周溝がめぐり、周溝内から若干の須恵器を出している。これらは、出土遺物から、六世紀後半代に築造されたと考えられている。

越前塚遺跡の場合は、弥生時代中期から古墳時代後期まで、連綿と続く墓地として、また出土遺物などで、服部遺跡と似た様相をもっているが、いまだ未報告のため、供献形態など詳細は明らかでない。

(3) 近江町狐塚遺跡[注⑤]

近江町高溝に所在する狐塚遺跡は、従来前方後円墳の可能性が推定されていたが、昭和57年に実施された調査で円墳であることが確認された。その後、昭和59年にこの隣接地の調査が実施され、帆立貝式古墳1基と円墳数基が検出された。このうち円墳は径20m余で深さ10～30cmの浅い周溝が廻り、周溝の北辺から円筒・朝顔形埴輪とともに靫形埴輪が出土した。狐塚1号墳の約100mに所在する4号墳は、マウンドをすべて削平しているが、全長30mの帆立貝式古墳であることが明らかになった。そして前方部前面の周溝内から家形埴輪と靫形埴輪が北側のくびれ部周溝内より、男性の人物埴輪が出土している。

(4) 中主町御明田古墳[注⑥]

中主町五条に所在する御明田古墳は、昭和58年に実施された調査で、新たに発見されたもので、帆立貝式古墳の可能性を残しているが現存長16mの円墳である。墳丘もかなり残存しており、ほぼ完全な状態で埋没していたことが判明した。そして南の周溝内より人物埴輪1点と馬形埴輪1点が出土したほか、円筒埴輪が周溝の各区から大量に出土した。

(5) 野洲町富波遺跡[注⑦]

野洲町富波に所在する富波遺跡では、昭和51年に実施された竹ノ花地区の調査で、古墳時代中期末とされる、帆立貝式古墳（全長20m）と円墳（径10m）各1基が検出された。未報告のため詳細は明らかでないが、いずれも墳丘は削平され、円墳の周溝内において、須恵器坏身セットの供献が認められた。また、昭和53年に実施された亀塚地区の調査では、弥生時代最終末期とされる、前方後方型周溝墓が検出されている。

(6) 野洲町和田遺跡[注⑧]

野洲町小篠原に所在する和田遺跡では、昭和51年度に実施された金ヶ糸地区の調査ではマウンドを失なった円墳3基

を検出し、周溝内から須恵器若干とともに円筒埴輪片を出土したとされる。未報告のため、出土状態など判然としないが、和田遺跡では、昭和49年実施の西今区の調査や、昭和54年に実施された横枕地区の調査において、円筒埴輪の出土が知られており、さらに多くの古墳の存在した可能性も考えられよう。

(7) 守山市金ヶ森東遺跡[注⑨]

守山市金ヶ森町に所在する金ヶ森東遺跡においては、昭和58、59年に実施された発掘調査で、マウンドを消失した円墳、12基が検出された。周溝内からは、須恵器ともに、埴輪が出土したとされるが、詳細は未報告である。金ヶ森東遺跡の西には、前方後円墳とみられる庭塚古墳が所在しており、円筒埴輪の出土も知られている。したがって、本遺跡も、いわゆる群集墳盛行以前における、平地型の古墳群としてとらえることができるであろう。

(8) 高島郡高島町鴨遺跡[注⑩]

高島町鴨に所在する鴨遺跡では、昭和55年に実施された調査で、マウンドを消失した方形周溝状遺構が検出された。詳細は明らかでないが、古墳時代中期とみられており、西に隣接して所在する六世紀前半代と推定されている前方後円墳、鴨稲荷山古墳に先行ないし従続する古墳群が、この周辺に埋没している可能性が大きくなった。

以上の諸例から知られるように、現在4000基といわれる県下の古墳のほかに、多数の埋没ないし削平された遺構の存在することが明らかとなり、その時期についても、中期末ないし後期初頭のいわゆる群集墳成立以前が大部分を占め、墳形も円墳だけでなく方墳や、小型の帆立貝式古墳のあること、土器供献や埴輪の樹立をみるものもあることなどが明らかになった。しかも築造後、それほど経過しない時期に削平埋没したため、現存例では失なわれた状況が、タイムカプセルのように密封保存されていた例もいくつか判明しているのである。そこで以下において、服部遺跡の遺構、遺物について、やや詳しく検討を加えることにしたい。

B. 形態と分布

まず遺構の形態は、基本的には方形と円形であり、方形が17基、円形が9基の合計26基である。方形で最大のものは第9号で、台状部の一辺20m、周溝幅5m、最小のものはやや特殊な第2号、第3号を除外すれば、第16号で、台状部の一辺6.1m、周溝幅1.5mをはかる。円形の最大のものは、第23号で台状部径20.5m、周溝幅6.8mをはかり、最小のものは、第18号で、台状部径8.2m、周溝幅2.3mをはかる。一般的には方形のもので、台状部一辺12m、周溝幅2.5m、円形のもので、台状部径12mで、周溝幅2.5mであるから、いわゆる後期群集墳と比較した場合、規模は一廻り大きいと考えられよう。

形態がやや特殊なものとしては、陸橋部をもつ第4号、第5号、第13号、ややいびつな形態を示す、第13号、第14号、第15号が認められる。陸橋部については、後に考えるとして、いびつな形態を示す3基については、これらの遺構の北側を蛇行する溝Dとの関連が考えられる。溝Dは、周溝状遺構の間をぬって、東から西へ流れる人工的なV字溝で、幅1.8m～2.9m、深さ0.5m～0.9mをはかり、およそ五世紀後葉から六世紀初頭ごろの須恵器、土師器を出土しており、周溝状遺構に併行ないし、やや先行して掘削されたと考えられる。したがって、第13・14・15号の3基はすでに先行して築造されていたと考えられる、第6号、第9号の2基と溝Dにはさまれた空閑地を占地せざるを得なかったがゆえに、ややいびつな形態をとることになったと考えるのである。

以上のように、遺構の形態については、正方ないし正円が基本形であることを確認したが、次に注意されるのは、そ

の形態と分布状況の関連である。結論的にいえば、これらの遺構は大きく６ないし７つのグループに分類できると考える。

まず第１群は、南から第12号、第10号、第11号、第１号、第８号、第７号、第18号の円形７基である。第２群は、第１群の北に分布する、第２号、第３号、第４号、第５号、第６号の方形５基、第３群は、第９号、第13号、第14号、第15号の方形４基、第４群は、第17号、第16号、第20号、第22号、第26号の方形５基、第５群は、第23号、第21号の円形２基、第６群は、第19号、第24号、第25号の方形３基からなると考えられる。このうち、第１群については、第12･10･11号の３基と他の４基とに二分される可能性はあるが、また後にふれたい。

まず第２群は、中規模の方形周溝状遺構である第４・５・６号と、小型の第２・３号から構成される。これらは、いずれも方形であること、軸を等しくしていることで共通性があり、第４・５・６号の３基は、規模においても類似している。また第３群の場合は、第２群の北に接しているものの、全く軸をかえているところから区別をすることができる。そして上述のとおり、第13・14・15号の３基は、先行する第６号・第９号と溝Ｂに規制されて、ややいびつな形態で築造されていることから、一つのグループと考えられる。したがって、第３群では、大型の第９号がまず築造された後、第13・14・15号が築造されたといえるであろう。第１群は溝Ｄの南で、第２・第３群に含まれない円形周溝を一括したものであるが、このうち、第１・７・18号の３基がほぼ一直線上に並ぶこと、第７号と第８号がほぼ同規模で類似した形態をとることからこれらを第10・11・12号など南よりに分布する一群と区別することも可能かと考える。

第４群とした、第17・16・20・22・26号は溝Ｄの北でほぼ軸と形態を等しくするものであるが、第２群における、第２・３号が第４号に従属する形で所在するのと同じように、第16・20号の小型２基が、大型の第17号に従属するような分布形態を示すことは注意されよう。したがって、第４群においても、第22・26号の２基と細分することも可能かと考える。そしてもう１点、第４群で問題となるのは、一応第６群に分類した第19号の取扱いである。第19号は、第17号の西に接するように所在する、やや大型の方形周溝であるが、軸はＮ-26°-Ｗと大きく異なっており、第23号をはさんで、同じ方形の第24・25号の２基と共通した軸をとっているところから、これらを第６群として分類したいのである。そして第５群は、溝Ｄの北側に所在する２基の円形周溝を１グループとしたのである。

以上の分布状況から指摘しうることは、まず第一に、方形と円形が、かなり区別を意識して造られていることであろう。仮にこれらの一群を、一つの古代家族の一系列の墳墓と考えた場合、それぞれの家族ごとに、築造しうる墳墓の形態が規制を受けていた可能性が指摘されるのである。第二に、それぞれのグループ内においても、必ずしも規模などにおいて、等質的な一面もあるが、大、小ばらつきがあって、階層差が推定されることである。たとえば第１群にあっては、第10号が大型であり、第18号が比較的小型で、他は近似した規模をもつこと、第２群では、上述のように、第４・５・６号が等質であるのに、第２・３号が、第４号に従属するような形態をとっていること、第３群においても、第９号が突出して大型であるのに対し、他は比較的等質であること。第４群でも、上述したように、第17号が大きく、第16･20号が小型でそれに従属する形をとること、第５群でも第23号がかなり大型で、第21号が平均的な規模をもつことなどが指摘されるのである。これらの点は仮に１グループを、上述のように一系列の家族の墳墓と考えるなら、家族の盛衰を物語ると考えることも可能であるし、また仮にこのグループを一家族の集団墓と憶測するなら、家族内における階層差を表現したものと考えることも可能かと思われるのである。

以上、遺構の形態・分布状況から考えられる問題点を指摘したが、それは一つの問題提起であって、その検証は出土遺物の検討によって、さらに詳細になされなければならない。そこで次に、各周溝内でみられた、供献形態を検討して、さらに考察をすすめたい。

第50図　　遺構配置図

C．供献の諸形態

上述のように、服部遺跡の周溝状遺構はすでにマウンドを削平され、主体部も失なわれていたが、野洲川のたび重なる洪水により、遺構が早い段階に埋没し、その後も地下水が豊富であったこともあって、周溝内やその周辺から、須恵器、土師器などの土器類のほかに、多数の木製品が出土し、若干の石製品とともに、遺構やその周辺でなされた儀礼の一端を窺うことができる。

周溝内からの出土遺物は、およそ次の四つに分類することができる。

(1) 周溝内に意識的に供献されたとみられるもの。

(2) 周溝内に意識的に投棄されたとみられるもの。

(3) 本来存在したマウンドや、周溝の外縁部に供献ないし、置かれていて、後に周溝内に転落したとみられるもの。

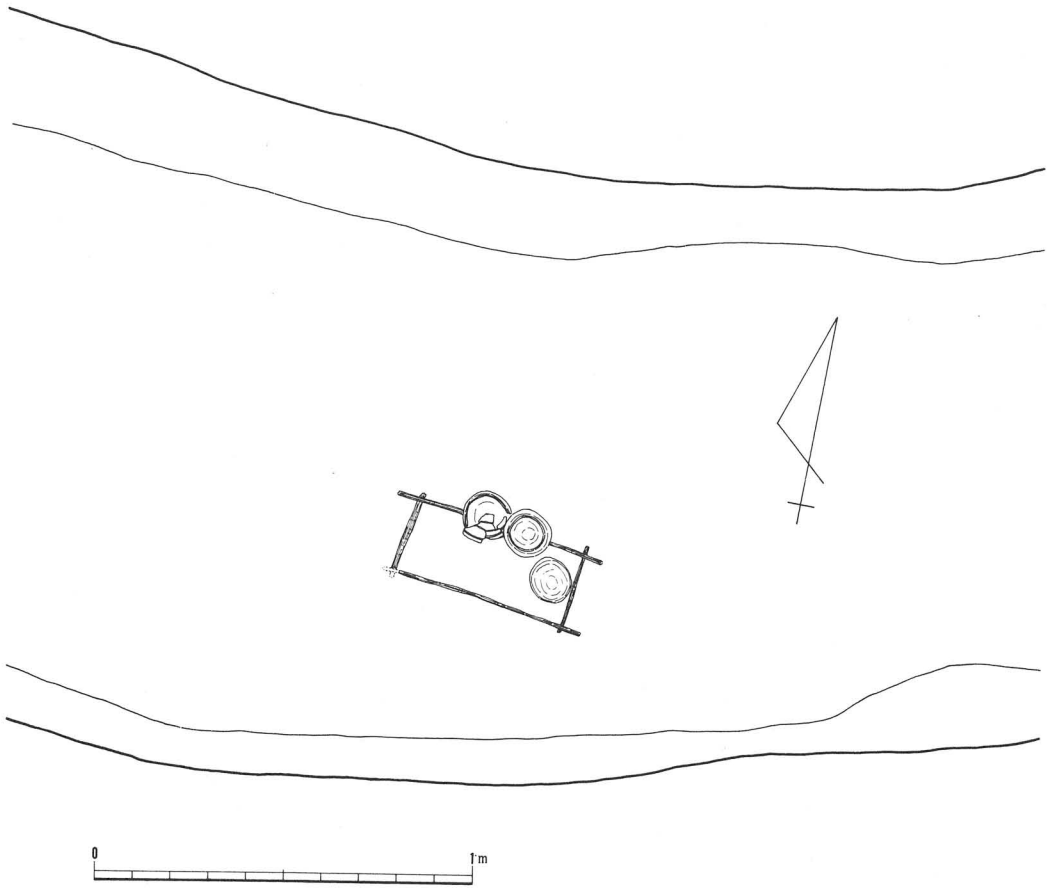
(4) 周溝が埋没したあと、流入ないし無意識に投棄されたと考えられるもの。

このうち、当面問題になるのは、(1)～(3)であるが、次に実例を上げて検討したい。

まず(1)と考えるものとしては、箱形容器や曲物容器による供献を指摘できる。すなわち第１号では、その南溝の中央よりやや外よりの部分に、長辺47.8cm、短辺20.9cm、高さ4.0cmの、枘穴で組合せた長方形の箱形容器がすえられ、内側の側板の上に完形の須恵器坏身２点が、並んでのっており、容器内に坏蓋１点が逆転して検出された。箱形容器には底板はなく、側板、小口板の底部近くに一定間隔の小孔がそれぞれ４ヶ所穿たれているところから、セイロ状の底を推定することもできるが、周溝の底に意識的に置かれ、これも消失したとみられる蓋の上に須恵器の坏身、坏蓋が並べて供献されたことは確実と考えられる。坏身の一つからは、貝の表皮とみられる遺物が少し検出されており、食物の供献のあったことも推測される。一方箱形容器については、小児埋葬用の木棺とする考え方もあるが、上述のように、きわめて浅いこと、明確な底、蓋をもたない点から、神事において、祭具などを容れるために使用される、「御供櫃」の先駆的なものと考える。[注⑪] このことは、次にみる第12号の箱形容器のあり方からも首肯されると思われる。

第12号の場合は、周溝状遺構の未検出な段階で発見されたものであるが、出土地点を復元的に検討してみると、第12号円形周溝の北西溝の中央よりやや内側によせて、長辺59cm、短辺21cm、高さ3.7cmの、第１号とほぼ同規の箱形容器が置かれ、その前面、周溝の外側よりに、須恵器の坏蓋、坏身が合せられた状態で、前列に三個、後列に二個、二列に並べて置かれ、その上に、須恵器碌１点と土師器長頸壺１点が倒立した状態で載せられていた。第12号の場合も、箱形容器に底、蓋はなく、側板、小口板の底部に、各４ヶ所小円孔が穿たれ、何か底板に底板にかわる施設があったと考えられる。そして第12号の容器の中央よりやや東よりに、滑石製の小玉39点が一ヶ所にまとまって出土した。これらの点から、第12号の場合も、箱形容器を周溝内に置き、その前面で、須恵器坏身、坏蓋セットによる食物の供献が意識的になされたことが判明するのである。そして容器内における小玉の出土状況からみて、何らかの祭具に付属していた可能性が大きく、箱形容器を小児用木棺とする考え方の否定的な資料といえよう。そして第12号の場合には、同じ周溝内において、曲物容器による供献もみられるのである。すなわち、箱形容器の東７mの北東周溝内やや外よりに、長径67.5cm、短径46.5cmの楕円形の曲物容器がすえられ、その中央に、ほぼ実物大の矢形木製品２本が、台状部中央に向けて置かれており、そのまわりに滑石製小玉２点が散在していたのである。そして曲物容器はすでに全形を失い、基底部のみを残すにすぎなかったが、明確な底板はなく、かわって植物性繊維による編物状の痕跡が認められたのである。したがって、第12号の曲物容器も供献祭具の容器として、周溝内に意識的におかれたことが判明するのである。

第12号の場合には、曲物容器に、須恵器による供献はみられなかったが、第５号の東に存在したとみられる第27号で



第51図　　第１号箱形容器供献状況実測図

は、やや不明確ではあるが、認めることができる。上述のように、第27号は、沼沢地との接点に所在したこともあって、平面形ををとらえることはできなかったが、その周溝内とみられる箇所から長径55cm、短径50cmの曲物の出土がありその周囲から、須恵器坏身、坏蓋セットと短脚一段透しの高坏のセットが出土したのである。第27号の場合には、その内部に供献具は認められなかったが、曲物の残りは比較的良好で、一段分は完存していた。

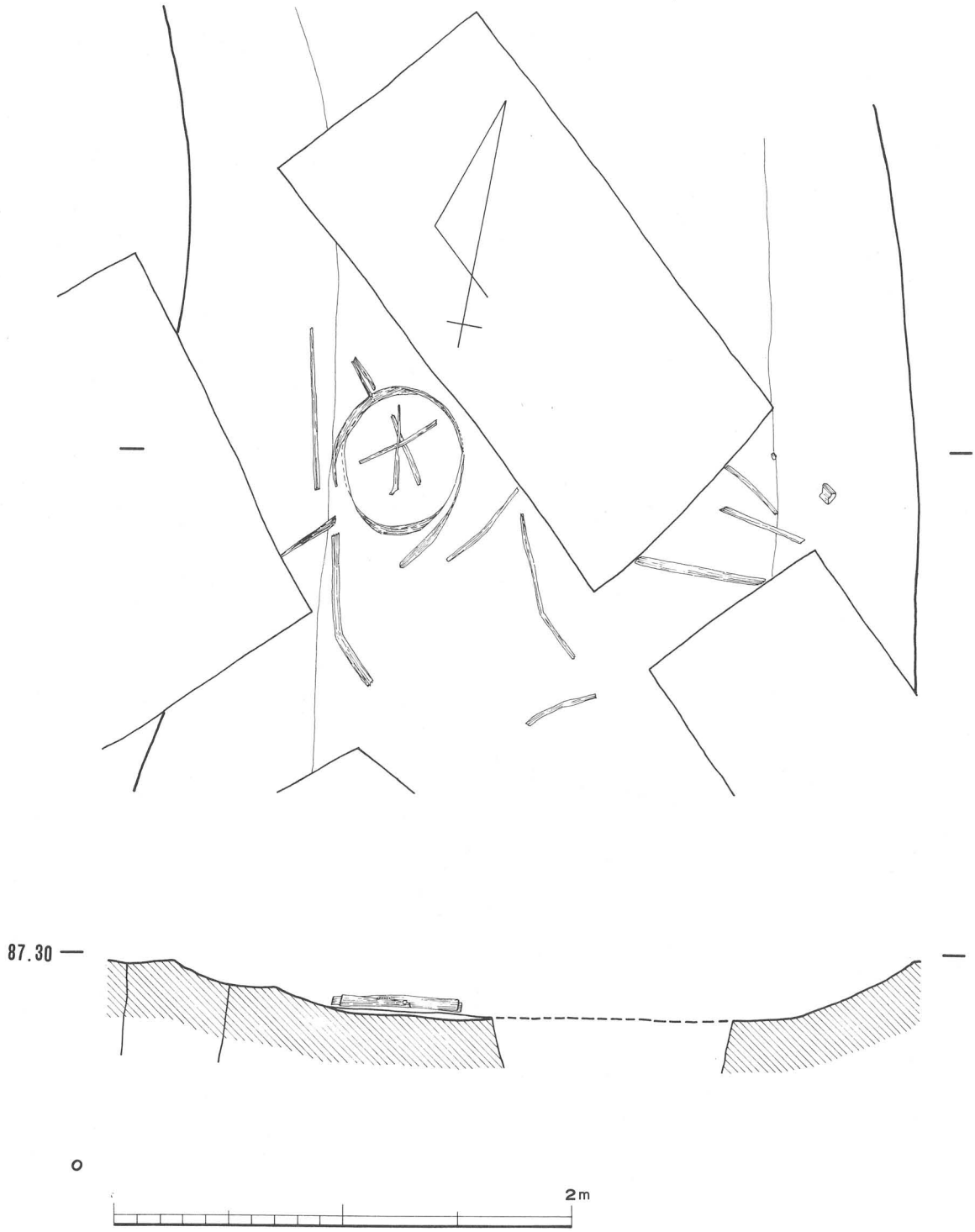
曲物容器による供献は、今一例第10号の西溝内にもみられた。西溝内の中央よりやや台状部よりにおいて、長径65cm、短径52cmの楕円形の曲物で、高さは5.0cmしか残存していなかった。底板、蓋板ともになく、内部に若干の自然木がみられるだけで、顕著な遺物はなかった。ただ曲物の底は、周溝底に着地しており、当初から周溝内に置かれたことは確実と考えられる。

以上の箱形容器、曲物容器による供献に類するものとしては、第５号でみられる板材による供献や、第６号でみられた田舟による供献、第７号、第23号における大甕による供献、そして、かなり一般的にみられる須恵器、土師器の供献がある。

まず第５号の例は、その北溝の北東コーナーよりで、陸橋部に近い場所の中央に、長辺63cm、短辺24cm、厚さ3.5cmの板材が置かれ、その周囲に必ずしも規則的とはいえないが、土師器坏身３点が、正位に置かれていた。板材は表面を平滑にしただけで特に加工はなく、その上や下にも何んら遺物は認められなかった。ただ箱形容器による供献のあり方から、類推するなら、板材の上に何んらかの祭具が載せられ、その廻りで、土師器による食物供献があったと考えることも可能であろう。

第６号では、北溝の外縁に接して、全長1.5m余、幅0.43mの田舟が検出され、その内側の周溝肩部より、滑石製紡錘

第52図　　第12号箱形容器供献状況実測図

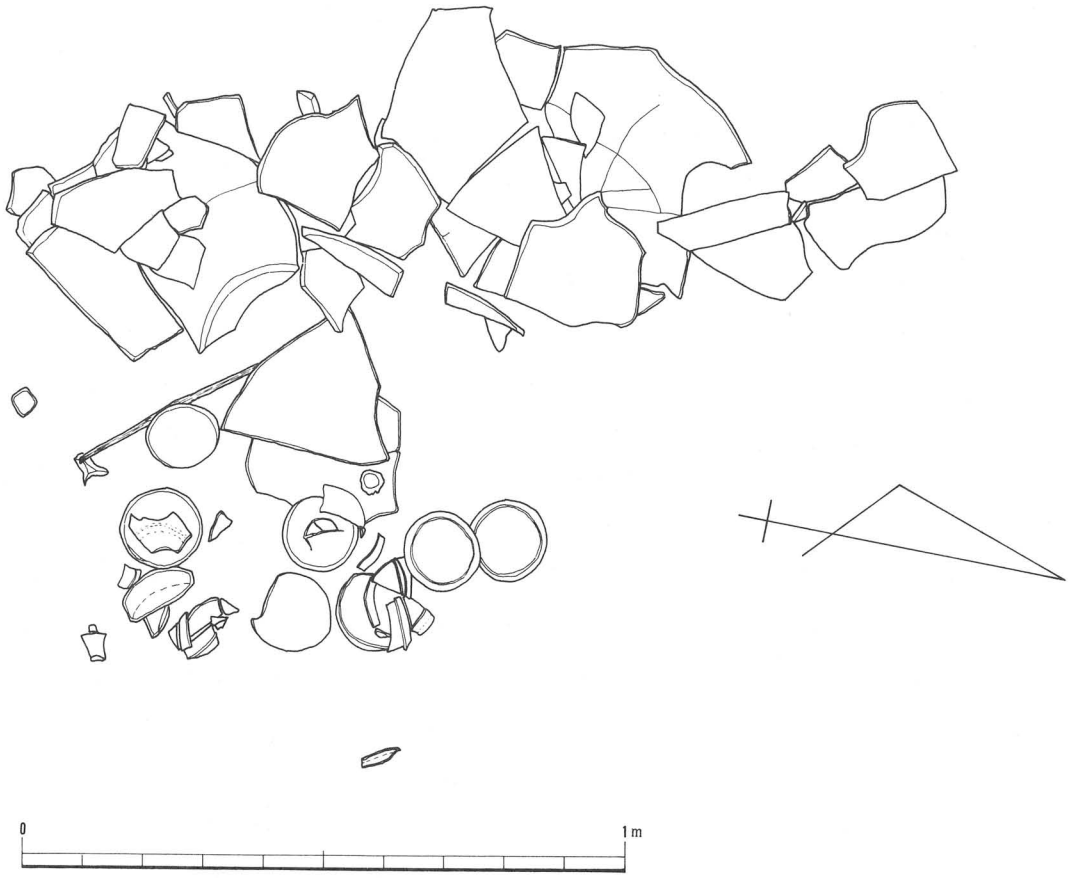


第53図　　第10号東溝曲物容器出土状況実測図

車２点が出土した。周辺には土器等の供献はないが、意識的な儀礼の一形態と考えられる。

第７号の場合は、東溝の中央に須恵器大甕が細かく破砕されてちらばり、その前面、周溝外よりに、須恵器坏身、坏蓋が、或は正立し、或は転倒して、一塊りで出土している。この場合は、当初から溝内に供献されたというより、何んらかの儀礼の後、一括周溝内に投棄されたとも考えられるが、性格的には類似した形態ともいえよう。

須恵器大甕の供献は、第23号で２ヶ所みられる。すなわち、東、北溝のほぼ中央に大甕が正位置で置かれているのである。ただ第23号の場合は、いずれも単独で、その廻りでの供献は全く認められなかった。そして、出土状況からみて、



第54図　　第７号東溝供献状況実測図

当初から周溝内に意識的に埋置されたことは、ほぼ確実と考えられるのである。

第23号例のように須恵器ないし土師器を周溝内に意識的に、単独ないし複数供献された例はかなり多く、第１号東溝における小型甕の供献、第10号北溝における小型甕の供献、さらに、第14号南溝における土師器坏と細頭壺の供献、第18号北溝における坏蓋、坏身の供献などが指摘される。周溝内出土土器の多くは、周溝内外から自然に転落したものや、投棄されたものより、意識的に供献された例がかなり多いと考えられるのである。

次に(2)の例としては、一部の土器類を除けば、木製品にその可能性が大きいと考えられる。木製品の意識的な供献の例としては、さきに第12号の曲物容器についてふれたように、容器中央に置かれていた摸造矢２本が知られるが、同じような例として、第23号周溝東溝より出土した刀形木製品が指摘される。これも、ほぼ実物大の摸造品であって、祭祀に使用された後、意識的に周溝内に投棄されたとみられる。そして、各周溝より出土している農耕具類も、このような例に含まれると考える。第５号の場合は、南溝のほぼ中央に長柄鋤１点が、他の木製品とともに出土しその近辺からは、着柄鋤の柄の部分が出土している。又、第９号の北溝からは、砧２点が、ほぼ近接して出土し、第19号では、西溝から、長柄鋤の完形品１点、柄の部分１点、ナスビ形着柄鋤１点が、周溝内の中央から出土している。第23号の場合も、北溝、東溝から、長柄鋤の完形品２点、ナスビ形着柄鋤１点、田舟１点、把手付四脚槽１点などが、他の木製品とともに出土をみている。24号の場合は、北溝中央から、長柄鋤２点が出土し、第25号の場合も、東溝より、長柄鋤の完形品２点と、ナスビ形着柄鋤１点が、周溝の端に折り重なって検出されている。

以上の農耕具類は、いずれも実物であって鋤の場合は本来U字型の鉄製鋤先がついたとみられ、事実その痕跡も認められるのである。ただ、これらの遺物は、ほとんど使用痕が認められず、未使用のまま供献されたと考えられるのである。すなわち、これらの農耕具は実物ではあるが、本来的に供献用の祭具として製作された可能性が大きいのである。ただその出土状況は、きわめてバラバラで、二次的に移動している可能性が高く、周溝内に意識的に埋置されたものか、

祭具として使用後、周溝内に投棄されたかについて定かではないのである。

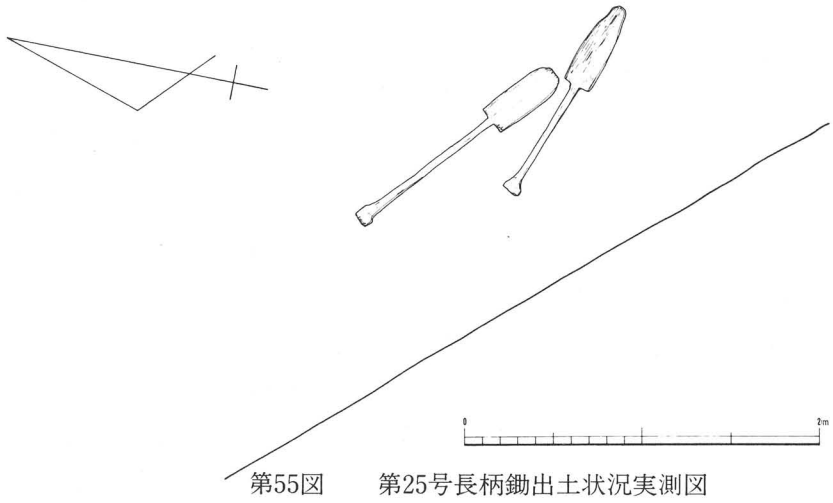
そこで次に、(3)とした、マウンドや周溝周辺に供献され、後に周溝内に転落したとみられる例としては、第４号、第５号、第17号などにみられた建材、第17号で発見された「やまと琴」、第19号で出土した「琵琶形木製品」、第19号、第23号で出土した埴輪類などを指摘できる。そして、さきに指摘した23号出土の大刀形木製品も、この例に含まれる可能性もある。

まず建材類については、第４号にみられる全長４m以上で枘をあけたものや、第17号で出土した組物状の建材などが主要なもので、本来の形態を複元できるものはほとんどない。ただいずれの場合も、意識的に埋置されたというより、周溝の囲りよりズリ落ちた状況を示している。第17号の組物の場合は、本来マウンド上か、周溝の上に置かれていたものが、周溝の内側よりズリ落ちた可能性が大きいと考えられるのである。これと同様に、この組物に引っかかるような状態で検出された「やまと琴」も、マウンド上から転落したと考えられる。すなわち「やまと琴」は、南溝のほぼ中央、組物の東端に、台状部からズリ落ち引っかかった状態で検出され、竜頭を下に竜尾をマウンド側にして、逆転した状態で検出されたため、竜尾の保存状態が良好ではなかったのである。そして、琴面の下から琴柱４点が出土したことから、周溝内に転落する段階でも、琴糸、琴柱が着装され、演奏可能な状態にあったことが知られるのである。

第19号から出土した「琵琶形木製品」の場合は、必ずしもその出土状況からうかがうことはできないが、周溝のかなり上層で浮いた状態で検出されており、周溝がかなり埋没してから転落したことが推定される。このことは、第19号、第23号からのみ出土した埴輪類にも該当すると考える。すなわち、いずれの場合も、周溝内から出土した埴輪は、そのほとんどが破片で、完形をとどめるものはなく、舟形や家形とみられる形象埴輪も、部分的な破片ばかりであった。そして、その出土状態も、周溝の下層から出土するものだけでなく、かなり上層から出土するものも多く、周溝の内外や、マウンド上から、かなり長期間に順次転落した可能性が考えられる。

最後に、(4)の埋没後流入ないし投棄されたとみられるものは、各周溝から若干出土をみた自然木を上げることができる。ただ第23号のように、周溝の内側肩部に、等間隔に切株が検出され、植林の推定されるものもあるから、周溝内に自然木が流入する可能性は、かなりあったとみられる。ただ、周溝内から時期の異なる土器や木器の出土は皆無であるから周溝の埋没は、意外に早かったと考えられるのである。

以上、周溝内における供献の諸形態について、やや詳しくみてきた。そして、それらが多様なあり方を示しつつも、共通した性格をもつことも明らかになってきた。それでは、かかる供献のあり方は、どのような儀礼の実態、性格を示すものなのか、或は、供献の多様性がどのような性格を示すものかというところへ、論点は波及するが、その点の検討



第55図　　第25号長柄鋤出土状況実測図

に移る前に、出土した土器、埴輪を検討して、個々の遺構の時期について改めて考えておきたい。

D．出土遺物の年代

上述のとおり、周溝内より出土した遺物は多様な内容をもっているが、ここでは主として、資料的に豊富な土器、埴輪の時期を検討することにしたい。

(1)円筒埴輪

成形の特徴

成形に関しては、幾内に一般的な技法を用いており、改めて記述するまでもないが、幅４～５cm程の粘土帯で基部を作り、さらにその上に２～３cmの粘土帯を積み上げていくもので、その際、内面をナナメ方向にナデ下ろし、粘土紐接合面は、内面に低く、外面に高くなっている。当遺跡出土の円筒埴輪は、すべて粘土紐接合痕が明瞭に残存しており、粗い成形である。しかし全形のわかるものは皆無であるため、何回かの小工程を経て全体を成形するものか、いっきに粘土帯を積み上げて、成形するものかは、明らかでない。

調整の特徴

検出されたものは、大半が小破片であり全形を知り得るものはないが、比較的遺存状態も良く、その調整等を、観察することができる。破片は、胴部片の他、口縁部片が多く、一応、調整の手法については、口縁部片を基に分類を行なった。

まず、外面の調整については、Ⅰ～Ⅲ類に分類することができる。Ⅰ類は、一次調整をタテハケ、二次調整に連続ヨコハケ（B種ヨコハケ）を施すもの。Ⅱ類は、一次調整にタテハケ、二次調整にヨコハケ（C種ヨコハケ）を施すもの。[注⑫] Ⅲ類は、一次調整にタテハケを施すが、二次調整は、やや消滅傾向にあり、口縁部上方に浅いヨコハケ一帯を廻らして端部付近のヨコナデの幅が広くなる。内面調整はａ～ｃ類に分類される。ａ類は、オサエ、ナデ後、器体上半から口縁部付近までにナナメハケを施すもの、ｂ類は、口縁部付近にヨコハケを施すもので、ａ類よりは、浅く整っているものである。又、ｃ類は、１点（H156）のみであるが、内面全体に細かいナナメハケが認められ、後、まばらなナデを行なうものである。

Ⅰ類（H086・H088・H113・H116・H114・H092・H143）

外面にはタテ又は、やや右下がりの粗いハケ調整を施し、連続ヨコハケ（B種）の二次調整を行なうものであるが、各段の$^{2}/_{3}$近くに及ぶものが多い。しかし、止めた際の工具痕の縦線が明瞭に観察できるものと、その痕跡がやや不鮮明に崩れたもの（H088～H086）がある。

内面は、ａ類が多く、ナナメ方向の粗いハケ調整を施すものである。全形は確認できないが、口縁部、又は底部付近にのみハケメが施されているようである。胴部についてはオサエ・ナデの可能性が強い。

Ⅱ類（H097・H098・H090）

粗いタテハケの一次調整後、ヨコハケ（C種ヨコハケ）を施すものである。H098は、口縁部上方に、ヨコハケ（幅1.2cm 6条/1cm）を施すが、さらに端部付近にヨコナデを施すものである。内面は、オサエ、ナデ後口縁部上方にヨコハケを施す。H090は、口縁部が、磨滅しており不明であるが、胴部には、タテハケ後、やや不揃いのヨコハケが廻る。内面は、ナデ・オサエを行なう。

第　1　表

番号	部位	外面				内面				タガ		
		一次		二次		一次			二次	高	巾	形態
		タテ	ナナメ	ヨコ	ヨコナデ	ナナメ	ヨコ	タテ	ナデ	(cm)	(cm)	
H086	口縁部	○		○（上、下）	○	○	○			0.8	2.1	変台形
H113	口縁部		○	○（上、下）	○	○				0.7	2.1	台形（凹）
H087	上半	○		○（浅く1帯）		○				0.7	2.1	変台形
H088	下半	○		○（上⅔）		○			○	0.7	2.1	変台形
H089	上半	○			○(口縁)	○		○	ヨコナデ（口縁）	0.9	2.6	変台形一部三角形
H090	上半	○		○（上、下）			○（口縁）		ヨコナデ（口縁）	1.0	2.9	台形
H092	上半	○		ヨコ（連）		○（口縁）				0.6	1.8	台形（凹）
H093	口縁	×		×			○（右下）			×	×	×
H094	底部	○		○					○	×	×	×
H095	底部	×		×					○	×	×	×
H096	体部	○							○	0.8	2.0	変台形
H097	体部	○		○			○			0.8	2.5	変台形
H098	口縁	○		○（½）			○		○	×	2.1	変台形
H099	口縁部	○			○		○		○	×	×	×
H100	口縁部				○	○				×	×	×
H101	口縁部				○				○（ヨコ）	×	×	×
H102	口縁部	×	×		○	○				×	×	×
H103	口縁部	○		○（1帯）			○（右下）			×	×	×
H104	口縁部	×	×	×	×		○			×	×	×
H105	体部	○					○			0.6	1.5	変台形
H106	体部	×	×	×	×				○（タテ）	×	2.4	× 三角形
H107	口縁部	○			○（上）		○			×	×	×
H108	口縁部	○			○（上）		○（右下）			×	×	×
H109	口縁部	○		○		×	×	×	×	×	×	×
H110	体部	×	×	×	×				○	×	1.5	×
H112	体部	×	×	×	×	×	×	×	×	0.7	2.1	台形
H114	体部		○	○ 連続					○（タテ）	0.7	2.1	台形
H115	口縁部	×	×	×	×		○		○	×	×	×
H116	体部			○ 連続					○	0.8	1.5	台形
H117	体部	○	○				○		○	×	2.7	×
H141					○	○			○	0.8	1.8	台形（凹）
H143				○ 連続					○	0.4	1.5	台形（凹）
H144	底部	○							○	×	×	×
H157	底部	○			○		○		○	×	×	×
H156	体部	○		○		○			○	1.4	2.0	台形

III類（H087・H089・H107・H103・H108）

一次調整のタテハケ後口縁部上方に浅いヨコハケを施し、さらにヨコハケを行なうもので、ヨコハケを消去するものもある。I・II類と比較すると二次調整の簡略化が著しく胴部においては二次調整は、ほとんどが欠如しており（H096・H105・H117）、やや新しい様相を呈するか。内面はb類で、さらにハケメは浅くなり、口縁部又は、口縁部上方にヨコハケがみられる。胴部は、オサエ、またはタテナデを行なう。H089は、さらにヨコナデを施すか。H144は、底部片であり、浅い、細目のタテハケを施し、下端部外面にはヨコハケ一帯が認められる。H157（参考資料）は、外面が磨滅しているが、浅いタテハケが確認される。これは、須恵質で赤褐色を呈するもので、胎土も緻密である。内面は、ナデ下ろし。

H156（参考資料）の外面は、II類、一次調整の細かいタテハケ後ヨコハケ（A種）の二次調整を施すものである。ハケ原体は、細目のもので幅1.5cm、10条/1cmのものである。ヨコハケは、ほぼ1cm程の間隔をあけて施されており、器体外面全体に施されるものと思われる。内面は、第19号出土のものに比べて丁寧な作りのもので粘土紐接合痕は認められない。内面全体に、細かいヨコ・ナナメハケを施し、ナデを行なっている（C種）。

底部調整

底部片はH061・H088・H094・H095・H156・H144・H157と少ないが、その中でも調整を観察し得るものはH088・H156・H144と極めて限定される。成形の技法については、明確にし難かったが、H088は、自重のため底部が歪んで、内面への粘土のはみ出しが大きいもので一気に連続して粘土帯を積み上げた結果とも解し得る。注⑬ 内外面下端部には、指オサエ、底外面はヘラナデ、又は指ナデを施すものである。また、底部外面の一次調整タテハケは、下端部には及ばない。他は、下端部が、やや外反するものであるが、内面に拇指を他指を外面にあててオサエによる調整を行なう。さらに外面下端部にヨコハケ1帯を施すものもある（H144・H156）。底外面は、ヘラナデ、指ナデによるが、ハケメを有するものもある（H156）。又、底外面に、藁状の圧痕を残すものがある（H088・H144）。

タガ及び貼り付け部分の調整

タガの貼り付けは、ヨコナデによるが、その際、布裂などを指に添えたと思われ、布目の圧痕がみられるものが多い。タガは、一次調整後に貼り付けが行なわれており、タガの剝離部分では、一次調整のタテハケが認められる。また、上、外面のみヨコナデを施し、下面未調整のものもある（H096）。

I・II類における二次調整は、タガ貼り付け後、約1cm間をあけて施される。またIII類では、タガ貼り付け後、局部的に再度タテハケを施すものもある（H087・H089）。

スカシ孔

孔の形状は、円形が主であるが、一点のみ方形を有するものがある（H156）。円形スカシは、直径6.5cm前後のものである。一般的には、スカシ孔は、二・三段目の各段に2孔、相対位置にあり、各段の2孔を結ぶ線は、直交する位置にある。当遺構で検出された埴輪はいずれも、中間段の大半を欠失しているが、やはり、一般的な形態をとると考えられる。

胎土・色調・焼成

胎土は、粗く、一様に石粒を含んでいる。また、H156以外は、すべて無黒班で、淡褐色を呈するが、やや軟質のもの

が多く、断面は灰黒色である。H157（参考資料）のみ、須恵器に近い、赤褐色を呈する。H156には、わずかに部分的に黒班がみられるが、それを、焼成法のちがいと解するかは不明である。又、朱塗のものが１点存する（H097）。

形態的特徴

先述したように破片が多く図上復元し得るものはないが、比較的に口縁部の遺存数が多い。口縁部径はH085が30.2cmと最も大きく、他は、25cm前後、口縁部の形態は、端部でやや外反するものと、まず端面、内外面をヨコナデするため、端面が浅く窪む二種類があるが、先に分類した外面調整Ⅰ～Ⅲ類がいずれにも存在しており、時期差によるものとは認められない。また胴部径と口縁部径にみえる外反の度合は、H086以外は至って小さく、口縁部から底部に向かって徐々に細くなっていくものである。

タガの形態は、高いものもあるが（H156）、一般に低く、断面が正台形、低いM字形（H143）、三角形等の他、大半が、上端を高く、下端が低い変台形を有するものである。H089は、断面三角形と変台形の両者を有するものである。大半は、タガは粗雑であり、波を打ってめぐるものが多い。

まとめ

近年、円筒埴輪については、古墳等の時期決定を成し得る重要な一資料として、更めて注目されてきている。又、ここ数年来の資料の増加に伴い、円筒埴輪の研究は、大きな進展をみせ、諸氏による編年的位置づけが試みられるまでに至った。特に、川西宏幸氏は、その形態・調整・成形技法等に詳細な分析・検討を加えられ、各地の円筒埴輪についての編年を呈示された。いうまでもなく、以後、特に畿内においては、氏の見解に大きく負うところであり、細部についての異論はなされても、その大綱は順守されていると言っても過言ではなかろう。

今回出土した円筒埴輪は、破片が多く全容は復元できなかったが、口径25cm前後のものが多く、器高50～40cm前後と推測される。高月町涌出山古墳出土の円筒埴輪は、口径の平均値30cm前後、器高（図上復元）52.5cmと計測されるものである。又、本遺跡例は、胴部径と口縁部径との差が、１cm前後と小さく、ほぼ寸胴に近い形態をとる。これらを考慮するなら、本遺跡例は、涌出山古墳のものよりはやや小型であり、時期的には、後出のものと考えられるのである。

調整については、先に外面Ⅰ～Ⅲ類、内面ａ～ｃ類に分類した。外面Ⅰ類は、一次調整後Ｂ種ヨコハケを施すものであるが、ハケ原体は、目の粗い5～6条/1cmのものが使用される。又、器壁は、1.5cm前後と分厚いものである。これは、川西編年「Ⅵ期」の新しい段階に相当するが、県内でこの時期に比定されているものは涌出山古墳、野洲町夕日ヶ丘北遺跡等である。[注⑲] 涌出山古墳出土の円筒埴輪は、外面指ナデ＋Ｂ種ヨコハケ、内面ナデ調整を施すものであるが、その調整法は、県内では、あまり出土が知られておらず、むしろ八尾市東弓削遺跡[注⑳]、東大阪市瓜生堂上層遺跡[注㉑]等に類例が認められる特徴的なものである。したがって当遺跡Ⅰ類にみられるＢ種ヨコハケは、4.5cm間隔に規則的に縦線が認められるもの（H113・H092・H116・H114・H143）と、不規則に崩れたもの（H086・H088）がみられ、「Ⅵ期」の新しい時期に位置づけられるものと考える。

Ⅱ類は、一次調整後、二次調整ヨコハケ（Ａ・Ｃ種）を施すものであるが、Ⅰ種と同様にハケメは、5～6条/1cmと粗い、破片のため、Ａ種かＣ種かは判断できないが、非常に雑な施し方をしているものである。Ⅰ・Ⅱ類ともタガは、低い台形、又は変台形の形態をとる。又、器壁は、1.5cm前後とやや分厚いものが多い。

Ⅲ類は、一次調整にタテハケを行なうが、二次調整は省略が著しく、浅いヨコハケを１帯口縁部に廻らせるもので、さらに端部付近には幅広くヨコナデが施される。H088、H089は、タテハケ一次調整後タガを貼り付けるが、さらに部分的に上→下にタテハケを重ねる。内面は、口縁部付近ナデ後浅いヨコハケを施す。しかし、Ⅰ・Ⅱ類と比較すると、

ハケメは、細目で浅くなるようである。

以上のように当遺跡出土の円筒埴輪は、概して大きな時期差を示すものではなく、古墳時代中期末～後期初頭に位置づけられるものであり、川西編年「VI期」の新しい段階を主体としており、III類のもので一部「V期」に下るものであると考えられる。

なお、本遺跡の円筒埴輪にも線刻するものが多数発見されている。ただその大部分は、断片であって、全形の窺えるものは少ない。その中で、H088には、中段の円孔の近くに鹿とみられる動物の線刻が認められる。

形象埴輪

形象埴輪は、いずれも小破片で、その形態を明らかにするまでには至らなかったものもあるが、大半は家形埴輪の一部と推測される。中でもH133は、磨滅が著しいが、鰹木の一部と思われ、直径4.8cm（図上復元）を測るものである。他には、底部、壁部、屋根の一部等が出土している。大部分のものは、線刻を有しているが、破片の為、いかなる部位にあたるのかは不明である。H138は、屋根の一部で、網代様の線刻を有し、朱塗の痕跡をとどめている。最近の調査では、高月町涌出山古墳、長浜市越前塚古墳[注㉒]、近江町狐塚古墳、近江八幡市供養塚古墳等[注㉓]において、家形埴輪の出土が知られており、いずれも、古墳時代中期末、五世紀末に比定されている。

H123・H129・H130は、馬形埴輪の脚部の一部とみられるもので、直径7.0cm（図上復元）を測る筒状を呈する。県下では、野洲町久野部遺跡等地区において[注㉔]古墳周溝より馬形埴輪の頭部が出土している。時期的にも古墳時代中期末～後期とされるものである。

(3) 土器

供献土器としては、須恵器・土師器の両者が認められた。須恵器には、坏蓋・坏身が数量的に最も多く出土しており、他に高坏・瑞・壺・甕が若干みられる。土師器は、坏・壺がある。

須恵器

坏蓋　つまみを持たないものA、持つものBに分類される。

坏蓋A　口径10cm～13cm前後と比較的小型のものであるが、形態によりA_1、A_2、A_3に分類し得るものである。

坏蓋A_1（C001、C011、C013、C015、C083、C021、C059）

稜は、短いが、鋭い断面三角形を呈し、天井部は、低く平らに近いものである。口縁部は、垂直又は、やや外反気味に下方にのび、端部は、平坦な凹面を成すものと、内傾する浅い凹面を呈するものがある。天井部の$^2/_3$前後に回転ヘラ削り調整がみられ、天井部内面中央には、仕上げナデが認められる。

安曇川町南市東遺跡SD1103出土の蓋類に類似しており[注㉕]、陶邑のI型式の3・4段階に相当するものと思われるが[注㉖]、天井部は、やや丸味を呈し、端部には、内傾する段が認められるものが多いことなどから、I型式の4段階の範疇に入るものと考える。

坏蓋A_2（C001、C047、C063、C073、C075）

天井部は、丸味を有しており全体に丸い感じを与える。口縁部は、垂直又は、外反気味に下方にのび、端部は、内傾する浅い凹面を呈する。坏蓋A_1に比べ、端部は、より明瞭な段を成すものである。稜は、短く丸味を有し、天井部の$^1/_2$

前後に回転ヘラ削り調整がみられ、天井部内面中央に仕上げナデが認められる。守山市吉身南遺跡[注㉗]、余呉町鉛練古墳等[注㉘]出土の坏蓋類に類似しており、陶邑Ⅰ型式の5段階に相当するものである。坏蓋A類の中では、数量的に最も多い。

坏蓋A_3（C036、C038、C039、C042、C071）

口径13cm前後とA類では、比較的口径が大きいものである。C036、C038、C039は、天井部が低くやや丸味を有し、稜は、短く鈍い。口縁部は外反気味に下方にのび、端部は内傾する面を成す。天井部の$^1/_2$～$^1/_3$前後に回転ヘラ削り調整がみられる。また、C071、C042は、口径12.2cmをはかるもので、天井部は丸味を有し、口縁部は垂直に下方にのび、端部は、内傾する浅い凹面を呈する。天井部の$^4/_5$～$^1/_2$前後に幅広の回転ヘラ削り調整がみられる。天井部内面中央には、円弧叩きが認められるものである。いずれもⅡ型式の1段階に相当すると考えられる。

坏蓋B（C020、C044、C057、C060）

天井部中央に基部の太い扁平なつまみを有するもので、つまみ中央は、凹状をなすものとやや凸状をなすものがある。小型の有蓋高坏の蓋の可能性があるが、C059のみ、高坏とセットになるものである。

C020は、器高6.0cm、口径12.8cm、つまみ高1.1cm、つまみ径2.9cmをはかる。天井部は、丸味を有しており、口縁部は、外反気味に下方にのび、端部は、内傾する浅い凹面を呈する。稜は、短く、断面三角形を成す。C044、C060は、形態的に良く近似したものであるが、C020に比べて、天井部は低く、稜は鈍い。つまみ径は3.1～3.2cmと扁平なものがある。

C020は、坏身A_1類と共伴することから陶邑Ⅰ型式の4段階に相当するものと考えられる。また、C044、C060は、坏蓋、坏身A_2類と共伴しており、長浜市越前塚古墳出土のものと類似する。[注㉙]

C057は、口縁部が外反して開き、端部は丸味のある面をなす。天井部は、丸味を有し中央には、高く凸状を呈するつまみを付すものである。県内では、類例が認められないものであるが、陶邑Ⅰ型式の古い段階に、同種の蓋がみられることから、C057は、その系譜上に位置づけられると考える。他の遺物との共伴関係よりⅠ型式の5段階に相当するか。

坏身

形態によりA_1、A_2、A_3に分類し得る。

坏身A_1（C003、C009、C010、C012、C014、C016、C017、C021）

蓋A_1類との共伴が認められる、口径11cm前後、器高4.5cm前後（C003は5.0cm）のものである。立ち上がりは、直上又は内傾気味にのび、端部は、内傾する浅い凹面を呈するが、未だ、明瞭な段を成さないものもある（C003、C009、C021）受部は、外方又は、外上方に長くのび、端部を丸く収める。底部は、平らに近いもの、やや丸味を有するものがある。底部の$^2/_3$前後に回転ヘラ削り調整が認められ、内面中央に仕上げナデがみられる。蓋A_1類との共伴より、Ⅰ型式の4段階に相当するものである。

坏身A_2（C002、C065、C067、C070）

口径10cm～11cm前後と小型のものである。底部は、丸味を有しやや深い。立ち上がりは、内傾してのび、端部は、内傾する浅い凹面を呈し、明瞭な段を成すものである。受部は、外方又は外上方にのび、端部を丸く収める。底部の$^2/_3$～$^1/_2$前後に回転ヘラ削り調整がみられ、余呉町鉛練古墳、守山市吉身南遺跡等出土[注㉚]の坏身に類似しており、蓋A_2類との共伴よりⅠ型式の5段階に位置づけられるものである。

坏身A_3（C037、C050、C058、C151）

口径11cm～12cm前後で、底部は、浅くやや平らに近い。立ち上がりは、内傾してのび端部を丸く収め、受部は、短く丸味を有する。底部の$^1/_2$以下に回転ヘラ削り調整がみられる。又、C072底部内面中央には、円弧叩きが認められる。県内では、守山市吉身南遺跡[注31]、湖北町四郷崎古墳[注32]、米原町入江内湖遺跡出土[注33]のものに類似しており、蓋A_3類との共伴より、II型式のI段階に相当するものである。

高坏（C147、C054、C060）

短脚一段スカシの脚部を有するもの。C147は、坏部を欠失しているが、坏底部より短く外湾してのびる脚部で、端部は、内傾する浅い凹面を呈し、外側に稜を成す。3方に円形スカシを有する。

C060の坏部は、立ち上がりが内傾してのび端部を丸く収める。底部は、やや平らに近く外面約$^2/_3$に回転ヘラ削り調整がみられる。脚部は、基部より外上方にのび、裾部上、下端を拡張する。四方に台形スカシを有する。

また、C148は、坏底部のみ残存するものであるが、脚部貼り付け位置に、ヘラ状工具により同心円、斜格子等を刻むもので、底部と脚部との接合を容易にする為であろう。

C147は、その出土状況より、遺構に伴うかは、やや疑問であるが、長浜市越前塚古墳より、C147、C148と同種の高坏が共伴して出土しており[注34]、共にI型式5段階に位置づけられると考える。

瑕（C080、C055）

2個体の出土が知られる。C080は肩の張る球状の体部に口頸部が外湾して開き、中位でやや段を成して内湾気味にのびるもので、端部は、内傾する凹面を成す。口頸部中位には、断面三角形の細い凸線を廻らせ、上・下に櫛描波状文を施す。また、体部中位には、沈線各2条を廻らせ、その間に波状文を施す。体部中央には円孔を穿つ。陶邑のI型式の4段階のものに類似する。

C055は、体部が、中位上方で強く張る偏球状を呈し、底部は、C080よりやや尖り気味のもの。口頸部は、外湾して開き、中位で段を成して内湾気味にのびる。端部は、内傾する面を成す。頸部、体部中位には、雑な波状文が各1条廻るが、C080に比べ、文様帯の省略がみられる。I型式の5段階の高坏と共伴する。

壺（C018、C027、C028、C056）

小型壺4個体が出土しているが、各々形態を異にするものである。

C018は、球状の体部に外湾してのびる口頸部を有し、端部は外傾する。体部外面回転カキ目調整、底部ハケ調整後静止ヘラ削りを施す。

C027は、肩の張る球状の体部に、外反して開く口頸部を有する。端部は丸く収める。口頸部中位には、低い凸線2条を廻らし、波状文1帯を施す。体部上半に回転カキ目調整。県内では、黒田永山4号墳第2主体部[注35]、米原町磯入江内湖遺跡等[注36]より、出土が知られており、各々形態的に近似したものであるが、C027は、黒田永山4号墳第2主体部出土の壺よりは、文様帯の退化が認められ、より後出のものと考えられる。

C028は、短頸壺で、肩の張る球状の体部に短く外湾する口頸部を有するものである。体部外面は、平行叩き後上半にスリケシナデを施し、肩部には太い沈線を2条廻らし、その間に波状文を施す。C027と共に第13号より出土しているものであるが、坏蓋、坏身A_2類との共伴が認められる。

C056は、球状の体部に短く外反する口頸部を有する短頸壺である。内外面共指頭圧痕が多くみられ、体部外面には、

ハケ目が施されている。他に類例を求められないものであるが、共伴遺物よりⅠ型式の5段階に比定し得るであろう。

甕

甕も比較的多く出土しており、大、中、小の三者が存在する。

大型甕（C149、C153）

C153は、口径41.0cm、器高70.0cm、C149は、口頸部を欠損しているが現存高77.0cmをはかる大型の甕である。いずれも体部は長胴形を呈しており、自重により底部に歪が生じている。C153は、口頸部が外湾して大きく開き、端部を上方に拡張する。口頸部内外面共回転ナデ調整。体部外面には、乱雑に重なり合う平行叩きがみられ、内面ナデを施すものである。C149は、体部外面格子様叩き、内面ナデを施す。両者共に、頸部内面に粘土の補強が認められる。

中型甕（C084、C040）

C084は、口径22.0cm、器高35.7cmをはかり、長胴形の体部に、口頸部は、短く外湾して開き、端部を上方に拡張するものである。またC040は、口径21.3cm、器高41.7cmをはかり、長胴形の体部を有し、口頸部は短く外湾して開き、端部は、外下方にやや曲折する。いずれも体部外面には、不整方向の平行叩きを施すが、C084はさらに回転カキ目調整を加え、内面は、円弧叩き後、半スリケシナデを施すものである。C040の内面には、叩きの痕跡はみられず、全面ナデを行うものである。また両者とも口頸部内外面回転ナデ調整を行うが、C084には、頸部の¼周に波状文がみられる。他に、口縁部破片（C145、C154、C155）が出土しているが、その形状は明らかでない。

小型甕（C004、C066、C146、C022、C023、C049、C091）

口径15cm～19cm前後、器高20cm～25cm前後のもので、口頸部片1点（C146）とほぼ完形をとどめるもの6点が出土している。体部は、やや肩の張るものもあるが(C066、C023)、大半は肩がなだらかに流れる球形を呈する。しかし、端部の形態においては、各々に違いがみられ、又、体部外面には、一様に平行叩き調整が施されるものの、二次調整において半スリケシ調整、回転カキ目調整等手法上の相異が認められるものである。そこで、やや便宜的ではあるが、端部の形態を大別し、端部付近に凸線がみられるものをA、凸線がみられないものをB類とした。

小型甕A（C004、C146）

口頸部は、大きく外湾してのび、端部付近で、さらに外方に屈曲し、上・下端をわずかに拡張する。屈曲点外面付近には、断面三角形の細い凸線を廻らしており、外端面は、凹面を呈する。C004は、凸線下方に、雑な波状文一帯を廻らすが、C146は、頸部中位に凸線を廻らし、上･下に波状文を施した文様帯を有する。体部は、球形を呈し、外面には不整方向の平行叩き後、回転カキ目調整を施す。内面にナデ、上半部に指頭圧痕が認められる。C004は、坏身A_1、坏蓋、坏身A_2類と共伴しており、陶邑Ⅰ型式の4・5段階に比定し得る。C146は、坏蓋、坏身A_1類と共伴するもので、陶邑Ⅰ型式の4段階に相当する。

小型甕B（C066、C022、C023、C049、C091）

形態的には、A類と大差のないものであるが、端部の屈曲は弱く、端部付近に凸線がみられないものである。また、頸部中位には、細い凸線を廻らすもの（C066、C091）と凹線を廻らすもの（C022）、全たくみられないもの（C049）等がある。口頸部外面には、凸線又は、凹線を界して二帯の波状文がみられるが、C049は、波状文一帯を頸$^1/_4$周に廻ら

せる。体部外面は、平行叩き後スリケシナデを施すものと（C066、C022、C023)、回転カキ目調整を施すもの（C049、C091)がある。体部内面は、スリケシナデにより丁寧に仕上げられるものが多いが、C091は、同心円叩き後、半スリケシナデを施す。C023は、口縁部を欠失しており、その形状は、明らかではないが、頸部に2条の細い凸線を廻らし、波状文を施す。体部は肩の強く張る球形を呈し、外面調整は、平行叩き後、半スリケシナデ、肩部には、上・下各2条の沈線間に波状文を廻らした文様帯を有するものである。C022と共に第10号より出土しているが、その形態及び調整等に著しい違いが認められる。ただいずれも体部外面にスリケシ、半スリケシ調整を施し丁寧に仕上げられているものである。他の器種の共伴が認められないものがあるが、Ⅰ型式の4乃至5段階の範疇に入るものと考える。

土師器

坏（H005～H007、H031～H033、H081）

坏は、すべて体部、口縁部が内湾してのびる半球状を呈するもので、口径12cm～13cm、器高4.5cm前後と前後と規格化されたものである。内外面共ナデ、指押えによる。

安曇川町南市東遺跡溝SD1103上層より、鉄刀、須恵器9点、土師器8点が一括出土しているが、須恵器坏蓋、坏身類は、当遺跡出土のものに類似するものである。土師器坏は1点であるが、口径10.8cm、器高4.2cmをはかる。やや小型のもので、本遺跡例に類似している。また、守山市吉身南遺跡住居跡にも同種のものがみられるが、Ⅱ型式以降の須恵器坏身を共伴するものである。[注㊲]

壺

形態より、A、Bの2類に分類し得る。

壺A（H082）　口径8.7cm、器高13.3cmをはかる小型の壺で、球形の体部に受口状口縁を有するものである。口縁部内外面共横ナデ調整、肩部には、横方向のヘラミガキを施し、体部下半は、ハケ調整後ナデを行う。体部内面上半ナデ、下半にヘラ削りが認められる。

壺B（H008、H019、H029、H034、H035、H085）　口径8.6cm～9.8cm、器高13.7cm～15.2cmをはかり、偏球状の体部に、外反（H008、H009、H029、H035）又は、外湾（H034、H085）してのびる口頸部を有し、端部を丸く収める。口頸部内外面共横ナデ調整、体部外面にはヘラミガキの痕跡が認められるものもあるが、内外面共ナデ及び指押えによる。C019、C029、C035は、Ⅰ型式の5段階の須恵器との共伴がみられるものであるが、他についても形態、調整等類似するものであり、時期的には、大差のないものであろう。

まとめ

以上、出土した須恵器、土師器の形態分類と時期の検討を行なった。そこで次に、大半の遺構より出土した坏蓋、坏身類によって、各遺構の時期を推定しておきたい。

Ⅰ期　陶邑Ⅰ型式の4段階に相当する。坏蓋A_1、坏身A_1を主体とするもの。

第7号、第10号。

Ⅱ期　陶邑Ⅰ型式の5段階に相当する。坏蓋A_2、坏身A_2を主体とするもの。

第1号、〔第9号〕、第12号、第13号、第20号、第23号、第27号、（このうち、第12号は、Ⅰ型式の4段階に相当するものを若干含み、やや古相を示し、第9号からは、坏身、坏蓋類の出土はなかったが、甕、高

坏等よりII期に含めた)。

III期　陶邑II型式の1段階に相当する。坏蓋A_3、坏身A_3を主体とするもの。

第16号、第18号、第21号、第24号、(このうち、第18号には、I型式の5段階のものを一部含む)

これらによって、服部遺跡の周溝状遺構は、II期(六世紀の第1四半期に該当する)を中心に、それを前後する、かなり限定された時期に、継起的に築造されたとみられる。

E. 遺跡の性格と意義

以上の検討によって、服部遺跡の周溝状遺構とそれをめぐる儀礼の実態が、より明らかになったと考える。そこで次に、かかる遺跡の性格と意義について、論究をすすめたいが、その前に、これまでの検討によって、明らかになった点をまとめておきたい。

(1) 遺構は、その形態や分布、或は方位などによって、6ないし7つのグループに分類できる。

(2) 周溝内における供献は、多様なあり方を示すが、そこには、共通した側面も色濃くもっている。

(3) 周溝状遺構の築造時期については、出土した土器、埴輪から、六世紀の第1四半期を前後する、きわめて限られた年代を求めることができる。

さて、このように、周溝状遺構とそれをめぐる儀礼の実態が考えられるなら、これらの遺構群が、六世紀の第1四半期を前後する、きわめて限られた時期に形成、解体し、そこに多様な儀礼を、その周溝内に密封していたことになるのであるが、そこでまず問題となるのは、遺構にみとめられた6ないし7のグループと供献儀礼の諸形態の関連性であろう。すなわち、上述の通り、土器供献においては、遺構によって、須恵器のみを供献するもの、土師器のみを供献するもの、両者を供献するもの、全く供献しないものなどがあるし、木製品についても、農耕具を供献するもの、しないもの、「やまと琴」などの楽器や、模造祭祀具を供献するものと、しないものがあり、埴輪や石製品に至っては、特定の遺構のみにみられるのである。

そこでまず、第1群で考えてみるなら、箱形容器や曲物容器による供献は、それぞれ第1号と第12号、第12号と第10号にのみ(第27号に曲物容器がみられるが、所属不明のため除外)みえるもので、第2群以下ではみられないものであるし、土器供献についても、第12号で1点土師器の可能性が考えられるだけで、すべて須恵器の供献であった。そしてその供献形態においても、第1号、第12号、第7号では坏の蓋身セットの形態に、他に例をみないあり方がみられるのである。木製品の供献は、第1群では、あまり顕著ではないが、その中でも第12号の曲物容器内における木製模造矢が注目されるし、石製品についても、第12号の箱形、曲物容器内の小玉の供献が、際立ったあり方を示しているのである。一方、削平を受けているとは言え、第11号や、やや小型の第8号では、周溝内における供献は全くみられないのである。

次に第2群では、第2号、第3号を除いて木製品の供献が顕著である。そして土器供献についても、須恵器は第3号の1点のみで、第4号、第5号は土師器のみの供献であった。このうち、第5号における供献は、板材のまわりに坏3点を置く点で、第1号、第12号と似た形態と言える。木製品については、第4号における建材は、第4群の第17号のものと同じものであるし、第5号の長柄鋤、第6号の田舟の供献は、第19号、第23号、第24号、第25号などと共通性をもつものである。

第3群の場合、その分布状況から、大型の第9号が先行することを想定したが、第9号では、北溝より完形の砧2本

が出土するなど、木製品の出土が顕著な割に、土器の出土は少なく須恵器壺、土師器壺各1点にすぎなかった。これに対し、第13号では須恵器の供献が顕著で、須恵器5点、土師器2点が出土し、第14号では土師器4点、第15号では須恵器、土師器各1点が出土している。第3群の場合は、第1群、第2群と異なり、須恵器と土師器が混在する傾向が特徴と言えよう。

第4群の場合、最も大型の第17号において、琴を伴う大規模な供献が検出されたが、土器の供献は土師器壺1点がわずかに出土しただけであった。これに対し、小型の第16号・第20号では、顕著な供献は認められなかったが、それぞれ4点、3点の須恵器の供献があった。そして、第22号、第26号では、周溝内の遺物は皆無であった。

第5群の場合、第21号が大半を削平され、わずかに須恵器坏身1点を出土しただけで、大量の須恵器、埴輪、木製品を出土した第23号と比較はできないが、木製品の出土は第2群や第6群と共通性をもつし、須恵器大甕の出土や木製模造太刀の出土は、第1群と、円筒埴輪、形象埴輪の出土は、第6群の第19号と共通性をもつと言える。

第6群は、遺構の分布や、出土遺物から、第5群とかなり共通性をもっている。木製品、なかでも長柄鋤やナスビ型着柄鋤の出土は第5群の第23号を除けば、第6群に集中しており、第6群の中では、第19号に、最も顕著な供献がみられる。「琵琶形木製品」や埴輪の出土、多数の木製品の出土は、第24号、第25号を、大きく凌駕しているのである。ただ土器の供献は第25号とともに皆無であって、第24号で2点の須恵器坏身の出土が知られているにすぎないのである。

以上、検討を加えてきたように、供献の形態においても、若干の共通性はもちつつつも、グループ間に、かなりの差異のあることが明らかになり、配置や、形態、方位などによるグルーピングが、必ずしも、恣意的なものでないことが裏付けられたと言えよう。そして、供献の形態の共通性と差異は、同一グループ内においても、かなり顕著に認められるのであって、これが、遺構の規模や構造と関連して、グループ内における時期差や、階層差を示す可能性は大きいと考える。

すなわち、第1群における、第12号・第1号は、遺構の規模としては、大型で最古式の須恵器を出土した第10号より小さく、中型であるが、供献の形態、内容において、他を大きく凌駕しており、出土した須恵器も、この種の遺構から出土したものとしては、古式のものである。これに対し第1群では、最も小型の第18号の場合は、顕著な供献もなく、出土した須恵器も、やや新しい様相をもっており、従層的、後出的な内容と言える。

第2群の場合、第2号、第3号を除けば、比較的等質的な内容をもつが、第3群の場合には、最も大型で、先行するとみられる第9号において、顕著な供献がみられるのに対し、他の3基は、比較的等質的な内容をもっており、第13号の須恵器のように、やや後出的なものを含むものもみられる。

第4群では、上述のように、第17号が、規模、供献内容においても突出しており、第16号・第20号は、それに従属するような内容をもっていた。そして、第22号・第26号については、供献が皆無な点で共通性が認められ、別のグループと考えるか、後出的な遺構の性格を示すものか確定しがたい。

第5群では、第23号が、規模・供献内容において、服部遺跡のこの種の遺構で、抜きんでたものであることは明らかであるが、出土した須恵器においては、、やや時期的に後出することが憶測される。第6群においては、第19号が規模・供献内容において突出することが明白であり、第24号出土の須恵器は、やや後出的な内容をもつものであった。

以上の検討によって明らかになった点をまとめると、次のようになるのであろう。

(1) グループ間における差異は、その形態や方位にとどまらず、供献の形態にも微妙に認めることができる。

(2) 各グループ間に、大きな時期差はないが、やや先行的な第1群に対し、第5、第6群は、やや後出すると考えられる。

(3) グループの内部においても、規模や供献の形態において、大きな差異が認められ、若干の時期差も推定される。

それでは、かかる事態は、いかなる状況を示すものであろうか。ごく常識的に考えるなら、ここに現れたグループは、一つの「古代家族」の一系列の墳墓と理解し、そこにおける差異とは、その「古代家族」内における階層差を示すと同時に、より大きな「集団」（ムラ）における地位、階層差を示すものと考えることができるであろう。[注38] ただ主体部が削平されていることもあり、一つの憶測ととどまざるを得ないと考える。そこで最後に、周溝内に密封されていた供献儀礼の性格について、検討を加えておきたい。

「A」で述べたように、服部遺跡で検出された27基にのぼる周溝状遺構は、若干の問題を残しつつも、基本的にはマウンドを削平された古墳の周濠と考えられ、それをめぐってなされた種々の供献儀礼も、いわゆる古墳祭祀の一部を構成するものとみられる。[注39] ただし、その中には、従来の調査では未周知の点もかなり含まれており、まず、それらの諸点を整理することから始めたい。

周溝状遺構の溝内およびその周辺で出土された供献儀礼は、およそ次の８つの要素から構成されている。

(1) 土器の供献　ほぼほとんどの遺構で認められるもので、構内に意識的に埋置されたものと、故意に構内に投棄されたか、周溝の内外から転落したとみられるものがある。

(2) 埴輪の樹立　ごく一部の遺構（第19号、第23号）のみにみられるもので、形象埴輪、円筒埴輪のいづれも、周溝の内外から転落したとみられる。

(3) 石製品の供献　例は少ないが、第12号の滑石製小玉が、箱形容器や曲物容器内より出土しており、管玉、車輪石、滑石製紡錘車、剣形模造品などは、意識的に溝内に埋置された痕跡はなかった。

(4) 木製容器の供献　箱形と曲物の二種があり、箱形が２例、曲物が３例で、いずれも溝内に意識的に埋置されていた。類例としては、第23号より出土した把手付四脚槽がある。

(5) 木製祭具の供献　第12号の曲物容器内より出土した矢２本、第23号より出土した太刀形木製品１点の出土が知られる。いずれも、実物大の模造品である。

(6) 木製農具の供献　第５号、第６号、第９号、第19号、第24号、第25号から出土したもので、長柄鋤、ナスビ型着柄鋤、(砧)、田舟などがある。いずれも実物で、鋤の場合は、U字型の鉄製鋤先が本来付いていたとみられるが、すでに消失していた。

(7) 木製楽器の供献　第17号の「やまと琴」、琴柱、第19号の「琵琶」形木製品がある。「やまと琴」の場合は、上述のように、琴糸を張った状態で、マウンド側からずり落ちた可能性が大きい。

(8) 建材類の出土　各遺構から大量の出土が知られる。いずれも実物で、大きいものでは、全長５mにおよぶものもある。特に第17号から出土した「組物」は、小屋的な建物の屋根ないし、壁と考えられる。ほとんどが、二次的に流入ないし投棄されたと考えられる。

(1)～(8)のうち、まず注意されるのは、周溝内において意識的になされた、(1)、(3)、(4)、(5)である。(1)の土器には、第１号で若干の痕跡があったように、本来、食物や飲物をつめて、死者に供えられたものと考えられるし、(3)、(4)、(5)は、第１号や第12号でセットになって発見されたように、明確な祭具であって何んらかの儀礼に使用された後、或はその儀礼の一環として、周溝内に埋置されたとみられる。箱形容器や曲物容器については、箱形容器の場合、小児棺とする考え方もあるが、箱そのものが高さ4.0cmという、きわめて浅いものであり、明確な底板や蓋板を欠いていることから、曲物容器と同様、後世の「御供櫃」の前身となるものと理解されよう。[注40] 第23号より出土した太刀形木製品については、出土状況が明確ではないが、第12号出土の２本の木製矢の場合、曲物容器内に２本並べ、台状部中心に先端を向けて置かれていること、その周囲より滑石製の小玉２点が出土しているところから、曲物容器に武器形模造品を納めて、供献さ

れたことが判明するのである。言うまでもなく、矢や刀、剣などは、武器であるとともに神聖な祭具であり、前、中期古墳の副葬品として、鉄鏃、銅鏃、鉄刀、鉄剣がポピュラーであることとも、関連するものであろう。

このように第12号における曲物容器の供献が理解されるなら、第1号や第2号の箱形容器の供献についても、滑石製小玉の出土状況などを考慮するなら、容器内に「御幣」の先駆的なものが納め供献されていたと考えることができるかも知れない。

以上のように、周溝内からの出土遺物の内容は、一部を除いて、いわゆる一般的な古墳祭祀とほぼ一致することが知られよう。(2)の埴輪の樹立や、(3)の石製品についても、古墳祭祀におけるものと共通するし、(6)の木製農具についても、その材質上、古墳からの出土例は少ないが、たとえば「U」字状の鉄製鋤先の副葬などから類推するなら、本来的に一致しない点は認められないのである。ただ、ここで注意されるのは、(2)の埴輪の樹立は除いて、これらの遺物がいわゆる副葬品として供献されたのではなく、周溝内において、種々な形態をとって供献されている点であろう。そこで注目されるのが(7)として上げた楽器類の供献と、(8)として上げた建材類の出土である。

まず、楽器のうち、「琵琶形木製品」は周溝内で浮いた状態で検出されたため、出土状況は明確に押えられないが、儀礼の後周溝内に投棄されたものか、周溝の内外から、二次的に転落したかのいずれかとみられるのに対し、「やまと琴」は、上述のように、マウンド側から、琴糸、琴柱着装のまま、逆転してズリ落ちた状態で検出されており、「やまと琴」より先行して転落したとみられる建材に引っかかった状況が伺えるのである。これらの点から、「やまと琴」については、マウンド上に存在した可能性のある、小規模な建物内に置かれてあったものが、建物の倒壊とともに、周溝内に転落した可能性を推測することができるのである。

そこで、(8)として上げた建材類の出土であるが、大量に出土した、第4号、第5号、第9号、第17号、第19号、第23号だけでなく、過半に及ぶ遺構からの出土が知られており、その中には全長5m前後の丸太材の出土もみられるのである。これらは、いずれも、意識的に埋置されたものではなく、二次的に周溝内に転落ないし投棄されたものと考えられるが、調査区域内において、当該期の集落跡は発見されておらず、第17号における「組物」にみられるごとく、建物自身も、小規模で、仮設小屋的な性格の強い点などを考えるなら、第17号で推定したごとく、マウンド上や、第19号の東側で検出された、2棟の堀立柱建物のように、周溝の外に規模の小さい建物が存在し、それが倒壊後周溝内に転落したと考えることもできると思うのである。

以上のように、周溝内からの遺物と、その出土状況を検討するなら、そこから復元される儀礼とは、従来古墳祭祀において指摘されてきた、埴輪や副葬品をめぐる限定された祭祀ではなく、それらを含みこんだ、古墳とその周辺において繰り広げられた儀礼そのものであることが明らかになってきた。周知のように、古墳をめぐる儀礼については、古墳のマウンド上や、周辺に樹立された、形象埴輪群や、人物埴輪群の分折を軸に展開されているが、[注41] 文献的には、二次的な資料の『古事記』『日本書記』の記述のほかに、中国の史書にみえる、わずかな記述のみである。

まず当該期以前の、いわゆる『魏志倭人伝』には、次のような記載が認められる。[注42]

其の死には棺有るも槨無く、土を封じて家を作る。始め死するや停喪十餘日、時に當りて肉を食わず、喪主哭泣し、他人就いて歌舞飲酒す。已に葬れば、挙家水中に詣りて、澡浴し、以って練沐の如くす。

又、『隋書倭国伝』にも、次の記述がある。[注43]

死者は、斂むるに棺槨を以ってし、親賓、屍に就いて歌舞し、妻子兄弟は白布を以って服を製す。貴人は三年外に

殯し、庶人は日を卜して窆む。葬に及んで屍を船上に置き、陸地之を牽くに、或は小轝を以ってす。

これらの記述は、必ずしも当該期を対象としたものでもなく、どれほど事実を伝えてしるか問題の残るところで[注06]が、その状況は、服部遺跡の周溝内に密封されていた儀礼と符合する点が多々あると言えよう。すなわち、人が死んだ場合、身分の高い人は殯（もがり）を行い、喪主は「哭泣」し、親族は「歌舞飲酒」し、その後「土を封じて家を作る」という記述は、まさに、さきに復元された古墳の周辺における「殯屋」の存在、「やまと琴」や「琵琶形木製品」による歌舞演奏の実在、土器供献にみられる、食物の供献などを彷彿とさせるのである。

一方、服部遺跡の周溝状遺構にみられる儀礼のあり方は、上に少しふれた人物埴輪群のあり方とも類似点が指摘できる。すなわち、人物埴輪群の中にみえる、「貴人」、「巫女」、「武人」、「農夫」、「兵士」、「楽器をもつ男」、「踊る人」などは、周溝内から出土した多くの遺物とセットを成す人物像を具体的に示してくれるのである。人物埴輪群の性格については、殯宮儀礼を形象化したとみる見解や[注44]、葬列を表現したとする見解[注45]、或は「大嘗祭」における服属儀礼を形象化したとする見解や[注46]、前首長への変らぬ奉仕を表現したとする見解など[注47]が指摘されている。これらの見解は、総合的にみるなら、死者に対する儀礼の性格を、やや異なる視角から論究したものであって、必ずしも対立的にとらえる必要はないと考えるが、古墳、それも首長墓の墳丘上に樹立されたという点を重視するなら、首長に対する一般成員の、死後も変らぬ奉仕、服属を表現したものととらえることができるであろう。ただ服部遺跡の周溝をめぐってなされた儀礼は、そのような象徴的なものではなく、具体的に死者に対してなされたものであって、形態的には、、殯宮儀礼ないし、その延長上にある葬礼と理解できると考えられよう[注48]。そして、さきに検討を加えた、遺構の規模、供献形態における階層的な差異を考えるなら、かかる儀礼を、人物埴輪群の性格と同じく、首長に対する、奉仕、服属の儀礼として、とらえ直すこともできると考える。

以上、やや繁雑な考察に終止したが、服部遺跡の周溝状遺構は、マウンドを削平され、主体部を失なっているにもかかわらず、逆に平地に立地し、周溝内における遺物を良好に保存していたがゆえに、古墳時代の中、後期の墓制について、新しい資料と問題を提起することになったと考える。

註

① 山岸良二『方形周溝墓』（考古学ライブラリー８、ニュー・サイエンス社、1981）

② 石部正志「古墳文化論」（日本史を学ぶⅠ、原始・古代、有斐閣、1975）

③ 石原道洋「古墳時代後期の竪穴式住居址群」（『滋賀文化財だより』、24、1979）

④ 宮成良佐・佐野誠一「長浜市越前塚遺跡略報」（『滋賀文化財だより』80、1983）

⑤ 吉田秀則「弥生中期の方形周溝墓等を発掘」（『滋賀文化財だより』85、1984）

滋賀県文化財保護協会、吉田秀則氏の御教示による。

⑥ 中主町教育委員会、辻広志氏の御教示による。

⑦ 古川与志継・長井秀之『冨波遺跡発掘調査概要』（野洲町教育委員会、1983）

⑧ 野洲町教育委員会、古川与志継氏の御教示による。

⑨ 畑本政美『金ケ森東遺跡調査概要』（守山市教育委員会、1983）

⑩ 丸山竜平ほか『鴨遺跡』（高島町教育委員会、1980）

⑪ 岩井宏美「曲物の用途」（『大阪市立博物館研究紀要』第10冊、1978）

⑫ 川西宏幸「円筒埴輪総論」（『考古学雑誌』第64巻第２号、1978）

⑬　注⑫前掲論文

⑭　注⑫前掲論文

⑮　注⑫前掲論文

⑯　京都大学文学部考古学研究室、向日丘陵古墳群調査団「京都向日丘陵の前期古墳群の調査」（『史林』第54巻第６号、1971）　赤塚次郎「円筒埴輪製作覚書」（『古代学研究』90、1979）、春成秀爾「埴輪」（『考古資料の見方・遺物編』、地方史のマニュアル６、柏書房、1977）

⑰　注⑫前掲論文

⑱　田中勝弘『北陸自動車道関連遺跡発掘調査報告書Ⅷ、一高月町涌出山古墳一』（滋賀県教育委員会、財団法人滋賀県文化財保護協会、1983）

⑲　古川与志継『三堂・野々宮遺跡他発掘調査概要報告書』（野洲町教育委員会、1983）

⑳　『八尾市文化財調査報告３、東弓削遺跡』（八尾市教育委員会、1976）

㉑　『東大阪市埋蔵文化財包蔵地域発掘調査報告20一瓜生堂上層遺跡、皿池遺跡発掘調査報告』（東大阪市教育委員会、1979）

㉒　注⑱に同じ

㉓　宮成良佐・佐野誠一『長浜市越前塚遺跡略報』（『滋賀文化財だより』80、1983）

㉔　『久野部遺跡辻地区現地説明会資料』（野洲町教育委員会、1983）

㉕　中江彰『南市東遺跡発掘調査概報』（安曇川町教育委員会、1980）

㉖　中村浩『陶邑Ⅲ』（『大阪府文化財調査報告書』第30輯、大阪府教育委員会、1978）

㉗　山崎秀二『吉身南遺跡発掘調査報告書』（『守山市文化財調査報告書』第６冊、守山市教育委員会、1980）Ｓ一19、49、52、64、70に類似。

㉘　田中勝弘『北陸自動車道関連遺跡発掘調査報告書Ⅳ』（滋賀県教育委員会、財団法人滋賀県文化財保護協会、1978）

㉙　注④に同じ

㉚　注㉗・㉘に同じ

㉛　注㉗に同じ

㉜　鬼柳彰・谷口義介『北陸自動車道関連遺跡発掘調査報告書Ⅱ』（滋賀県教育委員会、財団法人滋賀県文化財保護協会、1976）

㉝　注㉘に同じ

㉞　注㉓に同じ

㉟　注㉘に同じ

㊱　注㉘に同じ

㊲　注㉕に同じ

㊳　白石太一郎「日本古墳文化論」（『講座日本史』Ⅰ、原始・古代Ⅰ、東京大学出版会、1984）

㊴　丸山竜平「古墳の祭祀」（講座日本の古代信仰３『呪ないと祭り』学生社、1980）

㊵　注⑪に同じ

㊶　水野正好「埴輪芸能論」（『古代の日本』２、風土と生活、角川書店、1971）

㊷　和田清・石原道博編訳『魏志倭人伝・後漢書倭伝・宋書倭国伝・隋書倭国伝』（岩波書店、1951）

㊸　注㊶と同じ

㊹　大場磐雄「葬制の変遷」(『古代の日本』２、風土と生活、角川書店、1971)

㊺　後藤守一「埴輪よりみた上古時代の葬礼」(『斉藤先生古稀祝賀記念論文集』1937)

㊻　注㊵に同じ

㊼　春成秀爾注⑯前掲論文

㊽　「殯」については、和田萃「殯の基礎的考察」(『史林』第52巻第５号、1969)、井上光貞「古代の王権と即位儀礼」(『日本古代の王権と祭祀』、東京大学出版会、1984)

出土土器観察表

第1号　出土土器

器種	器形		図版番号	法量	形態の特徴	成形手法の特徴	備考
須恵器	坏蓋	A_2	C001	口径12.15cm 器高 4.6 cm 稜径11.6 cm	○口縁部は、外反気味に下方にのび、端部は内傾する浅い凹面を成す。 ○稜は短く丸い。 ○天井部はやや丸味を有す。	○マキアゲ、ミズビキ成形。 ○天井部外面約⅔回転ヘラ削り調整。 ○天井部内面中央に、仕上げナデ。 ○他回転ナデ調整。	色調（内）青灰色 （外）暗灰青色 胎土　良　好 焼成　堅　緻
	坏身	A_2	C002	口径 9.7 cm 器高 5.0 cm 立ち上がり高 1.89cm 受部径12.5cm	○立ち上がりは高く内傾してのび、端部は内傾する浅い凹面を成す。 ○受部は外方にのび、丸く収める。 ○底部は丸味を有する。	○マキアゲ、ミズビキ成形。 ○底部外面約⅔回転ヘラ削り調整後回転ナデ調整、底部内面中央に仕上げナデ。 ○他、回転ナデ調整。	色調（内）青灰色 （外）灰青色 胎土　精　良 焼成　堅　緻
		A_1	C003	口径10.9 cm 器高 5.0 cm 立ち上がり高 2.2 cm 受部径13.1cm	○立ち上がりは高く内傾してのび、端部は内傾する浅い凹面を成す。 ○受部は外上方にのび、丸く収める。 ○底部は平らに近い。	○マキアゲ、ミズビキ成形。 ○底部外面約½回転ヘラ削り調整。 ○底部内面中央に仕上げナデ。 ○他、回転ナデ調整。	色調（内）灰青色 （外）暗灰色 胎土　砂粒含有 焼成　堅　緻
	甕	小型甕A	C004	口径16.6 cm 器高20.8 cm 最大腹径 21.4 cm	○口頸部は外反して外上方にのび、端部近くで屈曲してさらに広がる。端部上下端をわずかに拡張して、外側に面を成す。 ○端部下方に断面三角形の凹線を廻らしその下方に櫛描波状文1帯を施文。	○マキアゲ、ミズビキ成形。 ○体部外面平行タタキ調整後回転カキ目調整。 ○他、回転ナデ調整、体部内面上半に指押え。	色調　灰色（断面）淡紅色 胎土　良　好 焼成　堅　緻

第3号　出土土器

器種	器形		図版番号	法量	形態の特徴	成形手法の特徴	備考
須恵器	甕	小型甕B	C066	口径15.2 cm 器高20.8 cm 最大腹径 21.4 cm	○体部は、肩の張る球状を呈しやや突出した丸底を有す。 ○口頸部は、外反して大きく開き、端部外面は、やや凹状を呈す。 ○頸部中位には、低い断面三角形の凸線を廻らし、上・下に櫛描波状文を施す。	○マキアゲ、ミズビキ成形。 ○体部外面不整方向の平行タタキ後肩部にスリケシナデを施す。 ○体部外面に指頭圧痕。	色調　暗灰褐色（黄緑色の自然釉付着） 胎土　精　良 焼成　堅　緻

第4号　出土土器

器種	器形		図版番号	法量	形態の特徴	成形手法の特徴	備考
土師器	坏		H081	口径12.3 cm 器高 4.4cm	○体部口縁部は内弯して上方にのび、端部を丸く収める。	○器体内外面共ナデ及び指押え。	色調　淡褐色 胎土　良　好 焼成　良　好
				口径 8.7 cm	○球状の体部に外反して立ち	○口縁部内外面共横ナデ調整。	色調　淡茶褐色

器種	器形		図版番号	法量	形態の特徴	成形手法の特徴	備考
土師器	壷	B	C082	器高13.3 cm 最大腹径 13.8 cm	上がる受口状口縁を有し、端部は内傾する面をなす。	○肩部外面に横方行のヘラミガキ。 ○体下部外面は、ハケ調整後ナデを施す。 ○内面体部下半ヘラ削り。	胎土 良 好 焼成 良 好

第5号 出土土器

器種	器形		図版番号	法量	形態の特徴	成形手法の特徴	備考
土師器	坏		H005 〜 H007	口径 12.0〜12.7cm 器高 4.0〜 4.5cm	○体部、口縁部は内弯気味に上方にのび、端部を丸く収める。 ○底部は平らに近い。 ○H007底部はやや丸味を有する。	○内外面共ナデ及び指押え。	色調 淡褐色 H007 褐色 胎土 良 好 焼成 良 好
	壷	A	H008	口径 8.8 cm 器高13.8 cm 最大腹径 13.9 cm	○やや胴部の張る球状の体部に外反して斜上方にのびる口頸部を有する。 ○端部を丸く収める。	○口頸部外面ナデ及び指押えによるが、粘土紐接合痕が明瞭に残存する。 ○体部外面に不整方行の細かいヘラミガキを施す。口頸部は粘土紐接合痕が残り指押え及びナデ。	色調 淡赤褐色 胎土 精 良 焼成 良 好
			H085	口径 8.9 cm 最大腹径 10.0 cm	○胴部中位が強く張る偏球状の体部に外弯気味に斜上方にのびる口頸部を有し、端部を丸く収める。	○内面ナデ、粘土紐接合痕残存。 ○口頸部内外面共横ナデ調整。 ○体部外面に細かいハケ調整痕が認められる。 ○頸部内面にしぼり目残存。	色調 茶褐色 胎土 良 好 焼成 良 好

第7号 出土土器

器種	器形		図版番号	法量	形態の特徴	成形手法の特徴	備考
須恵器	坏身	A_1	C009 C010	口径10.8 cm 器高 4.8 cm 立ち上がり高 1.65cm 受部径12.7cm 口径11.8 cm 器高 4.5 cm 立ち上がり高 1.9 cm 受部径13.4cm	○立ち上がりは高く内傾気味にのび、端部は内傾する浅い凹面を成す。 ○受部は外方にのび、端部を丸く収める。 ○底部は比較的浅く平らに近い。C010は、中央が窪む。	○マキアゲ、ミズビキ成形。 ○底部外面⅔、回転ヘラ削り調整、C010は、回転ナデ調整を加える。 ○底部内面中央に仕上げナデ ○他、回転ナデ調整、C010は回転右回り。	色調（内）青灰色 （外）暗灰色 胎土 1〜3㎜大の砂粒含有 焼成 堅 緻
	坏蓋	A_1	C011	口径12.8 cm 器高 4.3 cm 稜径12.85cm	○口縁部はやや外弯気味に外下方に下り、端部は凹面を成す。 ○稜は、短く断面三角形を呈す。 ○天井部は、低くやや丸味を有す。	○マキアゲ、ミズビキ成形。 ○天井部外面⅘回転ヘラ削り調整（回転左回り）。 ○天井部内面中央に仕上げナデ。 ○他、回転ナデ調整。	色調（内）青灰色 （外）暗灰色 胎土 砂粒含有 焼成 堅 緻
	坏身	A_1	C012	口径10.6 cm 器高 4.4 cm 立ち上がり高 1.75 cm 受部径 12.75cm	○立ち上がりは、高くやや内弯気味にのび、端部は内傾する浅い凹面を成す。 ○受部は外方にのび、端部を丸く収める。 ○底部は、浅く平ら。	○マキアゲ、ミズビキ成形。 ○底部外面⅘回転ヘラ削り調整（左回り）。 ○底部内面中央に仕上げナデ。 ○他、回転ナデ調整。 ○立ち上がり内面に貼付痕残存。	色調（内）淡灰色 （外）暗灰色 胎土 砂粒含有 焼成 堅 緻

器種	器形		図版番号	法量	形態の特徴	成形手法の特徴	備考
須恵器	坏蓋	A1	C013	口径12.8 cm 器高 4.0 cm 稜径12.5 cm	○口縁部は、外反気味に外下方に下り、端部は内傾する浅い凹面を成す。 ○稜は鈍い断面三角形を呈す。 ○天井部は低くやや丸味を有す。	○マキアゲ、ミズビキ成形。 ○底部外面4/5回転ヘラ削り調整。 ○底部内面中央に仕上げナデ。 ○他、回転ナデ調整。	色調 （内）淡青灰色 （外）暗青灰色 胎土 砂粒少量含有 焼成 堅緻
	坏身	A1	C014	口径11.4 cm 器高 4.75cm 立ち上がり高 1.8 cm 受部径12.7cm	○立ち上がりは高く内弯してのび、端部は内傾する浅い凹面を成す。 ○受部は外方に短くのび、端部は尖り気味に収める。 ○底部は、平らに近い。	○マキアゲ、ミズビキ成形。 ○底部外面2/3回転ヘラ削り調整。 ○底部内面中央に仕上げナデ。 ○他、回転ナデ調整。	色調 青灰色 胎土 砂粒含有 焼成 堅緻
	坏蓋	A1	C015	口径12.9 cm 器高 4.25cm 稜径13.0 cm	○口縁部は、ほぼ垂直に下方にのび、端部は内傾する浅い凹面を成す。 ○稜は短く断面三角形を呈す。 ○天井部は比較的低く、やや丸味がある。	○マキアゲ、ミズビキ成形。 ○天井部外面2/3回転ヘラ削り調整（左回り）。 ○天井部内面中央に仕上げナデ。 ○他、回転ナデ調整。 ○口縁部内面に貼付痕残存。	色調 （内）暗青灰色 （外）暗茶灰色 胎土 砂粒含有 焼成 堅緻
	坏身	A1	C016	口径11.5 cm 器高 4.5 cm 立ち上がり高 1.9 cm 受部径 13.15cm	○立ち上がりは高く内弯してのび、端部は内傾する凹面を成す。 ○受部は短く端部を丸く収める。 ○底部は浅く平ら。	○マキアゲ、ミズビキ成形。 ○底部外面2/3回転ヘラ削り調整。 ○底部内面中央に仕上げナデ。 ○他、回転ナデ調整。 ○底面にヘラ状具による線刻。 〔 〕	色調（内）暗灰色 （外）暗灰青色 胎土 砂粒少量含有 焼成 堅緻
			C017	口径10.4 cm 器高 4.8 cm 立ち上がり高 2.1 cm 受部径12.8cm	○立ち上がりは高く内傾し、端部は内傾する浅い凹面を成す。 ○受部は外上方にのび、端部を丸く収める。 ○底部は比較的浅く丸味がある。	○マキアゲ、ミズビキ成形。 ○底部外面2/3回転ヘラ削り調整。 ○他、回転ナデ調整。	色調（内）灰青色 （外）暗灰青色 （一部茶色化、口縁部灰青色） 胎土 良好 焼成 堅緻 （外面砂粒少し含有）
	坏蓋	A1	C083	口径12.7 cm 器高 4.8 cm 稜径13.1 cm	○口縁部は、ほぼ直線的に垂下し、端部は内傾する浅い凹面を呈す。 ○稜は断面三角形を呈し、端部を丸く収める。 ○天井部はやや丸味を有す。	○マキアゲ、ミズビキ成形。 ○器体内外面回転ナデ調整。	色調（内）暗灰色 外面天井部に自然釉付着 胎土 良好 焼成 堅緻
	甕		C145	口径22.5 cm	○大きく外弯して開く口頸部で、端部は外側に肥厚し、外端面は凸状を呈す。 ○端部下方に櫛描波状文（4条）を廻らす。	○マキアゲ、ミズビキ成形。 ○回転ナデ調整。	色調 青灰色 胎土 良好 焼成 堅緻
			C146	口径17.0 cm	○外弯気味に外上方に開く口頸部で、端部近くで緩く屈曲して上方に短く立ち上がり端部を丸く収める。 ○端部下方と頸部中位に1条の細い凸線を廻らせ、その間に櫛描波状文、直線文等を施す。	○マキアゲ、ミズビキ成形。 ○回転ナデ調整。 ○頸部内面に指頭圧痕。	色調 灰青色 胎土 良好 焼成 堅緻

第9号　出土土器

器種	器形		図版番号	法量	形態の特徴	成形手法の特徴	備考
須恵器	甕	中型甕	C084	口径22.0 cm 器高35.7 cm 最大腹径 35.9 cm	○中型の甕で、肩の張る球状の体部に外弯して開き、上方において外側に短く屈曲する口頸部を有し、端部を上方に拡張する。 ○口頸部外面中位に櫛描波状文（12条）を廻らす。 （全周に施さず¼程に施文）	○マキアゲ、ミズビキ成形。 ○口頸部内外面共回転ナデ調整。 ○体部外面に不整方向の平行タタキ後、回転カキ目調整、下半部に半スリケシナデを施す。 ○体部内面に円弧タタキ後半スリケシナデ。	色調　灰色 胎土　良好 焼成　堅緻
	壷		C018	口径 7.9 cm 器高14.8 cm 最大腹径 11.1 cm	○球状の体部に外弯気味に外上方に開く口頸部、端部外面は、面を成し、ヘラ描沈線が廻る。	○マキアゲ、ミズビキ成形。 ○体部外面回転ナデ調整後、胴部にカキ目調整、底面ハケ調整後ヘラ削りを施す。 ○他、回転ナデ調整。	色調　暗青灰色 胎土　精良 焼成　堅緻
土師器	壷	A	H019	口径 8.6 cm 器高14.9 cm 最大腹径 15.6 cm	○偏球状の体部に、外反して外上方に伸びる口縁部を有し、端部を丸く収める。	○器体内外面共ナデ及び指押え。 ○体部外面にヘラミガキの痕跡。	色調　赤褐色 胎土　良好 焼成　良好
須恵器	甕		C154	口径24.8 cm	○外弯して広がる口縁部で、端部近くでさらに外方に屈曲して開き、外端面はやや凹状の面を成す。 ○端部下方に1条の凸線を廻らす。	○マキアゲ、ミズビキ成形。 ○回転ナデ調整。	色調　淡灰色 胎土　良好 焼成　堅緻
			C155	口径12.7 cm	○外弯して大きく広がる口頸部、端部外面は凹状の面を成す。 ○端部下方に、1条の凸線を廻らす。	○マキアゲ、ミズビキ成形。 ○回転ナデ調整。	色調　暗灰色 胎土　良好 焼成　堅緻
	高坏		C147	茎部径4.15cm 脚部高4.8 cm	○平らな坏底部中央に、基部の太い、やや外弯気味に外下方に開く脚部を有する。 ○脚部下端は、内傾する浅い凹面を呈し外側に稜を成す。 ○脚部3方に円孔スカシを穿ち、その下方に凹線を廻らす。	○マキアゲ、ミズビキ成形。 ○回転ナデ調整。 ○脚部は貼り付け。	色調　淡灰色 胎土　精良 焼成　堅緻

第10号　出土土器

器種	器形		図版番号	法量	形態の特徴	成形手法の特徴	備考
須恵器	坏蓋	B	C020	口径12.8 cm 器高 6.0 cm 稜径12.2 cm つまみ径 2.9 cm つまみ高 1.1 cm	○口縁部は外反して外下方に下り、端部は内傾する浅い凹面を成す。 ○稜は、短く鈍い。 ○天井部は比較的高く、やや丸味を有し、中央が凹状のつまみを有す。	○マキアゲ、ミズビキ成形。 ○つまみは貼り付けによる。 ○天井部外面⅔回転ヘラ削り調整。他、回転ナデ調整。	色調　淡灰色 胎土　良好 焼成　堅緻
	坏身	A_1	C021	口径11.2 cm 器高 4.9 cm 立ち上がり高 2.1 cm 受部径13.1cm	○立ち上がりは、高く内傾後直上に伸び、端部は内傾する浅い凹面を成す。 ○立ち上がり内面中位には稜を有す。 ○受部は、外上方に長くのび端部を丸く収める。 ○底部は平らに近い。	○マキアゲ、ミズビキ成形。 ○底部外面½回転ヘラ削り調整。 ○底部内面中央に仕上げナデ。 ○他、回転ナデ調整。	色調（内）青灰色 （外）灰青色 胎土　良好 焼成　堅緻

器種	器形		図版番号	法量	形態の特徴	成形手法の特徴	備考
須恵器	甕	小型甕B	C022	口径15.6cm 器高22.7cm 最大腹径 20.9cm	○球状の体部に外反して開く口頸部を有する。端部外面は外傾する面をなす。 ○口頸部外面に櫛描波状文（9条）を2帯廻らし、その間に2条の凹線を施す。	○マキアゲ、ミズビキ成形。 ○口頸部外面回転ナデ調整。 ○体部外面平行タタキ後、約⅘にスリケシナデ、縦方向のナデの圧痕が認められる。 ○内面平行タタキ後スリケシナデ。	色調　灰青色 胎土　精良 焼成　堅緻
			C023	最大腹径 21.8cm	○肩の張る球状の体部に外弯して開く口頸部を有する。 ○口頸部外面に2条の細い凸線を廻らし、その下方に櫛描直線文1帯を施す。また胴部上方には沈線を廻らし、その間に波状文1帯を施文。	○マキアゲ、ミズビキ成形。 ○体部外面平行タタキ後、上半部に半スリケシナデを施す。 ○他、回転ナデ調整。 ○体部内面タタキ後スリケシナデ。	色調　淡灰色 胎土　良好 焼成　堅緻

第12号　出土土器

器種	器形		図版番号	法量	形態の特徴	成形手法の特徴	備考
須恵器	坏身	A_2	C065 C067	口径 10.2～10.6cm 器高 4.7～4.9cm 立ち上がり高 1.8～2.0cm 受部径12.3cm	○立ち上がりは内傾してのび端部は内傾する浅い凹面をなす。 ○受部は外上方にのび端部を丸く収める。 ○底部は比較的浅く、平らに近い。	○マキアゲ、ミズビキ成形。 ○底部外面約½回転ヘラ削り調整（右方向）。 ○他、回転ナデ調整。	色調（外）淡紫色 （内）青灰色 胎土　良好 焼成　やや軟
	坏蓋	A_2	C069	口径12.2cm 器高　4.4cm 稜径12.0cm	○口縁部は外反気味に外下方にのび端部は内傾する浅い凹面をなす。 ○稜は鈍い。 ○天井部は平らに近い。	○マキアゲ、ミズビキ成形。 ○天井部外面約⅔回転ヘラ削り調整（左方向）。 ○他、回転ナデ調整。	色調　黒灰色 胎土　砂粒多含 焼成　良好
	坏身	A_2	C070	口径10.7cm 器高　4.7cm 立ちあがり高 2.0cm 受部径12.8cm	○立ち上がりは、内傾してのび、端部は内傾する浅い凹面を呈す。 ○受部は外方にのび、端部を丸く収める。 ○底部は浅くやや丸味を有する。	○マキアゲ、ミズビキ成形。 ○底部外面約½回転ヘラ削り調整（左方向）。 ○他、回転ナデ調整。	色調（外） 暗青灰色 （内）黒灰色 胎土　1～2mm大の長石粒含有 焼成　やや軟
	坏蓋	A_3	C071	口径12.1cm 器高　4.3cm 稜径12.2cm	○口縁部は直線的に垂下し、端部は内傾する浅い凹面を成す。 ○稜は鈍い。 ○天井部は平らに近い。	○マキアゲ、ミズビキ成形。 ○天井部外面⅘回転ヘラ削り調整（左方向）。 ○他、回転ナデ調整。 ○天井部内面に、タタキの痕跡。	色調　青灰色 胎土　1～2mm の砂粒含有 焼成　堅緻 灰をかぶる
	坏身	A_3	C072	口径10.6cm 器高　4.7cm 立ちあがり高 2.0cm 受部径12.5cm	○立ち上がりは内傾してのび、端部は内傾する面をなす。 ○受部は外上方にのび、端部を丸く収める。 ○底部は平らに近い。	○マキアゲ、ミズビキ成形。 ○底部外面約½回転ヘラ削り調整（左回り）。 ○他、回転ナデ調整。 ○底部内面にタタキの痕跡。	色調　青灰色 胎土　1～2mm大の砂粒含有 焼成　堅緻 灰をかぶる
	坏蓋	A_2	C073	口径12.6cm 器高　4.9cm 稜径12.2cm	○口縁部は外反して下方にのび、端部は浅い凹面を呈す。 ○稜は鈍い。 ○天井部はやや丸味を有す。	○マキアゲ、ミズビキ成形。 ○天井部外面約½回転ヘラ削り調整（右回り）。 ○他、回転ナデ調整。	色調　青灰色 胎土　1～2mm大の砂粒含有 焼成　堅緻 灰をかぶる
	坏身	A_2	C074	口径11.0cm 器高　4.6cm 立ちあがり高 1.7cm	○立ち上がりは内傾してのび、端部は内傾する浅い凹面を呈す。 ○受部は外上方にのび、端部	○マキアゲ、ミズビキ成形。 ○底部外面約½回転ヘラ削り調整（右回り）。 ○他、回転ナデ調整。	色調　青灰色 胎土　1～2mm大の砂粒含有 焼成　堅緻

器種	器形		図版番号	法量	形態の特徴	成形手法の特徴	備考
須恵器				受部径13.0cm	を丸く収める。 ○底部は、やや丸味を有す。		
	坏蓋	A2	C075	口径12.3cm 器高 4.7cm 稜径12.5cm	○口縁部は直線的に垂下し、端部は外反し内傾する浅い凹面を成す。 ○稜は短く断面三角形を呈す。 ○天井部はやや丸味を有す。	○マキアゲ、ミズビキ成形。 ○天井部外面約½回転ヘラ削り調整。 ○他、回転ナデ調整。	色調 暗灰青色 胎土 精良 焼成 堅緻
	坏身	A2	C076	口径 9.7cm 器高 4.8cm 立ち上がり高 2.1cm 受部径12.0cm	○立ち上がりは内傾してのび端部は内傾する浅い凹面を呈す。 ○受部は外上方にのび、端部を丸く収める。 ○底部は比較的浅く平らに近い。	○マキアゲ、ミズビキ成形。 ○底部外面約½回転ヘラ削り調整。 ○底部内面中央に仕上げナデ。 ○他、回転ナデ調整。	色調 青灰色 胎土 0.5mm～3mm大の砂粒含有 焼成 堅緻
	坏蓋	A2	C077	口径12.3cm 器高 4.4cm 稜径12.3cm	○口縁部は、やや外反気味に下方に下り端部は内傾する浅い凹面を呈す。 ○稜は鈍い。 ○天井部はやや丸味を有す。	○マキアゲ、ミズビキ成形。 ○天井部外面約⅓回転ヘラ削り調整。 ○他、回転ナデ調整。	色調（外）灰白色 （内）青灰色 天井部内面に黄緑色付着物有。 胎土 3mm大程の長石粒少量含有。 焼成 堅緻
	坏身	A2	C078	口径10.7cm 器高 5.1cm 立ち上がり高 1.5cm 受部径12.7cm	○立ち上がりは、内傾して上方にのび、端部は内傾する浅い凹面を呈す。 ○受部は、外上方にのび断面三角形を呈す。 ○底部は、平らに近い。	○マキアゲ、ミズビキ成形。 ○底部外面約⅓回転ヘラ削り調整。 ○他、回転ナデ調整。	色調 青灰色 胎土 1mm程度の長石粒含有 焼成 堅緻
	坏蓋	A1	C079	口径13.0cm 器高 4.6cm 稜径13.0cm	○口縁部は、外反して下方に下り端部は内傾する浅い凹面を呈す。 ○稜は短く、断面三角形を呈し、鈍い。 ○天井部は平坦に収める。	○マキアゲ、ミズビキ成形。 ○天井部外面約½回転ヘラ削り調整（左回り）。 ○他、回転ナデ調整。	色調（外）灰白色 （内）青紫灰色 胎土 長石粒含有 焼成 堅緻
	瓻		C080	口径12.3cm 器高11.0cm 最大腹径 11.3cm	○肩の張る球状の体部に、口頸部は外弯して開き、中位で段を成して内弯気味にのびる。 ○端部は内傾する浅い凹面を成す。 ○口頸部外面中位に凸線を廻らし上下に波状文各1帯を施文、また胴部に沈線2条、その間に波状文1帯を廻らす。 ○胴部最大径の部分に円孔スカシ（径1.4cm）を穿つ。	○マキアゲ、ミズビキ成形。 ○口頸部内外面共回転ナデ調整。 ○胴部外面にカキ目調整か。 ○底部付近に指頭圧痕、不定方向のハケ目痕が認められる。	色調 暗灰色 胎土 良好 焼成 堅緻

第13号　出土土器

器種	器形		図版番号	法量	形態の特徴	成形手法の特徴	備考
	坏蓋	A2	C024	口径13.0cm 器高 5.3cm 稜径12.7cm	○口縁部は外反気味に下方にのび端部は内傾する浅い凹面をなす。 ○稜は、短い断面三角形を呈	○マキアゲ、ミズビキ成形。 ○天井部外面約⅔回転ヘラ削り調整。 ○天井部内面中央に仕上げナ	色調（外）暗灰色 （内）灰青色 胎土 1～2mm大の長石粒含有

器種	器形		図版番号	法量	形態の特徴	成形手法の特徴	備考
須恵器					す。 ○天井部は高くやや丸味を有す。	デ。 ○他、回転ナデ調整。	焼成　良好
	坏身	A2	C025	口径11.7cm 器高　5.1cm 立ちあがり高 1.8cm 受部径13.4cm	○立ち上がりは高く内傾してのび、端部は内傾する浅い凹面を成す。 ○受部は外方に長くのび、丸く収める。 ○底部はやや丸味を有する。	○マキアゲ、ミズビキ成形。 ○底部外面約⅔回転ヘラ削り調整。 ○他、回転ナデ調整。	色調　灰色 胎土　良好 焼成　堅緻
			C026	口径10.9cm 器高　4.2cm 立ちあがり高 2.1cm 受部径13.0cm	○立ち上がりは、高く内傾してのび、端部は内傾する浅い凹面を成す。 ○受部は外上方に長くのび、端部を丸く収める。 ○底部は平坦に収める。	○マキアゲ、ミズビキ成形。 ○天井部外面約½回転ヘラ削り調整。 ○他、回転ナデ調整、回転は左方向。 ○底面にヘラ状具による線刻が認められる。「≠」	色調　青灰色 胎土　精良 焼成　堅緻
	瓻		C027	口径10.7cm 器高13.0cm 最大腹径 12.1cm	○小型の壷でやや肩の張る球状の体部に、外反して開く口頸部を有する。 ○端部を丸く収める。 ○口頸部外面中位に細い凸線を2条廻らし、頸部位に櫛描波状文1帯を施す。	○マキアゲ、ミズビキ成形。 ○口頸部内外面共回転ナデ調整。 ○体部外面上半、カキ目調整。 ○体部内面ナデ及び指押え。	色調　暗灰色 胎土　良好 焼成　堅緻
	短頸壷		C028	口径　9.0cm 器高11.5cm 最大腹径 14.0cm	○肩の張る偏球状の体部に、短く外反する口頸部を有す。端部は内傾する面をなす。 ○肩部外面に太い沈線を2条廻らし、その間に波状文1帯を施文。	○口頸部内外面共回転ナデ調整。 ○体部外面平行タタキ後、上半部にスリケシナデ。 ○体部内面下半部にナデ及び指押え。	色調　灰色 胎土　良好 焼成　堅緻
土師器	壷	A	H029 H030	口径　9.8cm 器高15.3cm 最大腹径 13.7cm	○偏球状の体部に、外反して長くのびる口縁部を有する。	○H030体下部外面に接合痕残存。 ○内外面共磨滅が著しく、詳細は不明であるが、ヘラミガキを施すものと思われる。	色調　淡褐色 胎土　良好 焼成　良好

第14号　出土土器

器種	器形		図版番号	法量	形態の特徴	成形手法の特徴	備考
土師器	坏		H031 〜 H033	口径 12.0〜13.0cm 器高 4.8〜4.9cm	○体部口縁部は、内弯気味に上方にのび、口縁端部を丸く収める。	○器体内外面共ナデ及び指押え。	色調　淡褐色 胎土　良好 焼成　良好
	壷		H034	口径　9.8cm 器高15.2cm 最大腹径 14.6cm	○偏球状の体部にやや外弯気味に斜上方にのびる口頸部を有する。 ○口縁端部を丸く収める。	○器体内外面共ナデ。 ○外面体下部に接合痕残存。	色調　淡褐色 胎土　良好 焼成　良好

第15号　出土土器

器種	器形		図版番号	法量	形態の特徴	成形手法の特徴	備考
土師器	壷	A	H035	口径　9.4cm 器高14.2cm 最大腹径 14.8cm	○胴部中位が張る偏球状の体部に外反して斜上方にのびる口頸部を有する。口縁端部を丸く収める。	○内外面共磨滅が著しいが、体部外面にヘラミガキの痕跡が認められる。	色調　淡茶褐色 胎土　良好 焼成　良好

器種	器形		図版番号	法量	形態の特徴	成形手法の特徴	備考
須恵器	甕	小型甕B	C091	口径19.3cm 最大腹径 29.0cm	○胴の張る球状の体部に、外反して広がる口頸部を付す端部は下端をわずかに拡張しており面を成す。 ○口頸部中位に、2条の凸線を廻らし、端部下方及び頸部に櫛描波状文を施す。	○体部外面平行タタキ後回転カキ目調整。 ○体部内面同心円タタキ後上半部にスリケシナデ。 ○他、回転ナデ調整。	色調 青灰色 胎土 精良 焼成 堅緻

第16号 出土土器

器種	器形		図版番号	法量	形態の特徴	成形手法の特徴	備考
須恵器	坏蓋	A3	C036	口径13.1cm 器高 4.6cm 稜径13.4cm	○口縁部は、やや外反気味に下方に下り、端部は内傾する面をなす。 ○稜は、短くやや鈍い。 ○天井部はやや丸味を有す。	○マキアゲ、ミズビキ成形。 ○天井部外面約½回転ヘラ削り調整（右方向）。 ○他、回転ナデ調整。	色調 青灰色 胎土 精良 焼成 堅緻
	坏身	A3	C037	口径12.1cm 器高 4.7cm 立ちあがり高 1.8cm 受部径14.2cm	○立ち上がりはやや内傾してのび、端部を丸く収める。 ○口縁部内面上方に鈍い稜を形成。 ○受部は短く外方にのび、端部を丸く収める。 ○底部は比較的浅く平らに近い。	○マキアゲ、ミズビキ成形。 ○底部外面約½回転ヘラ削り調整（右方向）。 ○他、回転ナデ調整。	色調 灰色 胎土 精良 焼成 堅緻
	坏蓋	A3	C038	口径13.6cm 器高 4.6cm 稜径14.4cm	○口縁部は直線的に垂下し、端部は内傾する凹面を成す。 ○稜は、短い断面三角形を呈し、端部を丸く収める。 ○天井部はやや丸味を有す。	○マキアゲ、ミズビキ成形。 ○天井部回転ヘラ削り調整（右方向）。 ○他、回転ナデ調整。	色調（外）灰色 （内）青灰色 胎土 精良 焼成 堅緻
			C039	口径13.4cm 器高 3.9cm 稜径13.1cm	○口縁部は、外下方にのび端部は内傾する面を成す。 ○稜は鈍い。 ○天井部は低く平らに近い。	○マキアゲ、ミズビキ成形。 ○天井部約⅓回転ヘラ削り調整（右方向）。 ○他、回転ナデ調整。	色調 淡灰色 胎土 精良 焼成 堅緻

第17号 出土土器

器種	器形		図版番号	法量	形態の特徴	成形手法の特徴	備考
土師器	壷	A	H068	最大腹径 13.0cm	○偏球状の体部に外反して開く口頸部を有するもの。	○頸部外面横ナデ調整。 ○体部外面に細かいヘラミガキが認められる。 ○体部内面指押え及びナデ。	色調 淡褐色 胎土 良好 焼成 良好

第18号 出土土器

器種	器形		図版番号	法量	形態の特徴	成形手法の特徴	備考
須恵器	坏身	A2	C041 〜 C043	口径 12.2〜12.5cm 器高 4.5〜4.9cm 稜径 11.7〜12.8cm	○口縁部は、やや外反気味に下方に下り、端部は内傾する浅い凹面を成す。 ○稜は、断面三角形を呈するもの（C041・C043）と鈍いもの（C042）がある。 ○天井部はやや丸味を有す。	○マキアゲ、ミズビキ成形。 ○天井部外面約½〜⅔回転ヘラ削り調整左回り（C041）と右回り（C042）がある。 ○他、回転ナデ調整。 ○天井部内面中央に円心円タタキの痕跡が認められる。（C042）	色調 暗灰色 胎土 精良 焼成 堅緻

器種	器形		図版番号	法量	形態の特徴	成形手法の特徴	備考
須恵器	坏蓋	B	C044	口径12.0cm 器高 5.4cm 稜径12.0cm つまみ径 3.1cm つまみ高 1.1cm	○口縁部は、直線的に下方にのび、端部はやや外反して浅い凹面を成す。 ○稜は短く丸い。 ○天井部は、平らに近く中央が凸状を成すつまみを付す。	○マキアゲ、ミズビキ成形。 ○天井部外面½回転ヘラ削り調整。 ○他、回転ナデ調整。	色調 淡灰色 胎土 精良 焼成 堅緻
	坏蓋	A_2	C045	口径10.0cm 器高 4.9cm 立ちあがり高 1.5cm 受部径12.1cm	○立ち上がりは、内傾してのび、端部は面をなす。 ○受部は外方にのび、端部を丸く収める。 ○底部はやや丸味を有す。	○マキアゲ、ミズビキ成形。 ○天井部外面½回転ヘラ削り調整。 ○他、回転ナデ調整。	色調 淡灰色 胎土 精良 焼成 堅緻
	椀		C046	口径 9.4cm 器高 6.2cm	○肩の張りが弱く、内弯して下方にのびる体部で、やや安定した底部を付す。 ○口頸部は、短く外反し、端部を丸く収める。 ○頸部直下に丸味のある凸線を2条廻らし、その下方に櫛描波状文1帯を施文。	○器体内外面共回転ナデ調整。 ○底部外面にヘラ削り。	色調 淡灰色 胎土 精良 焼成 堅緻

第20号 出土土器

器種	器形		図版番号	法量	形態の特徴	成形手法の特徴	備考
須恵器	坏蓋	A_2	C047	口径11.1cm 器高 4.0cm 稜径11.1cm	○口縁部は、やや外反気味に下方にのび、端部は内傾する面をなす。 ○稜は短く断面三角形を呈す。 ○天井部は比較的低く丸味を有する。	○マキアゲ、ミズビキ成形。 ○天井部外面回転ヘラ削り調整。 ○天井部内面中央に仕上げナデ。 ○他、回転ナデ調整。	色調（外）灰青色 （内）青灰色 胎土 砂粒含有 焼成 堅緻
	坏身	A_2	C048	口径10.4cm 器高 4.5cm 立ちあがり高 1.8cm 受部径12.6cm	○立ち上がりは、内傾後直上にのび、端部は内傾する面を成す。 ○受部は外方に短くのび、端部はやや尖り気味。 ○底部は、浅く平らに近い。	○マキアゲ、ミズビキ成形。 ○底部外面回転ヘラ削り調整。 ○底部内面中央に仕上げナデ。 ○他、回転ナデ調整。	色調（外）灰青色 （内）青灰色 胎土 砂粒含有 焼成 堅緻
	甕	小型甕B	C049	口径18.9cm 器高24.3cm 最大腹径 25.8cm	○やや胴の張る球状の体部に外弯して広がる口頸部を有し、端部は上方に拡張して段を成す。 ○口頸部中位に櫛描波状文。	○マキアゲ、ミズビキ成形。 ○口頸部内外面共回転ナデ調整。 ○体部外面不整方向の平行タタキ、胴部にカキ目調整。 ○体部内面に指頭圧痕。	色調 淡灰色 外面上半部及び内面口頸部、体下部に自然釉付着 胎土 精良 焼成 堅緻

第21号 出土土器

器種	器形		図版番号	法量	形態の特徴	成形手法の特徴	備考
須恵器	坏身	A_3	C050	口径10.1cm 器高 4.5cm 立ちあがり高 2.0cm 受部径12.6cm	○立ち上がりは、内傾してのび、端部を丸く収める。 ○受部は短く丸く収める。 ○底部は浅く平らに近い。	○マキアゲ、ミズビキ成形。 ○底部外面約⅘回転ヘラ削り調整。 ○底部内面中央に仕上げナデ。 ○他、回転ナデ調整。	色調（外）暗灰色 （内）青灰色 胎土 精良 焼成 堅緻

第23号　出土土器

器種	器形		図版番号	法量	形態の特徴	成形手法の特徴	備考
須恵器	坏蓋	A3	C053	口径12.7cm 器高 2.6cm 稜径12.8cm	○口縁部は、内弯気味に下方にのび、端部は内傾する浅い凹面を成す。 ○稜は鈍く短い断面三角形を成す。 ○天井部は低く平ら。	○マキアゲ、ミズビキ成形。 ○天井部外面ヘラ削り未調整。 ○他、回転ナデ調整。	色調　灰青色 胎土　精良 焼成　堅緻
		B	C057	口径10.7cm 器高 5.4cm 稜径 9.3cm つまみ径 2.5cm つまみ高 1.3cm	○口縁部は外下方にのび、端部を外に引き出し、丸く収める。端部内側で着地。 ○稜は明確な段を成す。 ○天井部は丸味を有し中央にやや高い宝珠のつまみを有す。	○マキアゲ、ミズビキ成形。 ○器体内外面共回転ナデ調整。 ○天井部外面中央ヘラ削り。	色調　暗青灰色 胎土　精良 焼成　堅緻
	高坏		C054	口径10.5cm 立ちあがり高 1.6cm 受部径13.0cm	○立ち上がりは内傾してのび、端部は内傾する面を呈す。 ○受部は外上方にのび、端部を丸く収める。 ○底部は浅く平らに近い。 ○脚部欠損。	○マキアゲ、ミズビキ成形。 ○器体内外面共回転ナデ調整。	色調　淡灰色 胎土　精良 焼成　堅緻
	瓻		C055	口径10.1cm 器高10.2cm 最大腹径 11.0cm	○体部は偏球状を呈するが、その最大腹径は中位上方にある。底部は尖り気味の丸底。 ○口頸部は外弯して開き、中位で段をなして内弯気味にのびる。端部は内傾する面を呈す。 ○頸部及び胴部上方に櫛描文を廻らし、胴部上方に円孔（径1.3cm）を穿つ。	○マキアゲ、ミズビキ成形。 ○口頸部内外面共回転ナデ調整。 ○体下部外面に指頭圧痕。	色調　黒色 胎土　精良 焼成　堅緻
	壷		C056	口径 8.8cm 器高 8.5cm	○球状の体部に短く外反して開く口頸部を有す。端部は丸く収める。	○口頸部外面にカキ目調整。 ○体部外面にカキ目が認められる。 ○体部内外面に指頭圧痕。	色調　淡茶褐色 胎土　良好 焼成　堅緻
	甕	小型甕	C150	口径21.0cm	○外弯して大きく開く口頸部で、端部は上方に引き出し外側に凹面を成す。 端部下方に細い凸線を廻らし、その下位に櫛描波状文を施文。	○マキアゲ、ミズビキ成形。 ○回転ナデ調整。	色調　淡灰色 胎土　精良 焼成　堅緻
	高坏		C148		○丸味のある底部で、脚部貼り付け面には、斜格子状の線刻を施す。	○マキアゲ、ミズビキ成形。 ○底部外面回転ヘラ削り調整後ナデ。	色調 （外）暗青灰色 （内）淡赤褐色 胎土　精良 焼成　やや軟
	甕	中型甕	C040	口径21.3cm 器高41.5cm 最大腹径 38.0cm	○中型の甕で、長胴形の体部に外弯して開く口頸部を有する。	○口頸部内外面共回転ナデ調整。 ○体部外面不整方向の平行タタキ。 ○体部内面下半に指頭圧痕。	色調　灰色 胎土　精良 焼成　堅緻
		大型甕	C149	頸部径38.8cm 最大腹径 80.2cm 現在高77.0cm	○大型の甕で、肩が強く張り出す球状の体部を有す。底部は、自重で凹む。 ○口縁部欠失。	○体部外面格子様タタキ。 ○内面ナデ。	色調　暗灰色 体上半部に自然釉付着 胎土　精良

器種	器形		図版番号	法量	形態の特徴	成形手法の特徴	備考
須恵器							焼成　堅緻
		大型甕	C153	口径40.8cm 器高69.7cm 最大腹径 62.9cm	○大型の甕で、口頸部は外弯して大きく開き、端部は上側に肥厚し、外端面は凹状を呈す。 ○体部は肩の張る球状を呈し自重により底部が凹む。	○口頸部内外面共回転ナデ調整。 ○体部外面平行タタキ。 ○体部内面ナデ。	色調　暗灰色 体上半部に自然釉付着 胎土　精良 焼成　堅緻
	土錘		C152	直径　2.4cm	○円柱状を呈する。中ぶくれ。	○手づくね。	色調　淡青灰色 胎土　精良 焼成　堅緻

第24号　出土土器

器種	器形		図版番号	法量	形態の特徴	成形手法の特徴	備考
須恵器	坏身	A_3	C058	口径11.6cm 器高　5.2cm 立ちあがり高 1.9cm 受部径13.5cm	○立ち上がりは内弯して上方にのび、端部を丸く収める。 ○受部は外方に短くのび、丸味を有す。 ○底部はやや丸味を有す。	○マキアゲ、ミズビキ成形。 ○底部外面ヘラ切リ後、回転ナデ調整。 ○他、回転ナデ調整。	色調　灰青色 胎土　1mm大の砂粒少量含有 焼成　堅緻
			C151	口径10.7cm 立ち上がり高 1.7cm 受部径14.2cm	○立ち上がりは内傾してのび、端部を丸く収める。 ○受部は外上方にのび、端部を丸く収める。	○マキアゲ、ミズビキ成形。 ○回転ナデ調整。	色調　灰色 胎土　精良 焼成　堅緻

第27号　出土土器

器種	器形		図版番号	法量	形態の特徴	成形手法の特徴	備考
須恵器	有蓋高坏		C059	蓋口径12.8cm 器高　5.3cm 稜径12.4cm つまみ径 3.2cm つまみ高 1.1cm	○蓋口縁部は、やや外反気味に下方にのび、端部は内傾する浅い凹面を成す。 ○稜は鈍い。 ○天井部は、比較的低く丸味を有し、中央が凹むつまみを有す。	○マキアゲ、ミズビキ成形。 ○坏底部外面約⅔回転ヘラ削リ調整。 ○坏底部内面中央に仕上げナデ。 ○他、回転ナデ調整。	色調（外）淡灰色 （内）灰青色 胎土　微粒砂含有 焼成　堅緻
			C060	高坏口径 11.0cm 器高　9.3cm 立ちあがり高 1.9cm 受部径13.3cm 基部径　9.5cm 脚部高　4.8cm	○坏部立ち上がりは内傾してのび、端部を丸く収める。 ○受部は外上方に短くのび丸味を有す。 ○底部は浅く平らに近い。 ○脚は、基部より外下方にのび、裾端部上、下端をわずかに拡張する。 ○4方向に台形スカシを有す。		
	坏蓋		C061	口径12.9cm 器高　4.9cm 稜径13.3cm	○口縁部は直線的に下方にのび、端部は内傾する浅い凹面を成す。 ○稜は鈍い。 ○天井部は丸味を有す。	○マキアゲ、ミズビキ成形。 ○天井部内面中央に仕上げナデ。 ○他、回転ナデ調整。	色調　暗青灰色 胎土　精良 焼成　堅緻
	坏身		C062	口径11.4cm 器高　3.2cm 立ちあがり高 2.0cm 受部径13.2cm	○立ち上がりは内傾してのび、端部は内傾する浅い凹面を呈す。 ○受部は外方にのび、端部を丸く収める。	○マキアゲ、ミズビキ成形。 ○底部外面約⅔回転ヘラ削リ調整。 ○底部内面中央に不定方向の仕上げナデ。	色調（外）黒灰色 （内）青灰色 胎土　精良 焼成　堅緻

器種	器形		図版番号	法量	形態の特徴	成形手法の特徴	備考
須恵器					○底部は平らに近い。	○他、回転ナデ調整。	
	坏蓋	A2	C063	口径12.7cm 器高 4.9cm 稜径12.7cm	○口縁部は直線的に下方にのび、端部は内傾する浅い凹面を成す。 ○稜は鈍い。 ○天井部は比較的低く丸味を有す。	○マキアゲ、ミズビキ成形。 ○天井部外面約4/5回転ヘラ削り調整。 ○天井部内面中央に仕上げナデ。 ○他、回転ナデ調整。	色調 淡灰色 胎土 精良 焼成 堅緻
	坏身	A2	C064	口径11.1cm 器高 5.4cm 立ちあがり高 1.9cm 受部径13.2cm	○立ち上がりは内弯気味に上方にのび、端部は内傾する浅い凹面を成す。 ○受部は外方にのび、端部を丸く収める。 ○底部は浅く丸味を有す。	○マキアゲ、ミズビキ成形。 ○底部外面約2/3回転ヘラ削り調整。 ○底部内面約2/3に仕上げナデ。 ○他、回転ナデ調整。	色調 黒灰色 胎土 精良 焼成 堅緻

円筒埴輪観察表

番号	部位	法量	外面調整	内面調整	胎土・焼成・色調	備考
H086	上半部	口縁部径 30.2 cm 口縁部高 9.9 cm 胴部径 25.1 cm	タテ又は、右下がりのナナメハケ後、ヨコハケ。 口縁端部ヨコナデ。 タガ接合部ヨコナデ。	ヨコ又は右下りのナナメハケ、タガ接合部付近に指押え及びナデ。	微石粒含有 良好 淡褐色	第19号 線刻
H113	上半部	口縁部径 25.7 cm 口縁部高 10.6 cm 胴部径 24.3 cm	タテハケ後連続ヨコハケ。 口縁端部ヨコナデ。 タガ接合部ヨコナデ。 中間段に円形スカシを穿つ。	ヨコ又は右下りのナナメハケ、タガ接合部付近に指押え及びナデ。	微石粒含有 良好 淡褐色	第19号
H087	上半部	口縁部径 24.5 cm 口縁部高 11.4 cm 胴部径23.2cm	タテハケ後口縁部に浅いヨコハケ1帯を廻らし、さらに端部にヨコナデを加える。 タガ接合部ヨコナデ後口縁部に部分的にタテハケにより再調整。 中間段の相対位置に円形スカシ。	口縁部ナデ後ヨコハケ。 タガ接合付近に指押え及びタテナデ。	微石粒含有 良好 淡褐色	第19号
H088	下半部	底部径16.6cm 底部高12.3cm 胴部径20.5cm	タテハケ後連続ヨコハケ。 タガ接合部ヨコナデ。 中間段の相対位置に円形スカシ。 線刻を有す。	ナナメハケ後ナデ。 タガ接合付近指押え及びナデ。 底部下端指押え。 外底面ナデ、ワラ状の圧痕を有す。	微石粒含有 良好 淡褐色	第19号 線刻(鹿)
H089	上半部	口縁部径 24.8 cm 口縁部高 11.6 cm 胴部径21.8cm	タテハケ後口縁部に浅いヨコハケ1帯、さらにヨコナデを加える。 端部にタガ接合部ヨコナデ後、口縁部に部分的にタテハケにより再調整。 中間段の相対位置に円形スカシ。	口縁部ナデ後ヨコハケ。 胴部指押え及びナデ。	微石粒含有 良好 淡褐色	第19号 線刻
H090	上半部	口縁部径 23.3 cm 口縁部高 11.6 cm 胴部径22.5cm	タテハケ後ヨコハケ。 タガ接合部ヨコナデ。	口縁部は、磨滅しているがヨコハケが認められる。 胴部指押え及びナデ。	微石粒含有 良好 淡褐色	第19号
H092	口縁部	口縁部径 24.5 cm 口縁部高 12.5 cm 胴部径23.9cm	右下がりのナナメハケ後連続ヨコハケ。 タガ接合部ヨコナデ。 口縁端部凹状を呈す。 線刻を有す。	口縁部ナナメハケ、上端にヨコナデ。 胴部タテナデ。	長石粒少量含有 やや軟 淡褐色 断面 灰黒色	第19号 線刻
H093	口縁部	口縁部径 24.8 cm	剝離。	口縁部ヨコハケ。 胴部に指押え。	砂粒含有 良好 淡褐色	第19号
H094	底部	底部径22.4cm	タテハケ後ヨコハケ。	指押え及びナデ。	微石粒含有 良好 淡褐色	第19号

番　　号	部　　位	法　　量	外　面　調　整	内　面　調　整	胎土・焼成・色調	備　　考
H095	底　　部	底部径24.2cm	剝離。	指押え。	微石粒含有 やや軟 淡褐色 断面灰色	第19号
H096	体部小片	胴部径25.0cm	タテハケ。 タガ接合部ヨコナデ。 胴部に線刻。	指押え、タテナデ。	微石粒少量含有 やや軟 淡褐色 断面灰色	第19号 線刻
H097	体　　部	胴部径21.6cm	タテハケ後ヨコハケ。 タガ接合部ヨコナデ。 胴部に線刻。	ヨコハケ。 タガ接合付近指押え及びタテナデ。	長石、石英粒含有 良好 淡褐色	第19号 朱塗 線刻
H098	口縁部	口縁部径 25.0cm 口縁部高 12.0cm 胴部径 22.1cm	やや右下がりのタテハケ後ヨコハケ。 （巾1.2cm） タガ接合部ヨコナデ。	口縁部ヨコハケ後上端ナデ。 タガ接合付近タテナデ。	1～3mm大の石英含有 やや軟 茶褐色 断面灰色	第19号
H099	口縁部	口縁部径 23.4 cm	タテハケ後ヨコナデ。 上端凹状を呈す。	ヨコハケ後ヨコナデ。	微石粒含有 良好 淡茶褐色	第19号
H100	口縁部	口縁部径 21.9 cm	口縁部上方ヨコナデ。 以下指押え。 上方に粘土紐接合痕。	ナナメハケ。	良好 良好 淡褐色	第19号
H101	口縁部	口縁部径 23.0 cm 口縁部高 4.3 cm	ヨコナデ。	ヨコナデ。	微石粒含有 良好 茶褐色	第19号
H102	口縁部	口縁部径 25.7 cm	ヨコナデ。 上端凹状を呈す。	右下がりのナナメハケ。	良好 やや軟 淡褐色 断面灰色	第19号
H103	口縁部	口縁部径 24.3 cm	タテハケ後ヨコハケ。 上端凹状を呈す。	ヨコハケ。	微石粒含有 やや軟 淡茶褐色 断面灰色	第19号
H104	口縁部	口縁部径 22.3 cm	剝離。 上端凹状を呈す。	ヨコハケ。 粘土紐接合付近に指押え。	微石粒含有 やや軟 淡茶褐色 断面灰色	第19号
H105	体　　部	胴部径18.7cm	タテハケ。 タガ接合部ヨコナデ。 円孔スカシの一部が認められる。	ヨコハケ。	良好 良好 淡茶褐色	第19号
H106	体　　部	胴部径23.2cm	剝離、ヨコナデか。	指押え及びタテナデ。	微石粒少量含有 良好 淡茶褐色	第19号
H107	口縁部	口縁部径 23.8 cm	タテハケ後上方にヨコナデ。	ヨコハケ。	微石粒少量含有 良好 淡茶褐色	第19号
H108	口縁部	口縁部径 25.6 cm	タテハケ後上方にヨコナデ。	やや右下がりのヨコハケ、端部はヨコナデ。 粘土紐接合部に指押え。	良好 良好 淡茶褐色 断面淡灰色	第19号

番　　号	部　　位	法　　量	外 面 調 整	内 面 調 整	胎土・焼成・色調	備　　考
H109	口 縁 部	口縁部径 19.9 cm	タテハケ後上方にヨコハケ。	剝離。	微石粒少量含有 良　好 淡茶褐色	第19号
H110	体　部	胴部径23.3cm	剝離。	ナデ。	微石粒含有 やや軟 茶褐色 断面灰黒色	第19号
H112	体　部	胴部径24.9cm	剝離。	剝離。	微石粒含有 やや軟 淡茶褐色 断面灰黒色	第19号
H114	体　部	胴部径25.3cm	ナナメハケ後連続ヨコハケ（巾1.4 cm）。 タガ接合部ヨコナデ。	指押え及びタテナデ。	良　好 やや軟 淡褐色 断面灰色	第19号
H115	口 縁 部	口縁部径 22.1 cm	剝離。	ヨコハケ後ナデ。	微石粒含有 良　好 淡褐色	第19号
H116	体　部	胴部径23.0cm	連続ヨコハケ。 タガ接合部ヨコナデ。	ナデ。	良　好 良　好 淡褐色	第19号
H117	体　部	胴部径25.2cm	タテ、ナナメハケ。 タガ接合部ヨコナデ。	タテナデ。 右下りのヨコハケが認められる。	微石粒含有 やや軟 淡茶褐色 断面灰色	第19号
H141	体　部 （朝顔型）	胴部径24.0cm	ヨコナデ。 タガ接合部ヨコナデ。	ヨコナデ。 ナナメハケの痕跡残存。	微石粒含有 やや軟 淡褐色 断面灰黒色	第23号
H143	体　部	胴部径18.7cm	連続ヨコハケ。 タガ接合部ヨコナデ。	ナデ。	微石粒含有 良　好 淡褐色	第23号
H144	底　部	底部径24.3cm	タテハケ（6条／1.0 cm）	ナナメナデ。 外底面ナデ、ワラ状の圧痕を有す。	微石粒含有 良　好 茶褐色	参考資料
H156	底 体 部	底部径23.1cm 底部高21.1cm 2段径27.3cm 2段高12.3cm 3段径29.0cm	細かいタテハケ後ヨコハケ。 タガ接合部ヨコナデ。 胴部に方形スカシ。	細かいナナメハケ後、胴部にナデ。 底部下端ケズリ。	微石粒を含有するが緻密な胎土である 良　好 淡褐色	参考資料
H157	底　部	底部径30.7cm	磨滅が著しく詳細は不明であるが、細かいハケメが認められる。	ナナメナデ、一部ヨコハケが認められる。 底部下端ナデ。	微石粒含有 良　好 赤褐色	参考資料

昭和60年３月

服部遺跡発掘調査報告書Ⅴ

－滋賀県守山市服部町所在－

編集・発行

滋賀県教育委員会
守山市教育委員会
㈶滋賀県文化財保護協会

印刷

富士出版印刷株式会社
大津市札の辻４－20
ＴＥＬ（0775）２３－２５８０